田野町文化財調査報告書第３集

YOSHIGASAKO

芳ケ迫第１遺跡
芳ケ迫第２遺跡
芳ケ迫第３遺跡

FUDANOMOTO

札ノ元遺跡

県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和６１年３月

田野町教育委員会

序

この報告書は、宮崎県の委託を受けて昭和５８年度から２ヵ年にわたり、前平地区県営農地開発事業地内に所在する芳ヶ迫第１、第２、第３遺跡・札ノ元遺跡の発掘調査を実施した記録であります。

この調査では、縄文時代早期や旧石器時代の集石遺構、住居址や集石、土壙をはじめ、環状石斧や１３世紀ごろの土器等も多数検出されております。これらは、宮崎県における貴重な研究資料となることでしょう。したがって、本報告書が広く活用されることを願う次第であります。

終わりに、発掘調査から報告書刊行にいるまで終始熱心に御指導下さいました諸先生方をはじめ、調査に深い御理解をいただきました関係機関・地元町民各位に心から感謝謝申し上げます。

昭和６１年３月３１日

田野町教育委員会

教育長　種子田　栄　幸

例　　言

1．本書は、前平地区県営農地開発事業に伴い、昭和58・59年度実施した前平地区埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査は、宮崎県中部農林振興局の委託を受けて、田野町教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は、第１章～第３章を面高哲郎、第４章～第６章、第８章を寺師雄二が行った。

4．年代測定については、奈良教育大学市川米太教授、京都産業大学山田治教授に依頼し、その結果について掲載している。

5．本書の方位は、磁北である。

6．本書の編集は面高があたった。

7．遺物等は、田野町教育委員会で保管している。

本　文　目　次

第１章　序　説 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の組織 …… 3

第２章　前平地区遺跡群の位置と周辺遺跡 ……

第１節　前平地区遺跡群の位置 …… 3

第２節　周辺遺跡 …… 3

第３章　芳ケ迫第１遺跡の調査 …… 7

第１節　調査の概要 …… 7

第２節　層　位 …… 8

第３節　遺構と遺物 …… 8

1.　旧石器時代 …… 8

2.　縄文時代 …… 14

第４章　芳ケ迫第２遺跡の調査 …… 40

第１節　調査の概要 …… 40

第２節　遺構と遺物 …… 41

1.　縄文時代 …… 41

2.　中　　世 …… 41

第５章　芳ケ迫第３遺跡の調査 …… 47

第１節　調査の概要 …… 47

第２節　層　位 …… 47

第３節　遺構と遺物 …… 48

1.　旧石器時代 …… 48

2.　縄文時代 …… 48

第６章　札ノ元遺跡の調査 …… 75

第１節　調査の概要 …… 75

第２節　層　位 …… 75

第３節　遺構と遺物 …… 76
1.　旧石器時代 …… 76
2.　縄文時代 …… 76
第７章　年代測定の結果 …… 140
第１節　熱ルミネッセンス法及びC^{14}による年代測定結果 …… 140
第８章　結　語 …… 142

第１章　序　説

第１節　調査に至る経緯

昭和５６年４月、宮崎県農業開発公社が農地造成のため田野町東部の前平地区で土地購入の計画があり、町教育委員会及び県教育委員会で分布調査を実施した。当地区では、以前箱式石棺が確認されていた[(1)]が、分布調査により遺物散布地が新たに２ケ所確認された。昭和５７年５月、町教育委員会で試掘調査を実施したところ、３ケ所の遺跡の所在が確認された。うち２ケ所では、アカホヤ層の下で貝殻文土器等を共伴して多量の焼石が出土し、縄文早期の集石遺構等が良好な状態で存在することが判明した。以前、箱式石棺が確認された地点ではその追認はされず、土師器小片が出土したのみで今後の課題として残された[(2)]。

試掘調査の結果により、農地造成の事業主体である宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護について協議を重ねた結果、札ノ元遺跡（旧１号地）の一部については設計変更により現状で保存されることになったが、他については、小谷を埋めて農地とする事業施行上現状保存は困難であったので発掘調査を行い記録保存することになった。

発掘調査は、町教育委員会が調査主体となり、昭和５８年度芳ケ迫第１遺跡（旧３号地）行い、昭和５９年度は、昭和５８年度新たに発見された芳ケ迫第３遺跡を含めて、芳ケ迫第２遺跡、札ノ元遺跡の３ケ所の調査を実施した[(3)]。

なお、昭和５８年度の調査で、配石をもつ集石遺構№１６は昭和５９年度遺構取り上げを行い、現在、町役場において出土遺物と共に展示している。

注(1)　宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道（宮崎線）関係遺跡分布調査報告書」　１９６８。

注(2)　面高哲郎・長津宗重「前平地区遺跡発掘調査報告書」宮崎県文化財調査報告書第２６集　１９８３。

注(3)　面高哲郎「芳ケ迫第１遺跡－県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要－」田野町文化財調査報告書第１集　１９８４。
寺師雄二「芳ケ迫第２遺跡、芳ケ迫第３遺跡、札ノ元遺跡－県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－」田野町文化財調査報告書第２集　１９８５。

第２節　調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査地区	宮崎郡田野町前平地区
調査期日	昭和５８年７月～昭和５９年１１月
調査委託者	宮崎県中部農林振興局
調査主体	田野町教育委員会 教育長　種子田栄幸　　社会教育課長　藤野武男（前）・妹尾　博（現）
特別調査員	中村　純（元高知大学教授）、市川米太（奈良教育大学教授）、山口譲治（福岡市埋蔵文化財センター）、新東晃一（鹿児島県黎明館）、太田正道（北九州市自然史博物館館長）、藤井厚志（北九州市自然史博物館学芸主査）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課資料係長）、山田　治（京都産業大学教授）
調査協力	柴田喜太郎（広島大学理学部地質学鉱物学教室）
調査担当	昭和５８年度　面髙哲郎（宮崎県教育委員会文化課） 昭和５９年度　寺師雄二（田野町教育委員会）
事務担当	長友啓泰（前）、宮本真二（現）
調査補助員	

第２章　前平地区遺跡群の位置と周辺遺跡

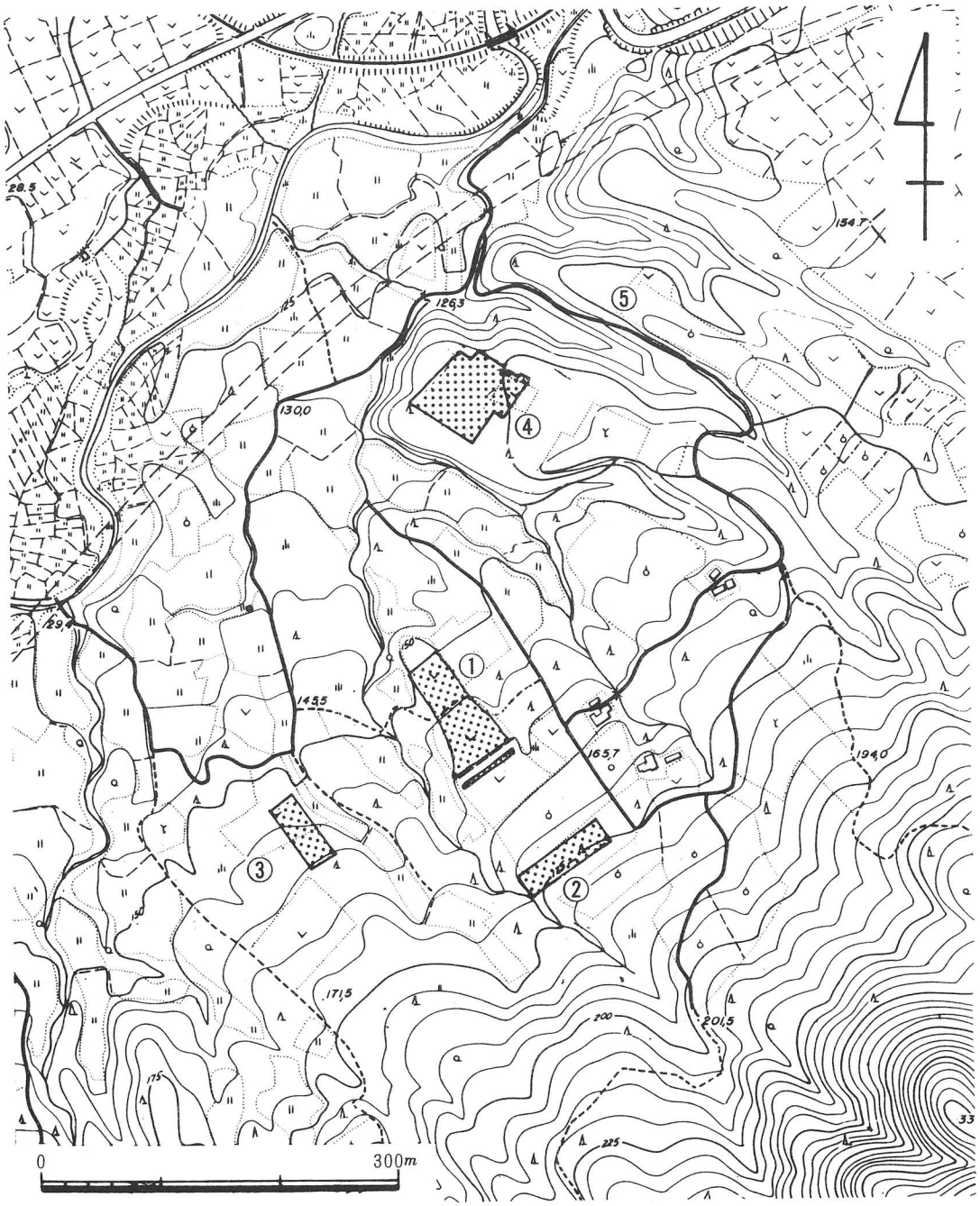
第１節　　前平地区遺跡群の位置（第１図）

前平地区遺跡群の所在する田野町は、宮崎市の南西約２０㎞にある田野盆地を中心とする町である。田野盆地は、南那珂山地の鰐塚山系、青井岳山系などを外輪山として、南西から北東へ楕円状（長径７㎞、短径３㎞）に開ける小盆地である。田野盆地内には、扇状地が発達しているが、盆地北縁を北流する片井野川、南縁を北流する井倉川及びその支流によって開析されて舌状の台地となっている。沖積地は、河川周辺にわずかに分布するのみで盆地内に所在する遺跡は、大半はこの台地上に分布している。

前平地区は、盆地南東の標高約６００ｍの荒平山、前平山の北西裾に位置する。当地は、西面する扇状地で、各所に湧水があり、小川となり、井倉川に注いでいる。扇状地は、この小川等に開析され、西へ延びる低丘陵や丘陵性台地となっている。前平地区で確認・調査された５遺跡は、この丘陵上及び山裾端部の西斜面に立地している。

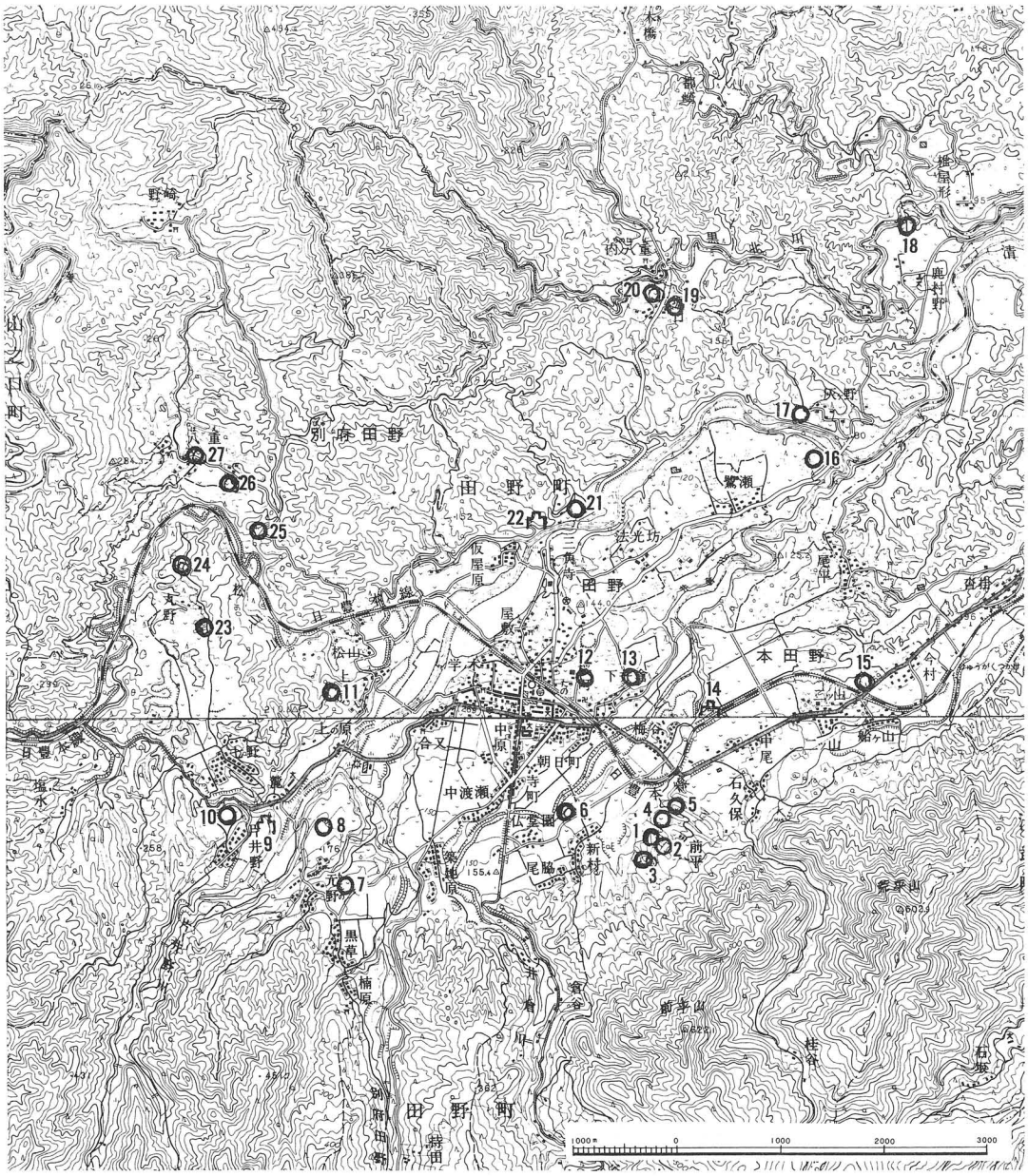
第２節　周辺遺跡（第２図）

田野町内で確認されている遺跡は、現在まで２７ケ所である。発掘調査は、前平地区の５遺跡、他は青木遺跡、黒草遺跡、灰ケ野地下式横穴群、高野原地下式横穴と少ない。旧石器時代の遺跡はナイフ形石器を出土した萩ケ瀬遺跡（宮崎大学実習林入口）の１ケ所が知られている。縄文時代の遺跡は、確認されている遺跡の半数を占める。芳ケ迫第３遺跡では、宮崎市堂地東遺跡出土の瓜形文土器に類似する草創期の土器が出土している。早期の遺跡は、貝殻条痕文土器を出土した前畑遺跡が知られていた[(1)]が、今回調査された遺跡等を含めると６ケ所となった。黒草遺跡の道路のり面でも、アカホヤ層の下に焼石が包含されており、今後ともその数は増加すると考えられる。前期の遺物は、昭和５３年、県教委が発掘調査した黒草遺跡で曽畑式土器が出土している[(2)]。中期の遺物は、県内でも出土例が少ないが、田野町においては確認されていない。後期の遺跡は、発掘調査された青木遺跡、黒草遺跡がある。青木遺跡は、昭和３８年賀川光夫、鈴木重治氏等により調査され[(3)]、不整円形プランの配石遺構、トチの実が出土し、貯蔵穴と推された竪穴等が検出されている。出土土器は、指宿式、綾式、市来式、下弓田式など後期初頭から中頃のものが出土している。黒草遺跡は昭和４６年宮崎大学、昭和５３年に県教委によって調査されている。遺物は、青木遺跡と同時期のものの他、晩期の黒色磨研土器が出土しているが、遺構は検出されていない。当遺跡は、以前より広範囲にわたり遺物が散布するところで土器の他、多量の石鏃、石匙、磨石、石皿等が採集されて



第１図　前平地区の遺跡と周辺の地形

①芳ケ迫第１遺跡　②芳ケ迫第２遺跡　③芳ケ迫第３遺跡　④札ノ元遺跡　⑤又五郎遺跡



第２図　前平地区遺跡群の位置及び周辺遺跡

1.芳ケ迫第１遺跡　2.芳ケ迫第２遺跡　3.芳ケ迫第３遺跡　4.札ノ元遺跡
5.又五郎遺跡　6.青木遺跡　7.黒草遺跡　8.高野原地下式横穴　9.ヒダカン城址
10.片井野遺跡　11.天建神社址　12.桜町遺跡　13.井倉洞穴遺跡　14.梅谷城址
15.船ケ山遺跡　16.灰ケ野遺跡　17.灰ケ野地下式横穴　18.ズクノ山遺跡　19.堀口Ａ遺跡
20.堀口Ｂ遺跡　21.萩ケ瀬遺跡　22.田野城址　23.（仮）七野地区遺跡　24.丸野遺跡
25.前畑遺跡　26.八重Ａ遺跡　27.八重Ｂ遺跡

おり、今後、住居跡等が発見されると思われる。七野地区遺跡（仮称）は、発掘調査されていないが、畑のり面で竪穴住居跡と推定される掘り込みが確認されている。土器は青木、黒草と同時期のものである。田野町内には、縄文早期、後期の有望な遺跡が多く、この密度は県内でも高く、今後に期待される地域である。

縄文遺跡の多さに比べ、弥生時代の遺跡はほとんど知られていず、県教委が黒草遺跡を調査した際出土した弥生終末期の土器は貴重な資料である。

古墳時代の遺跡は、灰ケ野[(4)]、高野原[(5)]で地下式横穴が調査されている。昭和４７年調査された灰ケ野地下式横穴からは、蛇行剣が出土している。集落等の遺跡はまだ確認されていないがこれは調査等が少ないためと思われる。古墳時代の墳墓である高塚古墳は、現在のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡の多さに比べ、弥生時代以降の遺跡は極端に少なくなっている。明治中ごろの地誌である平部嶠南の「日向地誌」によると、田野町は、水利は極めて便ならず、往々に旱害があり、土地はやせていたとある。弥生時代以降の遺跡が少ないことは、このような環境に適応できる採集経済である縄文時代の遺跡に比べ、農耕を主とする弥生時代以降の遺跡にとっては、悪条件であったと思われる。

延喜式によると、古代日向の官道に設けられた駅は１６駅が記されている。１６駅の推定より日向には、国府より南へのルートには、諸県を通り肥後へ至るルートと島津庄へ至る２ルートが想定されている。島津庄へ至るルートの場合、「救麻（クマ）」が宮崎市熊野、「水俣（ミマタ）」が都城盆地の三股町あるいは山之口町が推定地であり、田野町は島津庄へ至る中間に位置し、１６駅のうち「救弐（クニ）」を田野町七野にあてる考えもある。田野町内において地下式横穴は、灰ケ野と高野原で発見されている。灰ケ野は、清武から田野へ入る入口にあたる要所であることは田中茂氏の指摘があるが[(6)]、高野原について、田野から都城盆地へ至る出口にあたる。田野町は、海岸部の清武町から内陸部の都城盆地へ至る交通の要衝の地であったと考えられることから、今後、これらの時期の遺跡も少なからず発見されるであろう。

注(1) 茂山　護「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」宮崎考古第４号　１９７８。

注(2) 岩永哲夫、北郷泰道「黒草遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(3)　宮崎県教育委員会　1979。

注(3) 鈴木重治「宮崎県田野町青木遺跡の調査」日本考古学協会第２８回大会研究発表要旨　１９６３。

注(4) 田中　茂「宮崎郡田野町灰ケ野地下式横穴」宮崎県総合博物館研究紀要 No.1　１９７２。
石川恒太郎「田野町灰ケ野地下式古墳調査報告書」宮崎県文化財調査報告書第１７集　宮崎県教育委員会　１９７３。

注(5) 日高正晴「高野原地下式１号墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第２４条　宮崎県教育委員会　１９８１。

注(6) 注(4)に同じ。

第３章　芳ケ迫第１遺跡の調査

第1節　調査の概要（第３図）

調査は、前年度の試掘調査結果より調査の対象をアカホヤ層下位の縄文時代早期の集石遺構等におき、その推定範囲内を調査した。試掘調査では、アカホヤ層上位での包含層、遺物等の出土はみなかったので、アカホヤ直下の小白斑を含む黄褐色土層まで重機で剥ぐことにしたが、アカホヤ層を除去後、焼石のまとまりが数ケ所確認されたので重機の使用をこの面までとした。この焼石のまとまりは、球状の地層の回転部であることが、その後の調査過程の中で判明している。地層の回転部は、径２～３ｍ前後で、アカホヤ、黄褐色土、褐色土、第２オレンジを含む礫層が乱れることなく回転している。このような箇所は数１０ケ所あり、その一つでレベル的には縄文早期のレベルで旧石器時代のナイフ形石器が出土し、これが旧石器時代の包含層を調査する発端となった。

調査対象地は、最大幅７０ｍ前後の平坦面を有する丘陵性台地的様相を呈していたが、アカホヤ除去後の地形は、中央部に西へ傾斜する凹地があり、２つの丘陵に分けられ、北丘陵の中央にわずかな平坦面が存在していた。縄文早期の地形は、この地形に類似していたと思われたので、この面で１辺１０ｍのグリッドを設定し、同面で１００分の１の地形測量を行った。

今回の調査は、試掘調査の結果よりその対象をアカホヤ層下位の縄文時代早期においたが、調査区のほぼ全面にわたって集石遺構が検出された他、焼石群、石組遺構、土坑等が検出された。集石遺構５４基は、分布状態から４群に分けられ、調査区の中では平坦的地形となっているＦ・Ｇ－２・３区では、その密度は低い。Ｆ・Ｇ－２・３区では、遺物も多く出土し、特にチャート等のチップが多量に出土している。この区で炉跡と推定される石組遺構も検出された。焼石群は、Ｂ・Ｃ－４・５区、Ｄ・Ｅ－３区、Ｈ・１－３区、Ｊ－６区で４群確認され、土坑は、Ｃ－３区、Ｅ－３区の２区で検出されている。

Ｃ－３区の地層の回転部においてナイフ形石器が確認されたので、Ｂ・Ｃ－３区では、第２オレンジを含む層まで調査を行った。Ｃ－３区では、三稜尖頭器、剝片尖頭器が出土した他、流紋岩の剝片が多く出土している。遺構は、集石遺構が２基検出された。

その他、縄文時代晩期の竪穴遺構２基が検出された。Ｉ－５区では、焼土を含むピットが２個確認されている。また、時期不詳の長方形プランの土坑８基も検出されている。

第２節　　層　位（第４図）

芳ケ迫第１遺跡の基本層序は、第１層が表土（１５cm）、第Ⅱ層アカホヤ風化土（３０cm）、第Ⅲ層アカホヤ（第１オレンジ・１５cm）、第Ⅳ層小白斑を含む黄褐色ローム（３０cm）、第Ⅴ層小白斑を含む黒褐色ローム（３０cm）、第Ⅵ層褐色ローム（４０cm）、第Ⅶ層第２オレンジを含む礫層となっている。なお、第Ⅰ層表土下位に黒色土が部分的に残存している。

遺物は、第Ⅵ層褐色ローム下層から第Ⅶ層上層で旧石器時代遺物が出土し、第Ⅳ層から第Ⅴ層上層で縄文時代早期の遺物、焼石が出土している。縄文早期の集石遺構は、第Ⅴ層で確認している。縄文時代晩期の包含層は、アカホヤ層上位の黒色土に存在するが、耕作等により既に消滅している。アカホヤ層までは重機を使用したため、第Ⅳ層上面で遺構を確認している。

第３節　　遺構と遺物

1.　旧石器時代

遺　構（第８図）

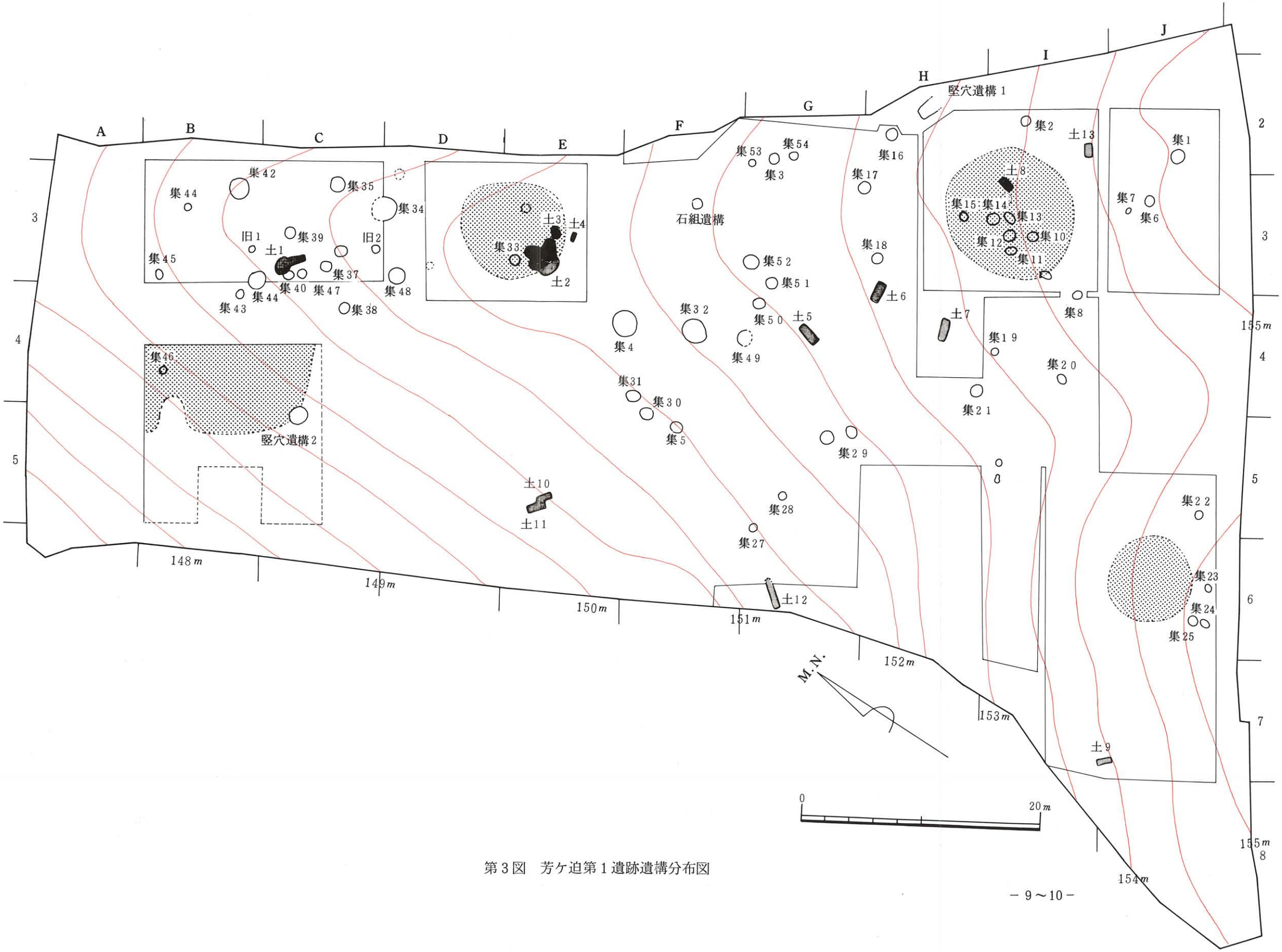
旧石器時代の遺構は、Ｂ－３区で１基（№１）、Ｃ－３区で１基（№２）の２基が検出された。検出された層は、第Ⅶ層第２オレンジを含む礫層の直上である。№１集石遺構は、拳大の焼石が約２０個が楕円状（長径６０cm、短径４０cm）に集石し、下部に土坑は伴わない。№２集石遺構は、１辺４０cmの方形状に集石し、№１と同様下部に土坑をもたない。

遺　物（第７・８図）

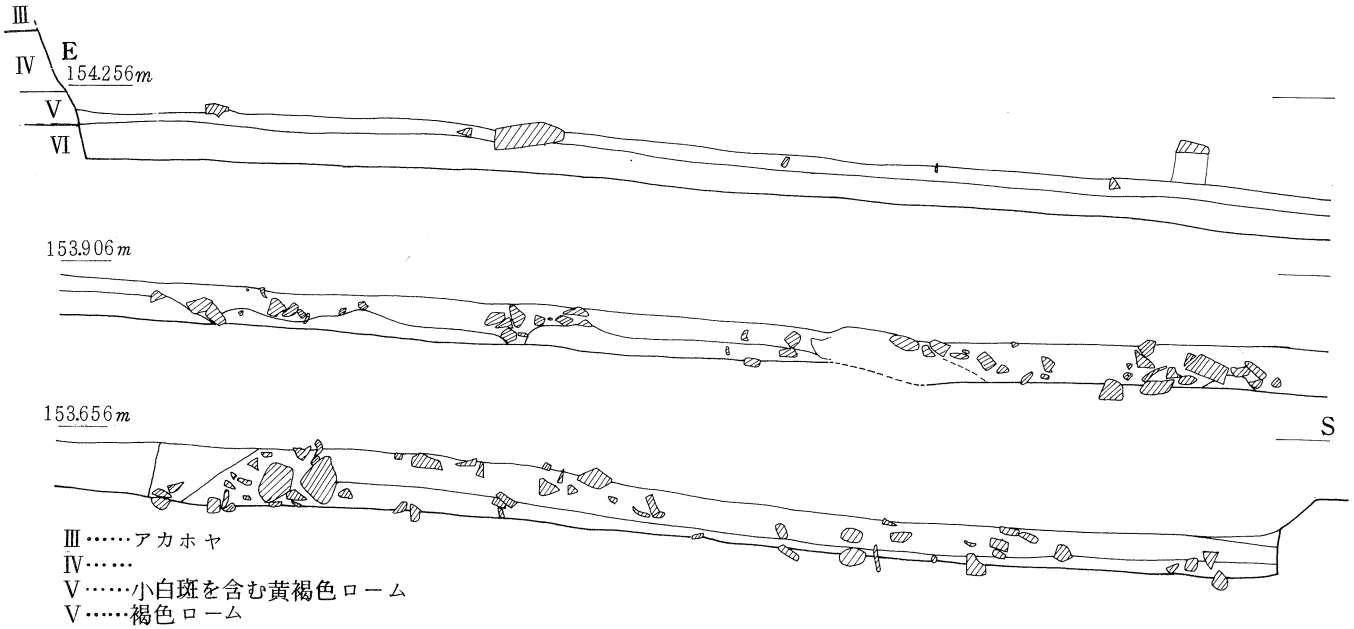
遺物は、ナイフ形石器、剝片尖頭器、三稜尖頭器、彫器、使用痕のある剝片等が出土している。その分布は、２基の集石遺構間の径５ｍの範囲内にまとまりを呈していた。１４～１６はナイフ形石器である。１４は、地層の回転部で出土したものである。安山岩系の縦長の剝片を素材としており、背部の刃潰しを行っている。現長5.1cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm。１５は安山岩系の剝片を素材とし、基部の両側を刃潰し、加工を行っている。現長4.4cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm。１６は、砂岩の縦長の剝片を素材とし、基部の両側を刃潰し加工を行っている。

１７は、一面に剝離を残し、二面に二次加工を加えた三稜尖頭器である。石材は安山岩系。長さ6.9cm、幅1.1cm、厚さ1.6cm。１８は、縦長の剝片を素材とした剝片尖頭器で背及び基部の刃潰し加工を行っている。砂岩製。現長6.8cm、幅3.8cm、厚さ1.5cm。

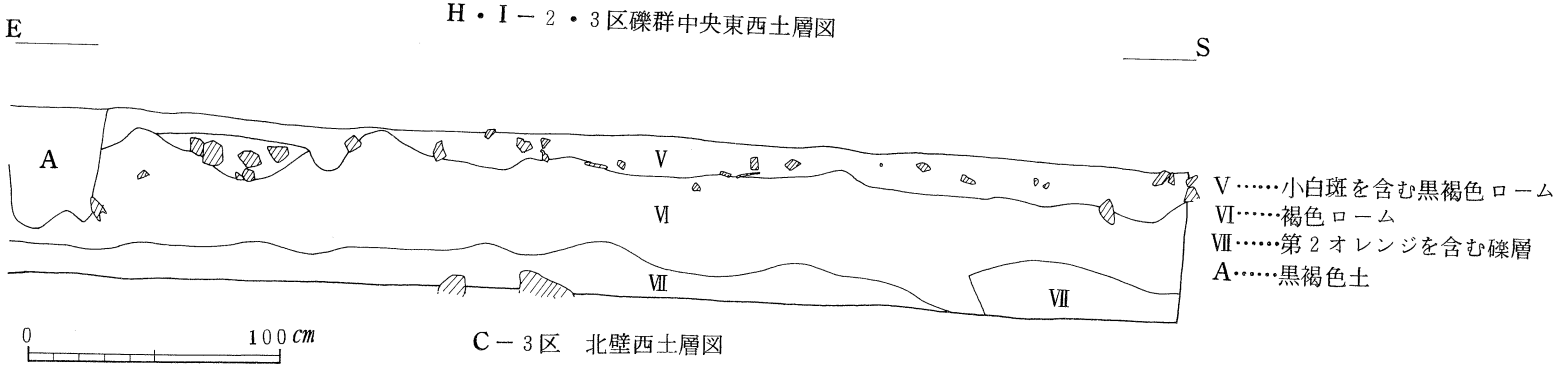
１９は、頁岩を素材した彫器である。彫刀面は１辺にそって一面施されている。長さ5.4cm、幅2cm、厚さ2.5cm。２０は、一面に自然面を残した剝片に、２辺に２次加工を加えられた掻器である。素材は粘板岩。長さ4.5cm、幅3.9cm、厚さ1.8cm。２１は、下端に使用痕と推定される面を



第３図　芳ケ迫第１遺跡遺構分布図

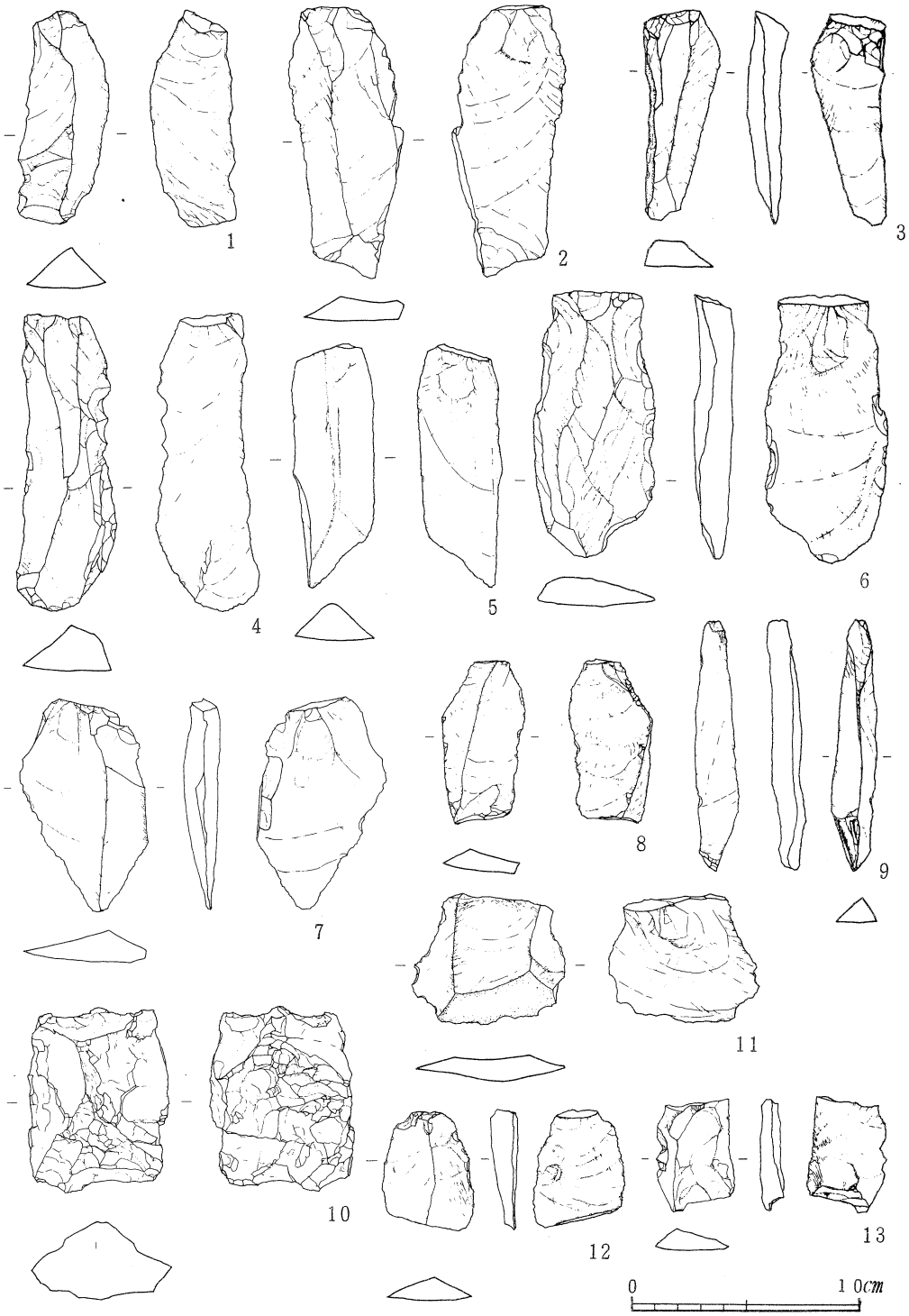


H・I－2・3区礫群中央東西土層図

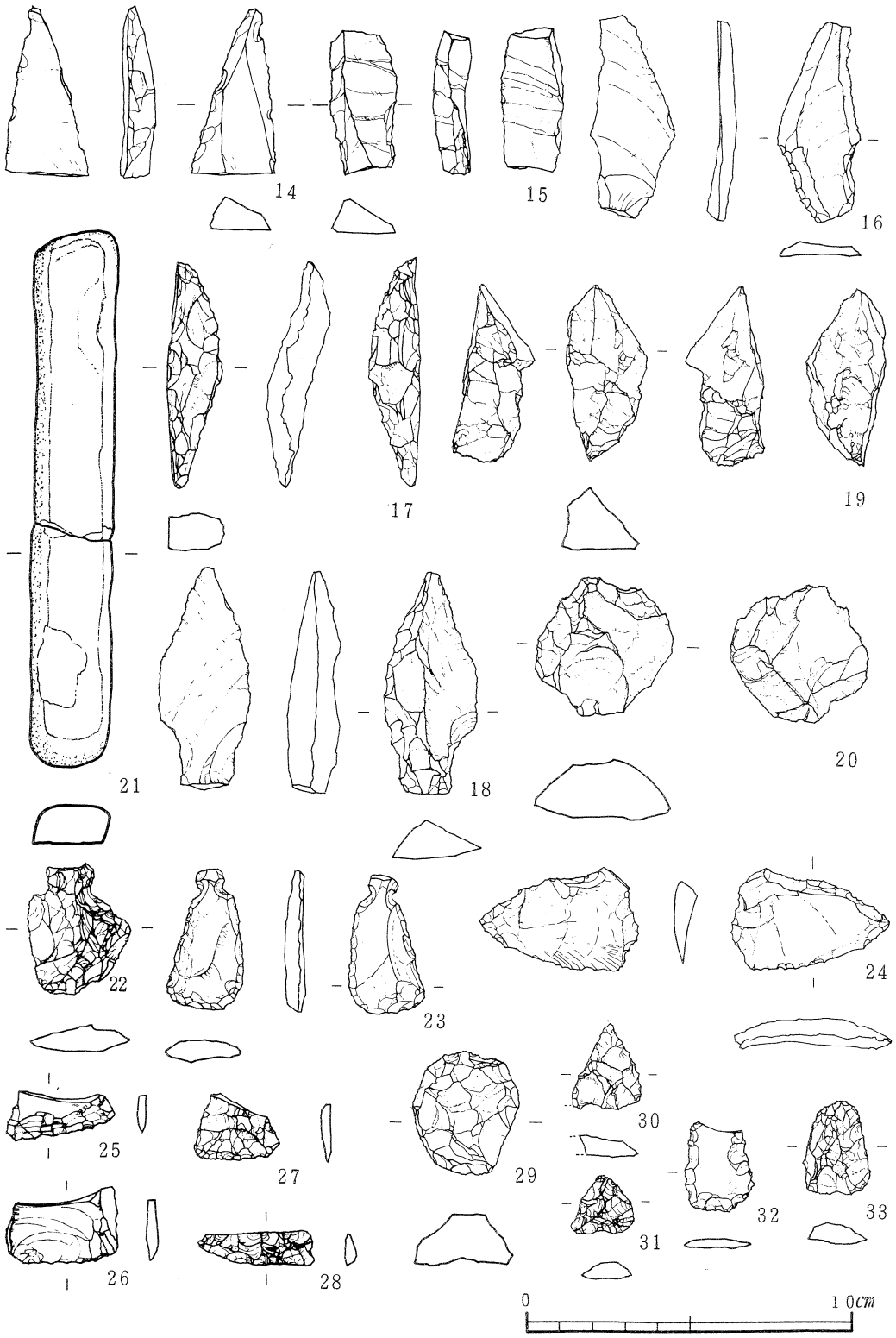


C－3区　北壁西土層図

第4図　土　層　図



第５図　出土石器実測図（１）



第6図　出土石器実測図（２）

もち工具と推定されるものである。石材は砂岩、長さ１６.４㎝、幅2.2㎝、厚さ1.4㎝。１、８、１１、１３は、流紋岩の剝片で、８は使用痕がみられる。２～６は、縦長の砂岩の剝片で、剝片尖頭器、ナイフ形石器の素材と考えられるものである。７、９は安山岩系の剝片で７は使用痕をもつ。１０は、粘板岩の石核で長さ8.3㎝、幅6.2㎝、厚さ3.7㎝である。

2. 縄文時代

遺　構（第８～１５図）

縄文時代の遺構は、早期と晩期の二時期のものが検出された。早期の遺構は、第Ⅴ層で検出されている。第Ⅳ層最下層付近より拳大の焼けた角礫が出土しはじめ、その分布範囲は、密度に濃淡はあるが、ほぼ調査区全域にわたっている。その中にあって焼石が0.５ｍ～２ｍ前後にまとまる所謂集石遺構が５４基確認された。さらに、西斜面にあたるＢ・Ｃ－４・５区、Ｄ・Ｅ－３区、Ｈ・Ｉ－２・３区、Ｊ－６区の４ケ所では、焼石が数ｍの範囲に集中する焼石群が確認された。Ｄ・Ｅ区の焼石群の下部では土坑数基、Ｈ・Ｉ区では集石遺構が検出されている。この他、Ｃ区で土坑１基、Ｆ区で石組遺構が検出されている。

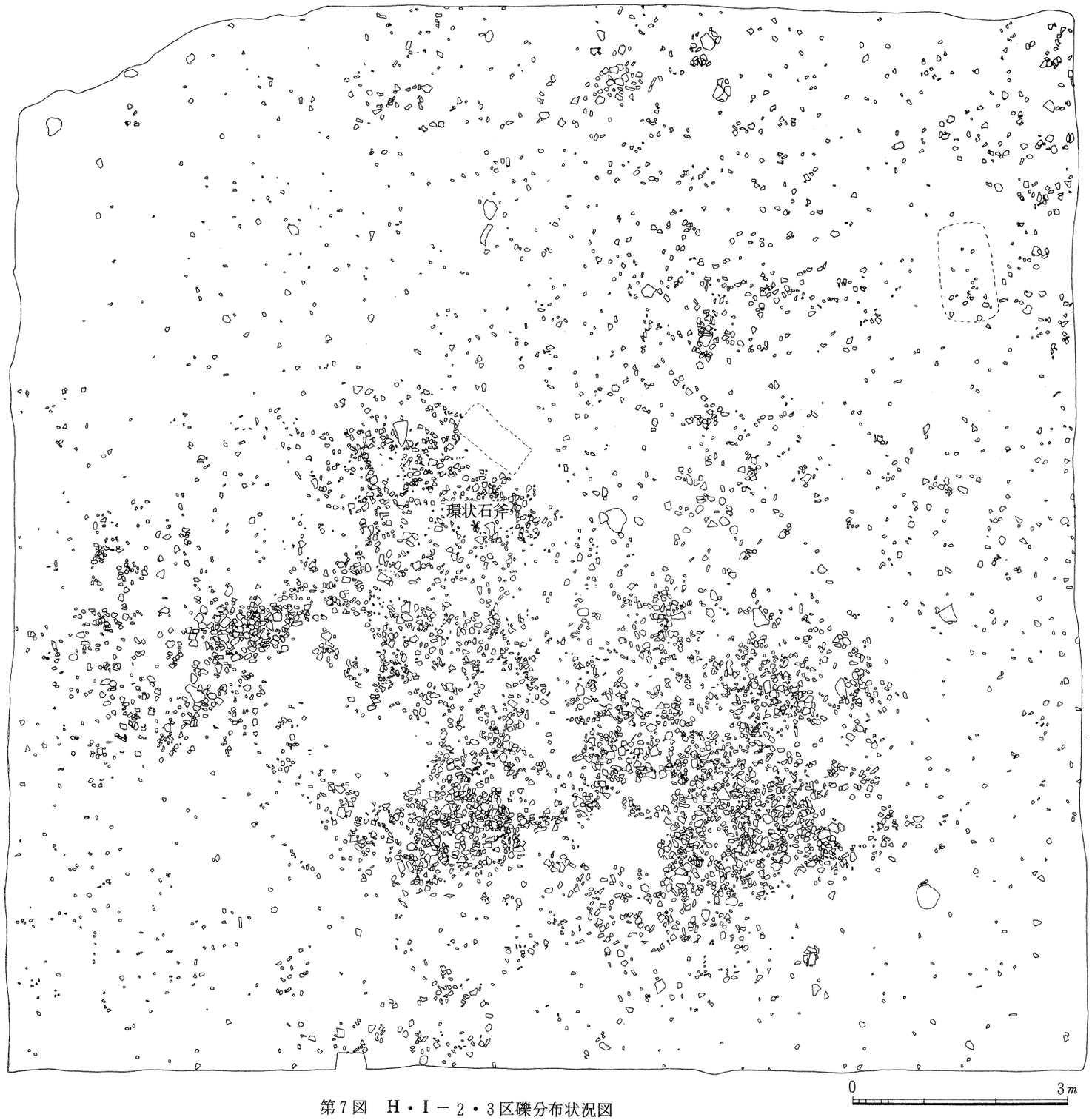
集石遺構５４基は、分布状況から、Ｂ・Ｃ－３区、Ｈ・Ｉ－２・３区、Ｊ－６区、Ｆ・Ｇ区の４群に大きく分けられ、Ｆ・Ｇ区については、平坦部と西斜面部に細分できる。Ｅ～Ｇ－３区は、調査区内では最も平坦的地形を示すが、集石遺構の密度は低い。この区においては、土器やチャート、粘板岩等のチップが多く出土し、また、石組遺構も検出されている。当遺跡では竪穴住居跡は、確認されていないが、Ｆ・Ｇ区は、居住空間とも考えられる。

集石遺構は、拳大から小児頭大の焼石が径0.５～２ｍ前後の範囲に円形ないし楕円状に集石している。焼石は、砂岩の角礫で熱のため赤色に変色しひびのはいるものも多く見られた。また、中には媒あるいはタール状の物質が付着している焼石もある。集石遺構は、単に平面的に集石するものとその下部に土坑を伴うものがある。土坑を伴うものの中には、底面に配石をもつものもある。土坑内にはいる礫は、床面より数㎝ういておりその間に多くの炭化物が含まれており、埋土は黒褐色ないし黒色を呈していた。また、礫の量が少ない場合でも埋土に炭化物の混入が認められたが、土坑内に焼土が含まれたり、壁面が焼けたりしているものは認められなかった。

集石遺構は、その形態から次のように分類される。

Ⅰ類は、焼石が平面的に拡がるものである（№２、５、７、２２、２３、２８、３１）。礫は、１ｍ前後の範囲に集石している。集石はその状態が密なものと粗なものがある。

Ⅱ類は、土坑の径が１ｍ以下のものである（№３、６、８～１０、１２、１３、１８～２０、



第7図　H・I－2・3区礫分布状況図

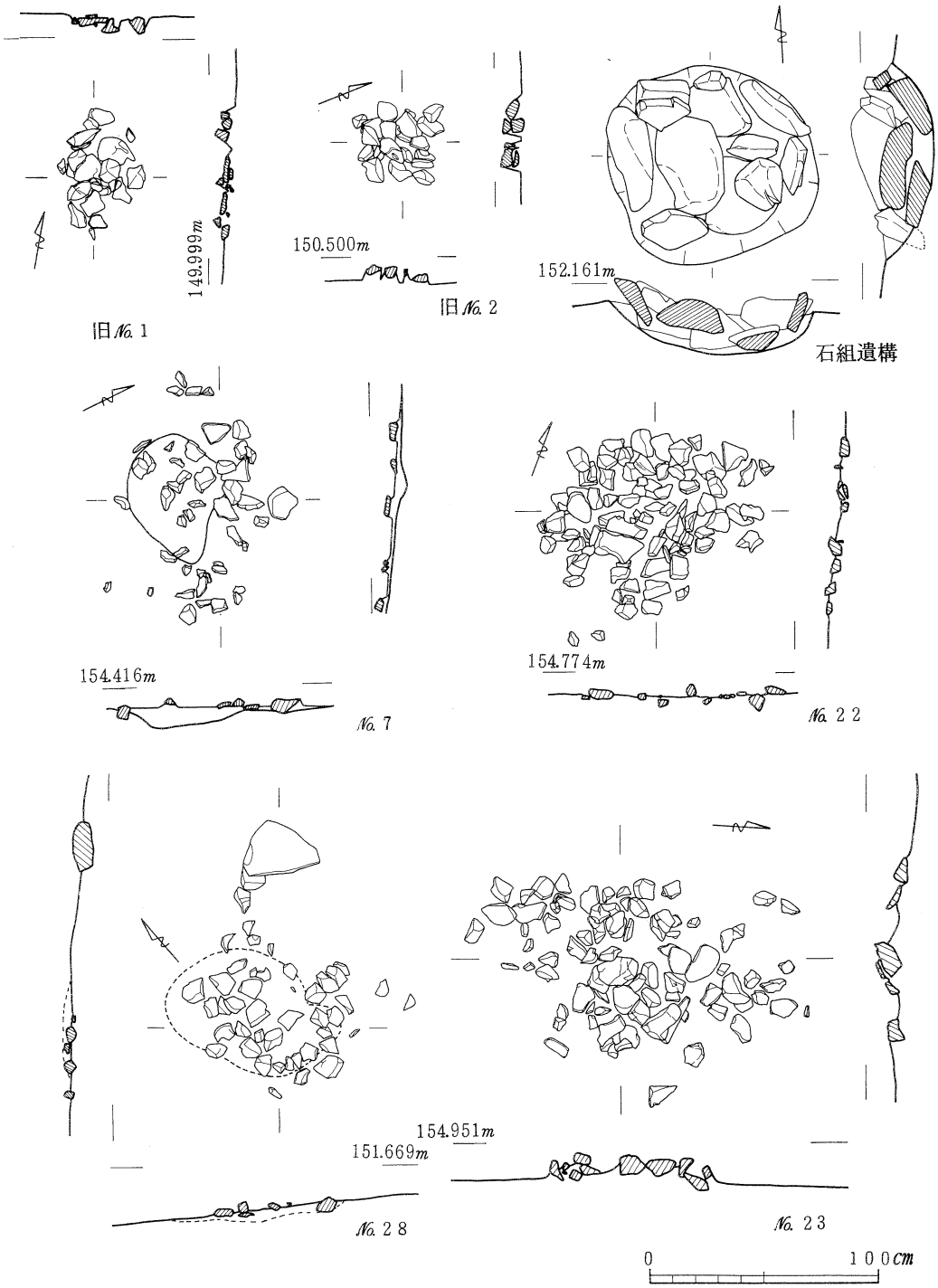
２４、２９、３８、４４～４６、５３、５４）。芳ケ迫第１遺跡で検出された集石遺構の多くはⅡ類である。土坑のプランは、円形と楕円形のものがあり、円形のものは礫が多い傾向がみられる。№３９は、長径1.2ｍ、短径0.7ｍで礫の量は少なく、埋土に炭化物が含まれている。礫は、白っぽい色を呈し脆い砂岩である。このような砂岩の使用は、Ｂ・Ｃ－３区の№３６、３７の集石遺構でみられ、礫の量が少ない。№４６は、Ｂ・Ｃ－４区の焼石群の下で検出された。長径６０cm、短径５０cmの土坑をもつ。礫は床面より１０cmほど浮いた状態であり、下部に炭化物がみられた。№６、１０、１２、１８などは径0.9cm前後の円形ないし円形に近い楕円形の土坑をもつ。礫は土坑内に密集している。下部に炭化物が含まれている。№８は、Ｉ－３・４区の境で検出されたもので、礫は中央に盛り上がりが見られた。№５４は、礫の量も少なく、径が６０cm前後、深さが１０cmほどで浅くＩ類に含めた方がよいかもしれない。

Ⅲ類は、土坑の径が１ｍ以上のものである（№１１、３３、３４、４０、４７）。№１１は、長径1.４５ｍ、短径1.０６ｍ、深さ２５cmあまりの楕円形の土坑をもつ。確認時は、径0.５ｍの小規模の集石遺構の様相を呈していた。№１は、径約1.１ｍ、深さ２５cmあまりの土坑をもつ。多量の礫が詰まるが、床面より１０cmあまり浮いており、その間に炭化物が多く見られた。№３４は、大型の集石遺構で径1.８５ｍ程で、すり鉢状を呈する。Ｃ－３区のり面で確認されたもので土坑上位には礫をあまり含まない。Ⅲ類集石遺構は、全体に占める割合は少なくＢ・Ｃ－３に集中している。

Ⅳ類は、土坑床面に配石をもつもので№１６、３１、５２の３基が検出された。№１４、１５号は床面に平たい石があるが、先の３基に比べ配石とは言い難い面がある。№１６は、径９５cm、深さ20ｍを測る土坑をもち、床面中央に３０cm×２５cm前後の偏平な河原石による配石がある。河原石は熱のため赤色に変色し、脆く剝離等が見られた。配石直上で炭化材や炭化粒が出土し、埋土下部も黒色ないし黒褐色を呈している。№５２は、径1.７ｍ、深さ３０cmほどの土坑をもつ。中央に偏平な河原石を１個もち、宮崎学園都市遺跡群内の前原西遺跡で検出された集石遺構に類似した形態であった。№３１は、径９０cmは円形の土坑をもつ。深さは１５cmあまりが確認されている。配石は長径３５cm、短径２０cm、厚さ１５cmを最大とする河原石で配石を行っている。Ⅳ類集石遺構は、調査区内では最も平坦面的地形であった地区に集中している。

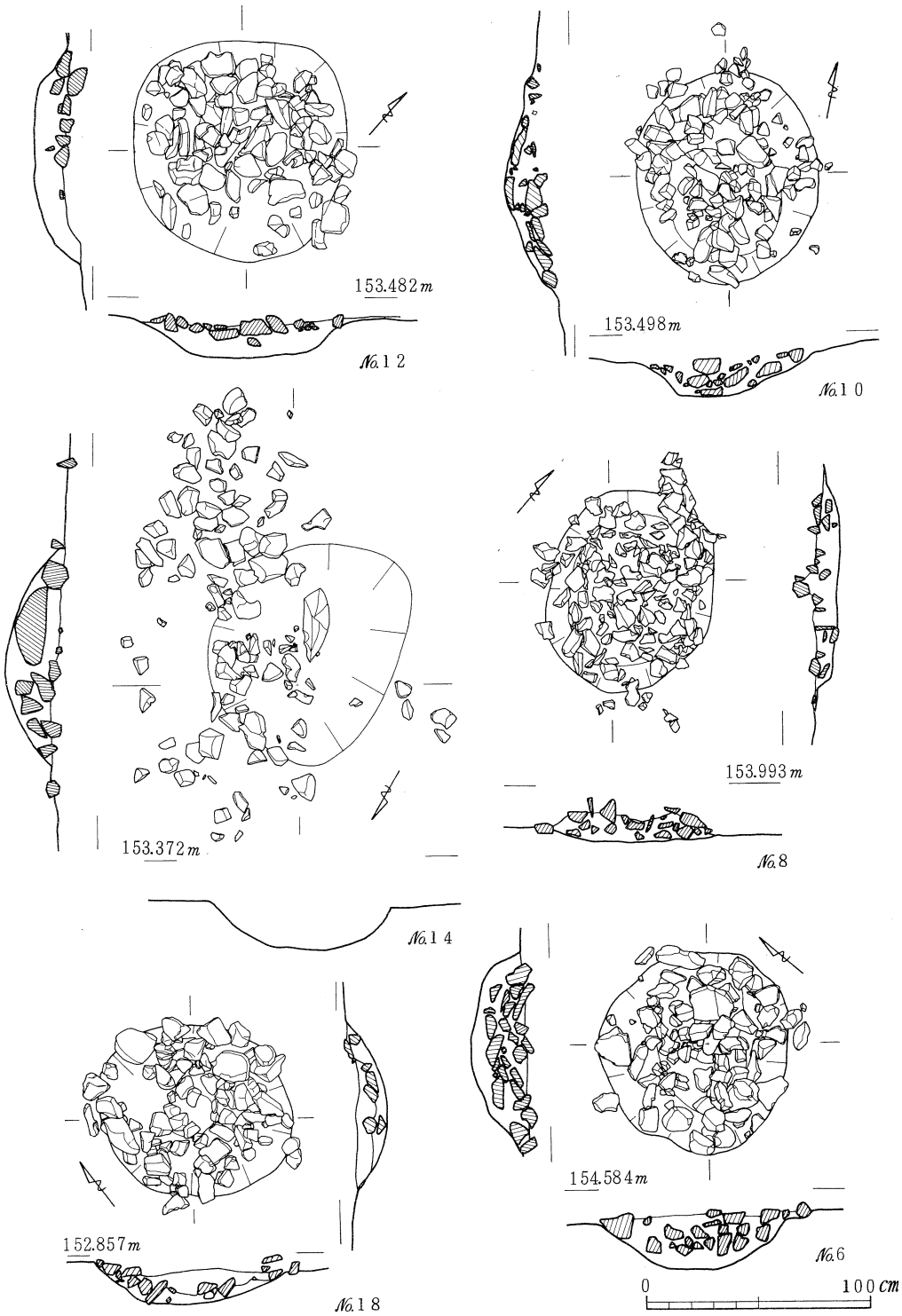
Ⅴ類は、№４集石遺構１基であるが、二段掘りの特異な土坑をもつ。土坑は上面で径約２ｍを測り、中位面で径1.１ｍを測る。深さ約１ｍ。土坑内の礫は中央が盛り上がっており、集石確認面では、径1.５ｍの範囲に礫の集中がみられた。礫は下位にいくほど大きくなり、下段土坑の壁面に丁寧さはないが、配石的様相を呈していた。中央に底石はない。埋土に炭化物を含む。

石組遺構（第８図）は、Ｆ－３区で検出されている。径９０cmほどの土坑の壁面に偏平な河原石

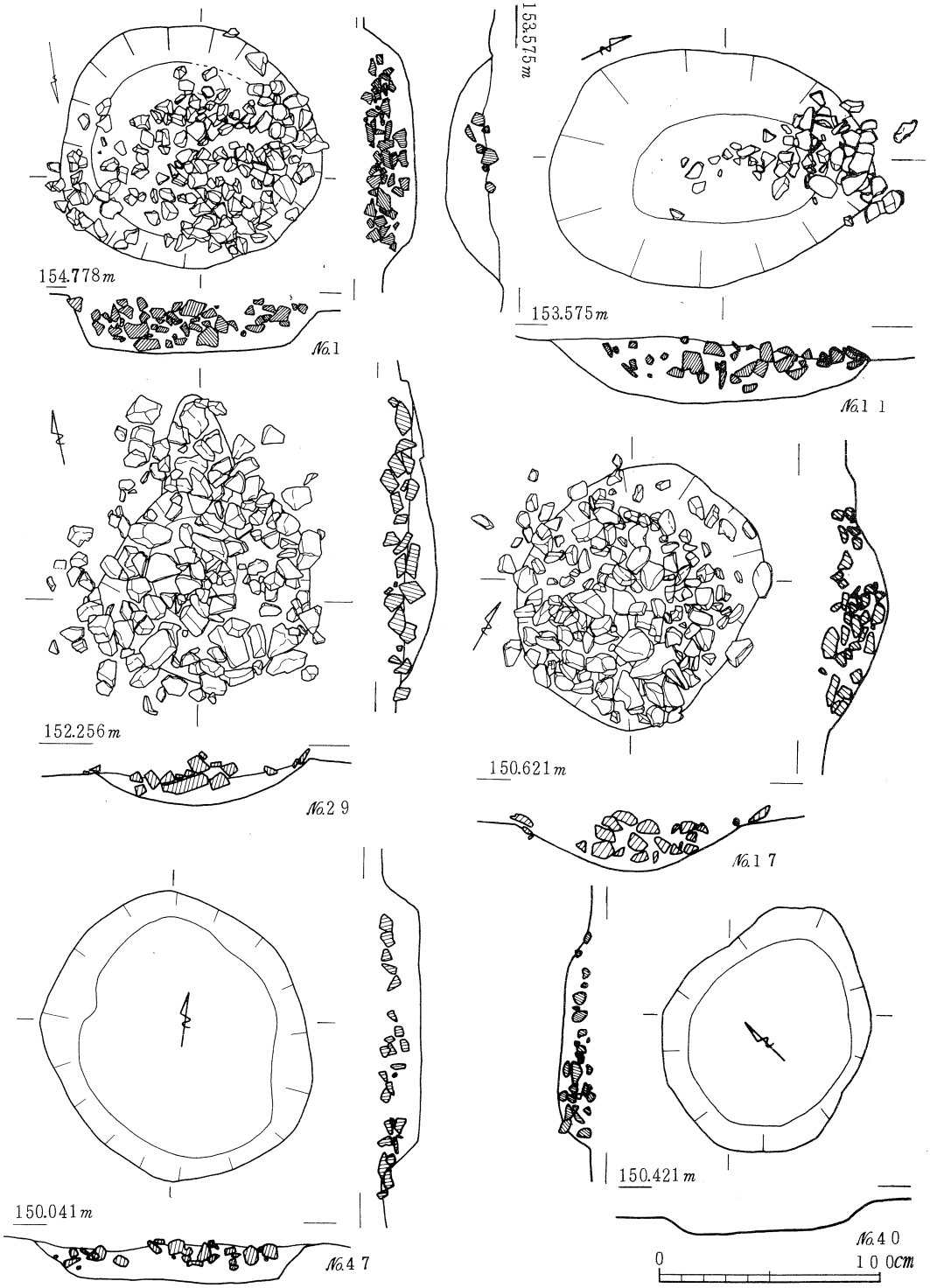


第8図　集石遺構等実測図（1）

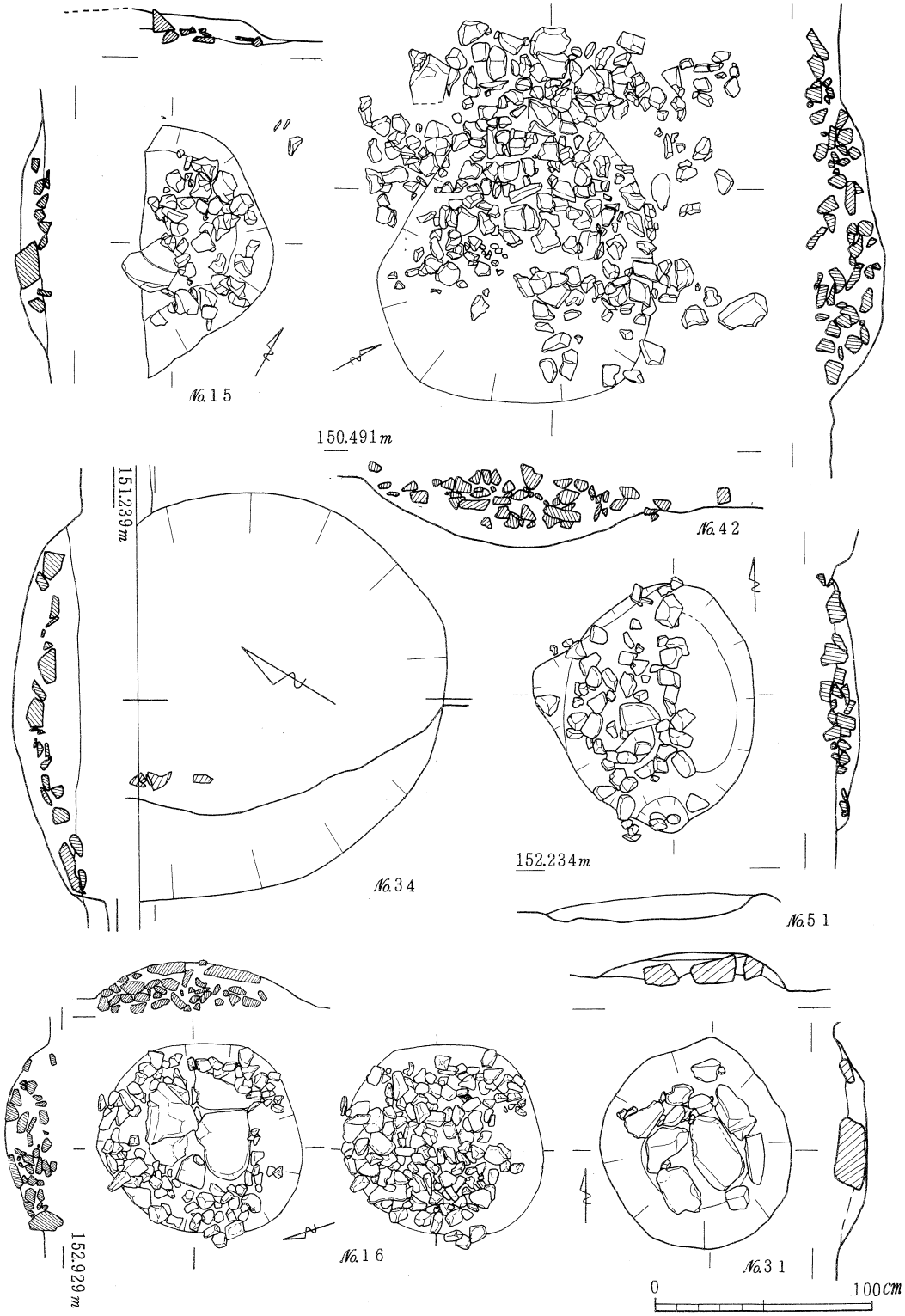
第9図　集石遺構実測図(2)



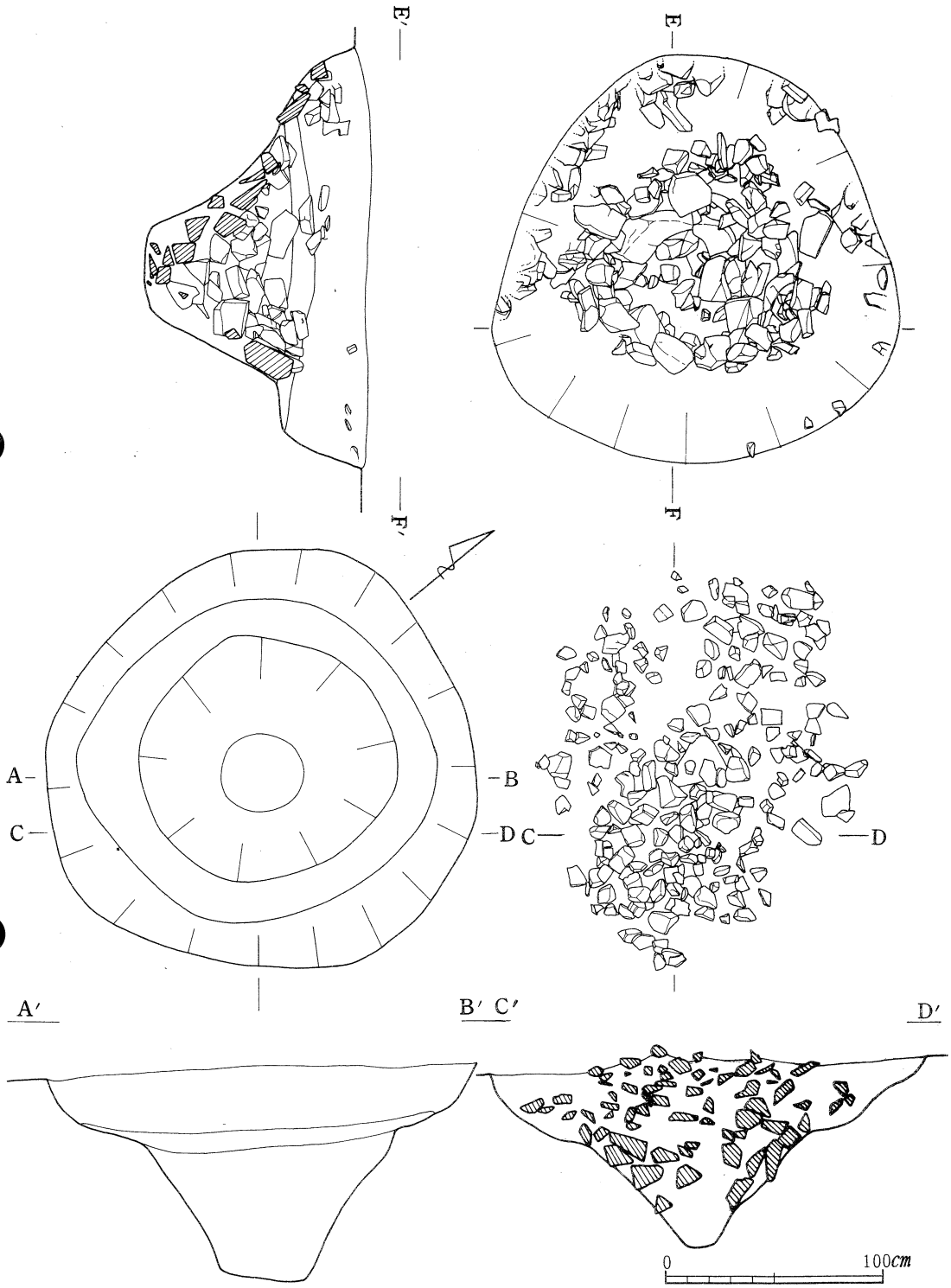
第10図　集石遺構実測図(3)



第 11 図　集石遺構実測図(4)



第12図　集石遺構実測図(5)



第１３図　集石遺構No.４実測図(6)

を立てかけ、中央にも河原石をおいている。遺構は、炉的形態をもつが、火を受けて赤化している部分は見られなかった。床面から石鏃が１点出土している。石組遺構内からは、周辺に見られる焼石は出土していない。

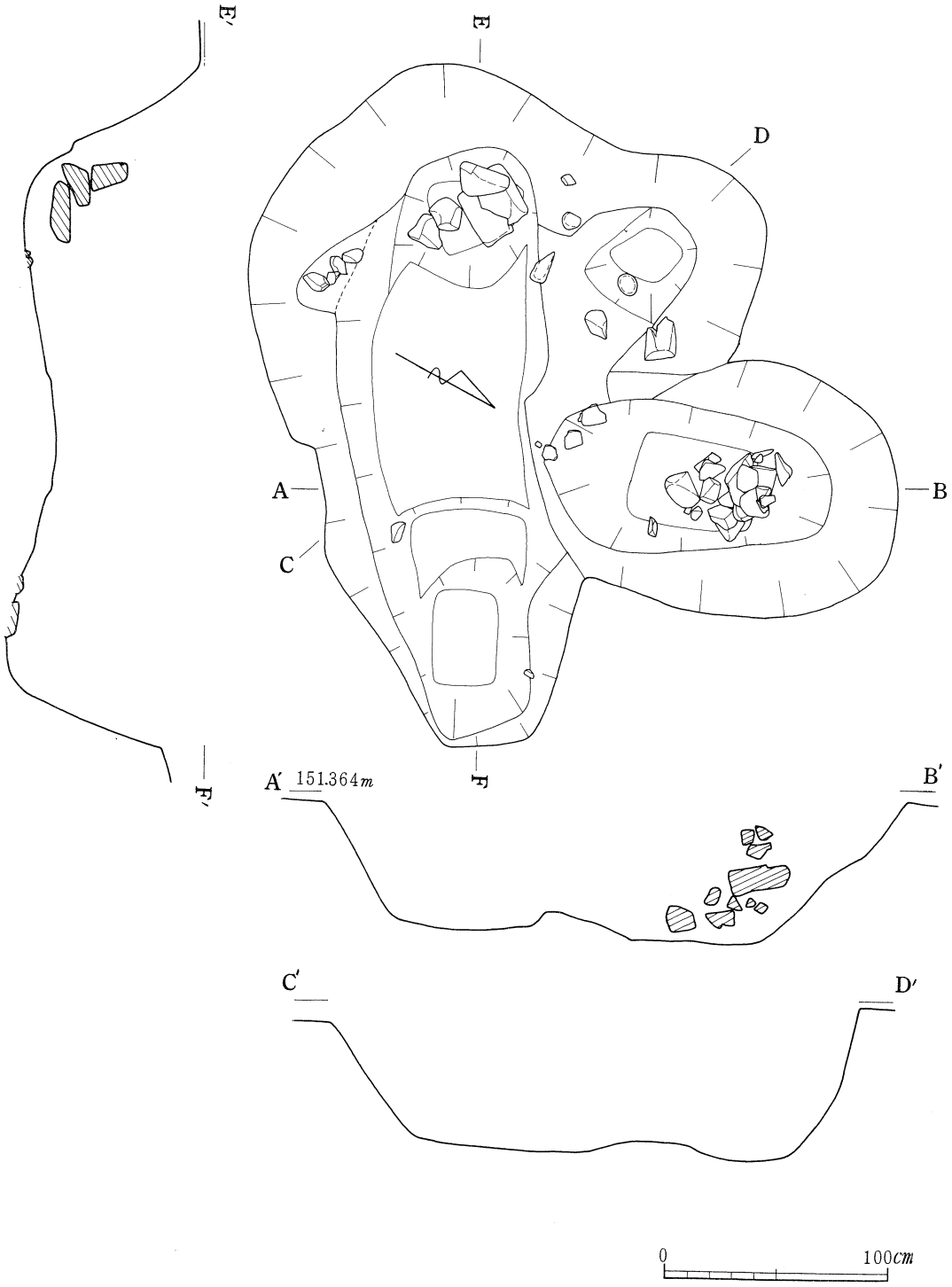
土坑は、C－３区で検出されている。C－３区の№１土坑（第１５図）は、1.5 m × 1.1 m、深さ 0.8 m前後を測る隅丸長方形の土坑と 1.9 m × 0.7 m、深さ 0.2 m前後を測る長方形の土坑が切り合っている。切り合い関係から後者が新しい。埋土は小白斑を含む黒褐色系である。遺物は出土していない。

E－３区では、３基の土坑が検出されている。うち２基は、焼石群の下に位置する。№２土坑は 1.6 m × 1 m、深さ 0.7 m前後の土坑が４～５基切り合った状態であるが、前後関係は確認できなかった。うち２基は、壁際に焼石が見られ、１つは流れ込んだ状態で、１つは偏平石を積んだ状態であった。№１土坑からは、貝殻条痕文土器が出土している。埋土は小白斑を含む黒褐色土である。№３・４土坑は、1.２５ m × 0.７５ mほどの長方形プランで浅い土坑である。

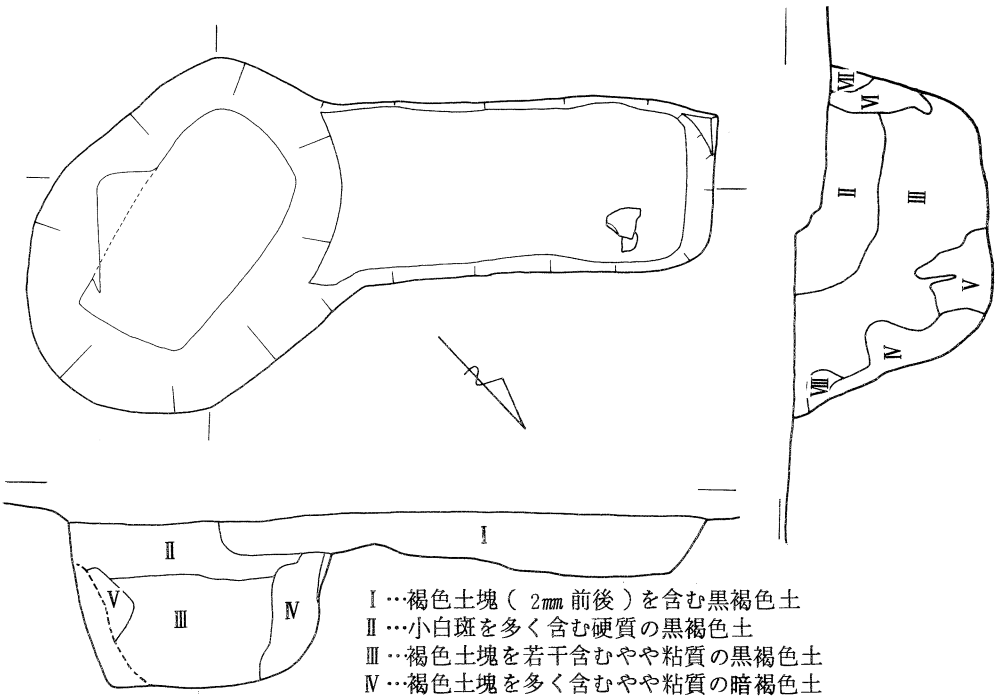
縄文晩期の遺構は、２基検出された。H－２区で検出された竪穴遺構№１（第１５図）は、長軸２ m、短軸 1.５５ mを測る不整形の長方形プランである。深さは１０cmほどが残存している。中央やや北よりに凹みがあり、焼土が見られた。床面上及び北東隅のピット内より土器が重なって出土した。第２２図１２２～１２４が床面上、１２０がピット内出土である。プランは不整形で柱穴は検出されていないが、竪穴住居跡の可能性が高い。

竪穴遺構№２（第１５図）は、径 1.4 m、深さ 0.6 mを測る竪穴である。竪穴上面で土器が出土し、中層に焼石がレンズ状に詰っていた。出土遺物は、土器の他、欠損した石斧を再利用したと考えられるたたき石が出土している。埋土は、アカホヤを含むにぶい黄褐色土である。

その他時期不祥の土坑が９基検出されている（第１６・１７図）。土坑は、全長が１ m～ 2.5 m であるが、幅は 0.5 m前後でいずれも長方形プランを呈している。土坑№７は、 1.9 m × 0.５３ m 深さ 0.7 mの長方形プランで、埋土は上層がアカホヤを含む黄褐色土、下層がやや粘質の黒褐色土でレンズ状を呈している。№８は、 1.1 m × 0.４５ m、深さ 0.３５ mほどの長方形プランをなす。埋土は、３層に分けられ、ほぼ水平に堆積していた。№１２土坑は、上面プランが現長 2.５５ m 幅 0.5 mの長方形プラン、深さ 0.９５ mで断面袋状となっている。埋土は上層に白灰色のボラ小粒がみられ、下層の中央には幅４０cmあまりに黒色土、その両側は暗褐色土となっている。９基の竪穴は、時期は、遺物等が出土していないため不明であるが、№８、№１２以外の埋土は、縄文晩期の竪穴遺構№２の埋土に類似していたので、同時期の可能性がある。

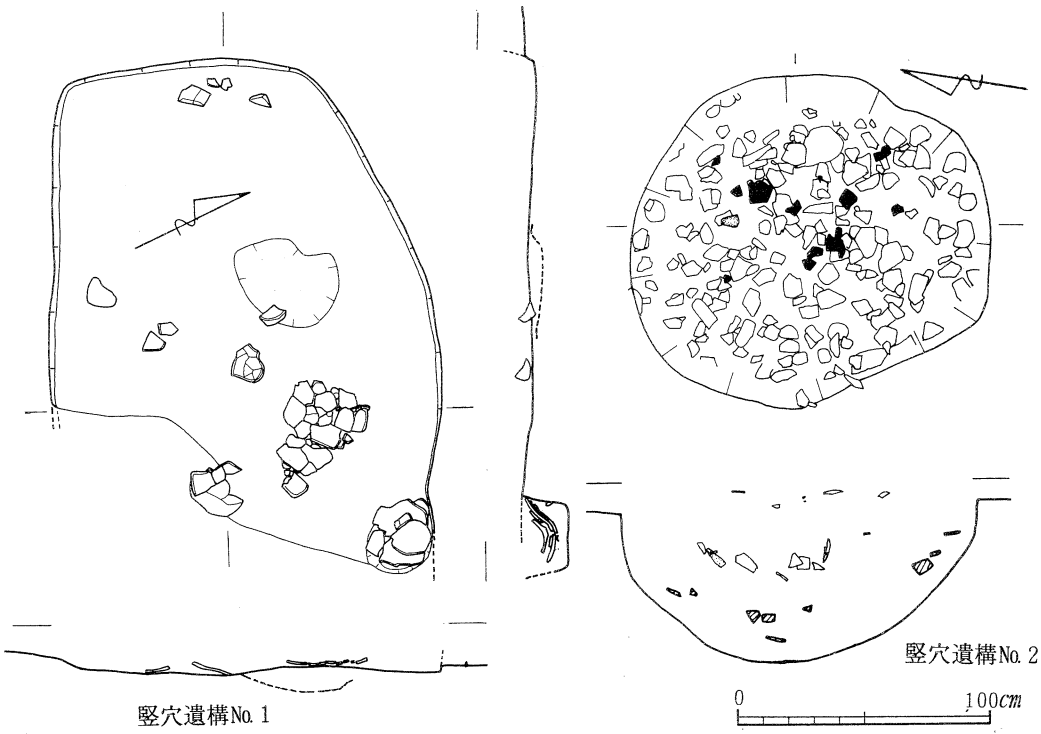


第１４図　土坑No.２実測図



土坑No. 1

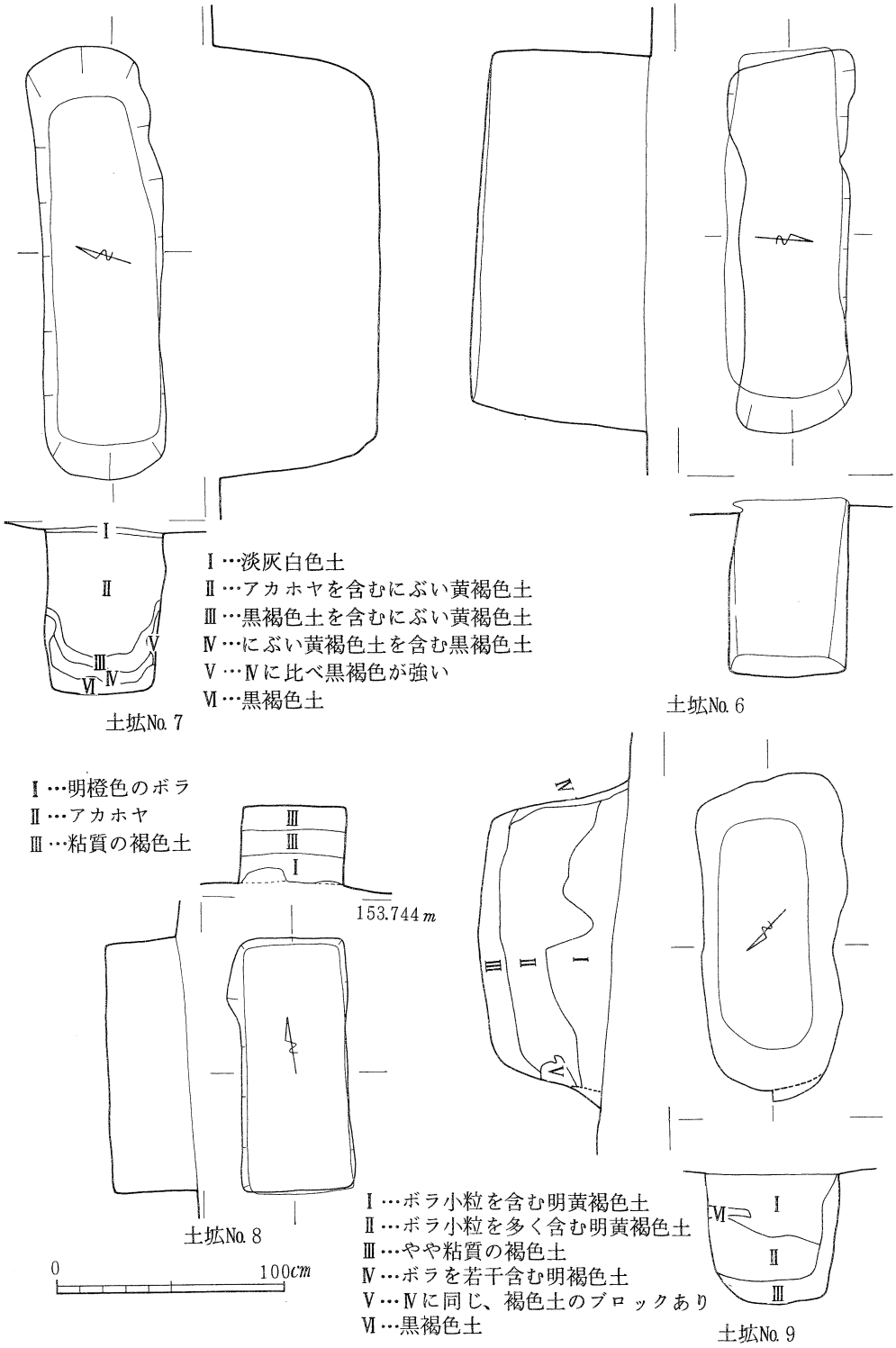
Ⅰ…褐色土塊（ 2㎜ 前後 ）を含む黒褐色土
Ⅱ…小白斑を多く含む硬質の黒褐色土
Ⅲ…褐色土塊を若干含むやや粘質の黒褐色土
Ⅳ…褐色土塊を多く含むやや粘質の暗褐色土
Ⅴ…褐色土塊を含むやや粘質の黒褐色土
Ⅵ…小白斑を多く含む暗褐色土
Ⅶ…砂質の淡褐色土
Ⅷ…暗褐色土



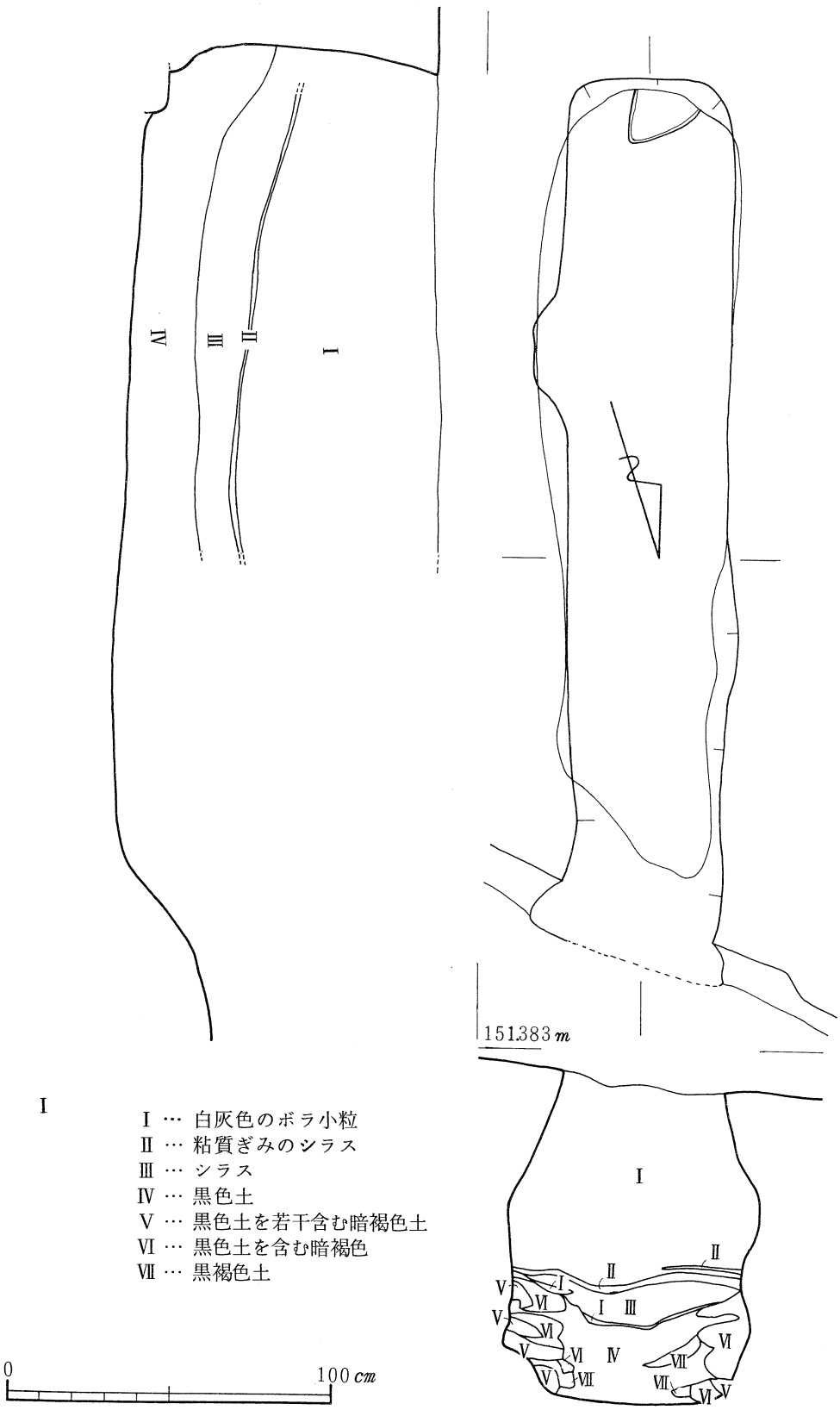
竪穴遺構No. 1

竪穴遺構No. 2

第１５図　土坑・竪穴遺構実測図


Ⅰ…淡灰白色土
Ⅱ…アカホヤを含むにぶい黄褐色土
Ⅲ…黒褐色土を含むにぶい黄褐色土
Ⅳ…にぶい黄褐色土を含む黒褐色土
Ⅴ…Ⅳに比べ黒褐色が強い
Ⅵ…黒褐色土
土坑No. 7
土坑No. 6
Ⅰ…明橙色のボラ
Ⅱ…アカホヤ
Ⅲ…粘質の褐色土
153.744 m
土坑No. 8
Ⅰ…ボラ小粒を含む明黄褐色土
Ⅱ…ボラ小粒を多く含む明黄褐色土
Ⅲ…やや粘質の褐色土
Ⅳ…ボラを若干含む明褐色土
Ⅴ…Ⅳに同じ、褐色土のブロックあり
Ⅵ…黒褐色土
0
100cm
土坑No. 9

第１６図　土坑実測図



第１７図　土 坑 No. １２ 実 測 図

遺　物（第１８～２４図）

出土した縄文時代の遺物は土器と石器で、大半は集石遺構に伴った早期のものである。晩期の遺物は、竪穴遺構、ピットから出土している。

縄文早期の土器は、押型文土器、貝殻文土器、撚糸文土器、無文土器等がある。文様、器形等より次のように分類される。

Ⅰ類……楕円押型文土器

a……横方向に施文された後、ヨコナデにより一部消されてベルト状を呈する。文様も3.3㎜と細く整っている。厚さも薄い（１～３）。２は内面に斜沈線が施文されている。

b……横方向に施文されたもの。（４）

c……外器面に縦方向に施文され、口縁部内面は横方向に施文される。口唇部にも施文されたもの。（６・７）

d……縦方向に楕円文が施文され、口縁部内面は横方向に施文されたもの。口縁部は丸く仕上げられ、刻目をもつ。（８・１０・２４）

e……口縁部が短く外反し、外器面に縦方向の楕円文が施文されたもの。口縁外反部内面に横方向に施文されている　（１１）。

f……外面は無文で、口縁部内面に楕円文が施されたもの。（１３）

g……Ⅰ類の底部。（１４～１７）。１５～１７は平底、１４は不明、楕円文はいずれも横方向に施文されている。

Ⅱ類……山形押型文土器

a……横方向ベルト状に山形文が施文されたもの。（２１）

b……横方向に山形文が施文されたもの。（１８～２２）。１９の内面調整は貝殻条痕である。２１は、文様が大きく、深く、厚さも他の３点に比べ厚いので２つに細分できる。

c……口縁部が外反し、外器面に縦方向の山形文、口縁部内面に横方向に山形文が施文されたもの。（２８）。２７は、風化のため外器面に文様が見られないが、Ⅱ－Ｃに含めてよいかと思われる。

d……口縁部に原体条痕文、胴部に横方向の山形押型文が施文された円筒土器。口縁部は丸く仕上げられ、器壁も厚い。（２５・２６）

e……Ⅱ類の底部。（２９・３０）。３０は、弥生中期の充実した脚台に類似する特異な底部である。

Ⅲ類……格子目押型文。（３１）

Ⅳ類……口縁部文様帯に貝殻による刺突文等をもち、口縁部外端に刻目をもつ。胴部はナデ調整されている。（３２～３５）

Ⅴ類……貝殻条痕文をもつ土器。

a……口縁外端が内傾し、ヘラ様工具で刺突された土器。胴部の貝殻条痕文は浅い。（３６）

b……胴部に貝殻条痕文をもち、口縁直下に短沈線やヘラ様工具による刺突文をもつ。内面は丁寧なナデ調整である。（３８～４０）

c……胴部に貝殻条痕文をもち、口縁部直下に短沈線文、ヘラ様工具による押圧文等をもつ。（４１～４５）　４３以外の土器の内面調整はケズリである。

d……口縁部に横方向、胴部に縦方向の深い貝殻条痕文をもつ。内面はナデ。焼成良好で堅固である。（４６）

e……外器面に浅い貝殻条痕文をもつ。内面はヘラナデ調整。（４７・４８）

f……外反する口縁部で外器面に浅い貝殻条痕文をもち、内面はヘラミガキである。ｅと類似する。（４９）

g……片面に貝殻条痕文をもち、片面はナデ調整されたもの。（５０・５１）

h……貝殻条痕文をもつもの。（５２～５４）

Ⅵ類……貝殻腹縁刺突文をもつ土器。

a……口縁直下に横位の、胴部に末広がり状ないし菱形状の貝殻腹縁刺突文が施文され、胴部下端に縦方向の貝殻腹縁による短沈線をもつ。内面はケズリ調整で、上位はケズリ後荒ナデが施されている。器形は円筒形。（５７・６２）

b……外器面は、浅い斜方向の貝殻条痕文を地文とし、口縁直下に横方向、胴部に菱形状に貝殻腹縁刺突文が施文されたもの。内面はケズリ調整。（５８～６１）

Ⅶ類……口縁端部が肥厚し、口縁部が内湾ぎみの土器。口唇部は内傾ないし平坦である。文様により次のように細分される。

a……３単位ほどの貝殻腹縁条痕文が短く横走ないし斜走しそれを繰返すもの。（６３～６５）

b……貝殻腹縁で稜杉状に刺突するもの。内面ヘラナデ。（６７・６９・７１・７２・７６）

c……貝殻腹縁で横位に刺突するもの。内面ヘラナデ。（６８・７０）

d……ｂ・ｃの底部。

e……貝殻腹縁で縦位に刺突するもの。内面ヘラナデ。（７４）

f……ヘラ様工具でハの字状にあるいは縦方向に施文するもの。内面ヘラナデ。（７７・７８）

g……ヘラ様工具で稜杉状に施文するもの。（８０・８１）

h……貝殻腹縁で横位に刺突し、その間にヘラ様工具で稜杉状に施文し、胴部、下部は貝殻腹縁で縦位に施文するもの。内面ヘラナデ。（８１～８５）

i……口縁端部の肥厚は見られないが、口縁部が内湾する。口縁部に棒状工具で横位に刺突し、胴部に曲線文をもつ。内面ナデ。（８６）

j……口縁直下に横位に、その下部に縦位方向に貝殻腹縁を刺突するもの。（８７）

k……無文のもの。（９２）

Ⅷ類……外器面及び口縁部内面に撚糸文をもつもの。（９３・９４）

Ⅸ類……外器面が無文のもの。（１００～１０６）　１０２は内面に斜沈線文が施文されている。

早期の土器は、この他平栫式に類似したものなどが出土している。底部は尖底が１点出土した他は平底ないし上げ底などが出土している。

晩期の土器は、１１５～１１９・１２１が竪穴遺構№２　１２０・１２２～１２４が竪穴遺構№１から出土している。１２０は、推定口径２７.９㎝で胴部でくの字形に内湾し開く。口縁部は、粘土貼り付けで低い立ち上がり部をつくっている。１１９の内面はヘラナデである。晩期の土器は大半が浅黄色を呈する。

石器は、石鏃、石匙、環状石斧、局部磨製石斧、磨石、たたき石等が出土している。磨石１１２、たたき石１２０以外は早期のものである。（第６・２３・２４図）

石鏃は、７０点あまりが出土している。石材は、粘板岩、チャート、流紋岩、黒曜石、メノウがあり、多くは粘板岩製である。黒曜石で姫島産と考えられるものは７０・７１・１００の３点である。石鏃は、凹基式、平基式、円基式があり、形状及び基部等により次のように分類される。Ⅰ類は、二等辺三角形状で梯形の抉りをもつもの（３４・３５等）、Ⅱ類は、正三角形状で側縁が外湾し、深い抉りをもつもの（４９・５０等）、Ⅲ類は、脚部が「ハ」の字状に広がるもの（５６・５７等）、Ⅳ類は、基部に弧状の抉りをもつもの（６６・６９等）、Ⅴ類は、基部に浅い抉りをもつもの（７４・７９等）、Ⅵ類は、磨製石鏃（８０）、Ⅶ類は、正三角形をなすもの（８２・８３）、Ⅷは、剝片鏃（８５・８６等）、Ⅸ類は、大型の石鏃（１０２）、Ⅹ類の円基式（９２・１０３等）に分類される。出土した石鏃は、Ⅰ類の占める割合が大きい。

石匙は３点出土した。２２は縦形の石匙で片側縁に刃部をもつ。石材はチャート。２３は、粘板岩を石材とした縦形の石匙で、つまみ、刃部の形成は丁寧である。２４は、粘板岩を石材とした横型の石匙で、２次加工によりわずかにつまみを造り出している。

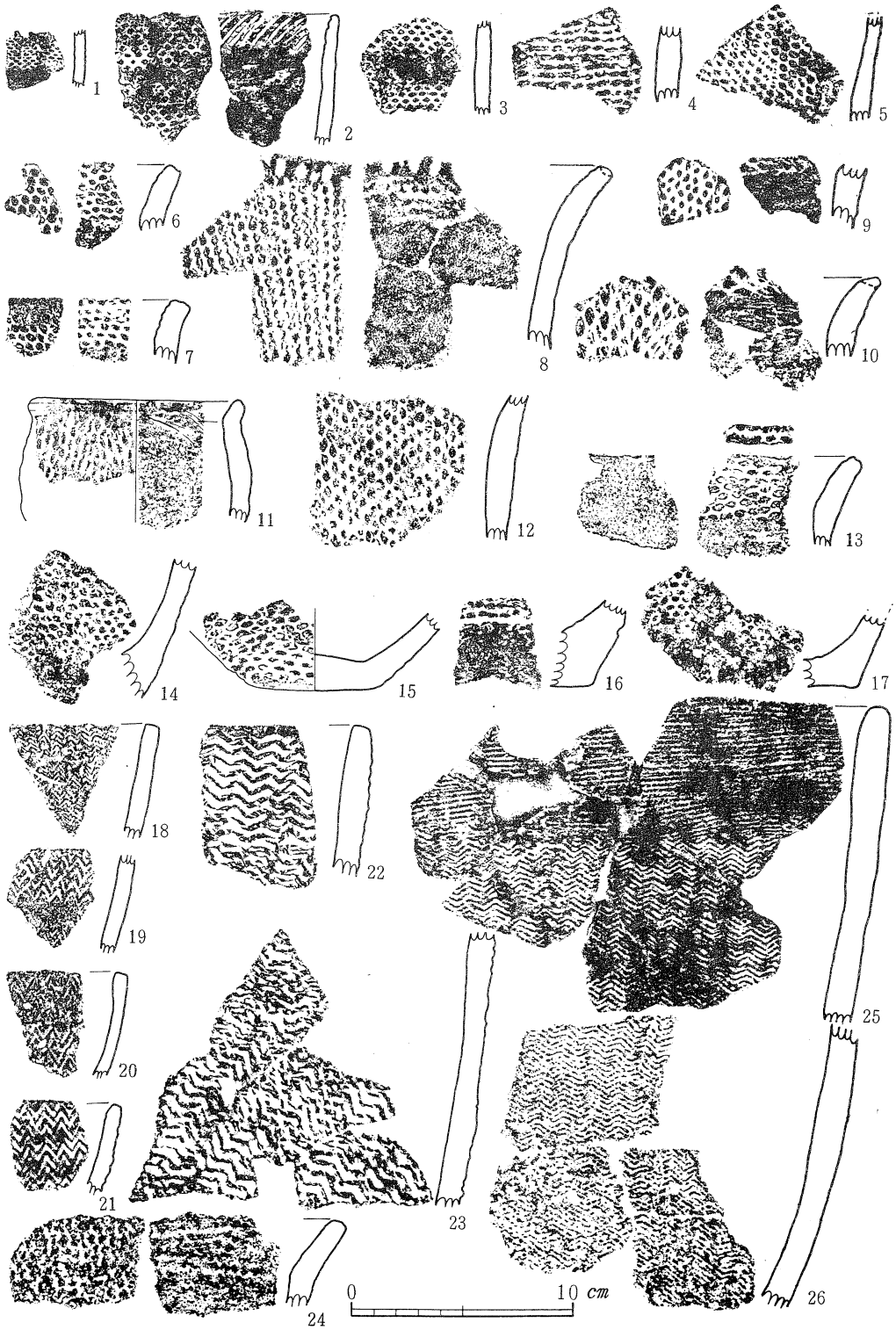
石斧は３点出土している。１０７・１０８は局部磨製石斧で粘板岩を使用している。１０７は短冊型で全長9.６㎝、幅5.０㎝、厚さ2.０㎝である。１０９は、Ⅰ－３区の礫群内で出土した環状石

斧である。砂岩を使用し、復元径8.4㎝、孔径2.5㎝、厚さ1.6㎝を測る。全周とも丁寧に磨研され、孔内の稜にあたる部分は磨れて丸くなっている。棒状のものをさし込んだものと思われる。刃部に刃こぼれもみられる。１０６は、Ｃ－４区で出土した円盤状石器である。砂岩を素材とし、外周は両面からの剝離により円形に成形している。径１0.8㎝、厚さ1.0㎝を測る。

磨石は、１０点ほど出土している。石材は、１１４・１１５・１１９が砂岩、１１６・１１８が流紋岩、１１７が石英安山岩である。砂岩を素材とした磨石は径１０㎝前後のものが多い。凹石は、いずれも砂岩を使用し、径１０㎝以下である。凹み部は片面あるいは両面にもち、深さは0.2㎜前後である。石皿は出土していないが、調査区内に点在していた２０～３０㎝の大石の片面等に一部磨滅しているものと見られたので、これが石皿として使用されたものかもしれない。

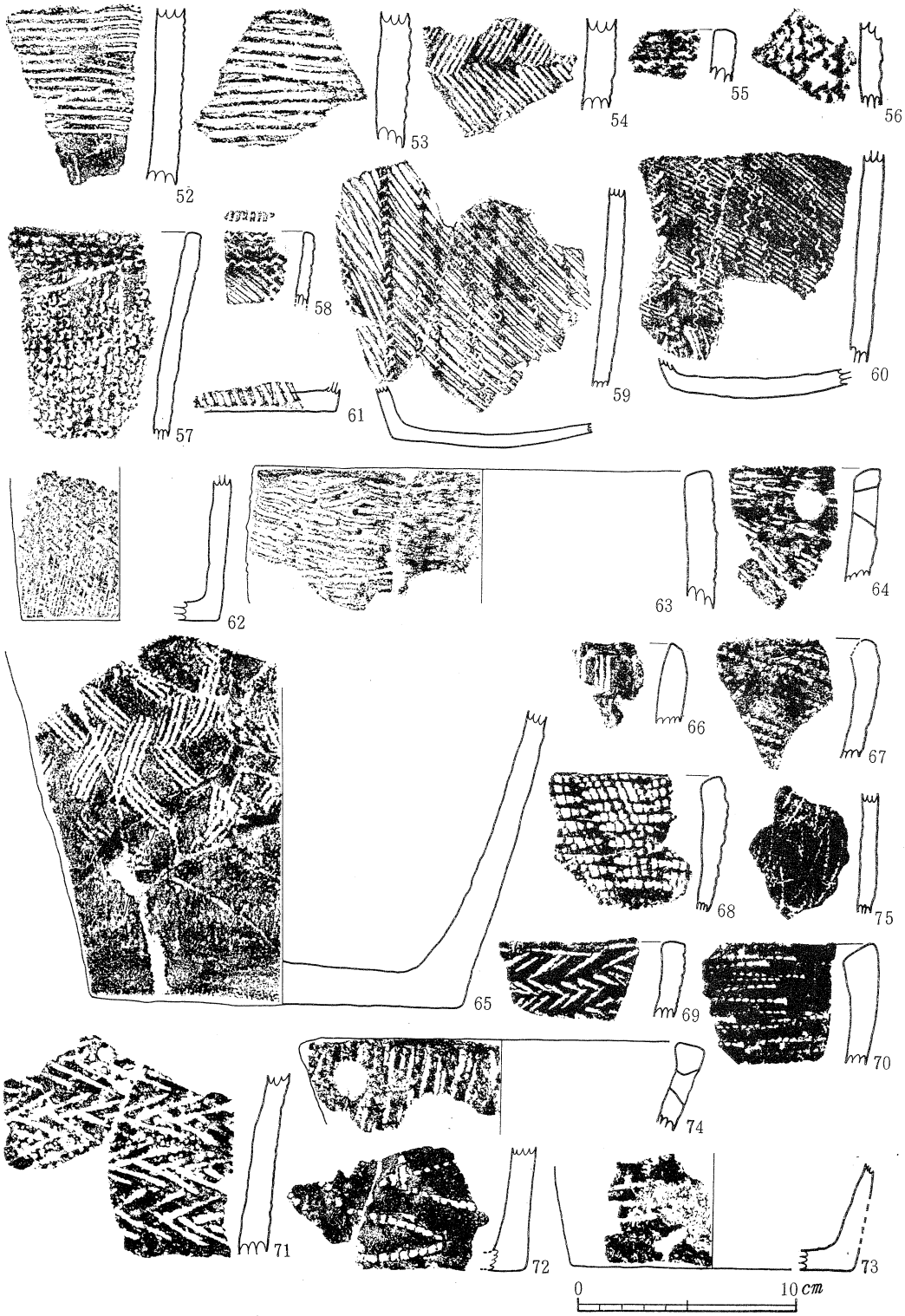
たたき石は、晩期の竪穴遺構№2から１点出土している。石英安山岩を使用し、一端部に使用痕をもつ。形状からして石斧の再利用と思われる。全長8.2㎝、幅5.1㎝、厚さ2.8㎝を測る。

２５～２７は、一側縁に２次加工により刃部が形成されており、スクレイパーの一種と考えられる。２７はチャートを石材としたラウンドスクレイパーである。３０～３３は２次加工のある石器で３０、３２が粘板岩、３１・３３がチャートを使用している。

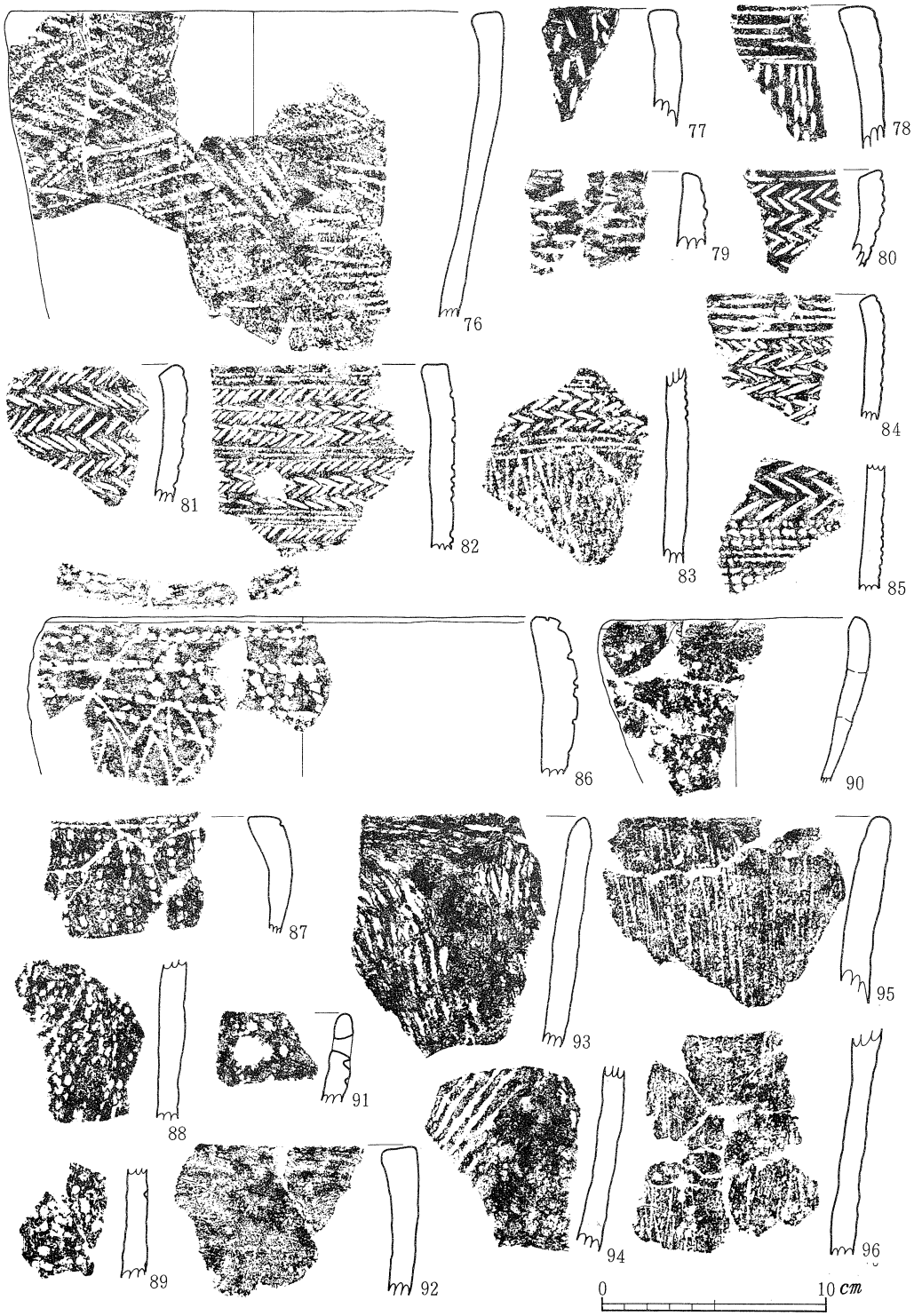


第１８図　出土土器実測図(1)

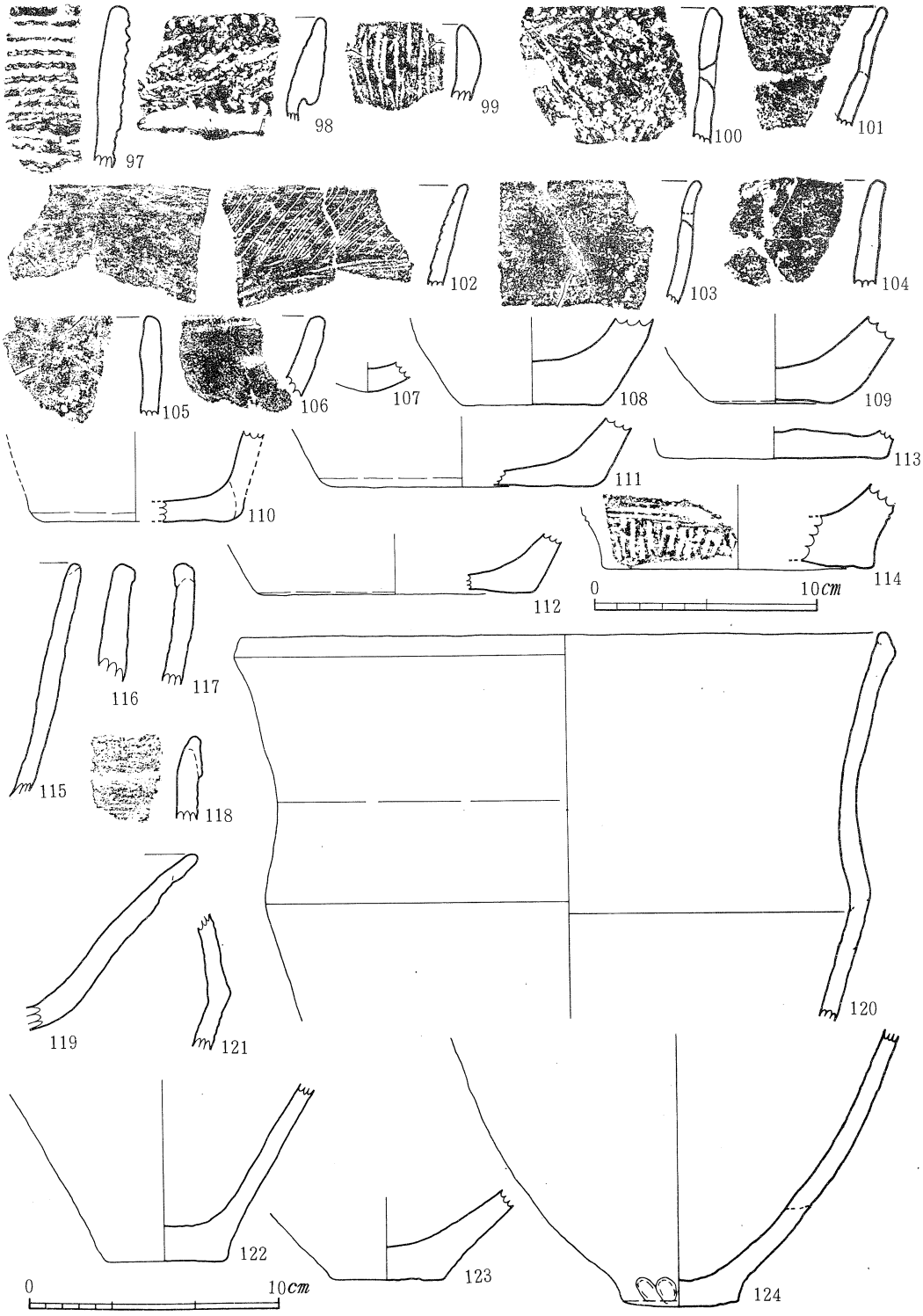
第１９図　出土土器実測図(2)



第２０図　出土土器実測図(3)

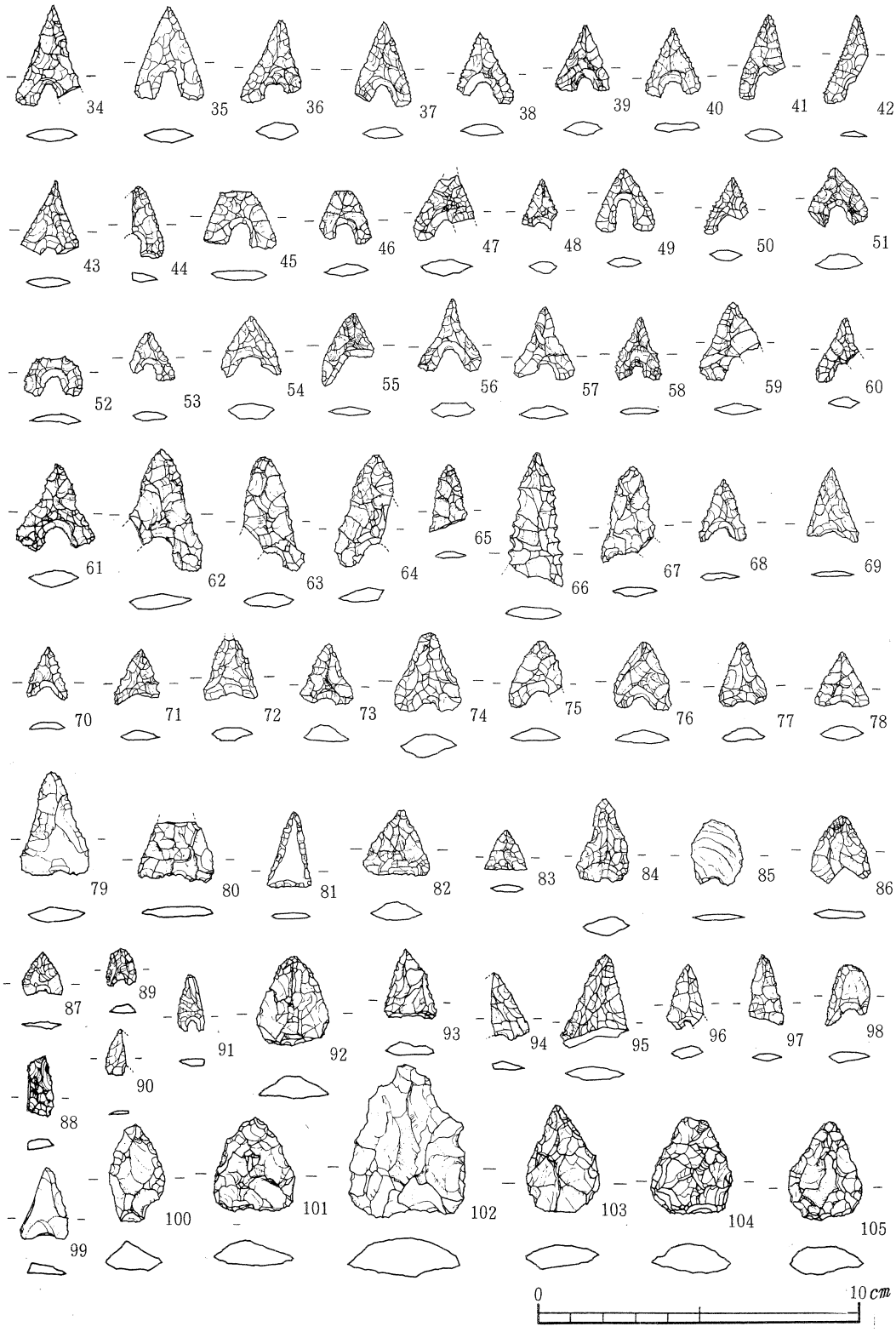


第２１図　出土土器実測図(4)

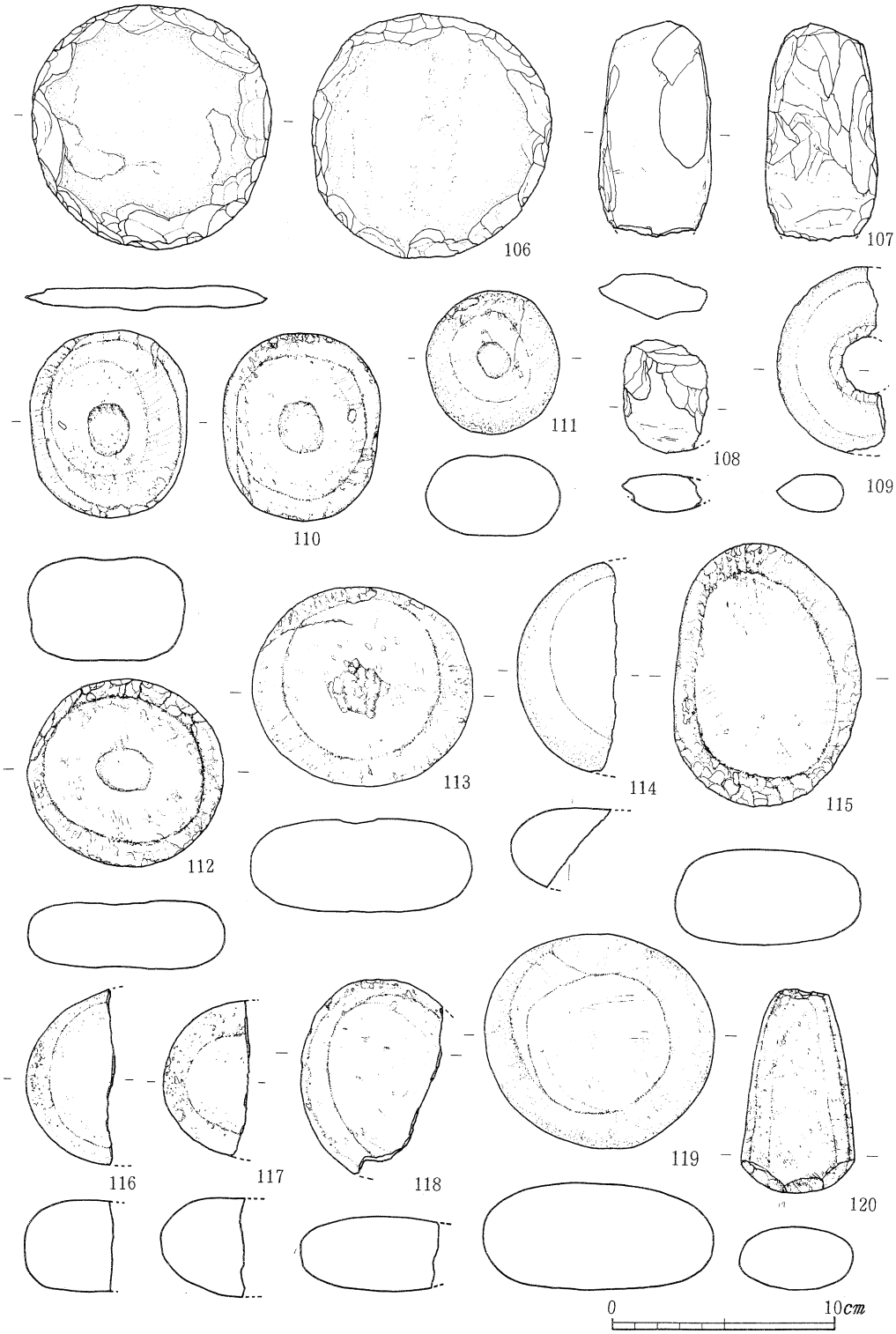


第２２図　出土土器実測図(5)

（97～121は1/3、120・122～124は1/4）



第２３図　出土石器実測図(3)



第２４図　出土石器実測図(4)

第４章　　芳ケ迫第２遺跡の調査

第１節　　調査の経過及び概要

芳ケ迫第２遺跡は、前平山の山裾端部にあたる北西向きの緩やかな斜面に位置しており、本地点より延びる丘陵上には芳ケ迫第１遺跡が位置する。

本遺跡周辺においては、昭和４５年に九州縦貫自動車道建設に伴う分布調査が行われた際、箱式石棺が１基確認された。しかし、昭和５６年４月の県営農地開発事業に伴う前平地区の分布調査においては、土器片がわずかに採集されたものの、箱式石棺の所在地は判明しなかった。続く昭和５７年の試掘調査においても、箱式石棺の所在地として調査の対象となったが、板石の散乱や土師器片がわずかに見られたのみで、その所在は確認されなかった。

そこで、今回の本調査においては、箱式石棺の存在が予想される地点を芳ケ迫第２遺跡として発掘調査し、箱式石棺の実体を記録保存することを目的とした。発掘調査は、昭和５９年７月２０日から７月２６日まで実施した。

本地点の現況は杉林であったので、昭和５７年の試掘調査の際に板石の散乱がみられた地点を中心に杉を約1,３００㎡伐採し、重機と人力によって樹根を処理した。そして、ボーリング等による事前作業を行いながら、アカホヤ層上面に堆積した黒色土を重機と人力を併用しながら除去した。

層位としては、耕作土である黒色土層が黄褐色火山灰層（アカホヤ層）上面に５０～８０㎝程度の厚さで堆積していたが、黒色土層中に黄褐色火山灰（アカホヤ）が混在しており、かなり散乱している状態であった。そして４０～６０㎝の堆積が見られるアカホヤ層下には暗褐色の粘質土層が約３０㎝の厚さで堆積しており、黄褐色パミス層（第２オレンジ層）が下に続いている状態であった。

箱式石棺の確認のためにアカホヤ層上面まで掘り下げた範囲は約1,０００㎡であったが、箱式石棺は確認できなかった。そこで調査区域の拡張も検討したが、調査期間や費用等の諸事情を考慮して不可能と判断し断念した。また、調査区周辺部の耕作土上からのボーリングも行ってみたが確認することはできなかった。以上のように、当初の目的であった箱式石棺の検出はできなかったが、アカホヤ層上面において中世を中心とする遺物が出土したため、グリッドを設定して遺物の取上げを行った。

アカホヤ層上面までの調査区域は斜面に直行する状態で２０ｍ×５０ｍの東西に長い長方形を呈していたので、それに応じて１０ｍ×１０ｍのグリッドを設定し、西から西へＡ・Ｂ……Ｇ区、南から北へ１・２・３区と呼称することにし、同時に地形測量も行った。

第２節　　遺構と遺物

遺構としては、炭化物がわずかに集中する部分が２ケ所みられたのみで他は検出されず、遺物も層位的には把握できなかった。これは、本地点が杉林になる前にサツマイモの畑であったことが判明しており、実際アカホヤ層に掘り込む状態で３０数個の貯蔵穴が確認されている等、立地条件の悪さと、開墾によって撹乱を受けていることに起因すると思われる。

遺物としては縄文土器・土師器・須恵器・備前焼・東幡系陶器・青磁・白磁及び石鏃・石錘・土錘が出土しており、その他鉱鐸も出土している。

1.　縄文土器

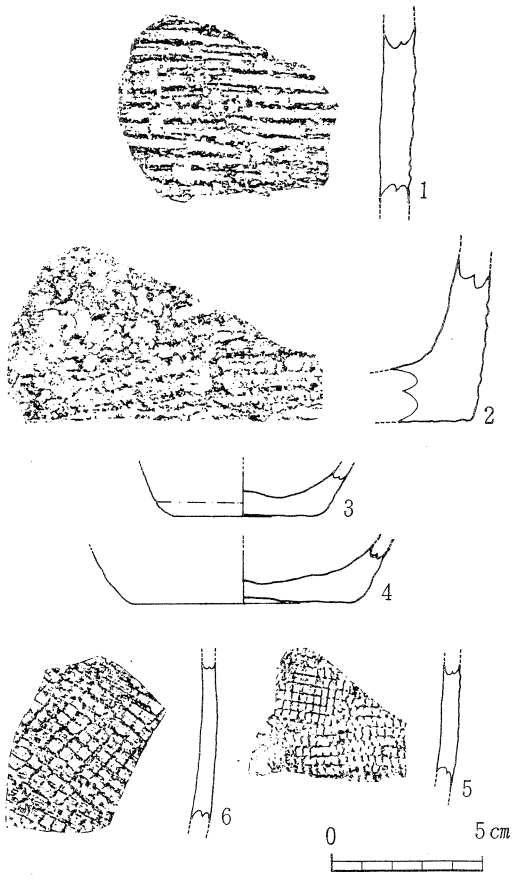
縄文早期の貝殻文（吉田・前平系）土器の胴部と底部片が各１点出土している。１と２は同一個体と思われ、外面に貝殻条痕文を施し、内面は底部より上方へケズリ調整を施す。

2.　土 師 器

土師器は坏の底部２点と胴部小片数点が出土しており、口縁部は出土していない。３・４ともに底部はヘラ切りで、底部はあげ底状を呈する。３の外面の底部と胴部の境は明瞭な稜線が認められるが、４は丸みを持つ。また４の底部外面には、ヘラ状の工具による沈線が１条巡る。

3.　須 恵 器

須恵器は胴部片のみ７点出土している。全て格子目の刻目が外面に施される。格子目は１単位の大小によって２種類あり色調、焼成も異なる。



第25図　　出土土器実測図(1)

4. 中世陶器（備前焼）（7）

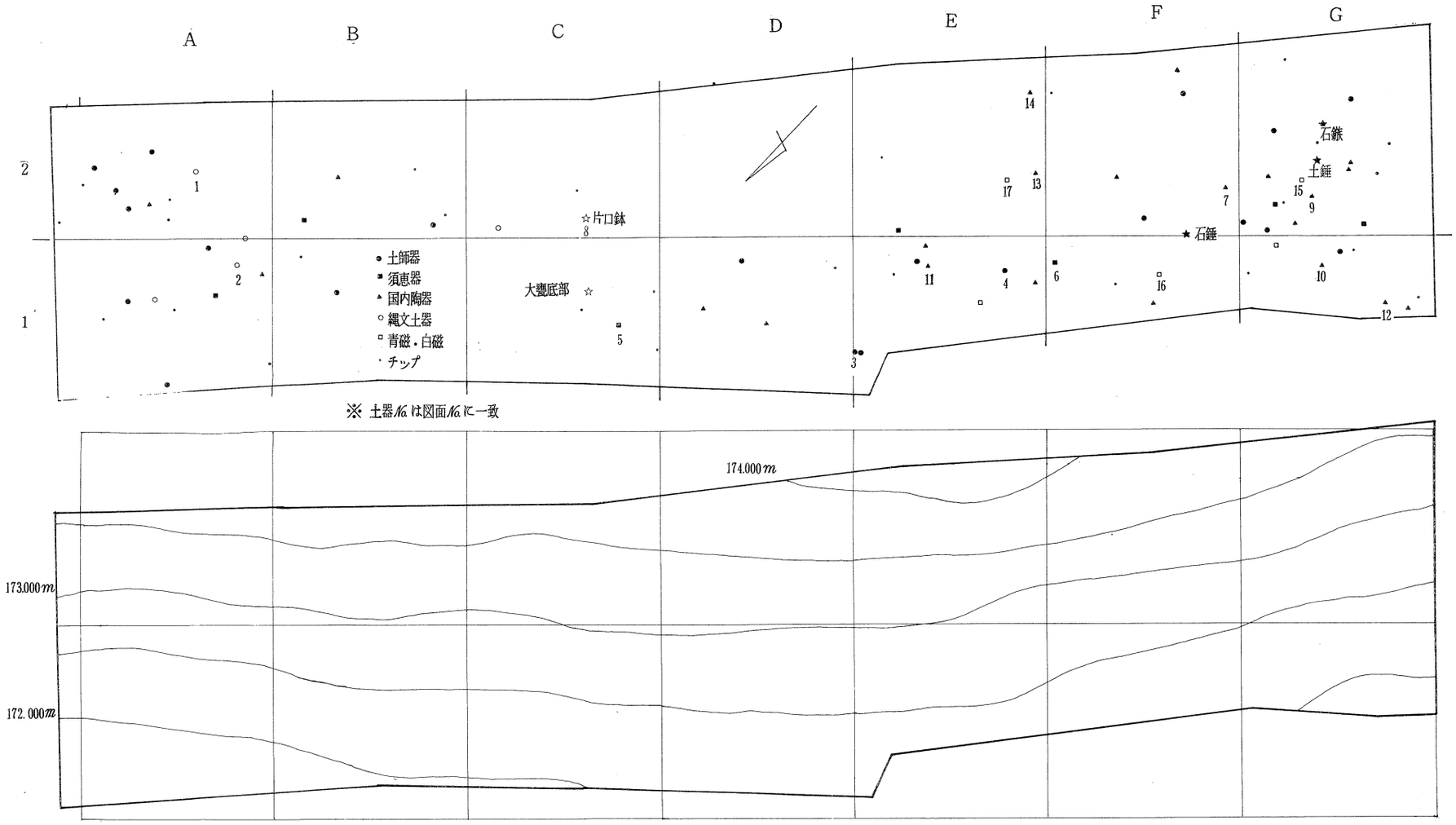
備前焼は口縁部１点と胴部５点が出土している。焼成が口縁部と胴部では異なり、また胴部も全く接合せず調整等も異なる。７は甕の口縁部で、頸部より外開きに立つ玉縁口縁を有する。頸部の下端部にわずかに自然釉がみられることから、肩部には自然釉がかかるものと思われる。

5. 中世陶器（東幡系片口鉢）（8～11）

８はほぼ完形で出土した小形の片口鉢である。底部より体部にかけて緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部内面には指ナデのあとと思われる凹部を有し体部とは稜をなす。さらに膨らみを持つ口縁部はほぼ直上に立ち上がる。また外面の口縁部と体部の接点には丸みをもつ稜を有する。内外面ともにヨコナデ調整で底部は回転糸切りである。焼成は甘く土師質状を呈する。　９は、焼成・色調ともに８に類似するが、口縁部の形態より別個体と思われる。９は、外面の口縁部と体部の接点に８よりもシャープな稜を有し、内側にかなり彎曲する凹部が続く。１０・１１はいずれも色調が灰色を呈し、焼成も良好である。８・９の口縁部外面の自然釉に比べ、光沢のある釉がかかる。１０の口縁部は小型のもので、内傾するのが特徴である。１１は以上の３点に比べ明らかに大型のもので、復元口径は約３５㎝である。口縁部外面には丸みをもつ稜を有し、体部との接点にもシャープな稜が巡る。内面の口縁部直下には、継目から派生するひび割れのはいった沈線を有する。出土したものは完形を除くと以上のいずれも別個体と思われる口縁部３点のみであり、体部・底部ともに破片も出土していない。

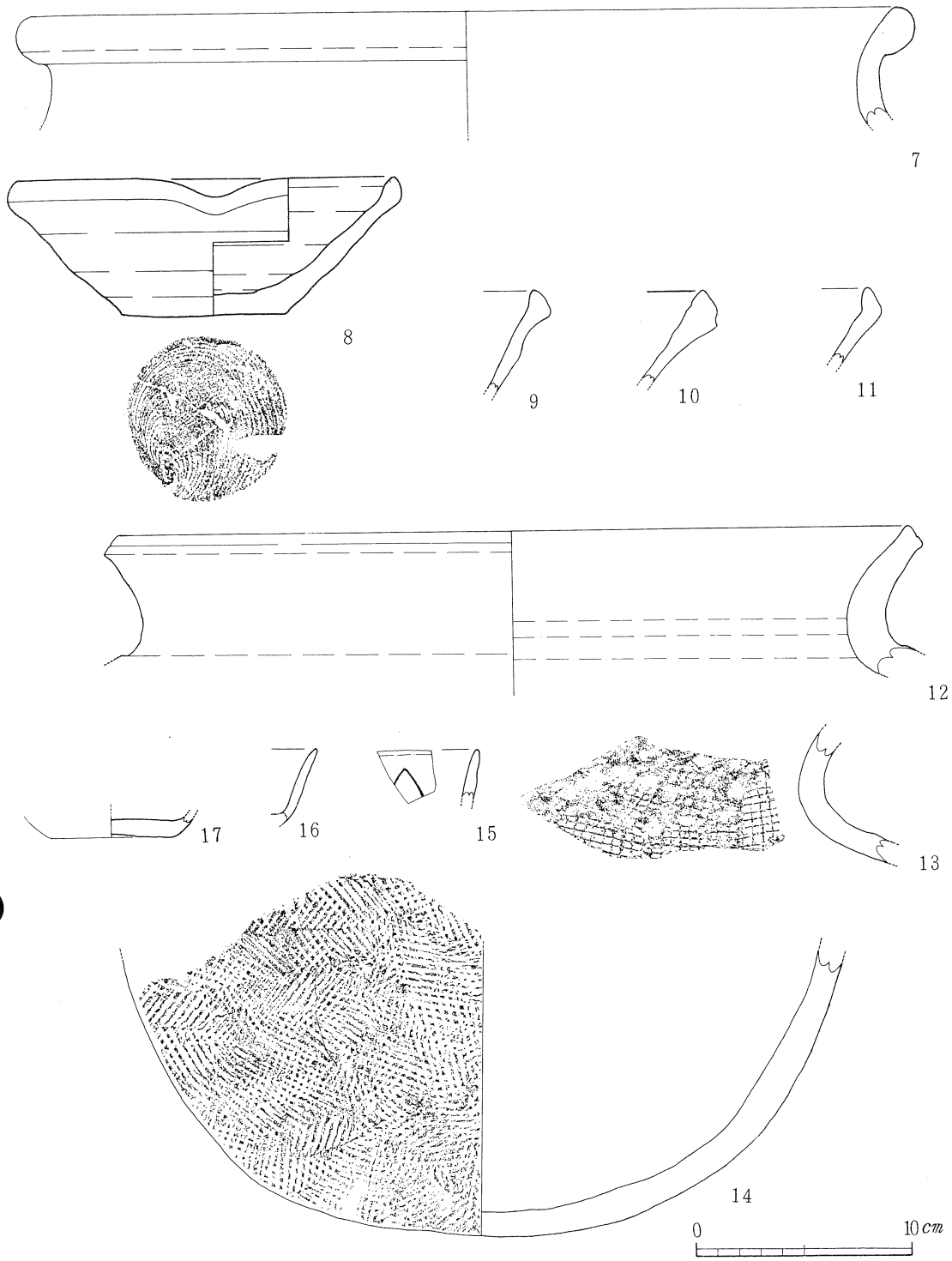
6. 中世陶器（12～14）

１２は甕の口縁部で復元口縁径は約３６㎝である。大きく外側へ開いており、肩部もかなり張るものと思われる。口唇部に条線が１条巡ることと肩部に格子目の刻目を有するのが特徴的であり、また内面は平滑なヨコナデ調整であるのに対し、頸部外面に凹凸が顕著なことも特徴の一つである。色調は灰色を呈し、焼成も堅致である。１３は甕の頸部であり、口縁部が外反し、肩部が張る器形を有するものと思われる。頸部より肩部へかけての格子目の叩き目及び内外面の調整は１２に類似するが、焼成が明らかに甘く器形も異なる。１４は丸底を呈する甕の底部であるが、外面の矢羽根状の叩き目が特徴的である。内面はナデ調整であるが凹凸が顕著であり、棒状のあて具を使用しているものと思われる。１２・１３・１４はいずれも１点ずつ出土しており、県内には類例がないものである。



※ 土器No.は図面No.に一致

第２６図　遺　物　分　布　図



第２７図　出土土器実測図(2)

7. 青磁・白磁

１５は、青磁碗の口縁部である。外面にケズリ出しによる蓮弁を有する。１６は、口縁部に施釉のないいわゆる口ハゲ口縁を有する白磁碗である。釉の色は青みがかった白色である。１７は白磁碗の底部である。畳付部を除く全面に白色の釉が施されている。

8. 土　錘

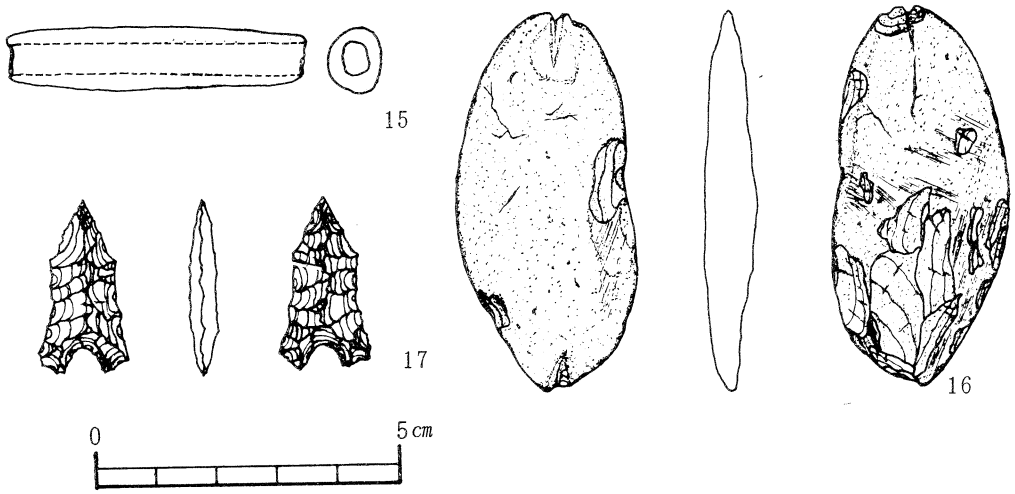
土錘は１点出土している(17)。 最大長 4.9 cm、内径 0.5 cm、重さ 4.4 g を計る。火山灰系の精良な粘土を使用し、焼成は良好で堅致である。色調は黄橙色を呈する。

9. 石　錘

石錘は２カ所の溝を有する扁平なものが１点出土している。石材は黒色の細粒砂岩でより剝離面のある扁平な河原石を使用している。剝離面は研磨によって平滑に仕上げている。両辺の溝は、一方は表裏面ともに研磨によって作り出しているが、他方は１面のみである。最大長 6.2 cm、最大幅 2.9 cm、最大厚 0.8 5 cmを計る。

10. 石　鏃

石鏃は両測辺に稜を有し、五角形の形状を呈するものが１点出土している。両測辺は表裏面より剝離調整を施し形を整え、基部にも同様の調整によって凹部を作り出す。最大長 2.9 cm、最大幅1.0 cm、最大厚 0.5 cmを計る。石材は灰緑色のチャートである。



第28図　　出土遺物実測図

第５章　　芳ケ迫第３遺跡の調査

第１節　調査の概要

芳ケ迫第３遺跡は、芳ケ迫第１遺跡より南西約２００ｍの地点にあり、立地としては、芳ケ迫第１遺跡の立地する丘陵の隣の低丘陵の緩斜面にあたる。

本地点は、昭和５６年の試掘調査の段階では調査の対象とはならなかったが、芳ケ迫第１遺跡の発掘調査中に試掘調査が行われ、アカホヤ層下より焼けた礫や遺物が出土したため芳ケ迫第３遺跡として発掘調査することになった。試掘調査ではサカホヤ層下のみで遺物が出土し、アカホヤ層上は耕作による撹乱が顕著であったため、良好な包含状態にあるアカホヤ層下を重点に調査することになった。

現況は緩やかな傾斜を有する小丘陵であったが、アカホヤ層下の地形及び土層確認の為傾斜に直行する幅２ｍのトレンチを入れた。遺物はほとんど出土せず、また焼石などもみられなかったが、壁面にアカホヤ層下で掘り込まれた土坑が確認された。そこで丘陵のより先端部を調査することにし、アカホヤ層まで剝いだ後傾斜にそって南北に長い１０ｍ×１０ｍのグリッドを設定した。グリッドは南から北へＡ・Ｂ……Ｆ区、東から西へ１・２・３区と呼称することにし、同時に地形測量を行った。掘り下げの段階で遺物等の分布域がさらに丘陵の先端部へ拡張することが予測されたが、先端部はかなりの傾斜で下位の耕作地に続いており排土等の問題があり、また保存可能なことも確認されたので、当初の予定区域のみを発掘調査した。発掘調査は昭和５９年５月１０日か　７月２０日まで行い、約1,２００㎡を調査した。

調査によって、縄文時代晩期の土坑、縄文時代早期の集石遺構・土坑、旧石器時代の集石遺構が検出され、それに伴う遺物が出土した。

第２節　層　位

本遺跡における層序は第30図のとおりである。

第Ⅰ層は、黒色の耕作土と黒褐色土が混在し下層のアカホヤの混入もみられるが、現況の雑草地以前は耕作地であったためと思われる。第Ⅱ層のアカホヤ層は、調査全域に厚さ３０～５０㎝の良好な堆積がみられる。この層の最下部には小粒の軽石層が途切れながらも３㎝前後の厚さで堆積している。第Ⅱ層の下位に焼石の散乱がみられるがまとまりはなく、遺物もほとんど出土しなかった。しかし、Ｃ－２区西側にアカホヤが混入する黒褐色土が堆積した縄文時代晩期の土坑がまとまって検出された。第Ⅳ層は縄文時代早期の遺物包含層であり、調査区全域に２０～３０㎝の安定した堆

積がみられる。第Ⅴ層から第Ⅷ層までは無遺物層である。第Ⅴ層・第Ⅵ層は調査区全域に堆積しているが、第Ⅵ層はトレンチの東側に堆積がみられるもののＣ区の土層断面には確認されず堆積する地域は調査区の北東部に偏る。第Ⅶ層は前平地区の遺跡群内では本遺跡のみにみられるもので特異な層である。トレンチでは角礫が詰まった非常に粘質の強い層として確認されたが、調査区内ではＡ区北側で途切れており、含まれる角礫もほとんどなかった。Ｃ・Ｄ区にはこの層はみられたが、Ｅ区で灰白色の粘質層がみられる。しかし、この層は全く礫を含んでおらず、粘性は弱い。この第Ⅶ層の堆積状況は他の層のそれとは全く異なることから、土石流等による一次的な層であると思われる。第Ⅸ層は姶良Ｔｎ火山灰層に相当するものと思われ粒の大小によって２層に区分される。第Ⅹ層は有機物を含む粘質層であるが、第Ⅺ層の堆積が厚くトレンチにおける層の確認だけに終わった。

第３節　遺構と遺物

1. 旧石器時代

旧石器時代の調査は、縄文時代の調査を終了した後２×１０ｍのトレンチを８ケ所設定して第Ⅸ層まで掘り下げ、集石遺構が検出されたＥ・Ｆ－２・３区は全面調査を行った。

遺　構

Ｅ－２区北側トレンチの第Ⅸ層上面で石核・剥片を伴った集石遺構が１基検出された。規模は４０×５０cm程度のもので、掘り込みはみられなかった。構成する礫は砂岩製の偏平な礫がほとんどで焼けた痕跡は当初みられなかったが、実際は火を受けていることが判明した。

遺　物

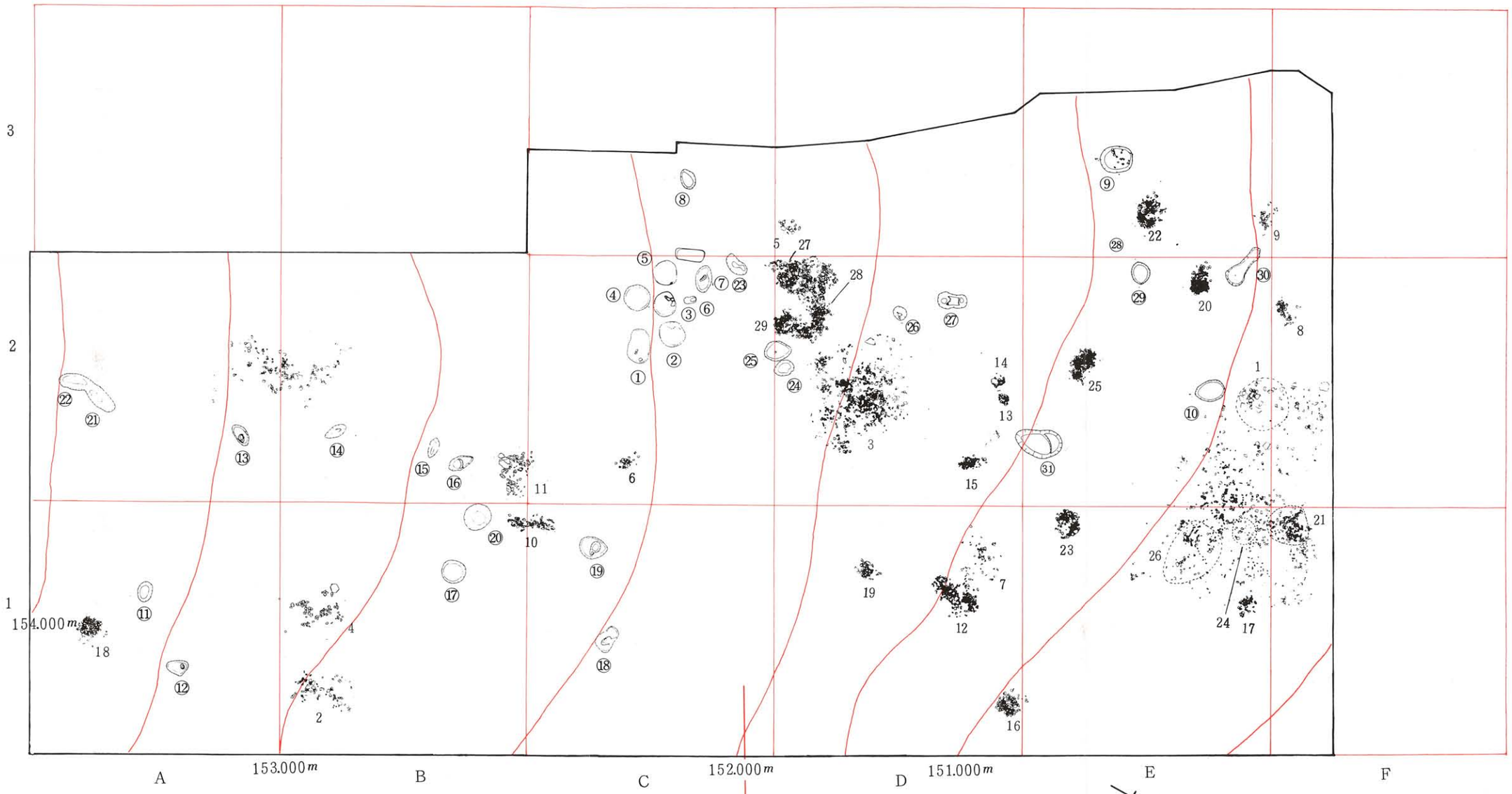
出土遺物は、当初泥質細粒砂岩製の石核１点・剥片２６点が集石遺構を中心に径1.5ｍの範囲で出土したのみであったが、Ｅ・Ｆ－２・３区を掘り下げたところＥ－２区北隅において肉厚の黒色泥岩製の剥片尖頭器が出土した。

2. 縄 文 時 代

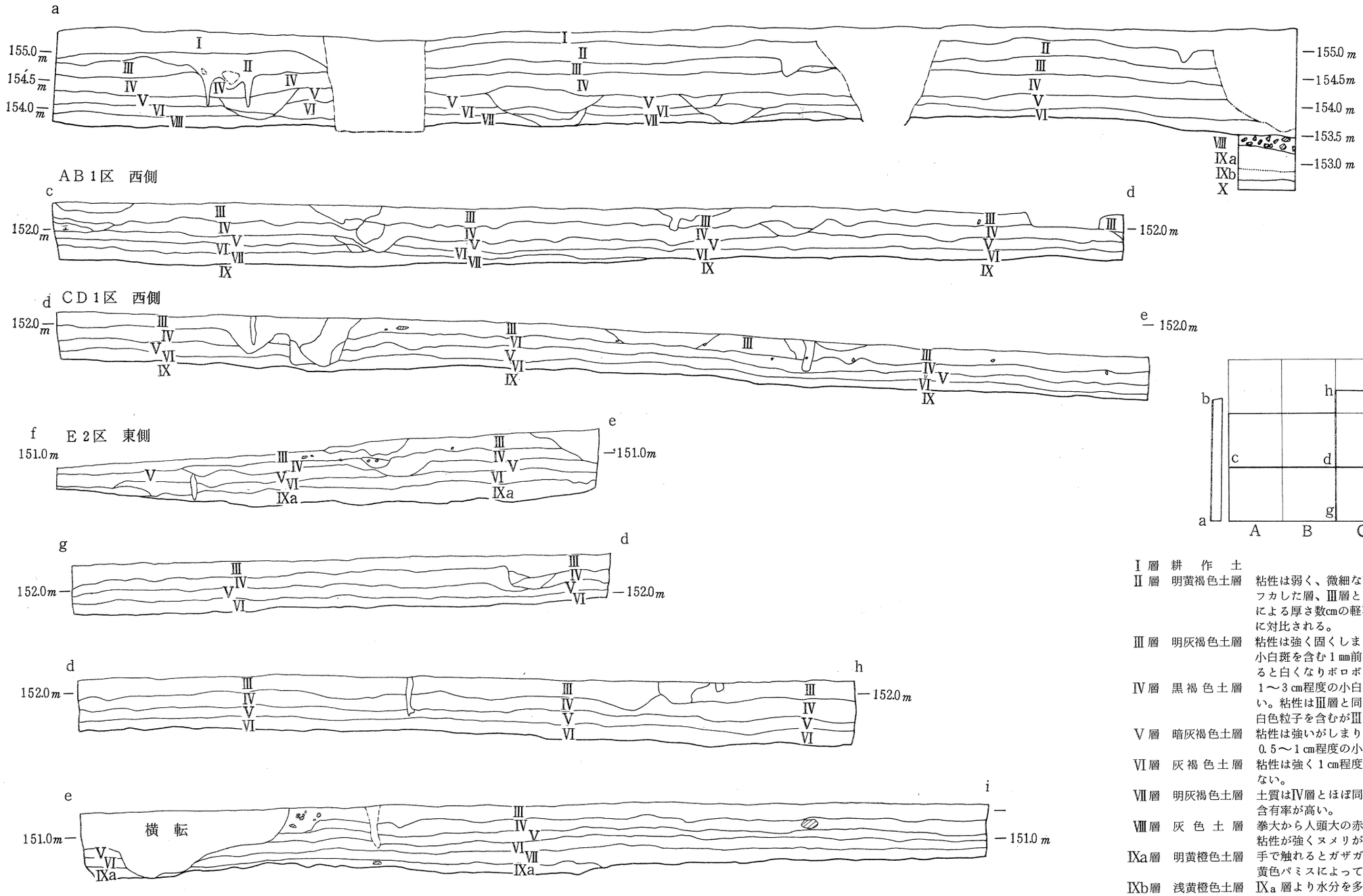
縄文時代の遺構

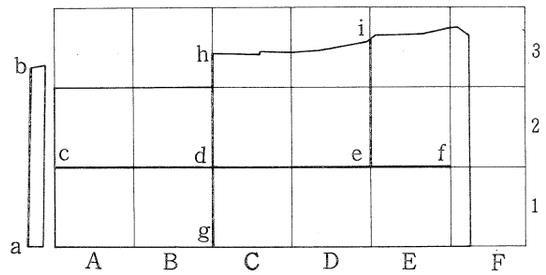
集石遺構（第31～36図）

集石遺構は全てアカホヤ層下で検出されたものであり、土坑を持つものと持たないものに大別される。前者は12基、後者は17基検出された。その他、土坑をもつ集石遺構を含んだ焼礫群が２ケ所で確認された。土坑を持つタイプの集石遺構には、土坑底部に配石を有するものが２基存在する。



第２９図　遺構分布図





第３０図　土層図

Ⅰ層	耕　作　土	
Ⅱ層	明黄褐色土層	粘性は弱く、微細な粒子によって構成されるフカフカした層、Ⅲ層との境には１～３㎜程度の軽石による厚さ数cmの軽石層がみられる。アカホヤ層に対比される。
Ⅲ層	明灰褐色土層	粘性は強く固くしまっている。径１～３cm程度の小白斑を含む１㎜前後の白色粒子を含む。乾燥すると白くなりボロボロにくずれる。
Ⅳ層	黒褐色土層	１～３cm程度の小白斑を含むがⅢ層より密度が低い。粘性はⅢ層と同程度で固くしまる。白色粒子を含むがⅢ層より少ない。
Ⅴ層	暗灰褐色土層	粘性は強いがしまりは弱い。小白斑を僅かに含む。０.５～１cm程度の小礫を含む。
Ⅵ層	灰褐色土層	粘性は強く１cm程度の小礫を含む。小白斑は含まない。
Ⅶ層	明灰褐色土層	土質はⅣ層とほぼ同じであるが、含まれる小礫の含有率が高い。
Ⅷ層	灰色土層	拳大から人頭大の赤褐色の角礫を密に含む。粘性が強くヌメリがある。
Ⅸa層	明黄橙色土層	手で触れるとガザガザしており、１～２m前後の黄色パミスによって構成される。
Ⅸb層	浅黄橙色土層	Ⅸa層より水分を多く含んでおり、粒子が細かく密である。
Ⅹ層	黒色土層	水分を多く含むが固くしまっている。手で触れるとヌメリがある。繊維状のものを多く含む。

集石遺構を構成する礫は、ほとんど砂岩の円礫・角礫であり、熱を受けた痕跡として赤変したり、脆くなったりしている。土坑中の埋土には炭化物が観察されるものが多いが、焼土は検出されない。土坑を持つタイプの集石の土坑は径１ｍ前後のものが多く、深さ２０～３０cm程度の円形のすり鉢状のプランが平均的なものである。

集石遺構の分布（第105図）

集石遺構については、Ｄ－２ＥとＥ－１・２Ｅの２ケ所に焼礫群があり、その間に単独の集石遺構が存在しているがグループとＡ・Ｂ区に独独に存在しているグループとに分かれる。Ａ・Ｂ区のグループ内では１８号集石を除いて土坑を伴っていない。一方、Ｄ・Ｅ区のグループは土坑を伴うものが多いのが特徴である。そして焼土を有する土坏が２基とも２Ｄ・Ｅ区のグループに属していることから、焼土を有する土坑と土坑や伴う集石の関連性が考えられる。その他の縄文早期の土坑はＤ・Ｅ区よりもＡ・Ｂ区の方が多い。

土坑（第38・39図）

縄文早期の土坑は２４基検出されたが、掘り込み面がある。第Ⅳ層中では確認が困難であり、遺構確認面の第Ⅴ層上面で第Ⅴ層以下に掘り込む状態で検出された。形態は様々であるが埋土は全て第Ⅳ層の黒褐色土であり、炭化粒を含む土坑や小礫を含む土坑も数基存在する。その中で３０号土坑と３１号土坑は焼土を持つタイプのものである。

縄文早期の遺物

土器（第40・41図）

第Ⅳ層の縄文土器包含層からは、押型文土器と貝殻文を施文する土器を中心とする土器が出土している。

Ⅰ類　山形押型文土器

Ⅰａ ― 外面・口縁部内面に横位に施文し、口唇部に凹線文。（１）

Ⅰｂ ― 外面・口縁部内面に横位に施文し、口縁部内面に棒状施文具による刺突文。（２）

Ⅰｃ ― 外面は縦位、口縁部内面は横位に施文に、口縁部内面に棒状施文具による刺突文。(3)

Ⅰｄ ― 外面は縦位、口縁部内面は横位に施文し、内面に稜を有する。（４・６）

Ⅰｅ ― 外面は斜位、口縁部内面は横位に施文し、口唇部に刺突文。（５）

Ⅰｆ ― 外面は山形文帯を鋸歯状に施文し、内面は横位に施文。（７）

Ⅰ′類　山形押型文土器底部

Ⅰ′ａ ― 平底で胴部へ僅かに外傾し、外面は斜位又は横位に施文。（８～１１）

Ⅰ′ｂ ― 平底で胴部へ大きく外傾し、外面は縦位に施文。（１２）

Ⅱ類　楕円押型文土器

Ⅱａ ― 外面・口縁部内面は横位に施文し、口縁部内面に凹線文。（１４）

Ⅱｂ ― 外面は斜位、口縁部内面は横位に施文し、口唇部にも施文。（２０）

Ⅱｃ ― 外面は縦位、口縁部内面は横位に施文。（１６）

Ⅱｄ ― 外面は縦位に施文し、口縁部内面は凹線文のみ。（１７・１８）

Ⅱｅ ― 外面は楕円押型文帯を鋸歯状に口縁部に施文し、胴部及び口縁部内面は横位に施文。(15)

Ⅱ′類　楕円押型文土器底部で丸底状の平底。（１９）

Ⅲ類　胴部が張出し、間延びした山形押文を斜位に施文。（２１・２２）

Ⅳ類　外面に貝殻による施文を施す円筒土器。

Ⅳａ ― 口縁部が肥厚して内湾し、外面全面に貝殻腹縁による押引き文を施文。（２３）

Ⅳｂ ― 外面に貝殻腹縁の刺突文を施文。（２６）

Ⅳｃ ― 外面に、１単位４～５条の貝殻条痕文を間隔をあけて口縁部から底部まで施文し、重ねて胴部上半のみ貝殻条痕文を横位に施文。（２７）

Ⅳｄ ― 貝殻条痕文を縦位に密集施文。（２４）

Ⅳｅ ― １単位４～５条の貝殻条痕文を間隔をあけて斜位に施文。（２５）

Ⅳｆ ― 貝殻による刺突連点文を外面に施文する。（２８）

Ⅴ類　ヘラ状施文具の連続刺突による爪形文土器。（３１・３２）

Ⅵ類　数本１単位のヘラ状施文具の束によって流水状の文様を施文。（３２）

Ⅶ類　ヘラ又は棒状施文具によって半截竹管状・綾杉状の文様を施文。（３３・３４）

Ⅷ類　外面は撚糸文、口縁部内面は撚糸文と凹線文を施文。（３５）

Ⅸ類　底部

Ⅸａ ― 平底で胴部へ外傾する。（３６）

Ⅸｂ ― 平底で胴部へ直行し、外面に浅い条痕を施文。（３７・３８）

分布（第42･43図）

押型文土器・貝殻文系土器ともにＣ－２区を中心に分布するグループとＥ－２・３区を中心に分布するグループに分けられ、Ｄ区の土器出土数が少ないのが特徴である。しかし、両グループに分かれるものの接合する土器もあり、時間的な差異としては把握できない。

石器（第４４・４５図）

石器は、石鏃・局部磨製石斧・尖頭状石器・石錐・石匙・異形石器・磨石・凹石が出土している。

石鏃は４１点出土している(1～41)。　基部が平基のものが１点の他は全て凹基の基部を有する。凹基鏃は抉りの形状によってU字形・V字形・円弧を呈するものに大別される。また、全体形は正三角形のもの、スリムな二等辺三角形のもの、両側辺が外側に張出すものなどがある。また、両側辺に抉りを有するものもある。凹基鏃のうちではU字形を呈するものと円弧を呈するものがまとやって出土している。石材としては、姫島産１点を含む黒曜石製が１７点、チャート製１４点と多く、その他サヌカイト・細粒砂岩・珪質頁岩・メノウ等が素材として利用されている。

局部磨製石斧は２点出土している（４５・４７）。４５は破損しており刃部のみである。風化した安山岩を石材として用い、断面はレンズ状を呈する。４７は片面に自然面を残し、両側辺と刃部に研磨痕がみられる凝灰質砂岩製のものである。

尖頭状石器はサヌカイト製のものが１点出土している（４４）。胴部のみ残存しているが、両面より調整を施しており断面はレンズ状を呈する。

石錐はチャート製のものが１点出土している（４３）。自然面を残す剝片を利用して両面より調整し、先端部に僅かに抉りを入れて鋭い錐の先端部を作り出す。

石匙は白色の珪質頁岩製のものが１点出土している（４６）。縄文早期のものとしてはあまり類例のない形状である。表裏面とも平坦面を僅かに残して３側辺の刃部調整を施している。

異形石器は黒曜石のものが１点出土している（４２）。厚めの剝片を利用し、頭部は方形状を呈し３つの刃部は急角度の刃部が作り出されている。そして脚部も両側と基部からU字状の抉りが施されている。

磨石は２７点。凹石は３点出土している（４８～５０）。磨石は偏平なものが多く凹部も磨石を転用したものである。石材は、３点が粘板岩製の他は砂岩製である。

石器の分布（第46･47図）

石器も土器と同様にC区とE区で２つにグルーピングされ、石材もほぼ同様である。その中で、黒曜石のチップがAとBの石質の差によって分かれることが認められる。

縄文晩期の遺構と遺物

縄文時代晩期の土坑（第37図）

第Ⅱ層（アカホヤ層）まで除去した段階で第Ⅲ層に掘り込んだ状態の土坑がC－２区北側に７基まとまって検出された。埋土は全てアカホヤ粒が混入した黒褐色土であった。形態の特徴としては、平面形が円形を呈するものが多く、アカホヤ層上から掘り込まれているため深さは浅い。また凹部を有する土坑も２基ある。この中で４号土坑と７号土坑の土器片が接合しており、近接して切り合いも無いことからほぼ同時期のものであると思われる。

土坑内出土遺物（第４８図）

１号土坑　　粗製土器の胴部と底部が各１点出土している。１は深鉢（甕）形土器底部である。胴部にかけて張り出し、底部端部も僅かに張り出す。底部は上げ底状である。

２号土坑　　粗製土器の口縁部１点、胴部　点が出土している。２は僅かに肥厚する口縁部である。口縁部内面から口唇部にかけては丸みをもつが口縁部外面と口唇部は稜をなす。３も先端はないものの口縁部近くと思われる。この土器は、他の粗製土器と異なり内面はヘラ磨きである。４～８はいずれも胴部片で確実な部位は不明である。

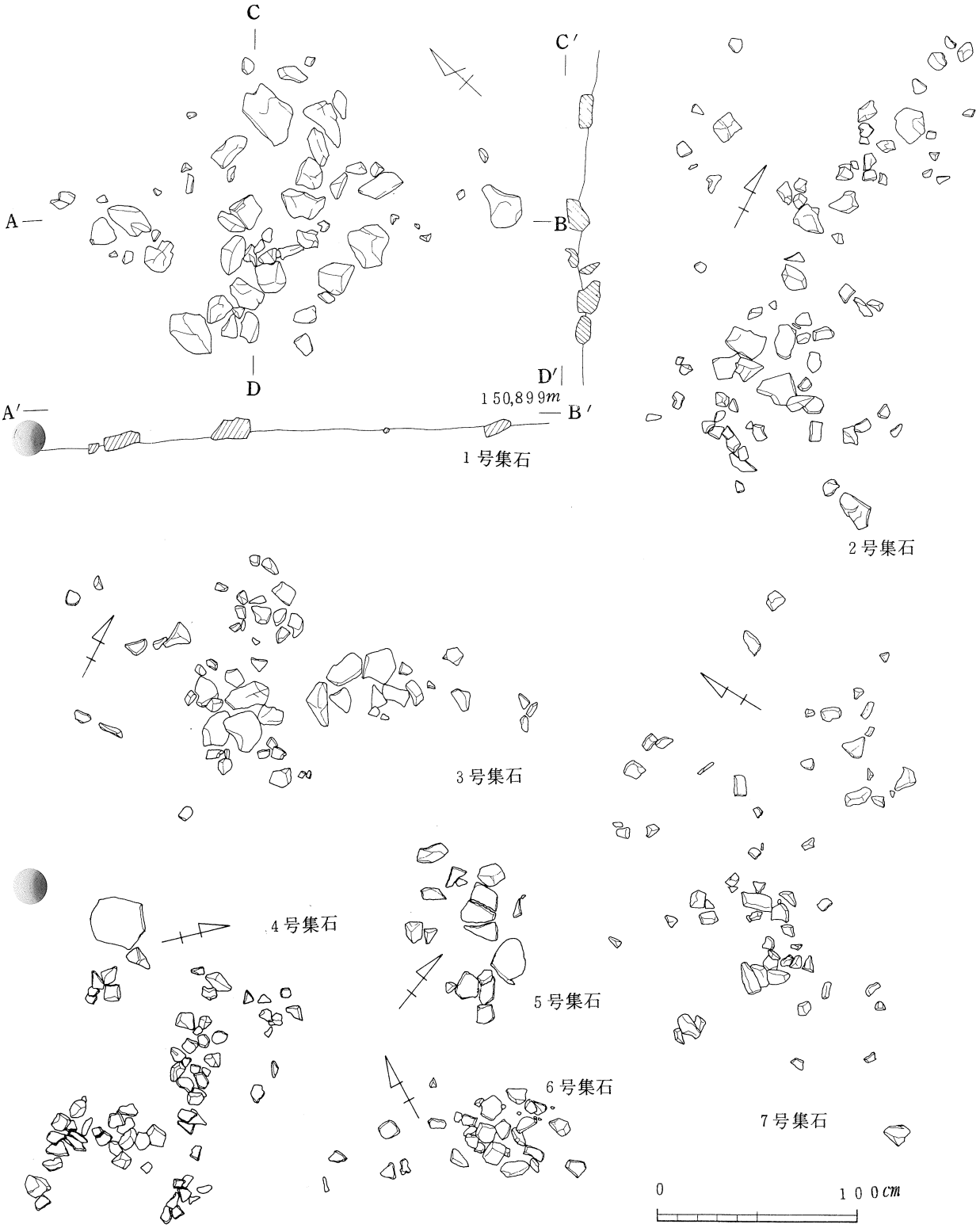
３号土坑　　精製磨研土器の口縁部１点、胴部１点、粗製土器の胴部６点が出土している。

４号土坑　　精製磨研土器の口縁部１点、粗製土器の口縁部２点・胴部５点、刻目のある張り付け突帯を有する土器の口縁部１点が出土している。10は浅鉢の口縁部であり、外反した頸部がそのままのびて口縁部となるものである。内面には段を有し、外面にも幅１㎜の沈線が巡る。９は胴部から口縁部にかけて外傾し、さらに口縁部が弱冠外反する器形を呈する深鉢形土器である。11はの同一個体と思われるが、接合しない。下部は丸みを有し底部へ続くものと思われるが、底部は出土しておらず全形は不明である。14は約３㎝の突帯を張り付けて肥厚させた口縁部を有する深鉢形土器である。口縁部は僅かに外反する。12は口唇部に刻目を有し口縁部外面にも刻目のある張り付け突帯を２条巡らせる深鉢形土器である。胎土・調整・器形等が他の土器と全く異なり、時期も異なるものと思われる。９・11は７号土坏と土器片が接合したものである。

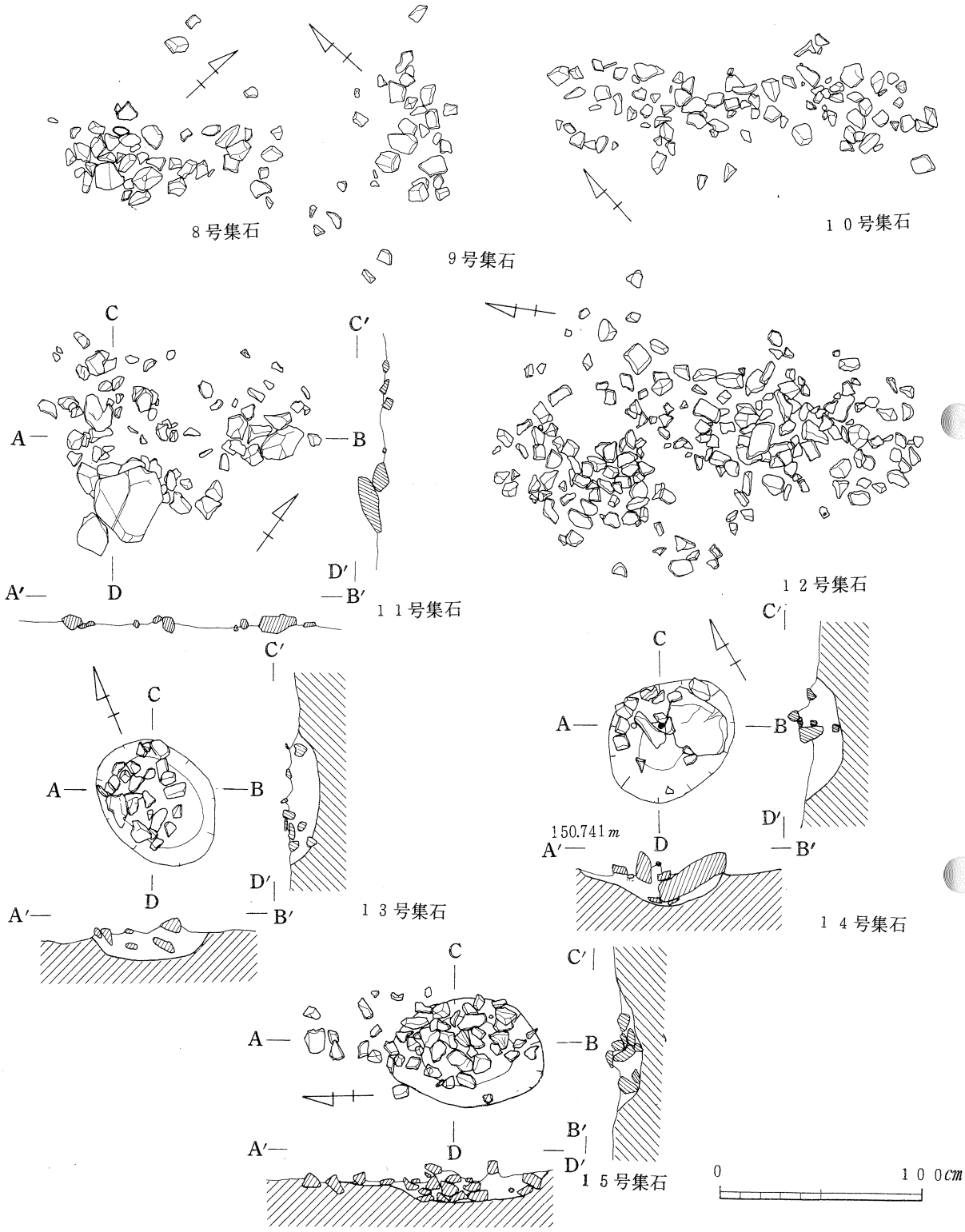
５号土坑　　精製磨研土器の口縁部１点、粗製土器口縁部２点、胴部３点が出土している。18は浅鉢形土器の口縁部で19は頸部である。18は口縁部が内湾し、先端上部に張り付け突帯が直立して巡るものである。内面の突帯接合部には沈線を有する。17はひれ状突起を有する鉢形土器の口縁部である。19は頸部で、胴部より内湾し頸部で強い屈曲を示して外反する。肩部の張り付けは小さく肩部外面に直径１㎜の沈線が巡る。15は口縁部が僅かに外反する深鉢形土器の口縁部で外面に張り付け突帯を有する。16は深鉢形土器の胴部で丸みがなく、直線的な形態を有する。

６号土坑　　精製土器の口縁部が１点出土している。20は浅鉢形土器の口縁部で頸部より緩やかに外反する形態を有する。内面には段を有し、外面には鋭いＶ字状の沈線が巡るが両者とも先端の粘土接合部に施す。

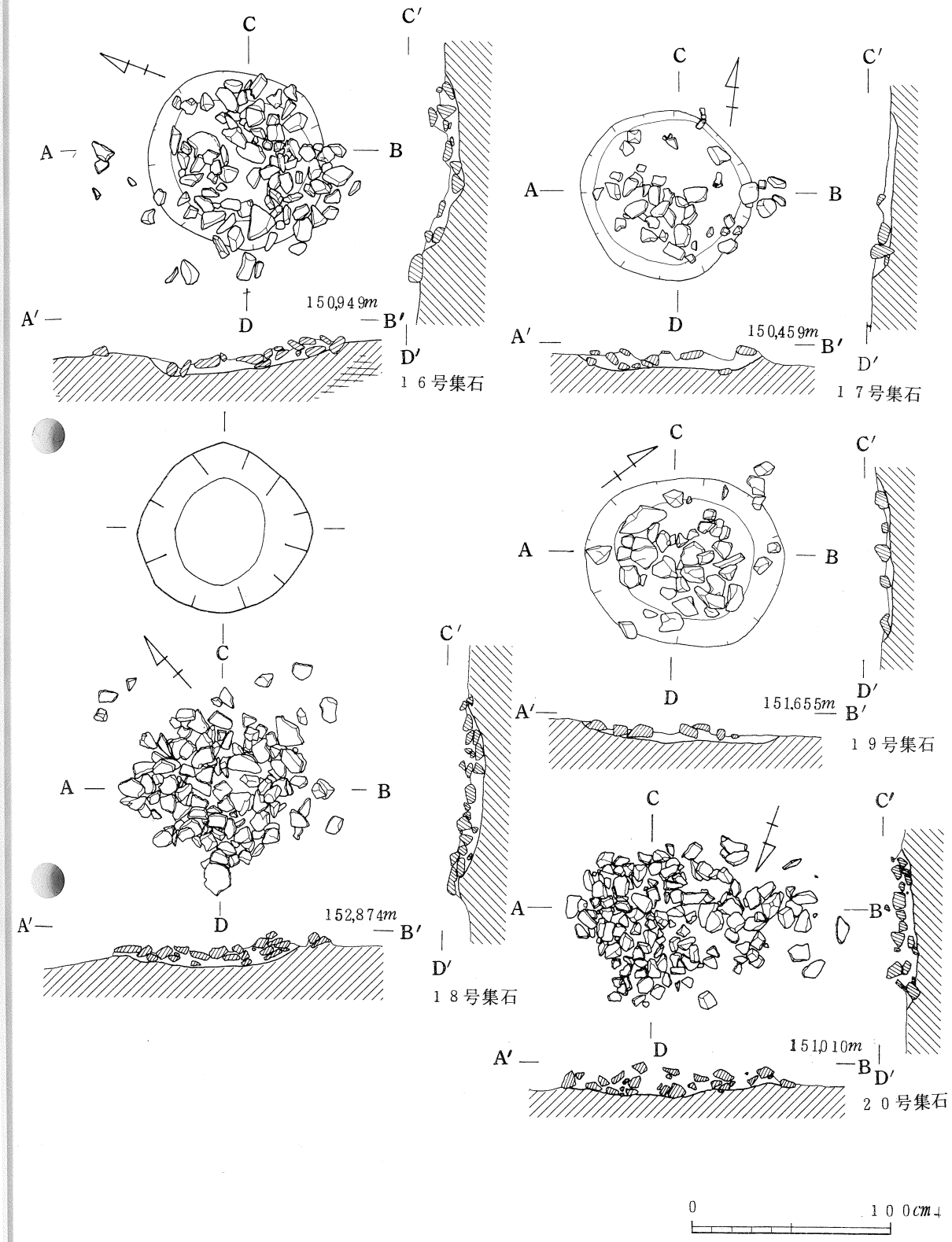
７号土坑　　粗製土器口縁部２点、胴部２点が出土している。



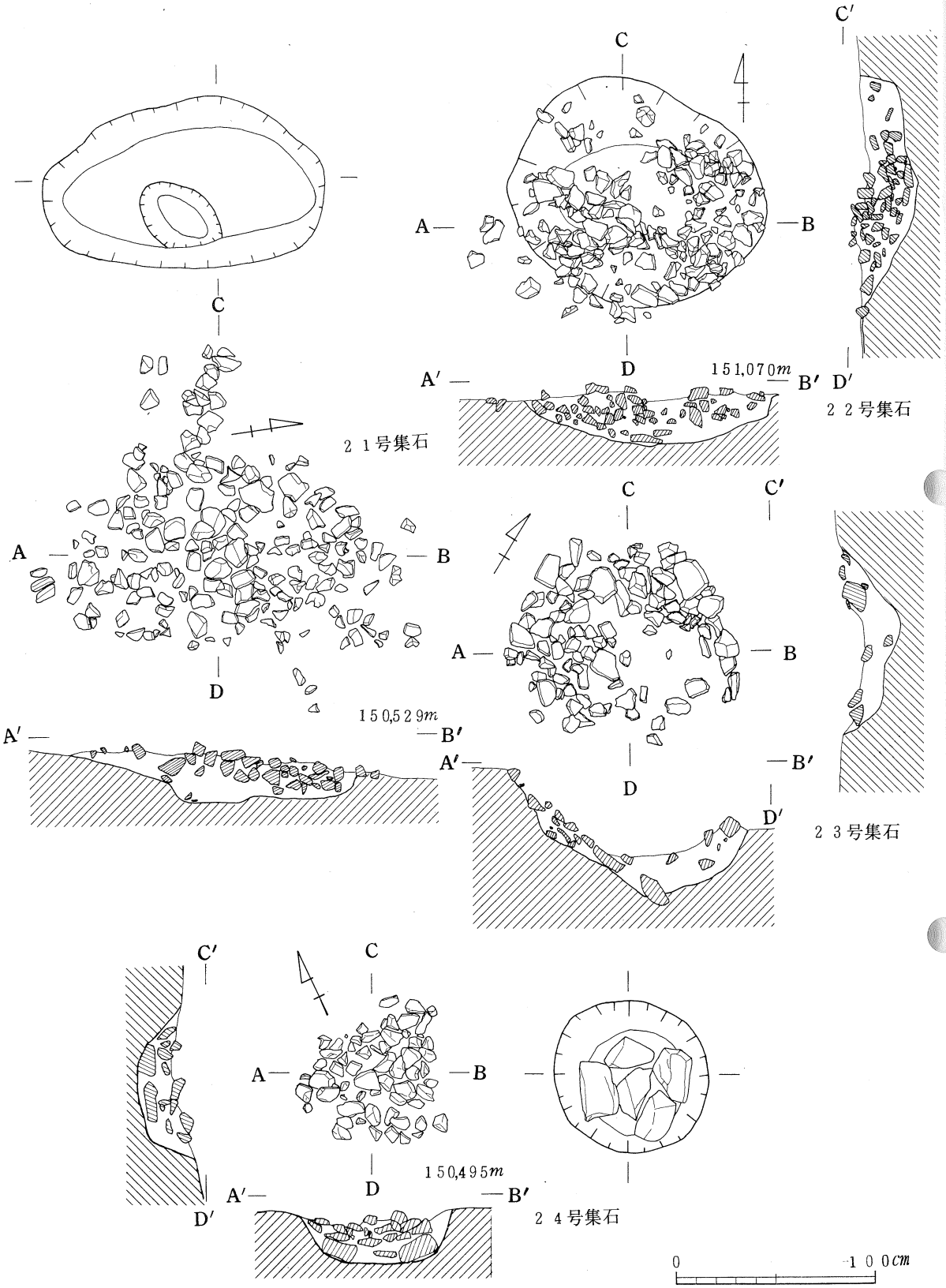
第31図　集石遺構実測図(1)



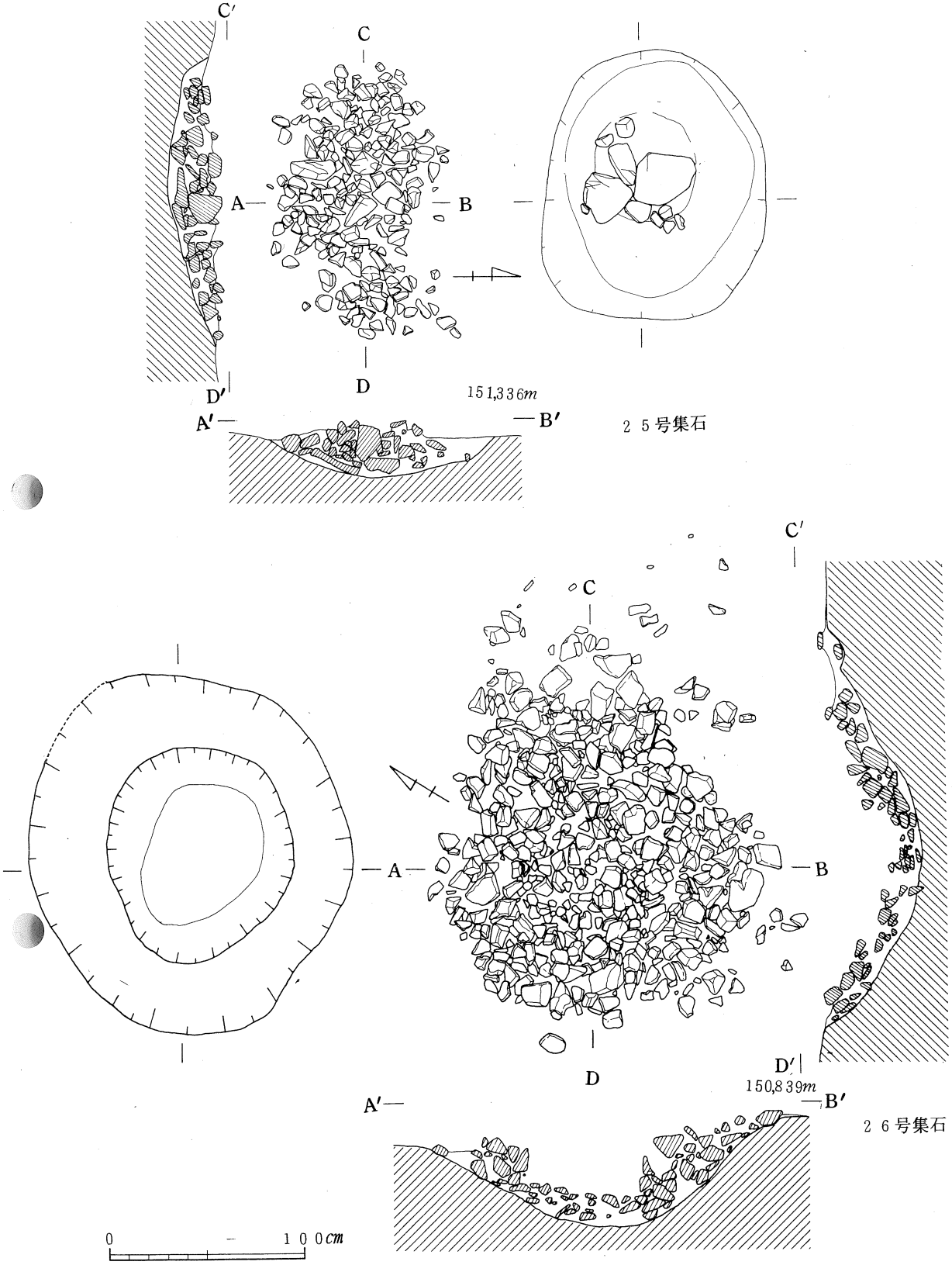
第32図　集石遺構実測図(2)



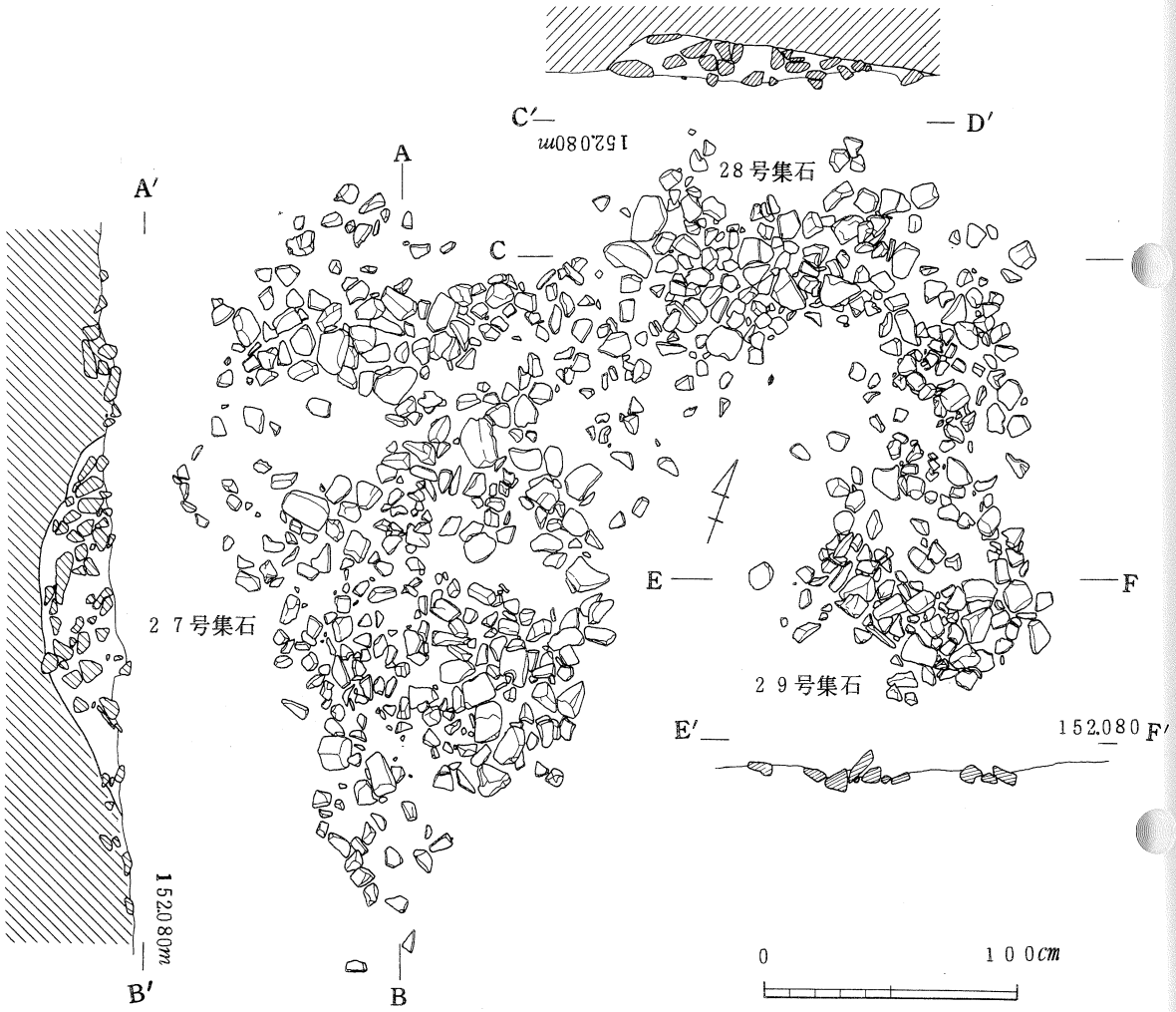
第33図　集石遺構実測図(3)



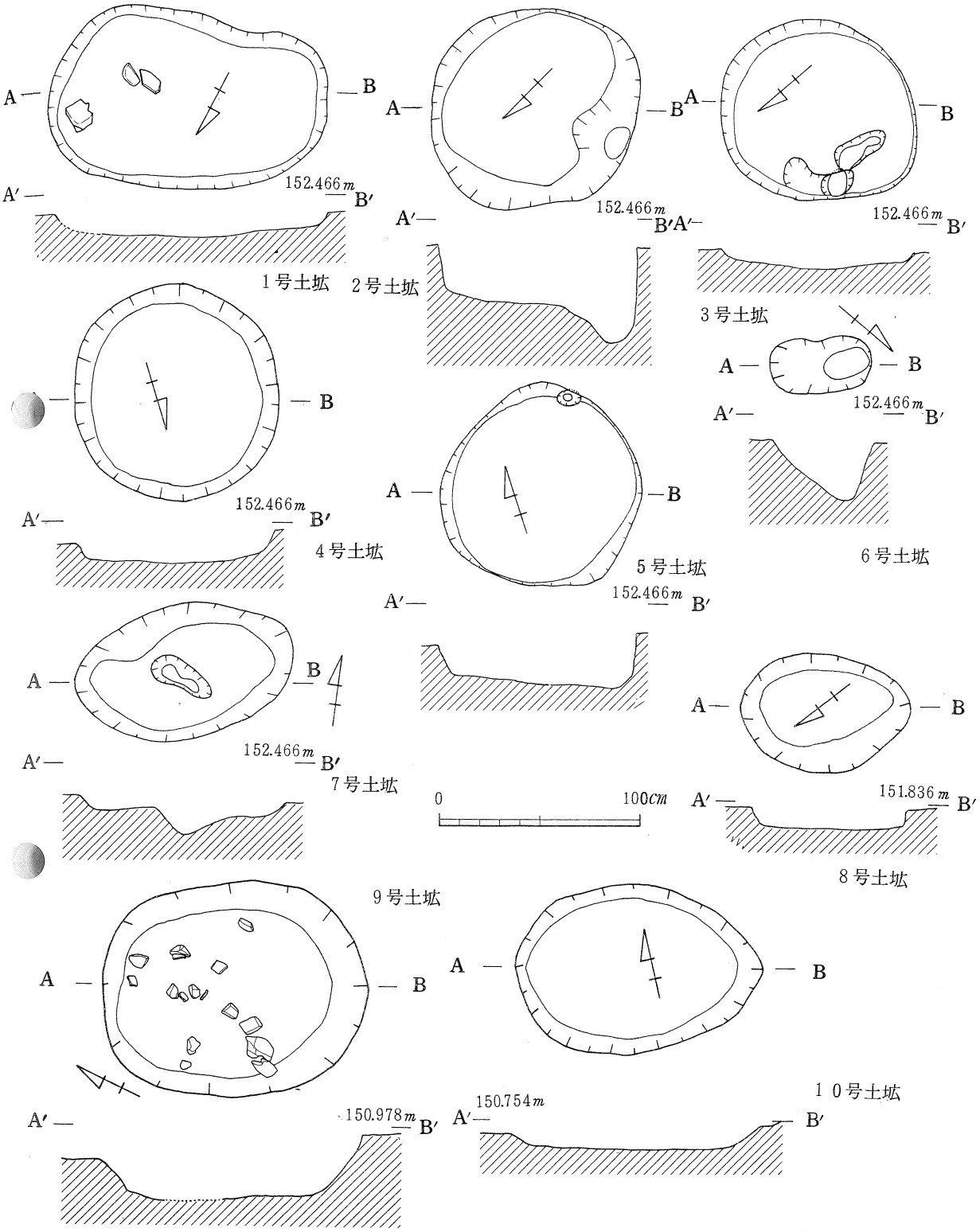
第34図　集石遺構実測図(4)



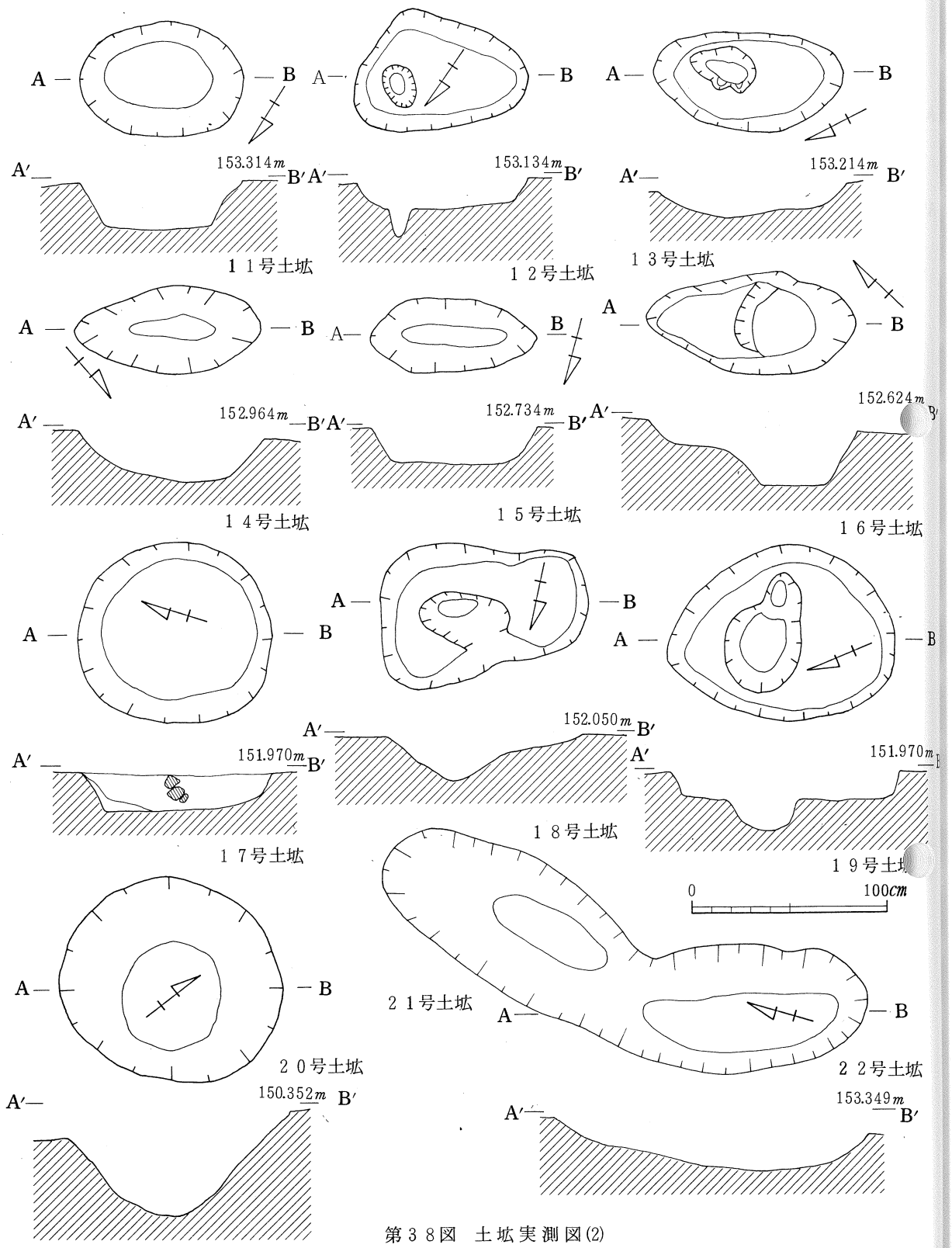
第35図　集石遺構実測図(5)



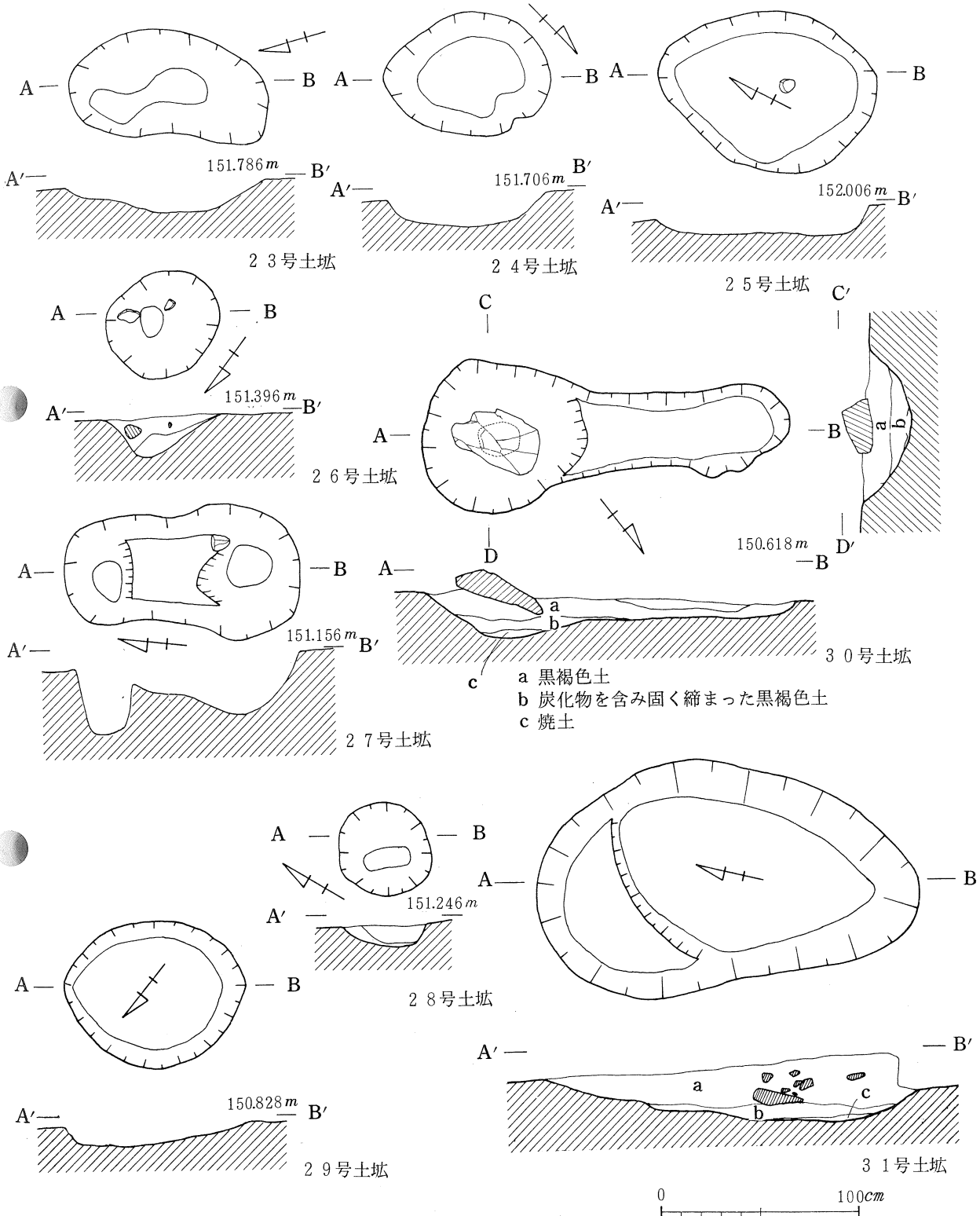
第36図　集石遺構実測図(6)


A
B
A′
B′
152.466m
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
0
100cm
151.836m
150.978m
150.754m

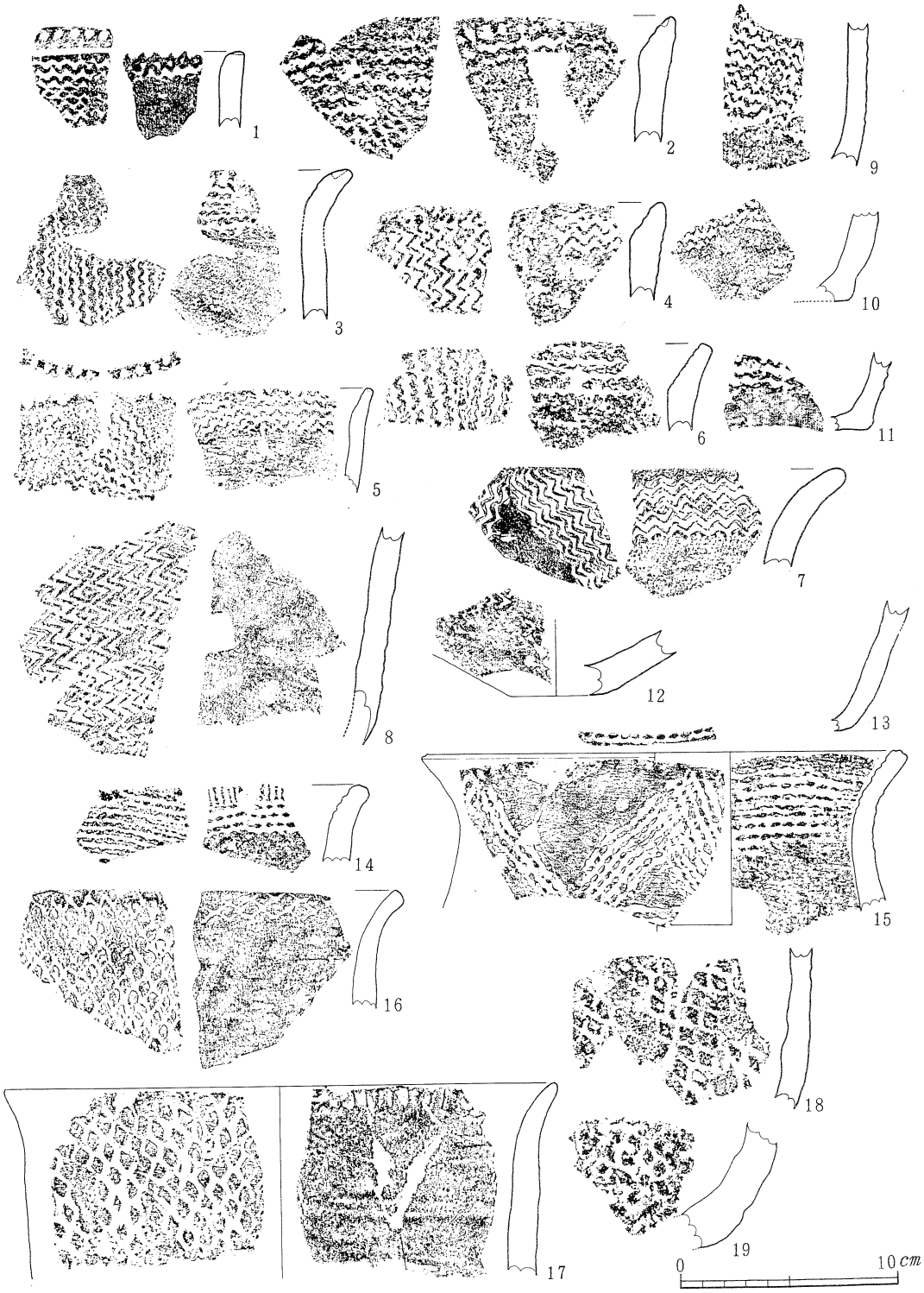
第37図　土坑実測図 (1)


A
B
A′
B′
153.314m
153.134m
153.214m
1 1号土坑
1 2号土坑
1 3号土坑
152.964m
152.734m
152.624m
1 4号土坑
1 5号土坑
1 6号土坑
151.970m
152.050m
151.970m
1 7号土坑
1 8号土坑
1 9号土坑
0
100cm
2 0号土坑
2 1号土坑
2 2号土坑
150.352m
153.349m

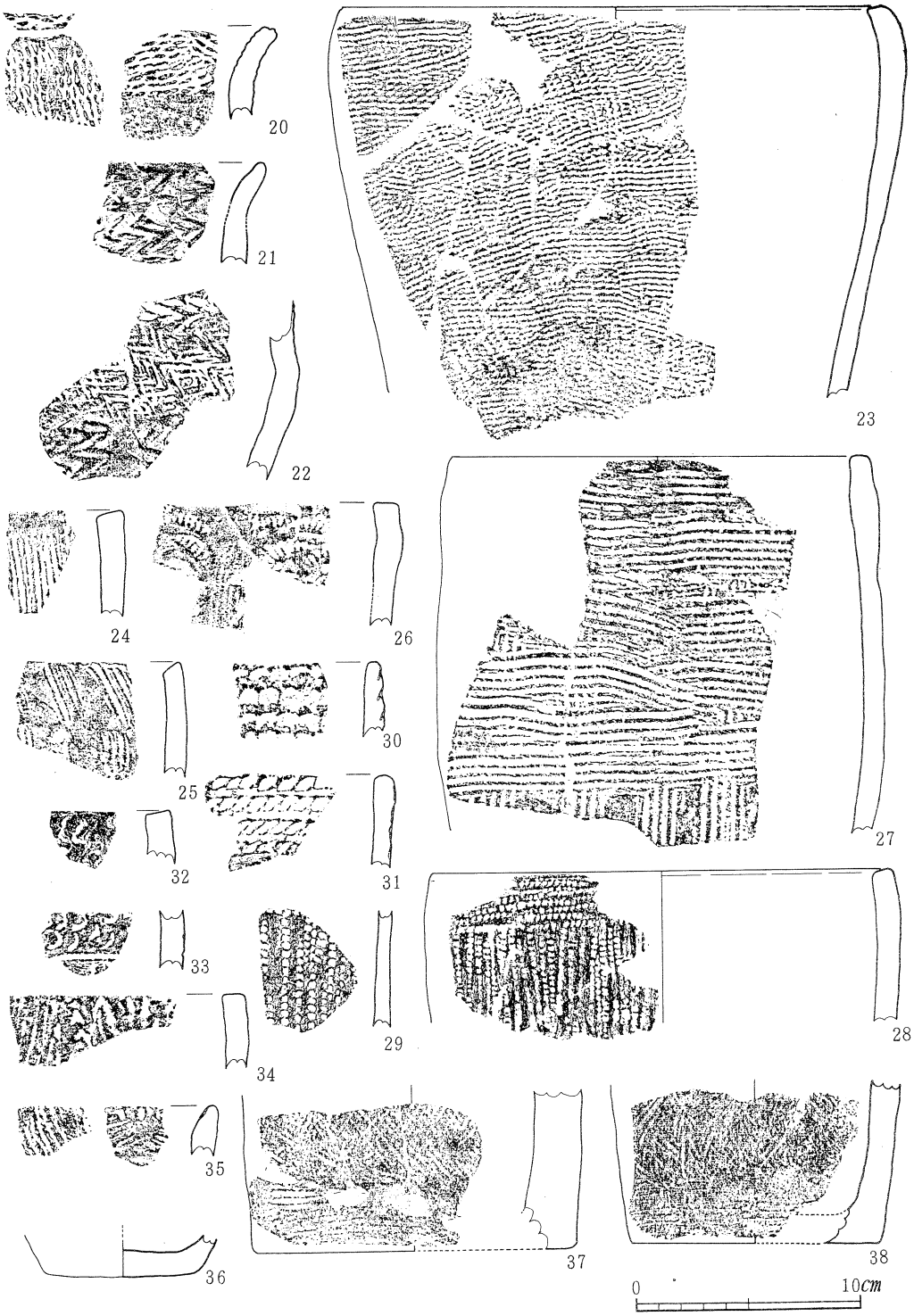
第３８図　土坑実測図(2)


A
B
A′
B′
151.786m
2 3号土坑
151.706m
2 4号土坑
152.006m
2 5号土坑
151.396m
2 6号土坑
C
C′
D
D′
a
b
150.618m
3 0号土坑
151.156m
2 7号土坑
c
a 黒褐色土
b 炭化物を含み固く締まった黒褐色土
c 焼土
151.246m
2 8号土坑
150.828m
2 9号土坑
3 1号土坑
0
100cm

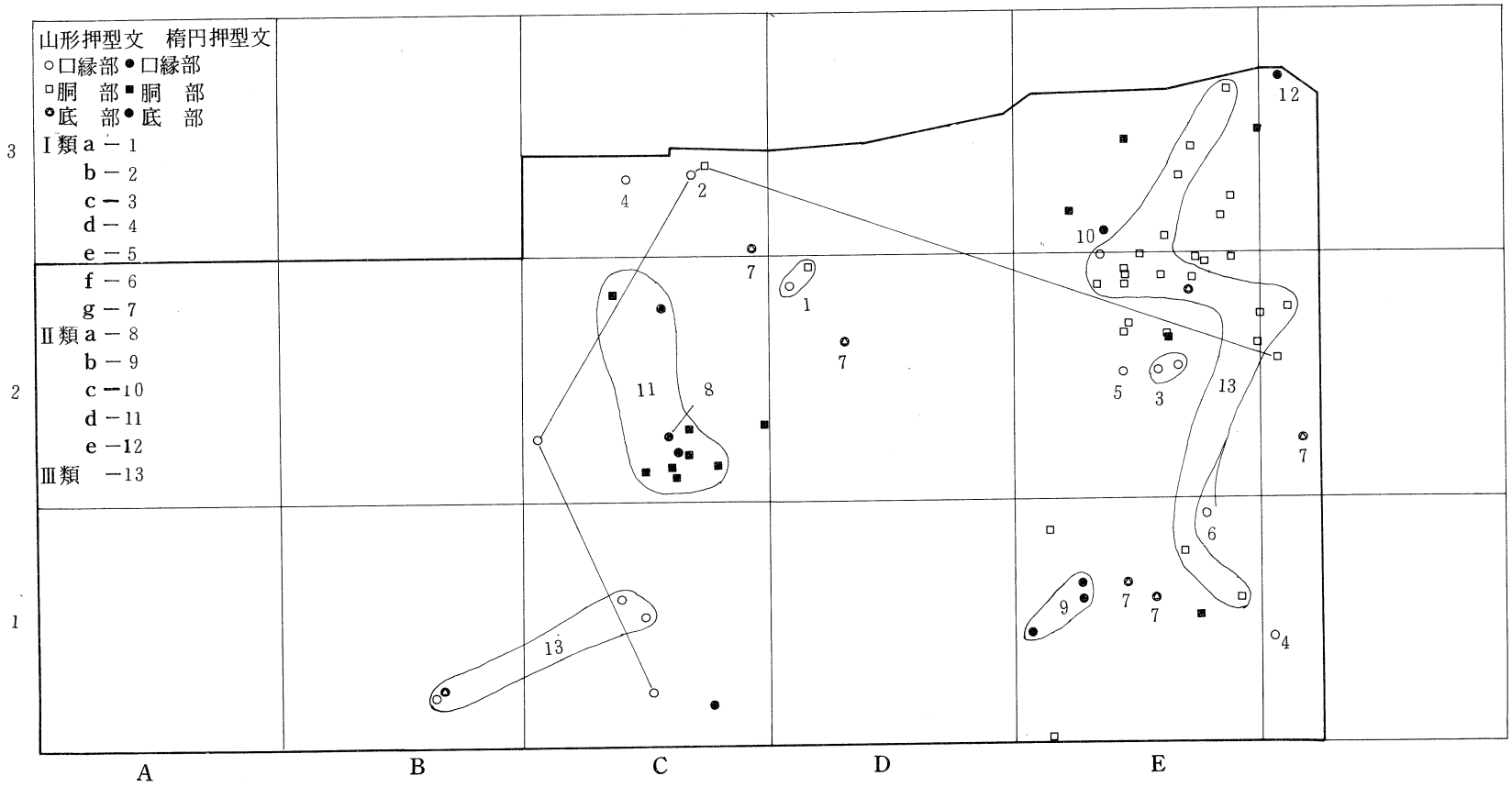
第３９図　土坑実測図(3)



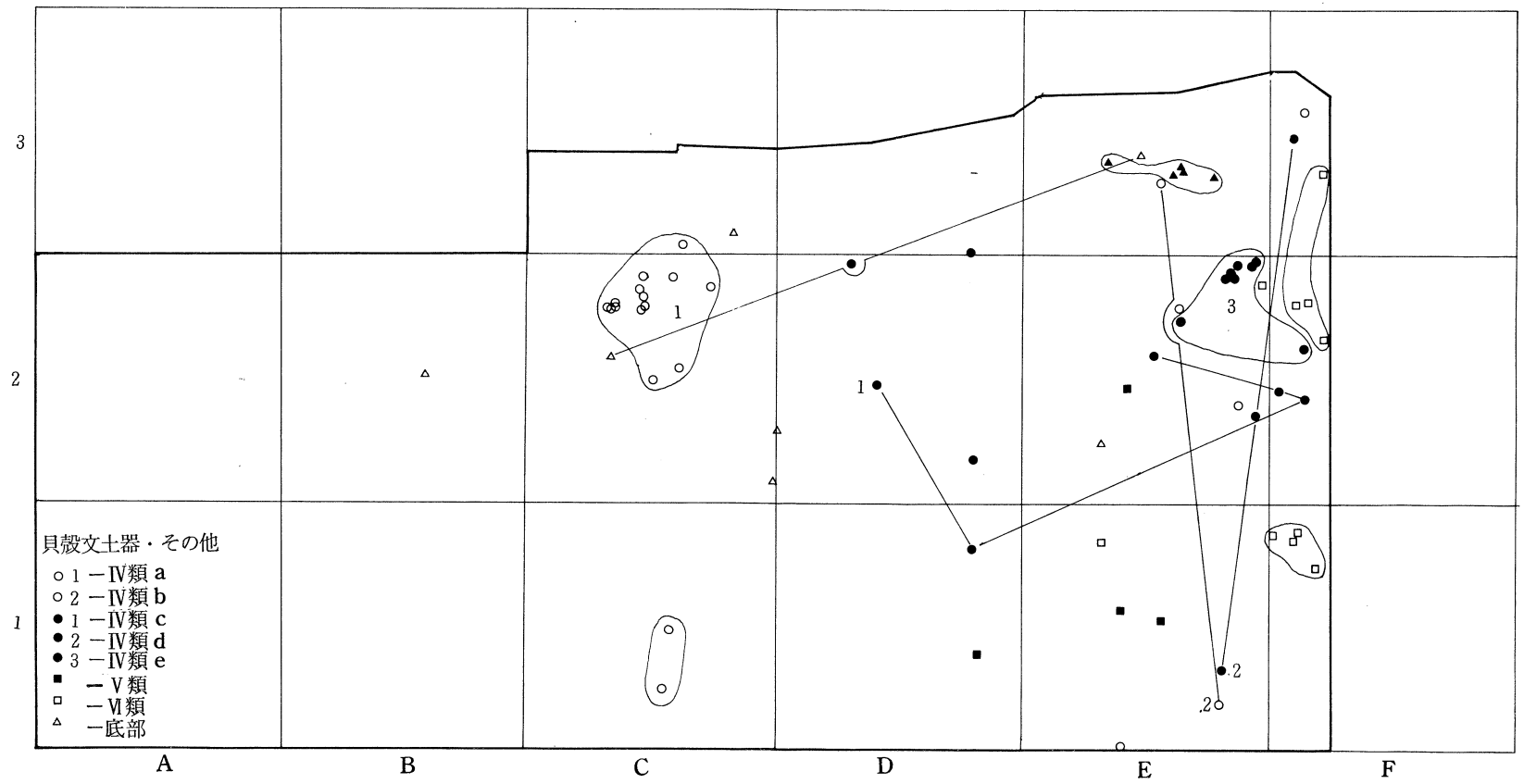
第４０図　出土土器実測図 (1)



第４１図　出土土器実測図(2)



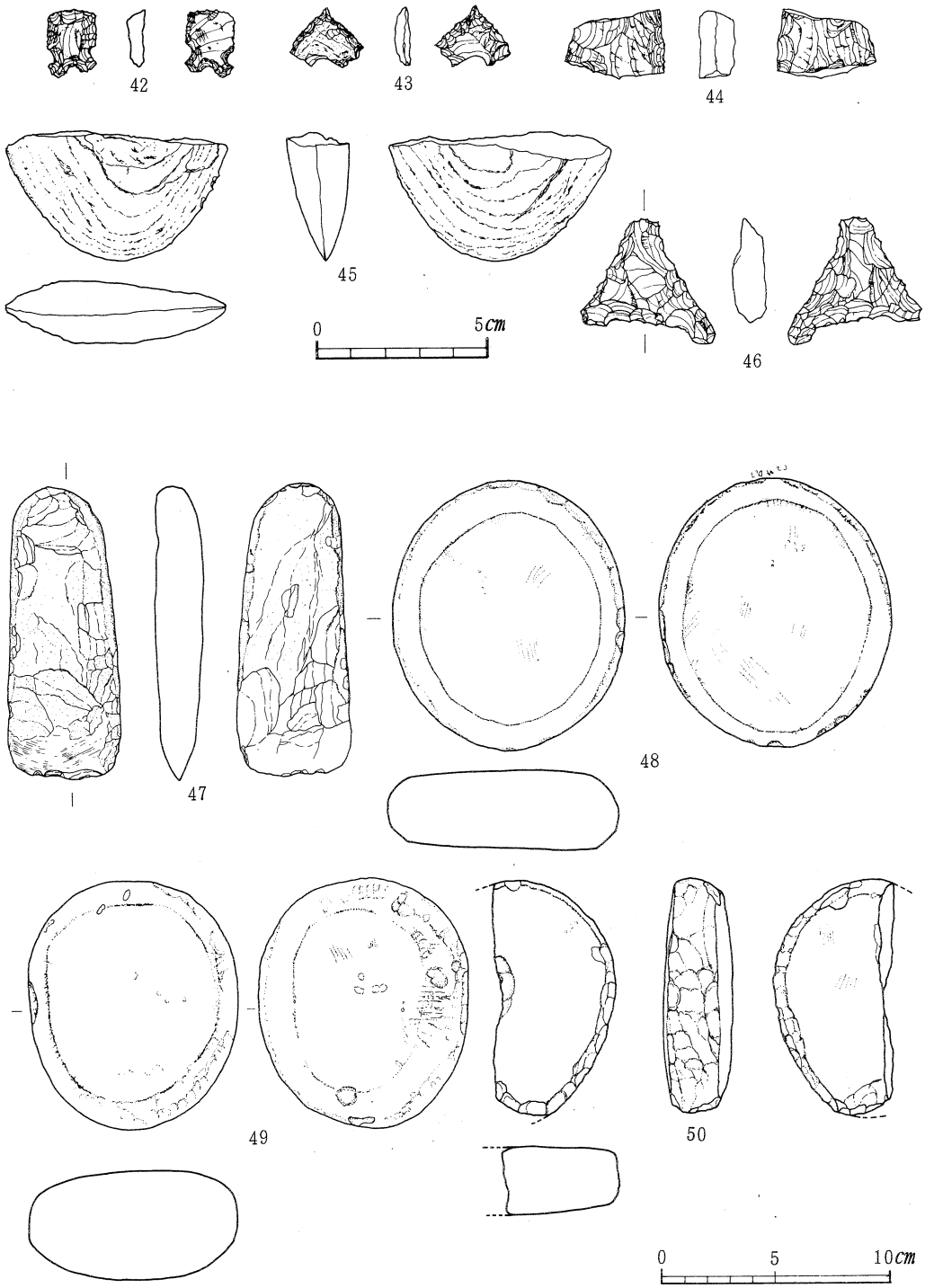
第42図　出土土器分布図(1)



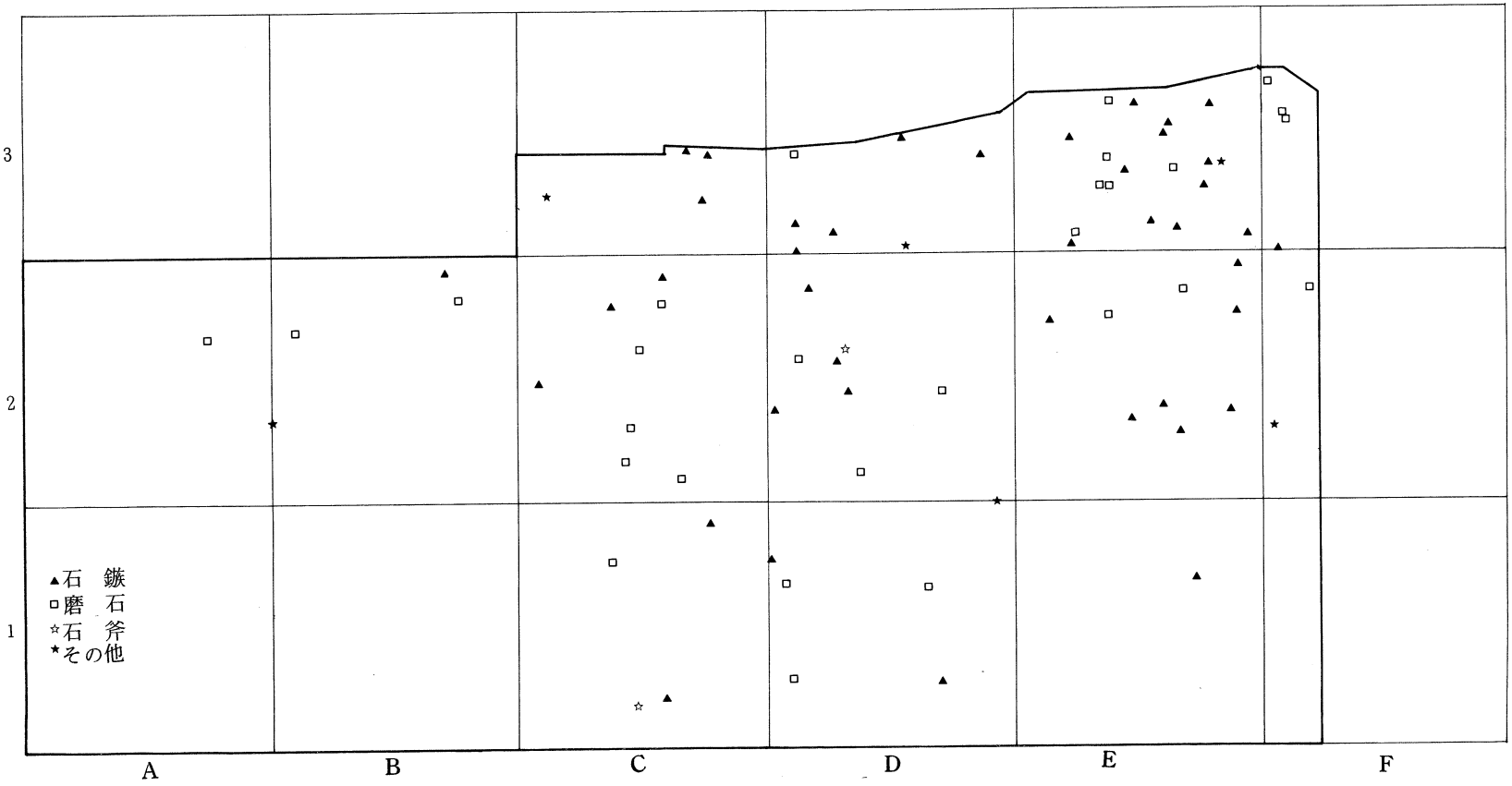
第43図　出土土器分布図(2)

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
5cm

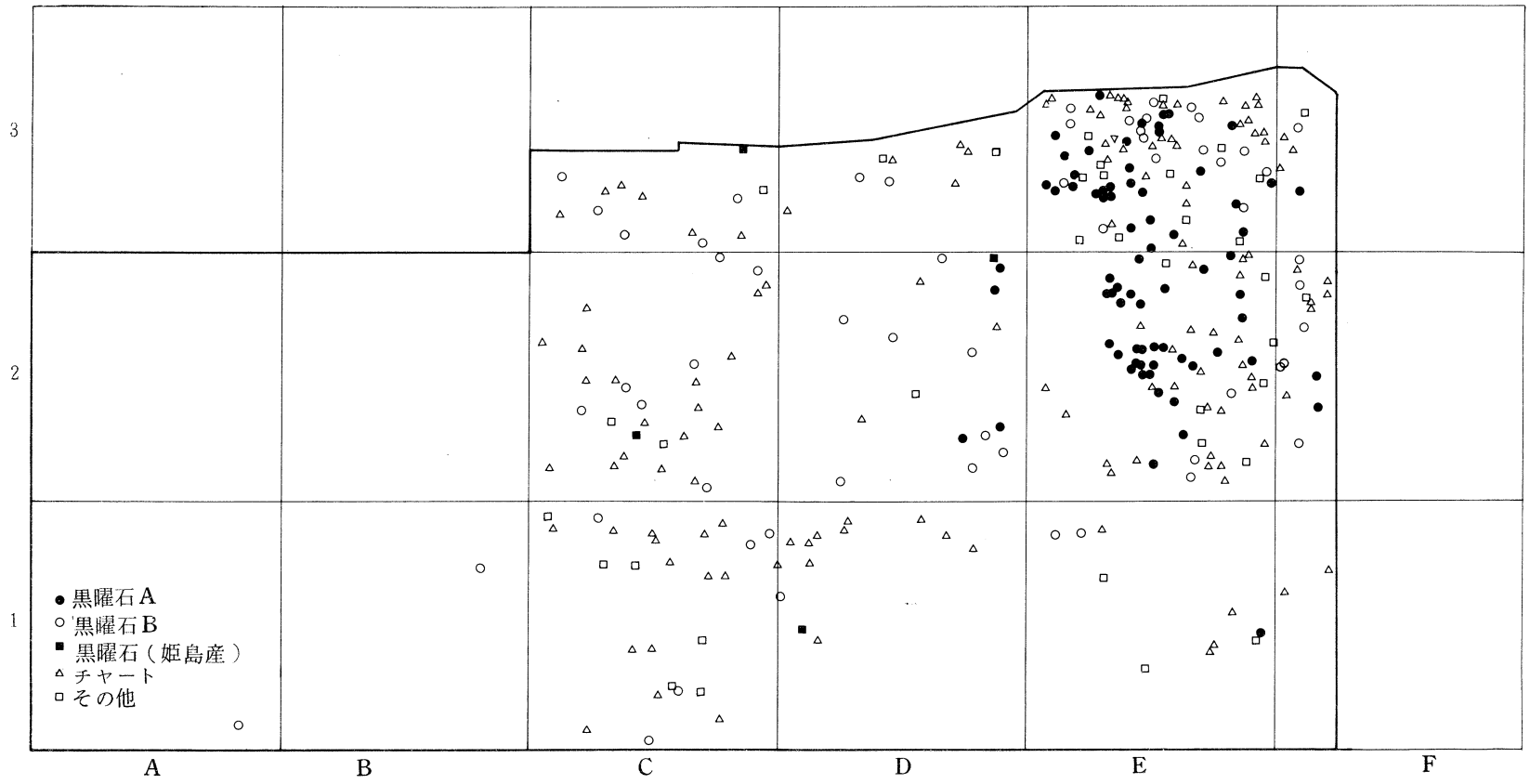
第４４図　石器実測図(1)



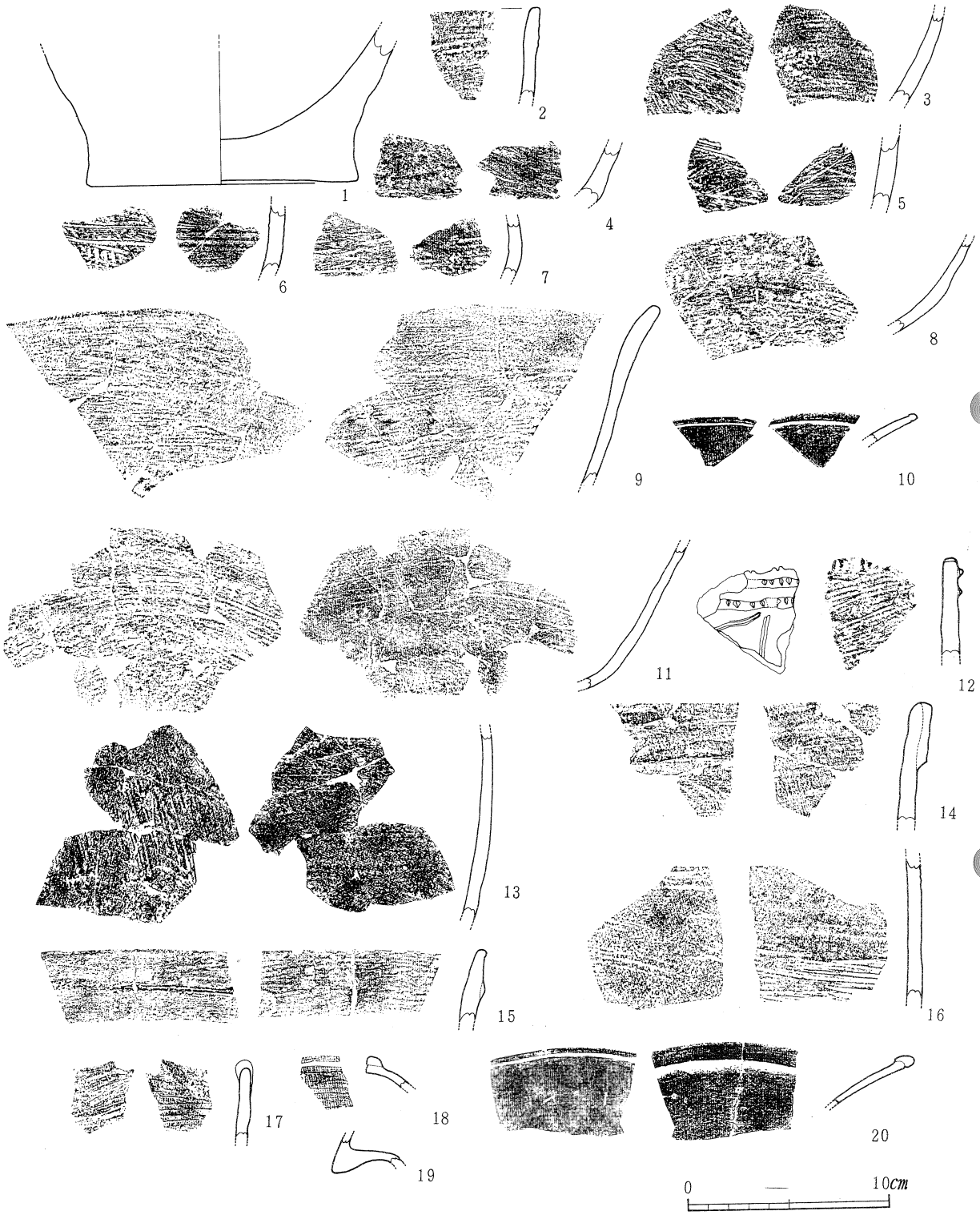
第４５図　出土石器実測図(2)



第４６図　出土石器分布図



第４７図　石材別チップ分布図



第４８図　土坑内出土土器実測図

第6章　札ノ元遺跡

第1節　調査の概要

本遺跡の発掘調査前の地形は、６０～８０ｍ程度の幅の平担面を有する舌状の低丘陵であり、南から北へ緩やかに傾斜していた。試掘調査により遺跡の大部分がアカホヤ層中まで削平を受け撹乱していることが判明していたが、本地区が桑やサツマイモ等の畑作地で主として使用されていたためと思われる。そこで、本調査では試掘調査によって良好な遺物や遺構が検出されたアカホヤ層下を中心に調査することにし、調査区全面をアカホヤ層まで重機を使用して剥いだ。また地形測量もアカホヤ層除去後の面で行なった。

アカホヤ層除去後の地形は、調査区全体が南から北へ緩やかに傾斜し、東側は平担面を有するものの中央部から西側へ向かって傾斜していた。また、西側では南から北へ凹地が走り、当初１つの丘陵性台地の様相を呈していた本丘陵は、アカホヤ層下では２つの小丘陵であったことが確認された。そこで、地形に応じて１０ｍ×１０ｍのグリッドを設定し、南から北へＡ・Ｂ……Ｆ区、西から東へ１・２……７区と呼称することにした。調査面積は約3,３００㎡で、昭和５９年７月２６日から１１月３０日まで調査を行なった。また、調査期間中に、県文化課永友良典氏の御指導を得て芳ケ迫第１遺跡の集石遺構の取り上げを行なった。

調査によって、縄文時代早期の集石遺構・土壙・住居址等が検出され、遺物も多量に出土した。

第2節　層　位

本遺跡の基本層序は、次のとおりである。（第４９図）

第１層が耕作土混入の黒色土層、以下第Ⅱ層―下部に数cm程度の軽石層を有する黄褐色火山灰層（アカホヤ層）、第Ⅲ層―小白斑を含む暗黄褐色土層、第Ⅳ層―黒褐色土層、第Ⅴ層―褐色土層、第Ⅵ層―暗褐色土層、第Ⅶ層―黄褐色土層、第Ⅷ層―角礫を含むにぶい黄褐色土層、第Ⅸ層―第２オレンジと呼ばれ姶良Tn 火山灰層に相当すると思われる黄褐色土層、第Ⅹ層―黒褐色土層となっている。

縄文時代の遺物と集石遺構は第Ⅲ層と第Ⅳ層中より検出され、土坑のほとんど及び住居址は第Ⅴ層上面を遺構確認面として第Ⅴ層以下に掘り込む状態で検出された。実際の掘り込み面は第Ⅴ層より１０～２０cm程度上の第Ⅳ層中であることが土層断面で確認されたが、埋土が全て黒褐色土であるため、第Ⅳ層を掘り下げる段階では、土坑の掘り込み面での検出は困難であった。また、無遺物層である第Ⅴ層・第Ⅵ層下の第Ⅶ層中から石核・剥片等を伴って旧石器時代の集石遺構が検出された。

第３節　遺構と遺物

1.　旧石器時代

旧石器時代の調査は、縄文時代の全面調査を終了した後Ａ－４・５・６区を行なった。その結果、Ａ－５・６区の第Ⅶ層中より剥片が出土し始め、Ａ－６区東隅で第Ⅶ層下部より石核・剥片を伴って集石遺構１基が検出された。

遺構（第５０図）

検出された１基の集石遺構は、経１０～１５cm前後の中粒砂岩の焼けた角礫１０数個で構成されていた。規模は４０×４０cm程度の小さなもので掘り込みは見られなかった。また、礫は破砕礫がほとんどで火熱によって赤褐色を呈するものもあるが、床面に炭化物等は見られなかった。

遺物（第５１図）

遺物は、集石遺構を中心にして径３ｍ程度の範囲でＡ－６区からＡ－７区にかけて出土した。出土遺物は、凝灰質泥岩製の石核１点、使用痕のある剥片２点、剥片９４点、流紋岩製の石核１点、ナイフ形石器１点、剥片２７点であった。

１は、原礫面が残存する凝灰岩質泥岩製の石核である。大型の母岩より石核となる岩片を取り出し、さらに両端に残存する原礫面を除去して平担面を作り出しそこから縦長の剥片を取り出す。２・３はその剥片であり、使用痕が観察されるものである。４は、流紋岩製のナイフ形石器であるが、縦長剥片に基部調整を施し丸みのある基部を作り出している。

2.　縄文時代

縄文時代の遺構として集石遺構・土壙・住居址が検出されたが、全てアカホヤ層下のものである。

集石遺構（第５２～６６図）

集石遺構は８４基検出されたが、次のように大別される。

Ⅰ型　土坑を伴わない平面的なタイプ

Ⅱ型　土坑を伴うタイプ

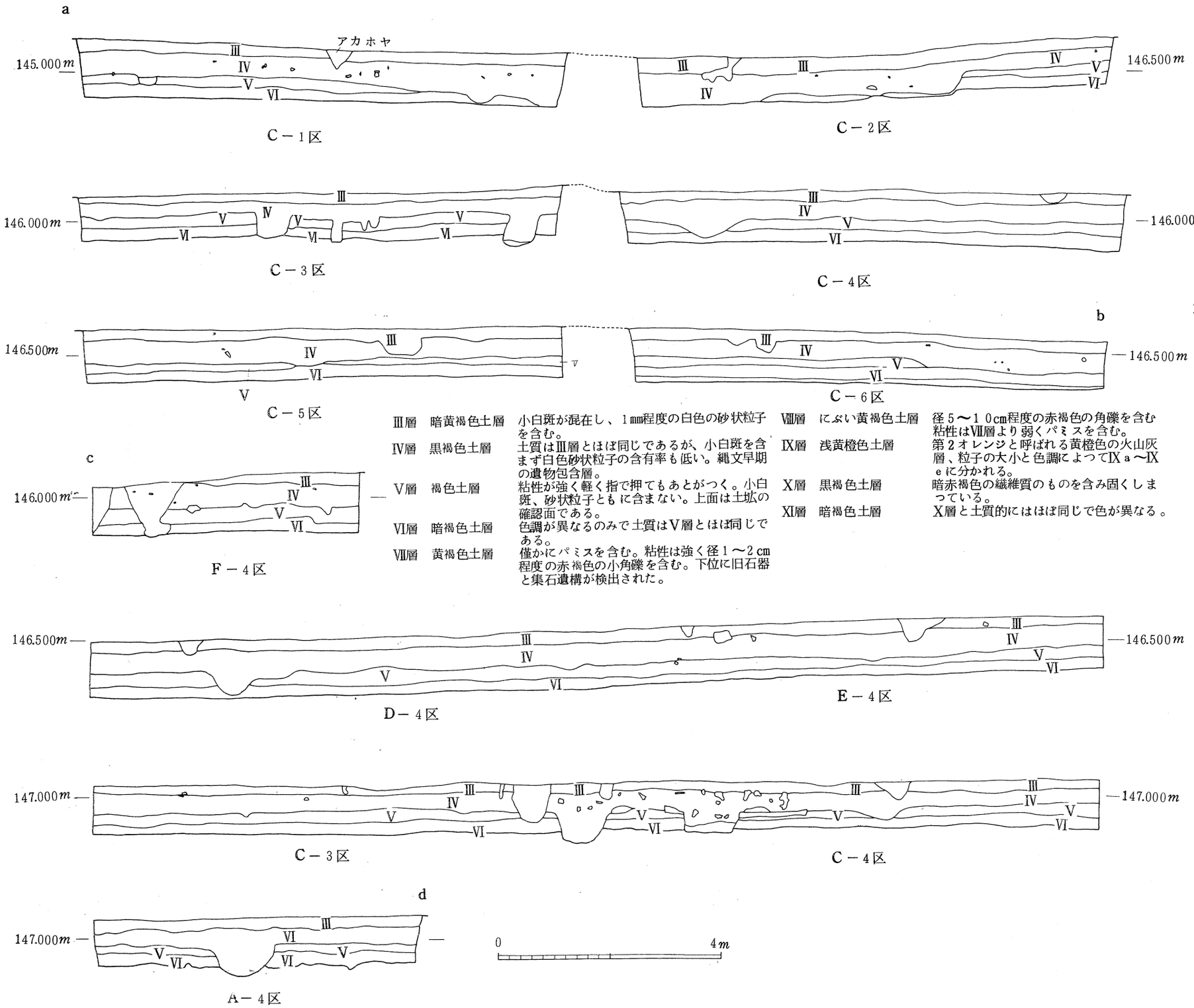
　ａ　土坑を伴うが配石を有しないもの。

　ｂ　土坑を伴い、配石を有するもの。

　ｃ　構成礫が小型で密度の高いもの。

　ｄ　構成礫が大型であるが土坑が浅く小規模のもの。

である。その他Ⅱ類の集石遺構を数基含んだ規模の大きい焼石群も２ケ所で検出された。構成する礫は、砂岩等の円礫・角礫であり、ほとんどが熱を受けて赤変したり脆くなったりしている。土坑



Ⅲ層　暗黄褐色土層　小白斑が混在し、1㎜程度の白色の砂状粒子を含む。

Ⅳ層　黒褐色土層　土質はⅢ層とほぼ同じであるが、小白斑を含まず白色砂状粒子の含有率も低い。縄文早期の遺物包含層。

Ⅴ層　褐色土層　粘性が強く軽く指で押てもあとがつく。小白斑、砂状粒子とも に含まない。上面は土坑の確認面である。

Ⅵ層　暗褐色土層　色調が異なるのみで土質はⅤ層とほぼ同じである。

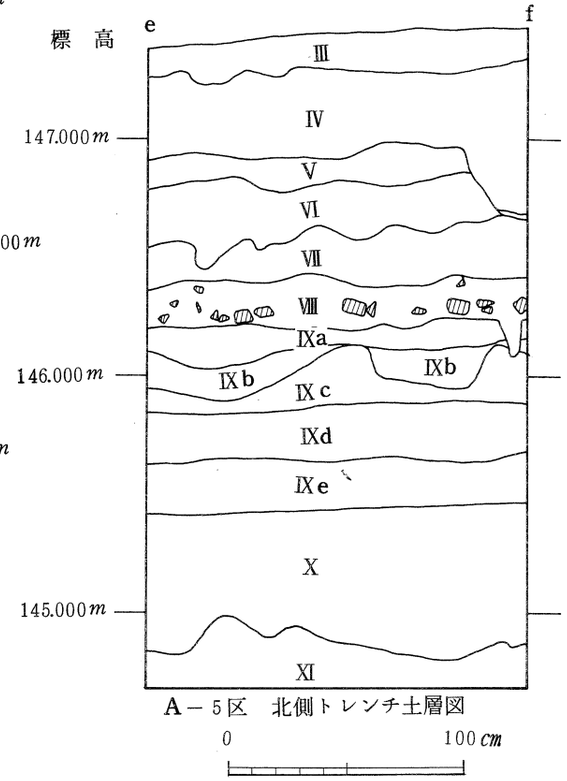
Ⅶ層　黄褐色土層　僅かにパミスを含む。粘性は強く径1～2㎝程度の赤褐色の小角礫を含む。下位に旧石器と集石遺構が検出された。

Ⅷ層　にぶい黄褐色土層　径5～10㎝程度の赤褐色の角礫を含む粘性はⅦ層より弱くパミスを含む。

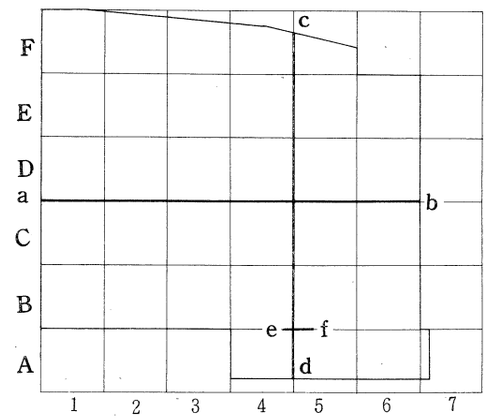
Ⅸ層　浅黄橙色土層　第2オレンジと呼ばれる黄橙色の火山灰層、粒子の大小と色調によってⅨa～Ⅸeに分かれる。

Ⅹ層　黒褐色土層　暗赤褐色の繊維質のものを含み固くしまっている。

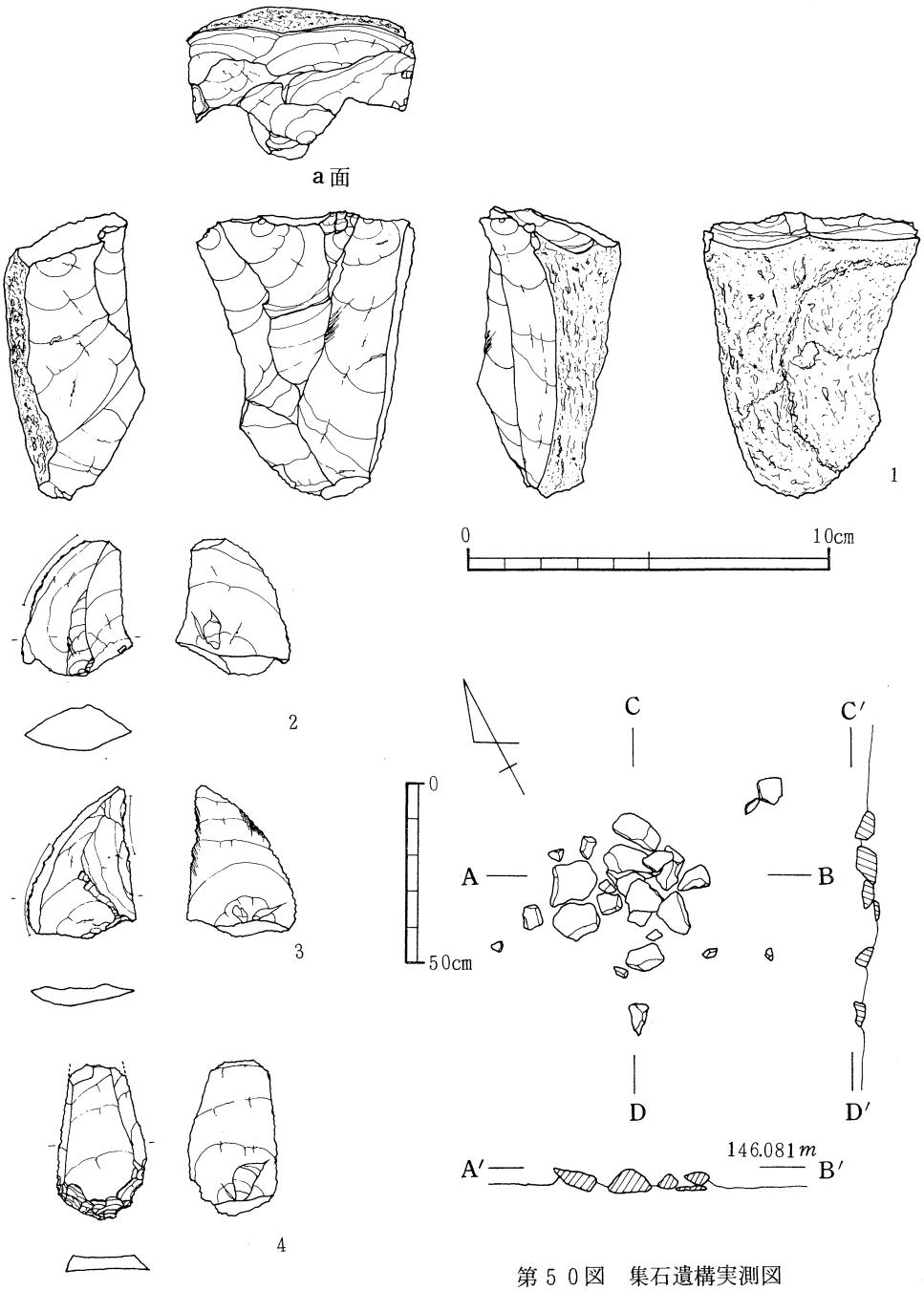
Ⅺ層　暗褐色土層　Ⅹ層と土質的にはほぼ同じで色が異なる。



A－5区　北側トレンチ土層図



第49図　土　層　図



第５０図　集石遺構実測図

第５１図　出土石器実測図

中の埋土には炭化物が検出されるものが多いが、焼土は検出されない。出土層位は、アカホヤ層直下の第Ⅲ層下部から第Ⅳ層中部に集中している。第Ⅲ層上部ではⅠ類、Ⅱａ類が多いが、出土遺物がが集中する第Ⅲ層下部から第Ⅳ層中部ではⅡ－ａ・ｂ・ｃ類が混在して検出され、第Ⅳ層下部ではⅡｄ類が多い。全体的な分布では、発掘区東側の台地上に集中して検出される。また、類別ではⅡ－ｂ型がＣ・Ｄ－４・５区に集中しており、特に２号住居跡周辺部に多い。さらに発掘区西側の１・２・３区ではⅡ－ｂ型はほとんど検出されず、３号住居跡に密接した○号のみである。

土坑（第６７～８３図）

土壌は１０４基検出されたが、次のように大別される。

Ⅰ型　断面がスプーン状を呈する長円形のタイプ

ａ　焼土を伴うが礫は検出されないもの。

ｂ　焼土を伴い、大型礫が検出されるもの。

ｃ　焼土を伴い、小型礫を伴うもの。

ｄ　焼土を伴わないもの。

Ⅱ型　連穴土坑

ａ　焼土を伴うもの。

ｂ　焼土を伴わないもの。

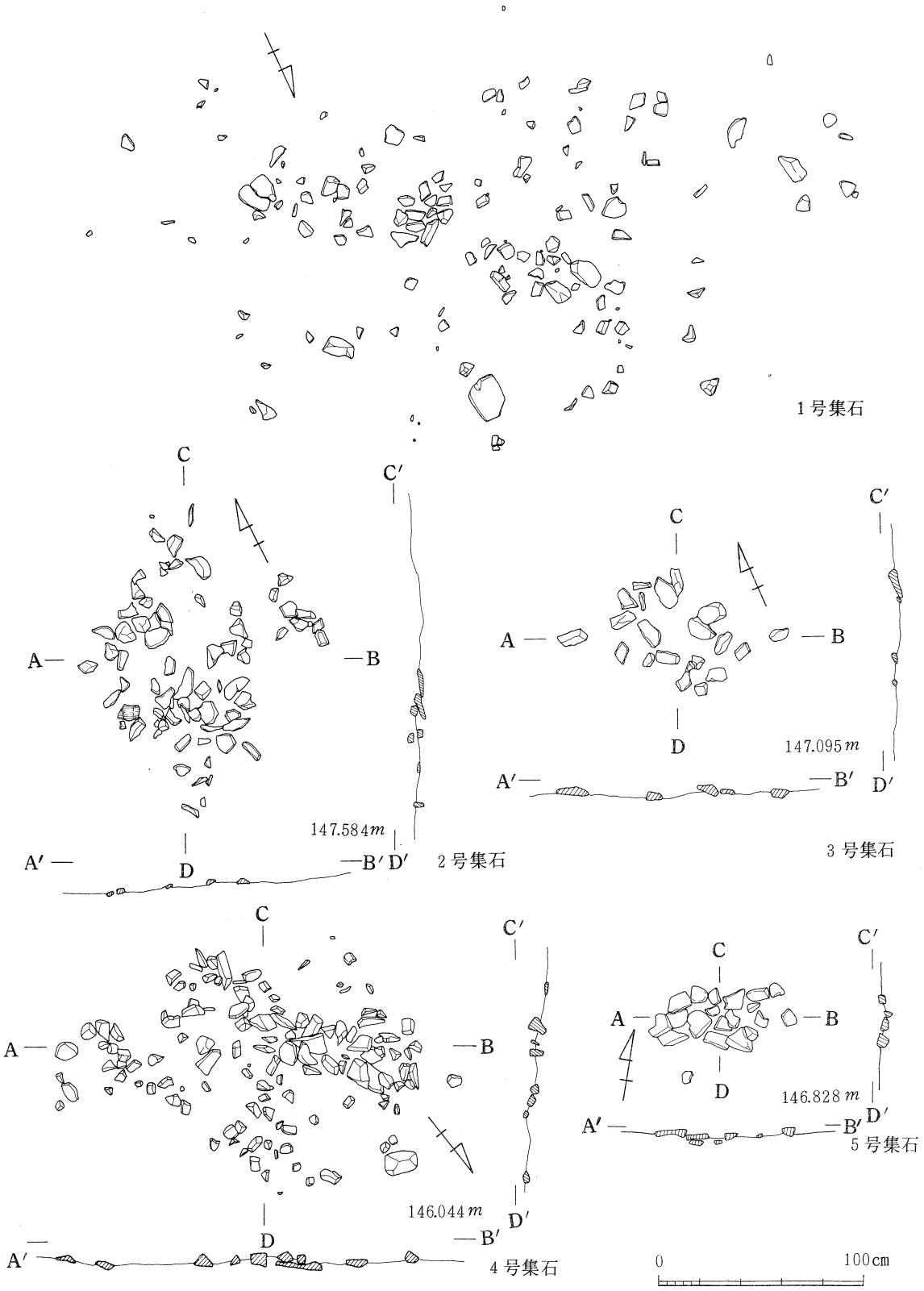
Ⅲ型　円形を呈する土坑

ａ　掘り込みが浅く規模が大きいもの。

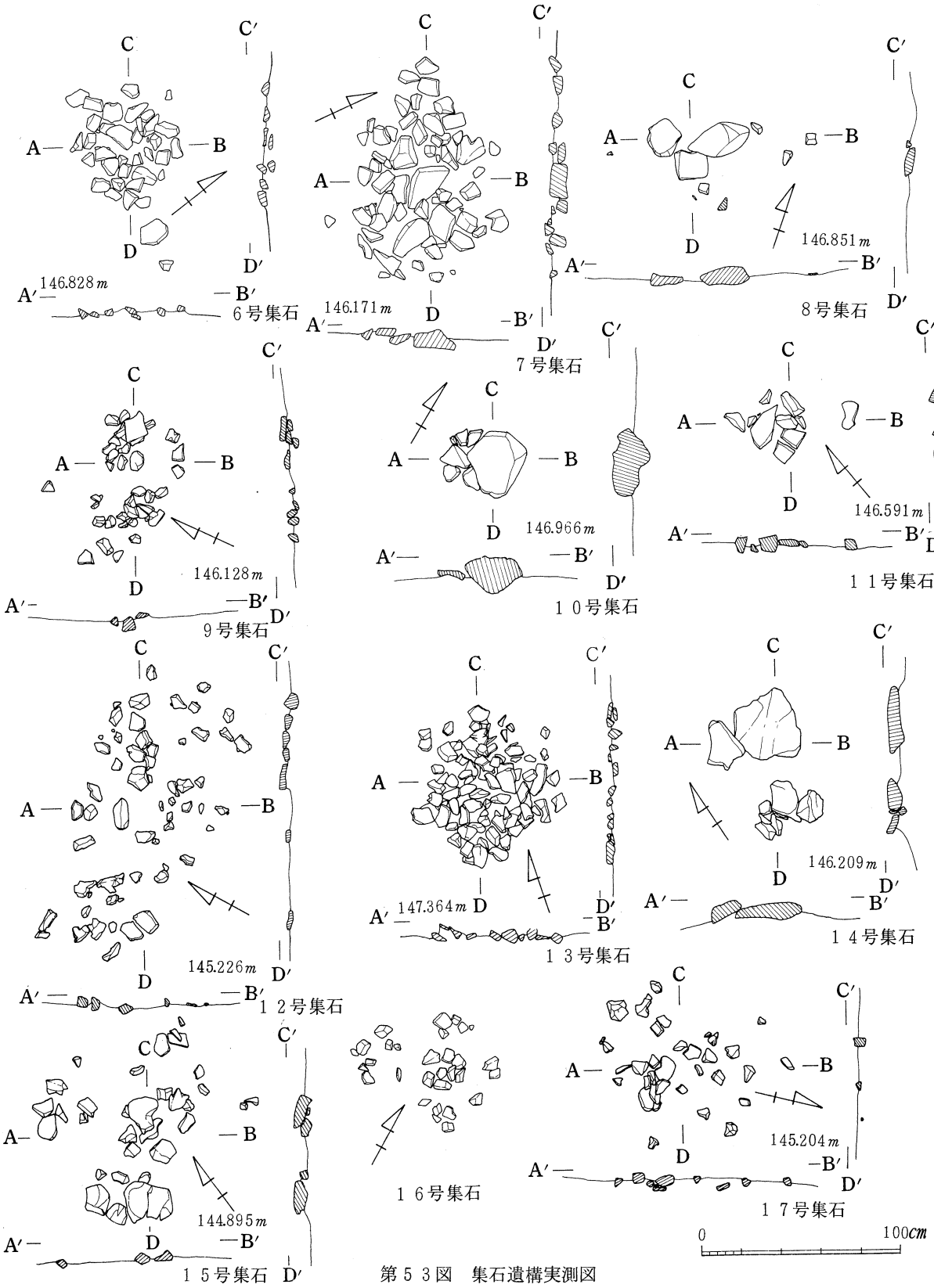
ｂ　掘り込みが深く規模が大きいもの。

Ⅳ型　その他の土坑

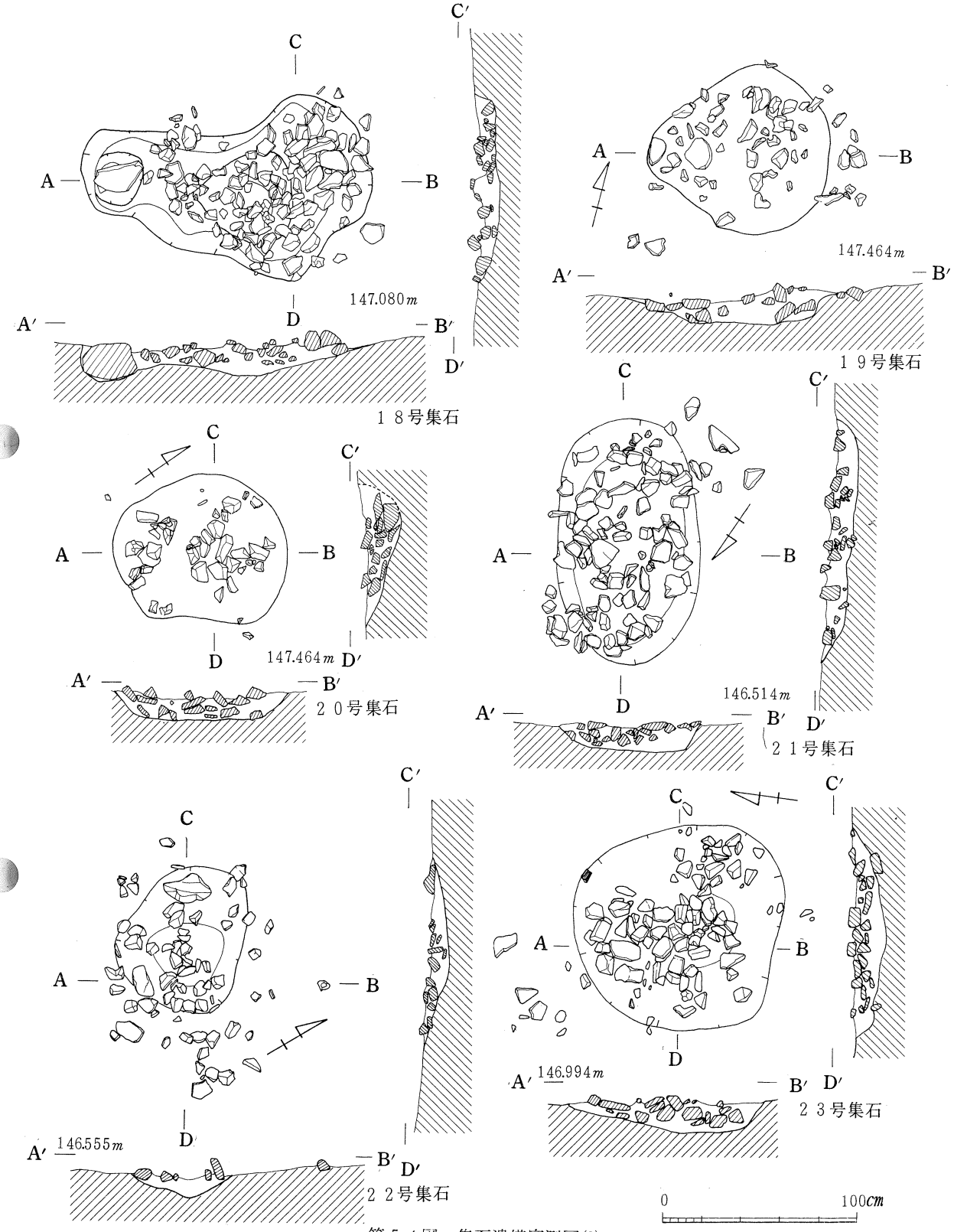
である。土坑は、集石遺構や遺物が集中して検出される第Ⅳ層中では検出されず、遺構確認面である第Ⅴ層上面で検出された。この中でⅠ型・Ⅱ型土坑は県内での検出例がなく特異なものである。Ⅰ型土坑の形態上の特徴としては、長軸１２０～１５０cm、短軸４０～６０cm程度の長円形のもので、断面がスプーン上を呈し円形状の凹部を有することがあげられる。深さは確認面の第Ⅴ層上面から２０～７０cmと幅があるが実際はさらに１０～２０cm程度深いものである。基本的な埋土は、スプーン状の凹部に２～１０cmの厚さで焼土が堆積し、その上部に炭化物や焼土を含み固く締まった黒褐色土が５～１５cmの厚みを持って堆積している。また、このⅠ型土坑の中には、凹部の固く締まった黒褐色土上に大型の円礫や角礫が検出されたものが１２基あり、１３号土坑のように礫が平面的な広がりをもって検出されたものもある。さらにこのⅠ型土坑が数基連続しているものも存在する。Ⅱ型土坑は、いわゆる連穴土坑と呼ばれ、県内では初見のものである。連穴土坑は４６号



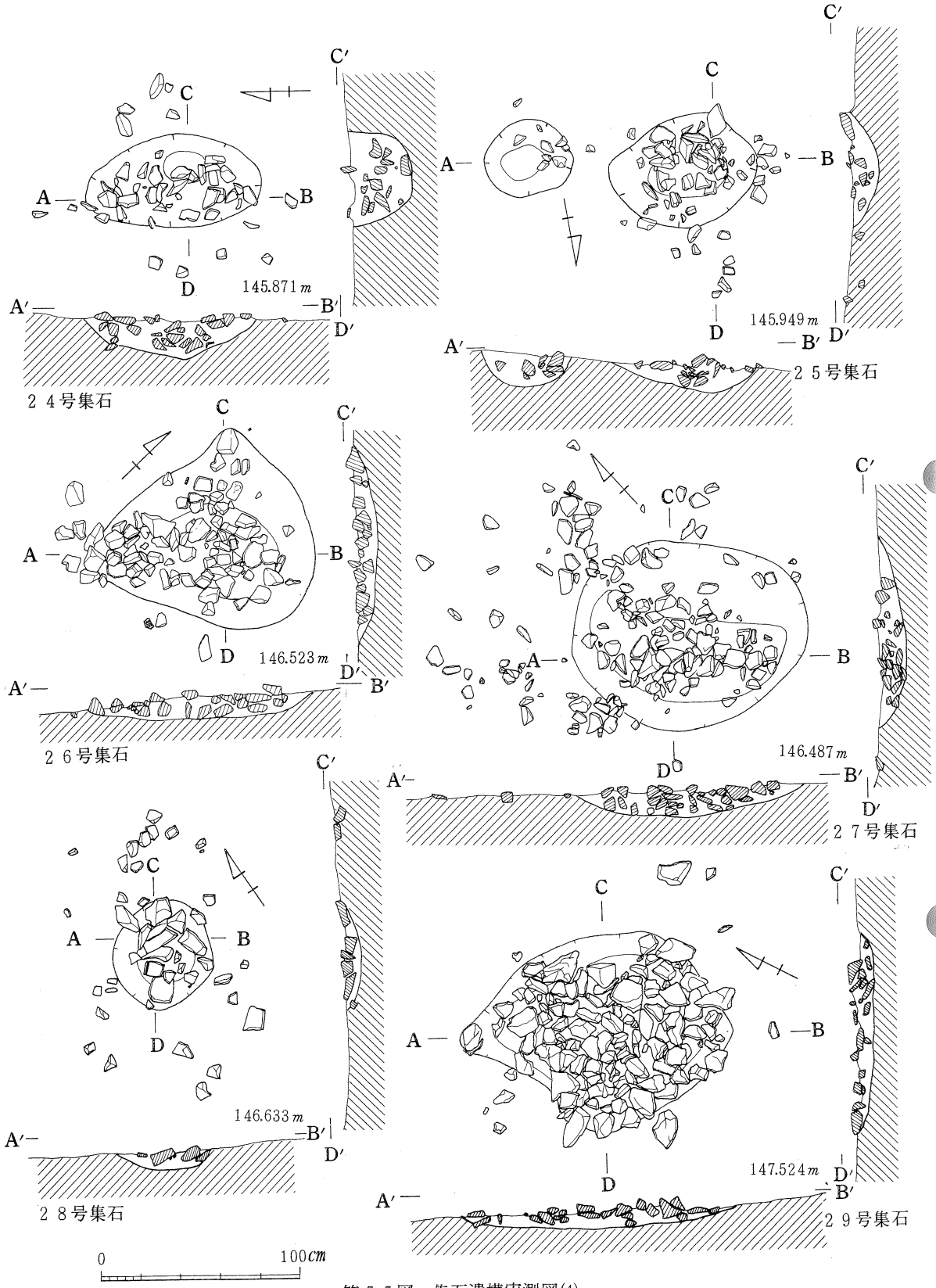
第52図　集石遺構実測図(1)



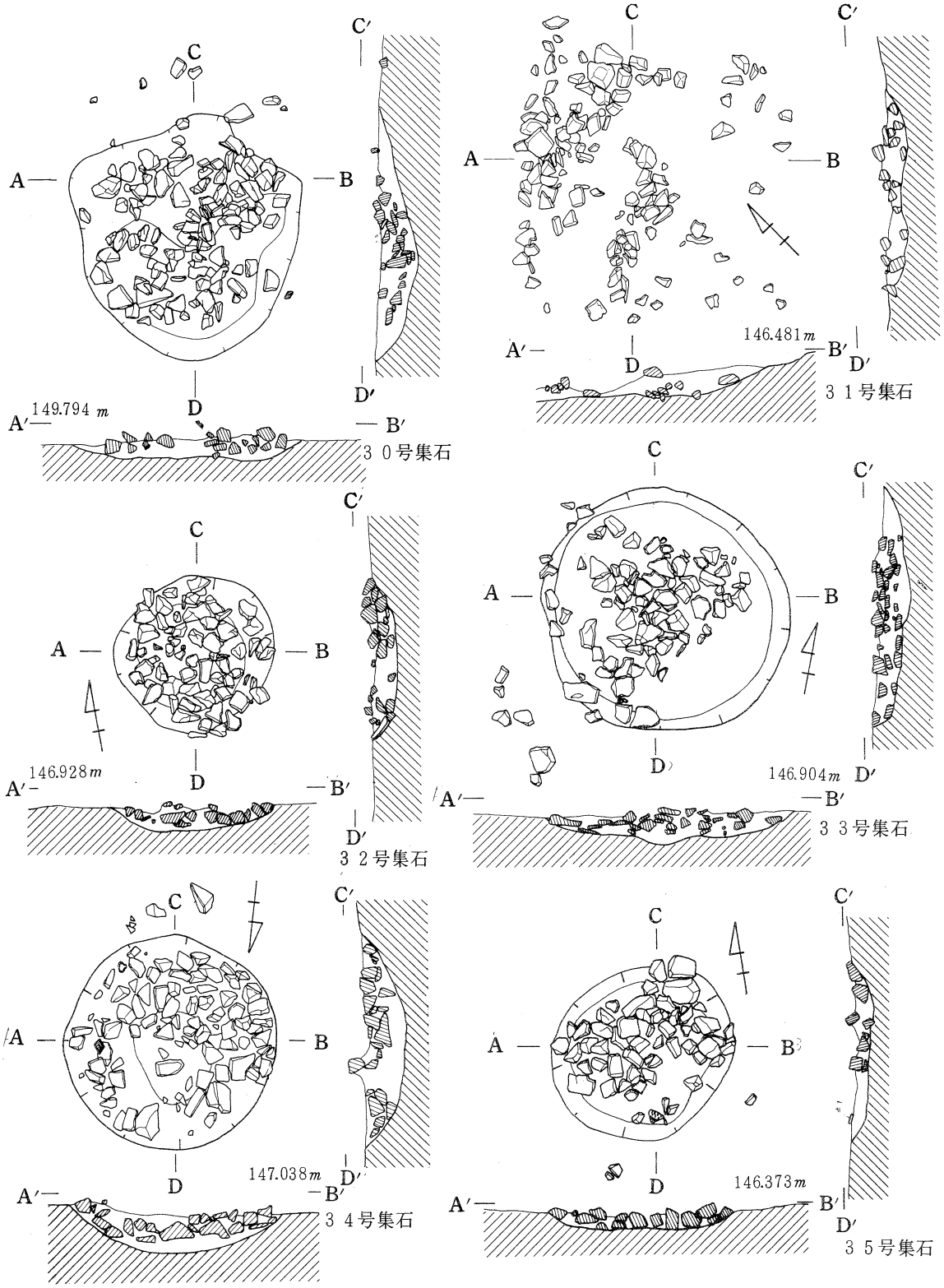
第53図　集石遺構実測図



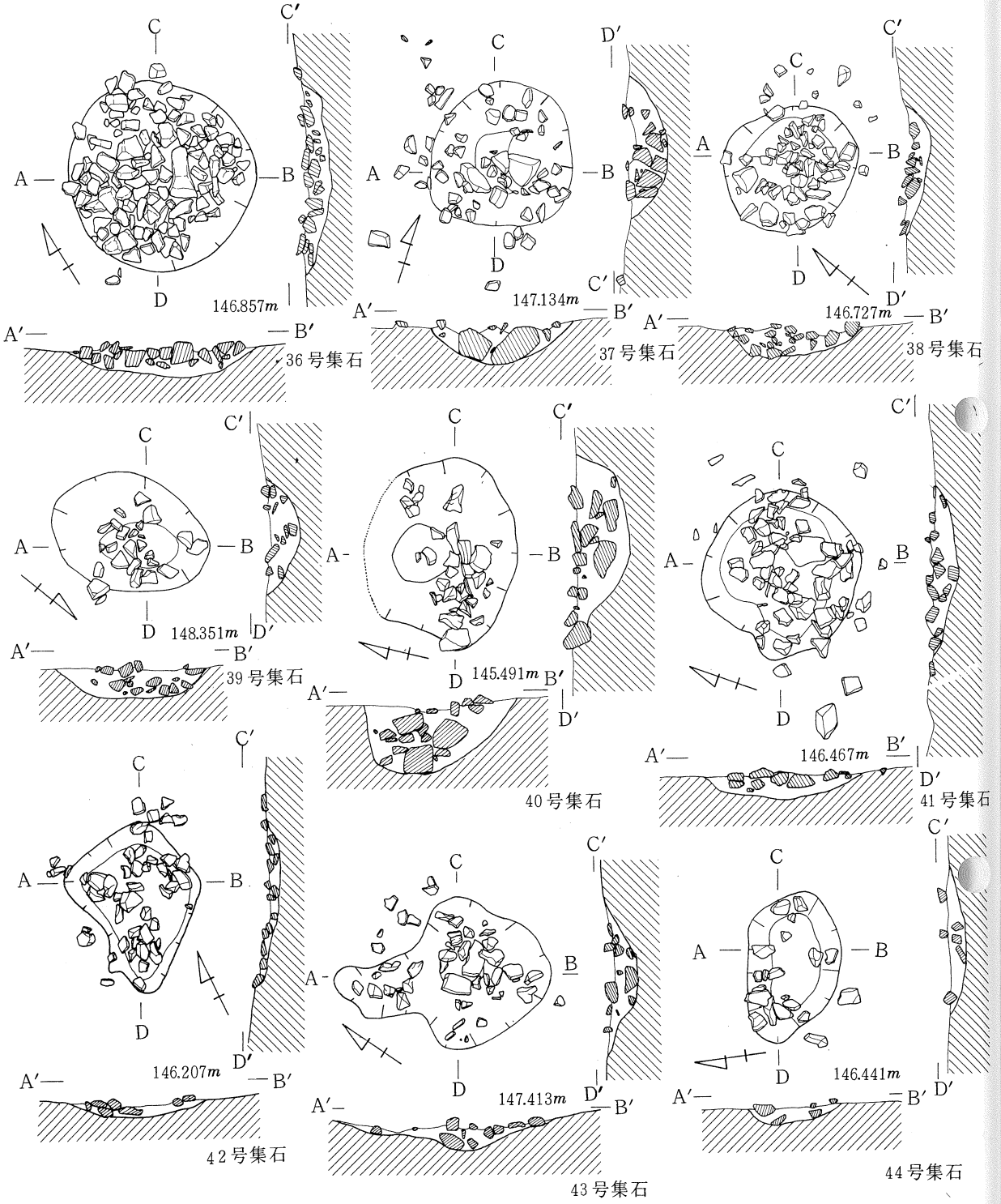
第５４図　集石遺構実測図(3)



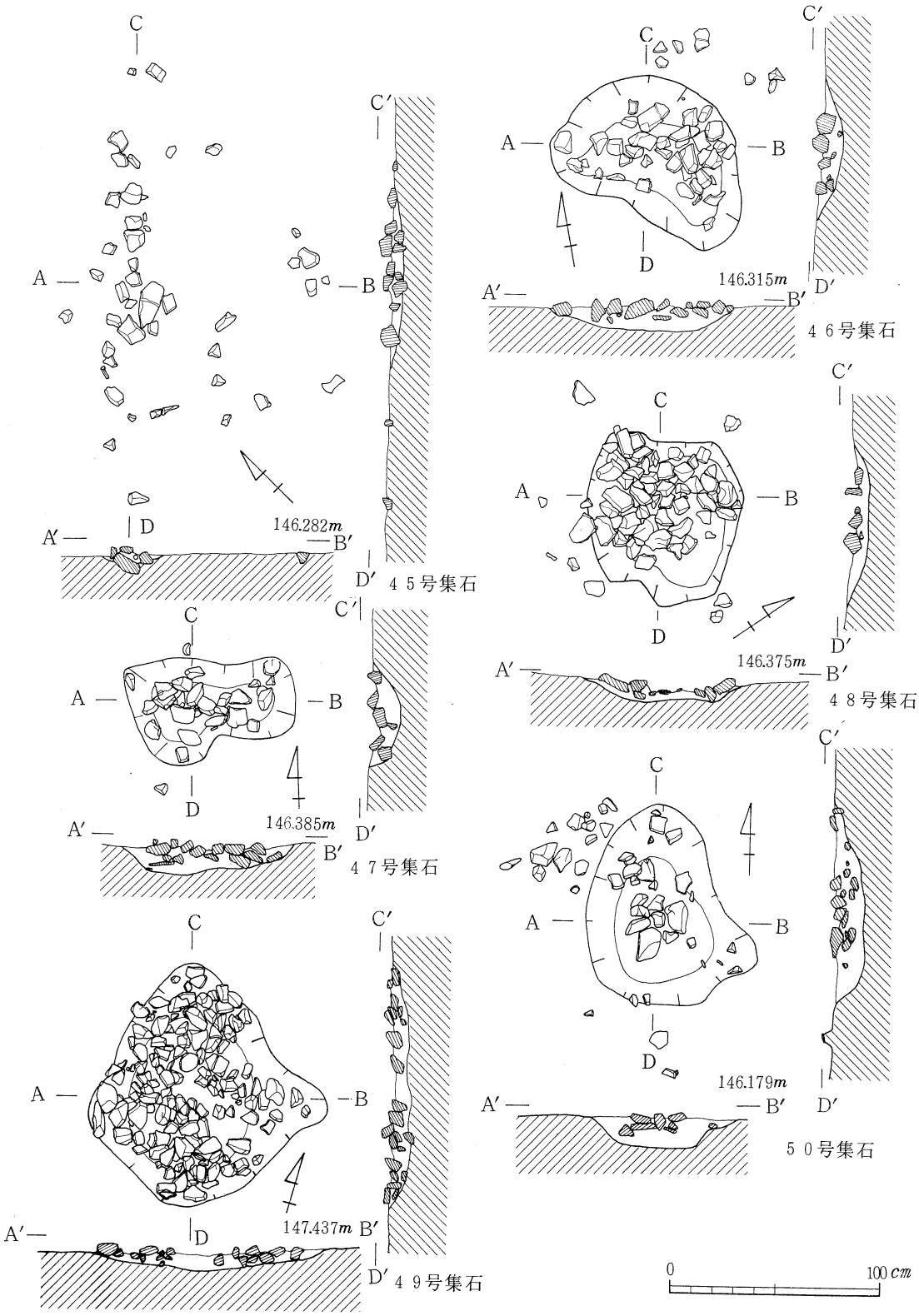
第５５図　集石遺構実測図(4)



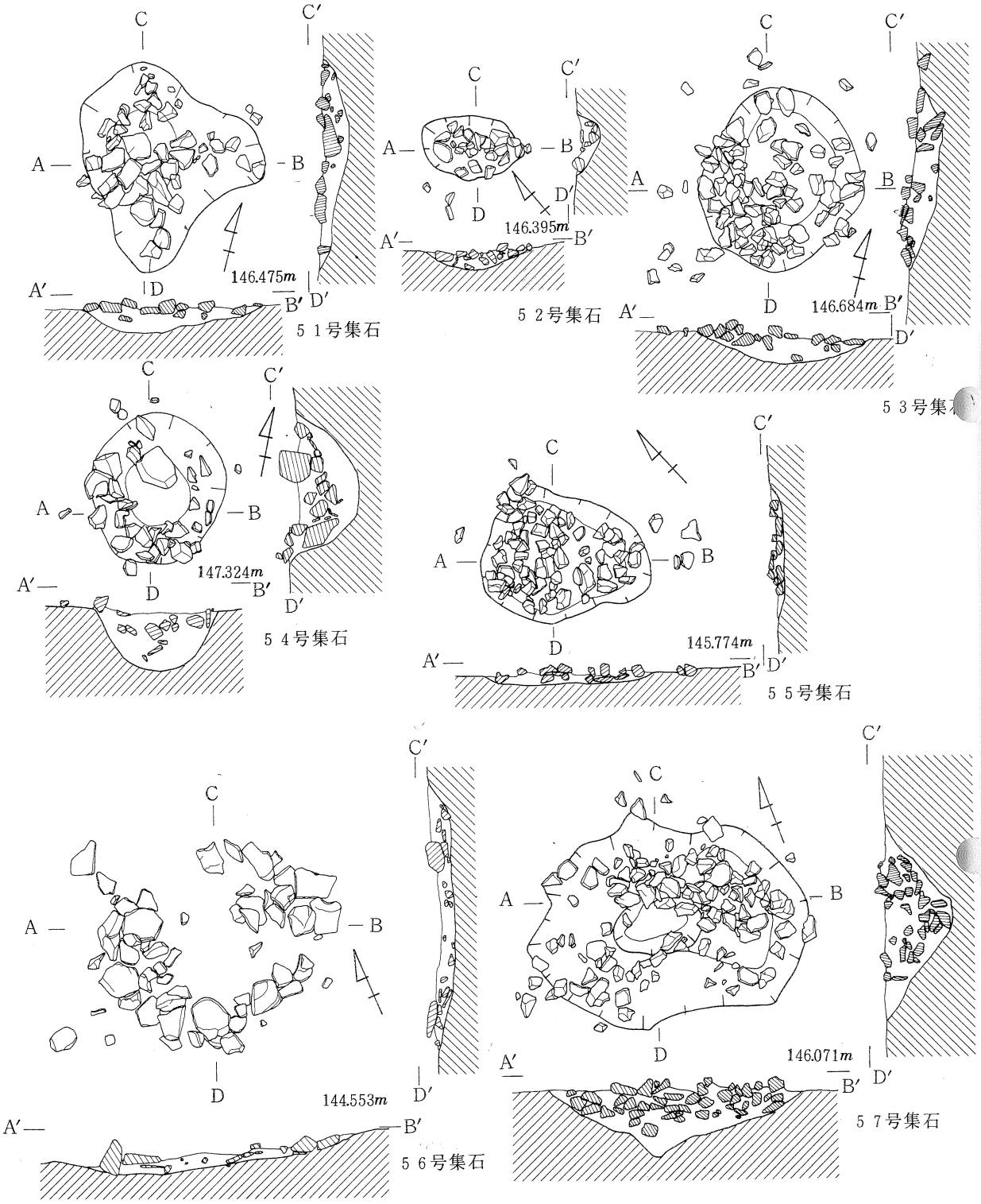
第 5 6 図　集石遺構実測図(5)



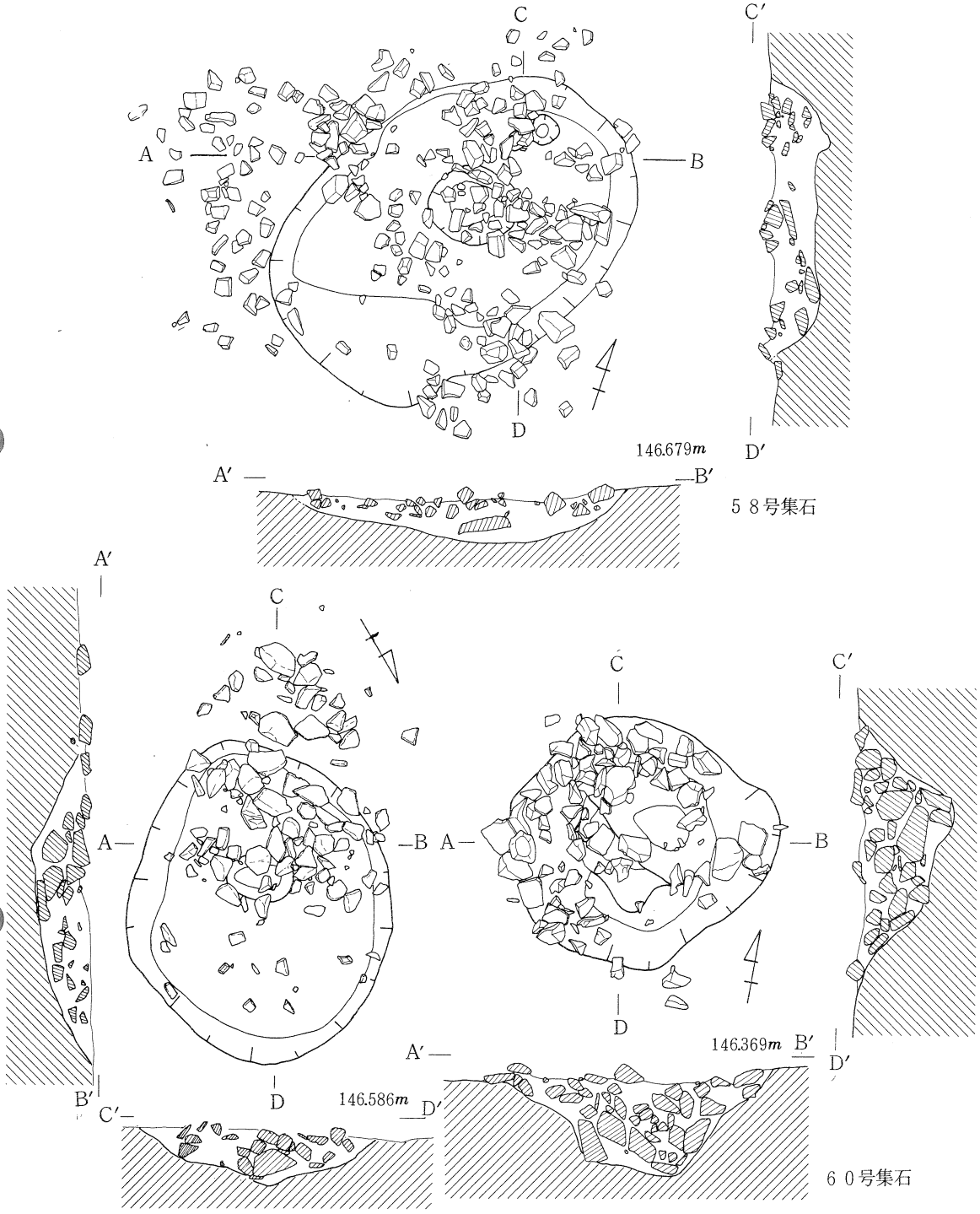
第57図　集石遺構実測図（6）



第58図　集 石 遺 構 実 測 図 (7)

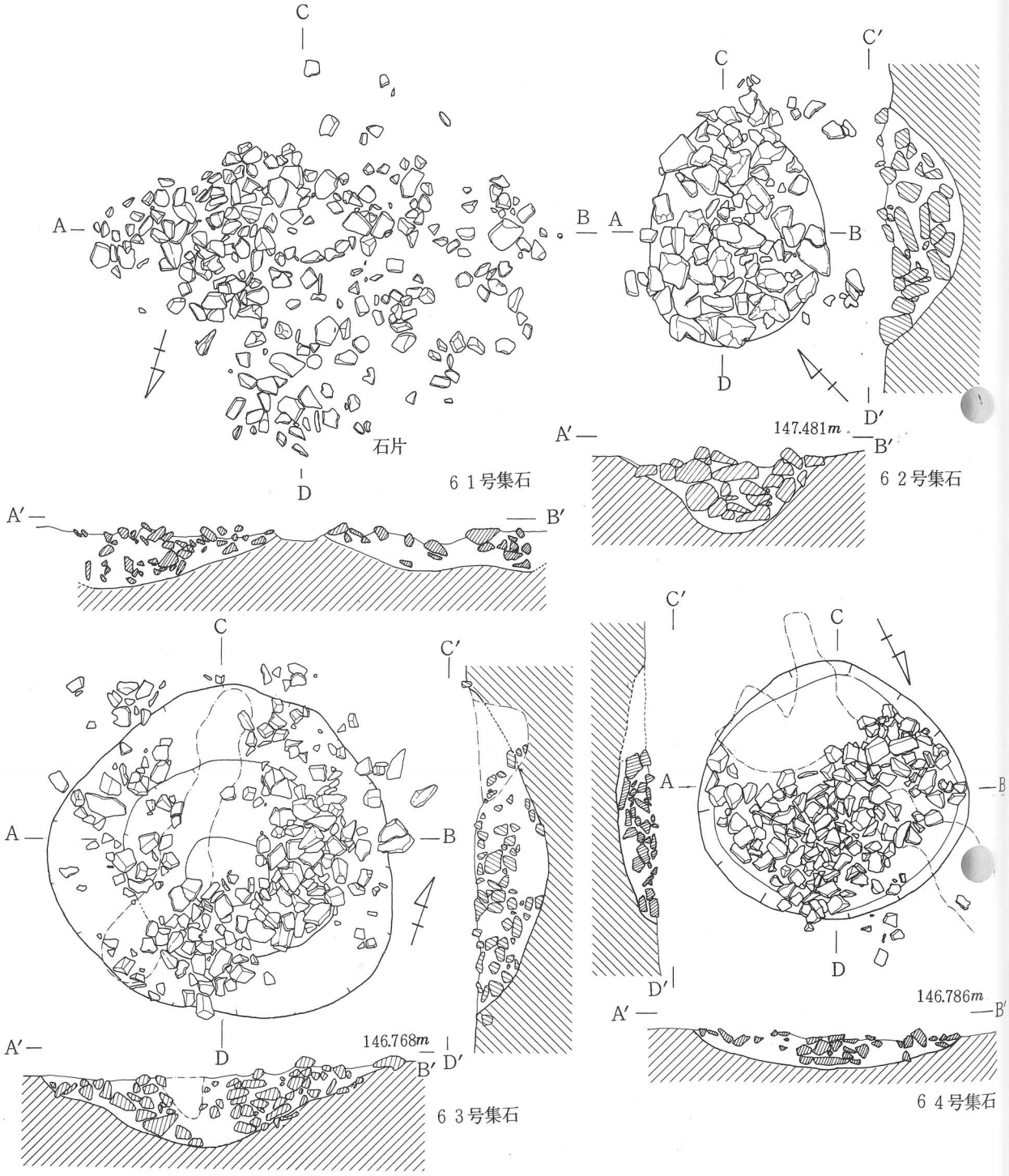


第59図　集 石 遺 構 実 測 図 (8)

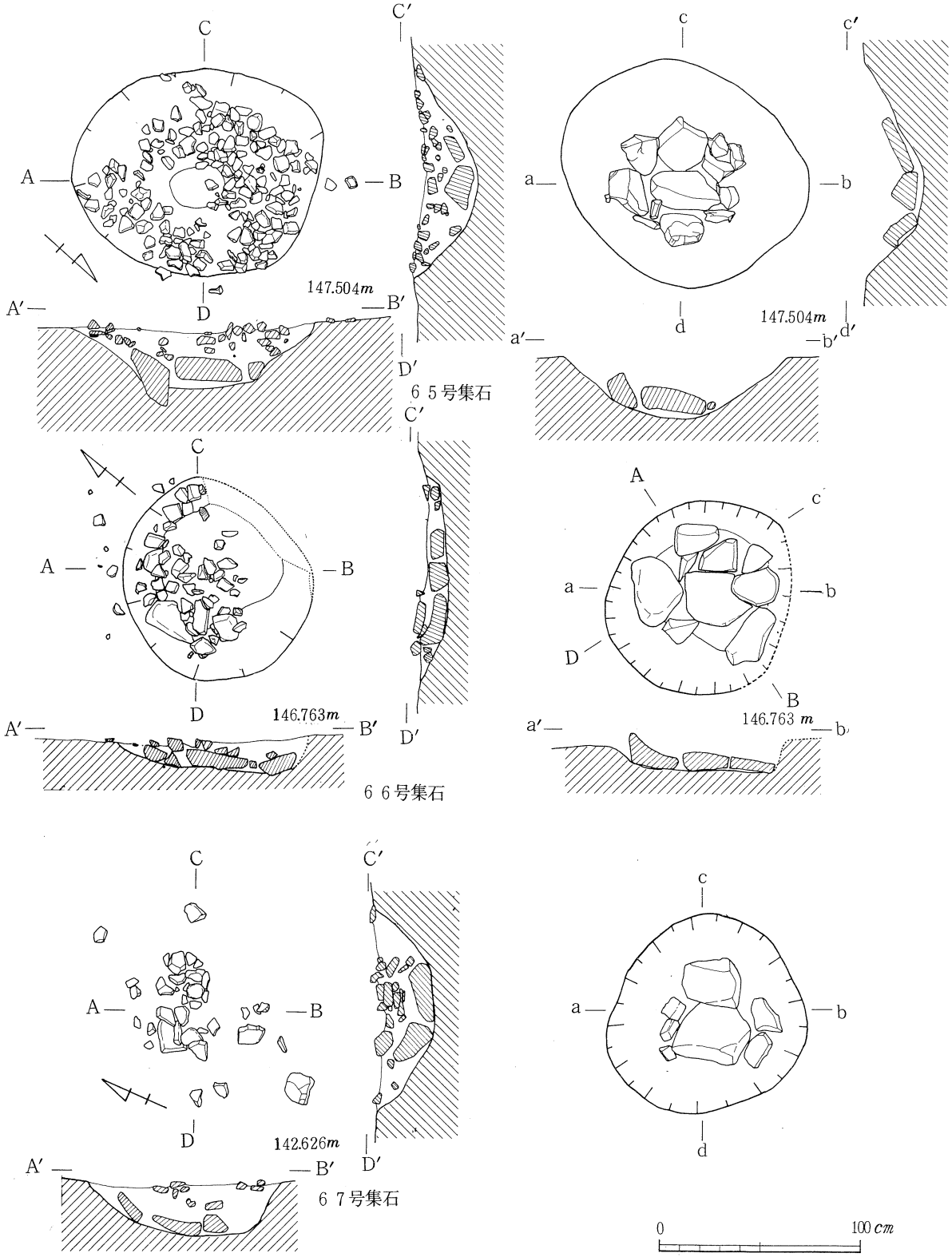


第６０図　集 石 遺 構 実 測 図 （9）

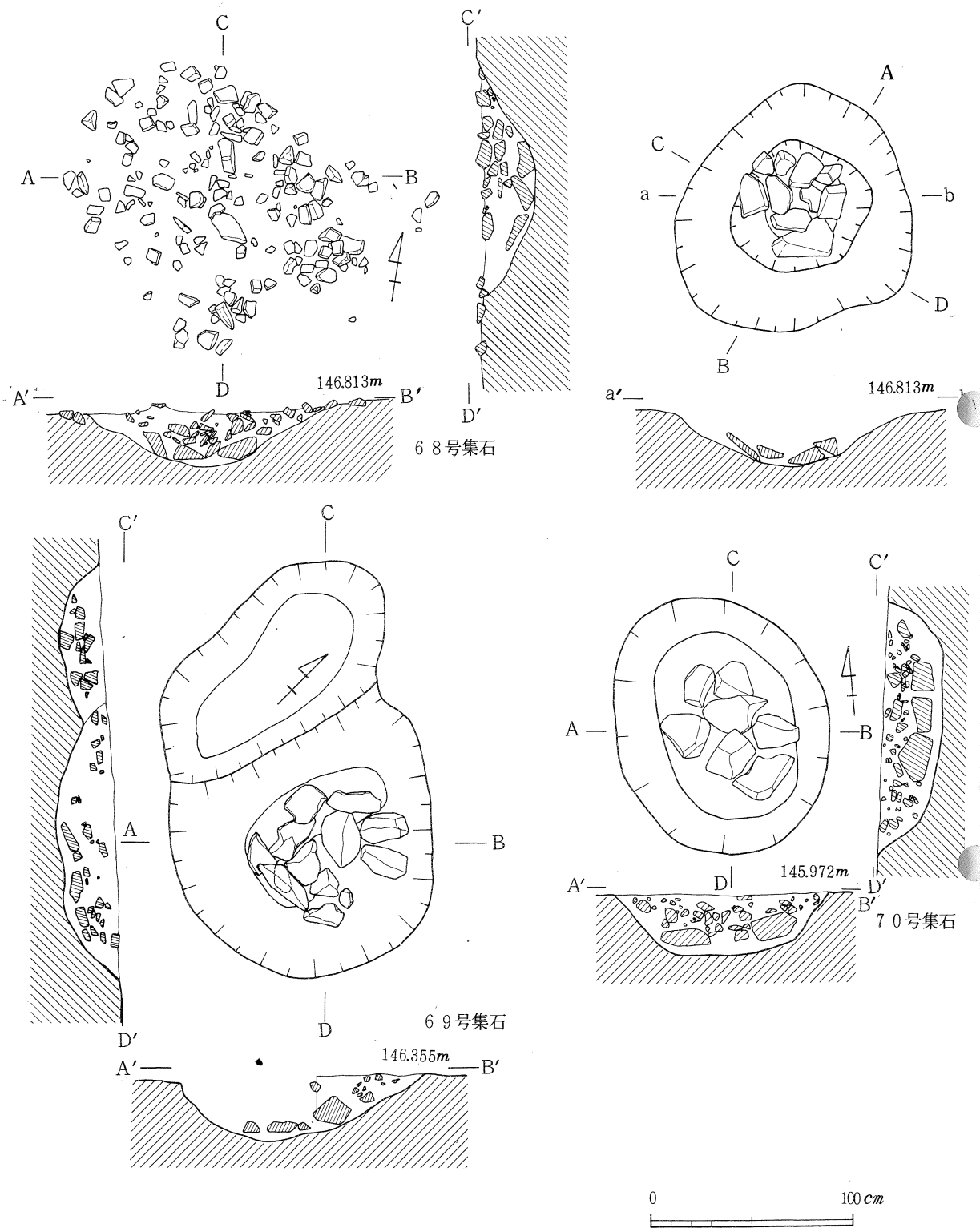
0　100 cm



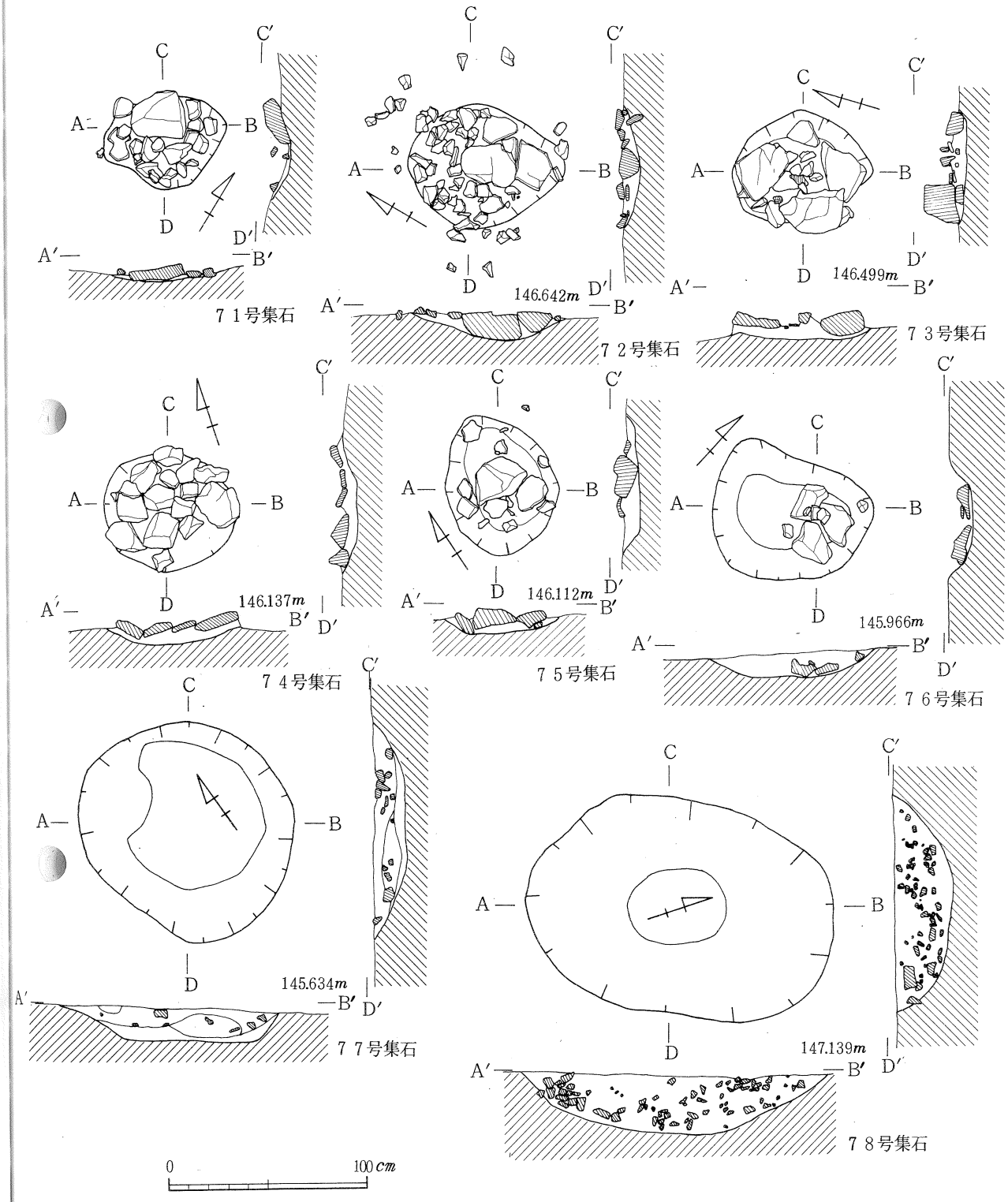
第61図　集石遺構実測図（10）



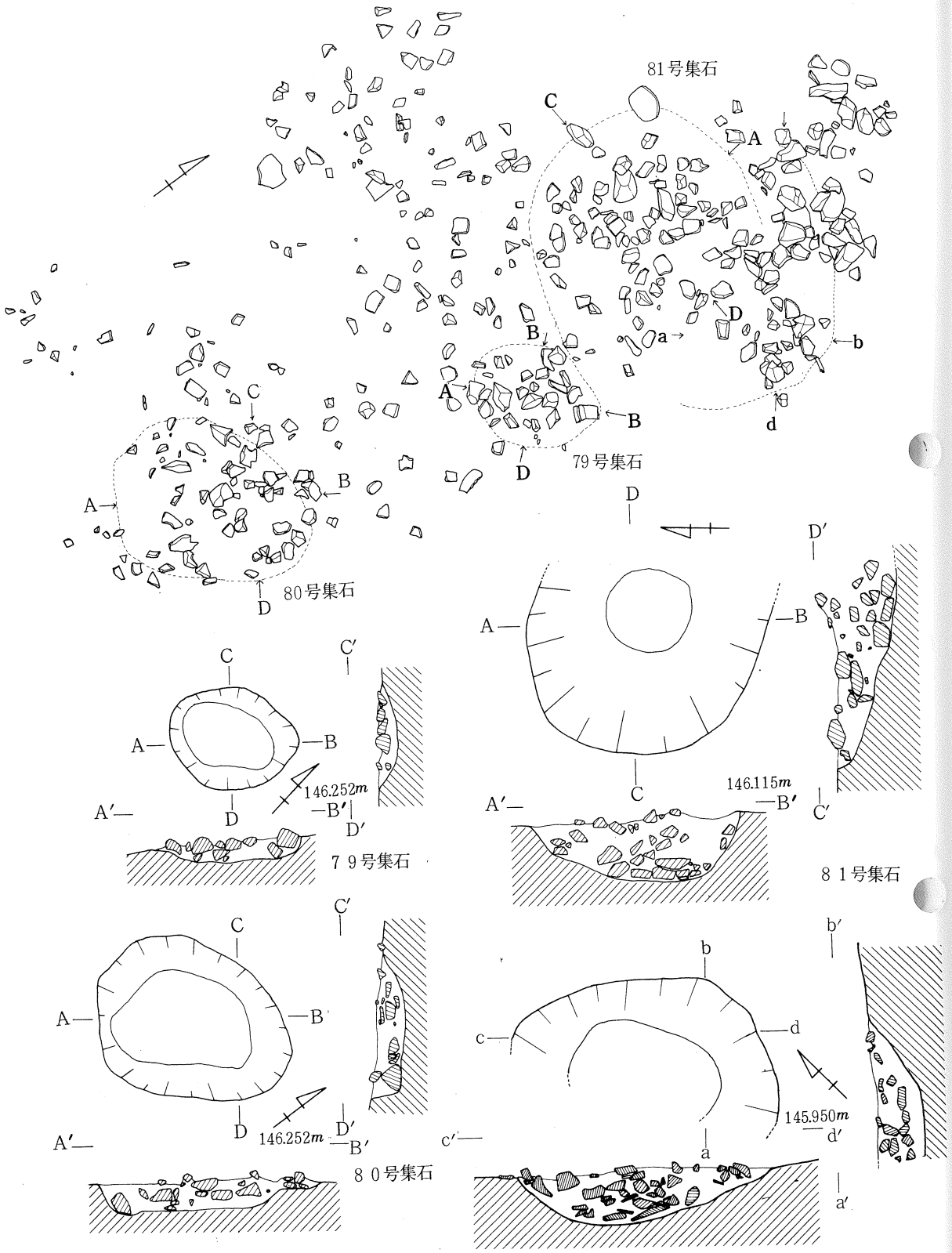
第6 2図　集 石 遺 構 実 測 図 (11)



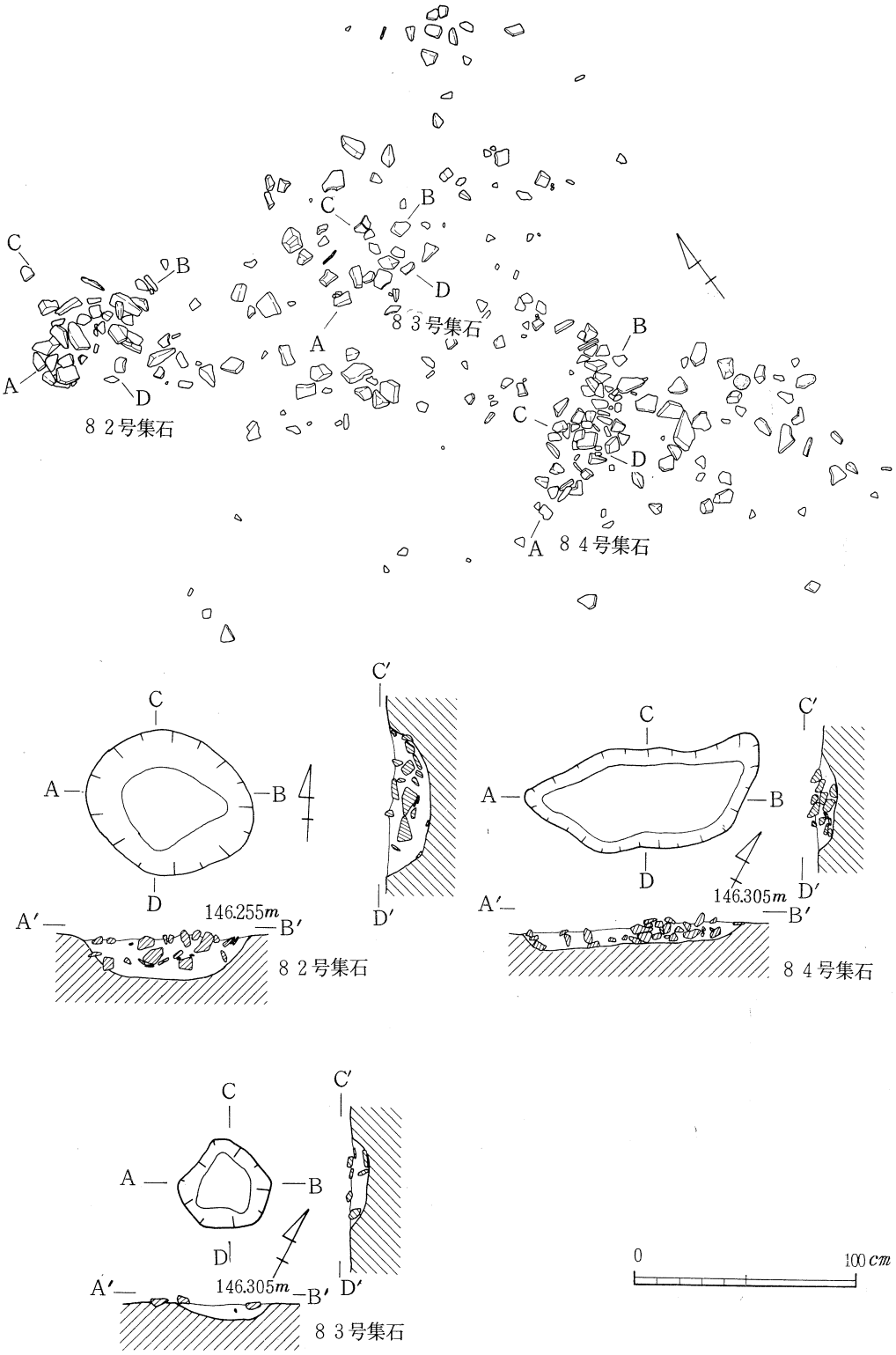
第63図　集石遺構実測図（12）



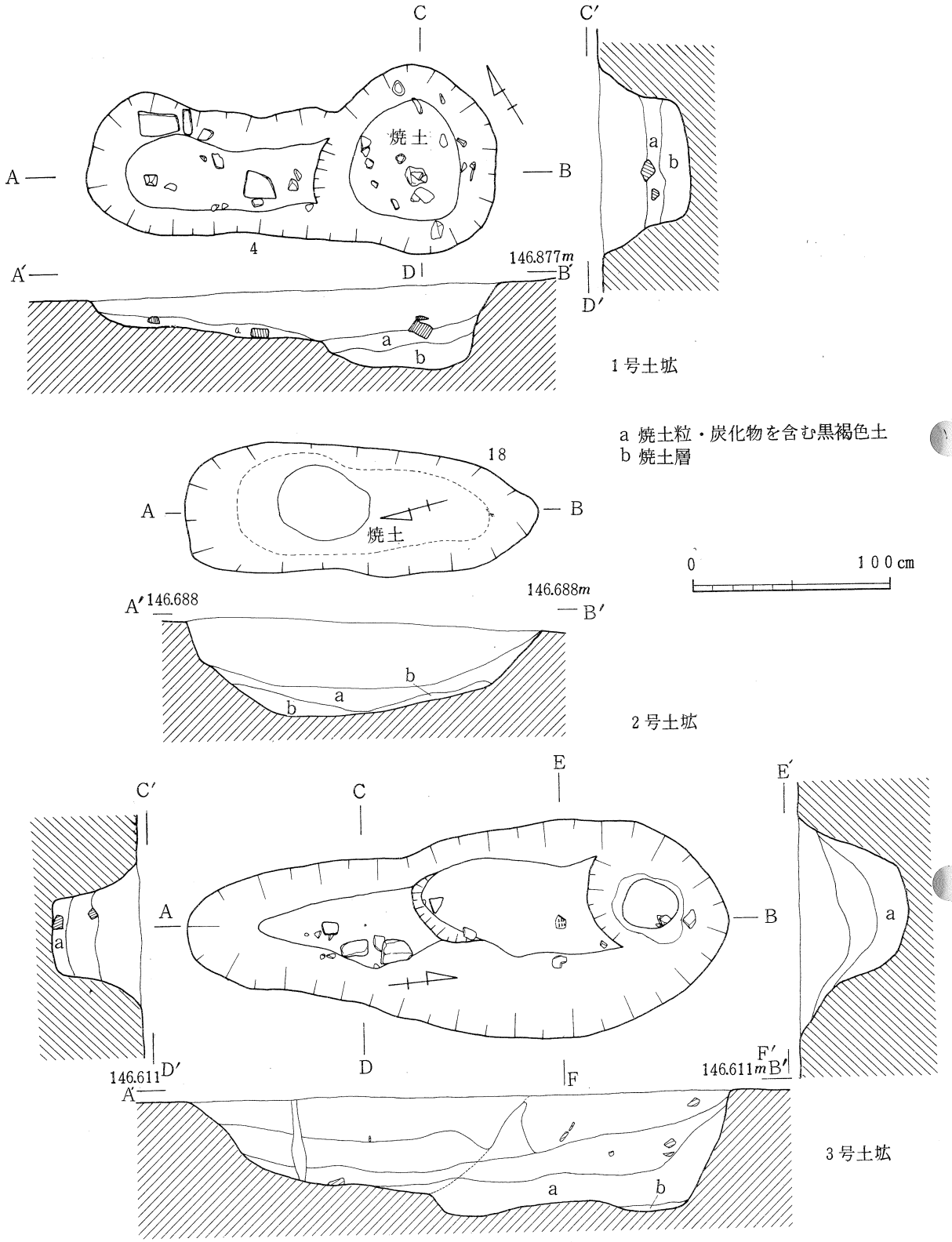
第６４図　集 石 遺 構 実 測 図 (13)



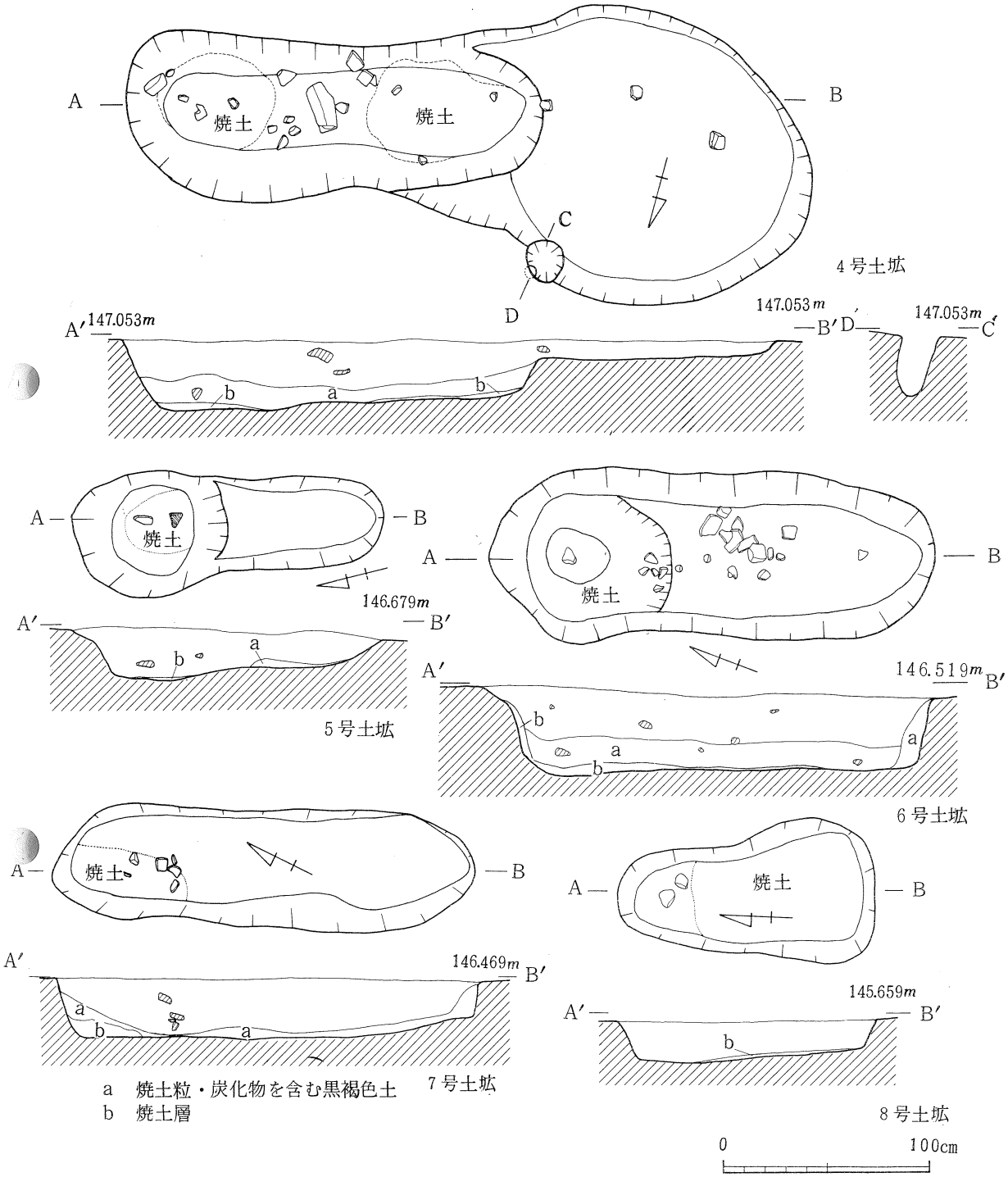
第65図　集石遺構実測図 (14)



第６６図　集石遺構実測図（15）

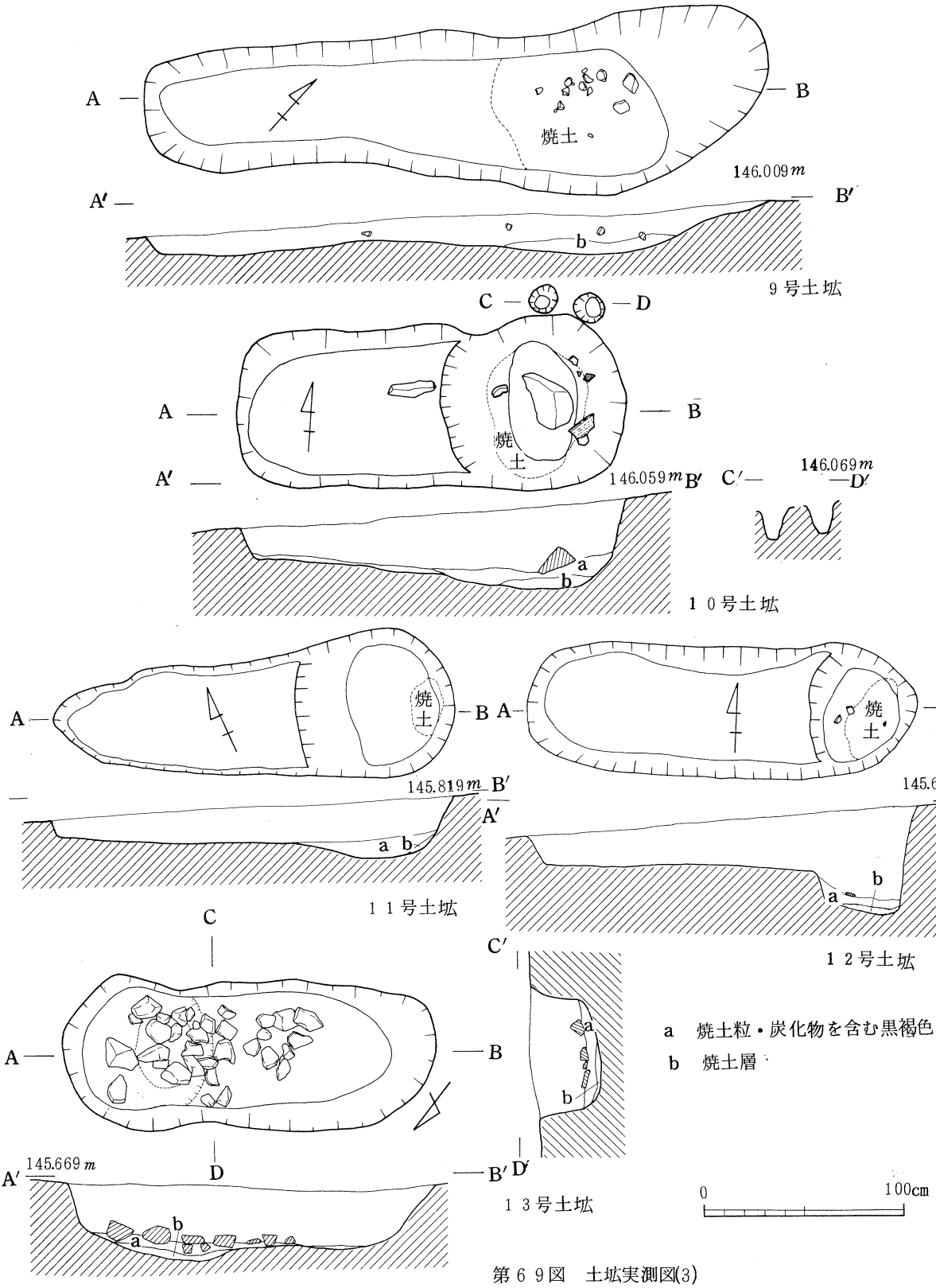

C
C′
焼土
A
B
a
b
4
A′
D
146.877m
B′
D′
a
b
1号土坑
a 焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b 焼土層
18
A
B
焼土
0
100cm
A′
146.688
146.688m
B′
b
a
b
2号土坑
E
E′
C′
C
A
B
a
a
D
F
F′
146.611
D′
146.611m
B′
A′
a
b
3号土坑

第67図　土坑実測図(1)

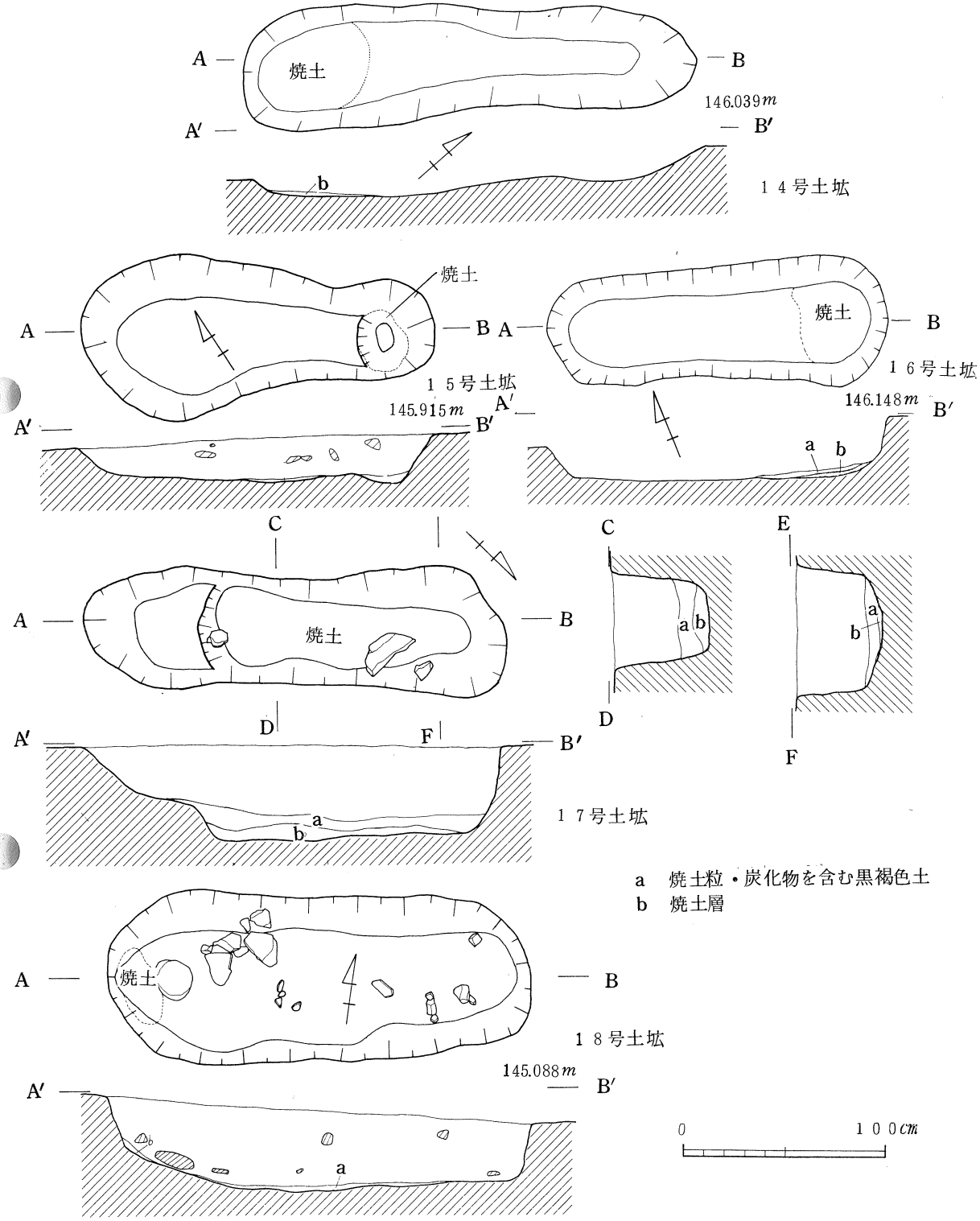


a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層

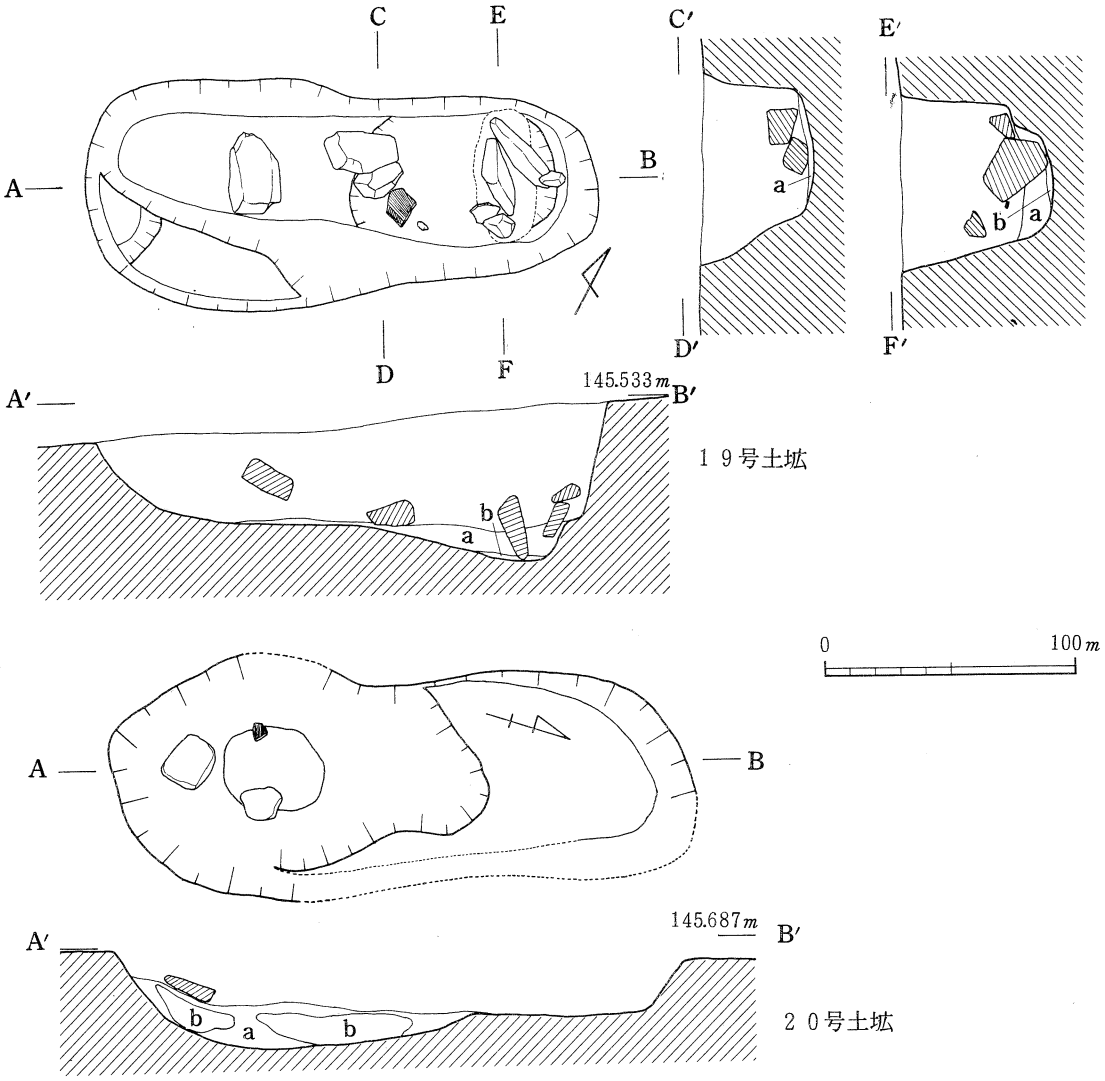
第68図　土坑実測図(2)


A
B
焼土
146.009m
A′
B′
b
9号土坑
C
D
A
B
焼土
A′
146.059m
B′
C′
146.069m
D′
a
b
10号土坑
A
焼土
B
A
焼土
145.819m
B′
A′
a
b
11号土坑
145.639m
B′
a
b
12号土坑
C
C′
A
B
a
b
A′
145.669m
D
B′
D′
a
b
13号土坑
a 焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b 焼土層
0
100cm

第69図 土坑実測図(3)

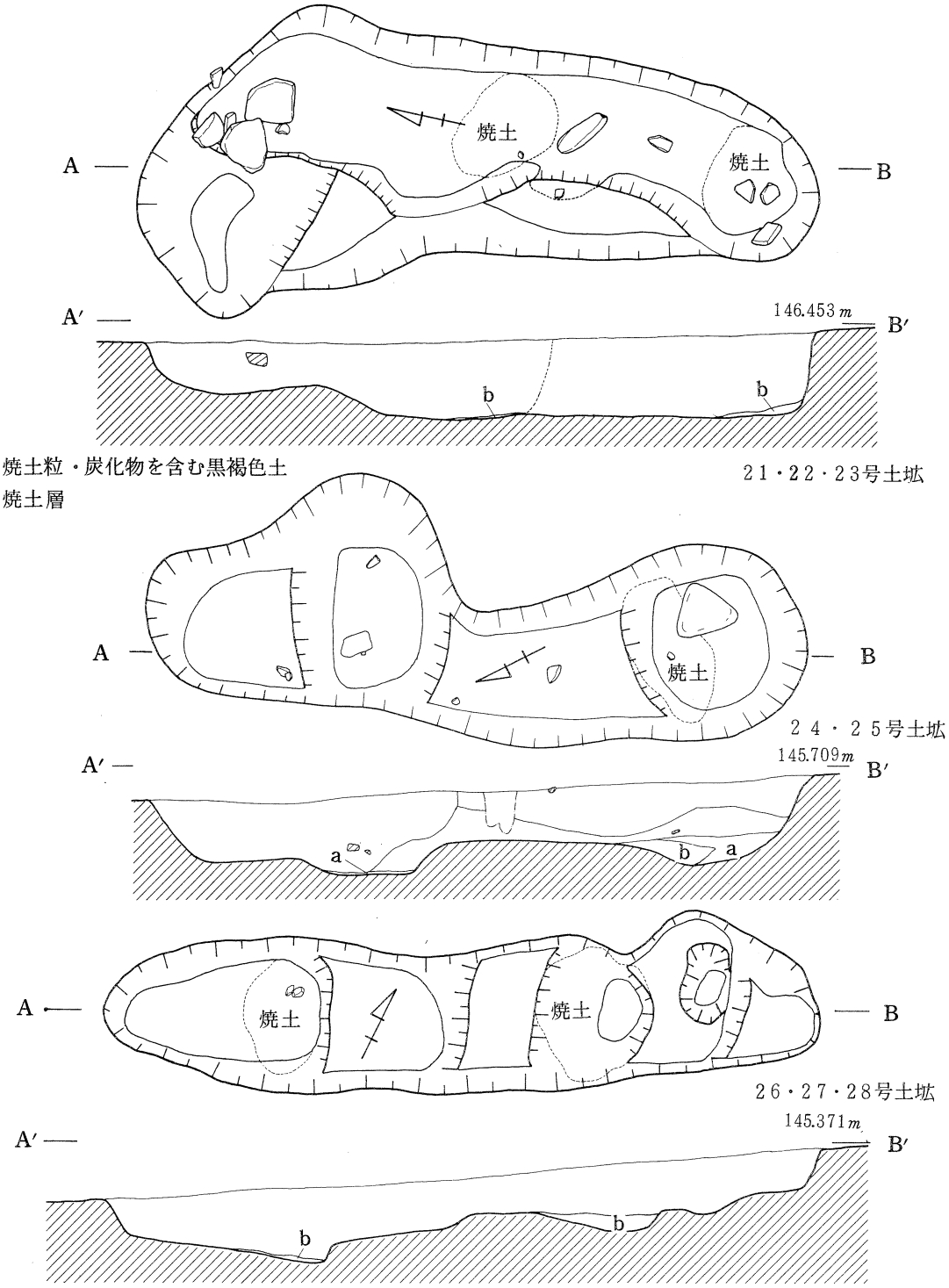

A
焼土
B
146.039m
A′
B′
b
14号土坑
焼土
A
B
15号土坑
145.915m
A′
B′
焼土
A
B
16号土坑
A′
146.148m
B′
a
b
C
A
焼土
B
D
F
A′
B′
a
b
17号土坑
C
a
b
D
E
a
b
F
a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層
A
焼土
B
18号土坑
145.088m
A′
B′
a
0
100cm

第70図　土坑実測図(4)

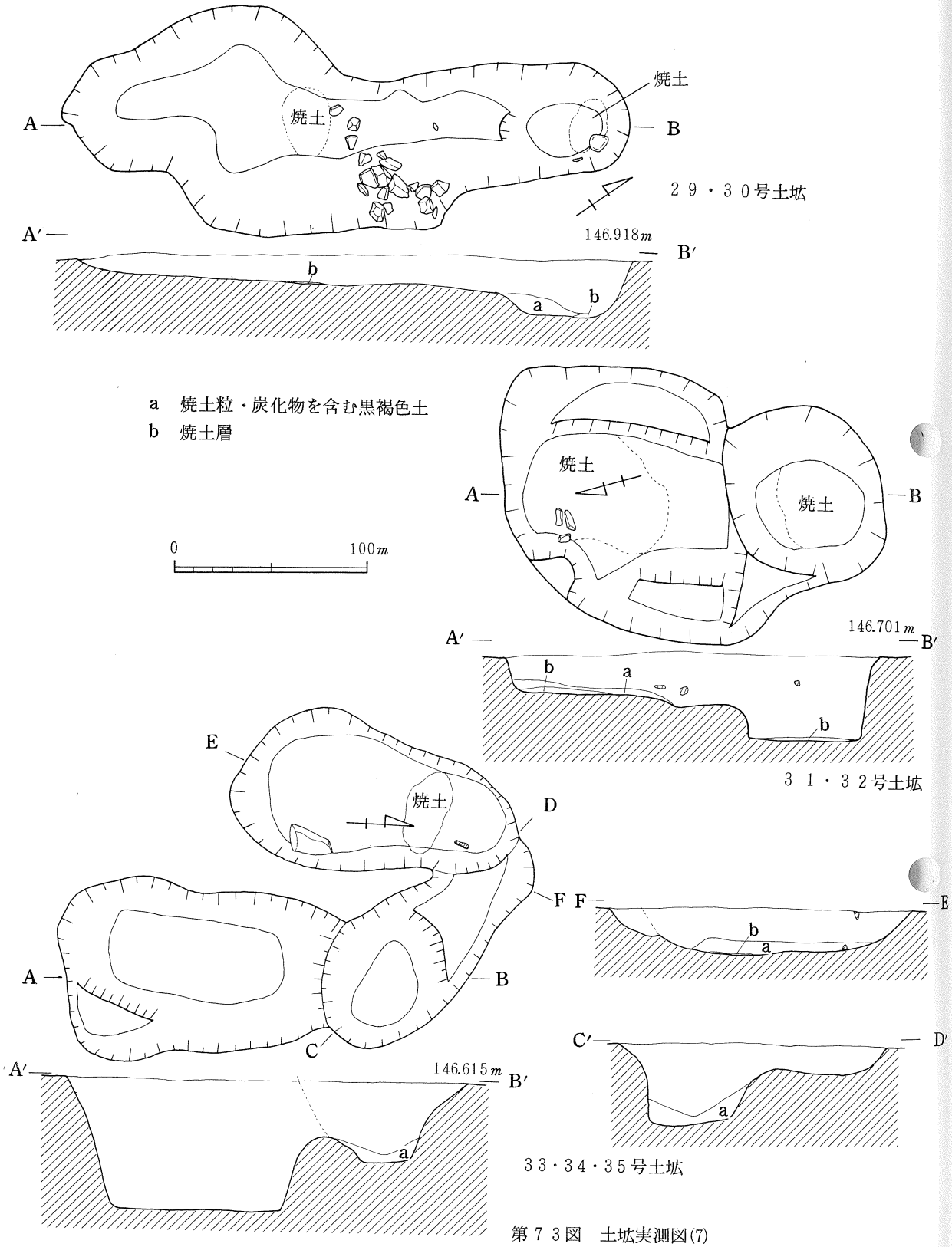


a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層

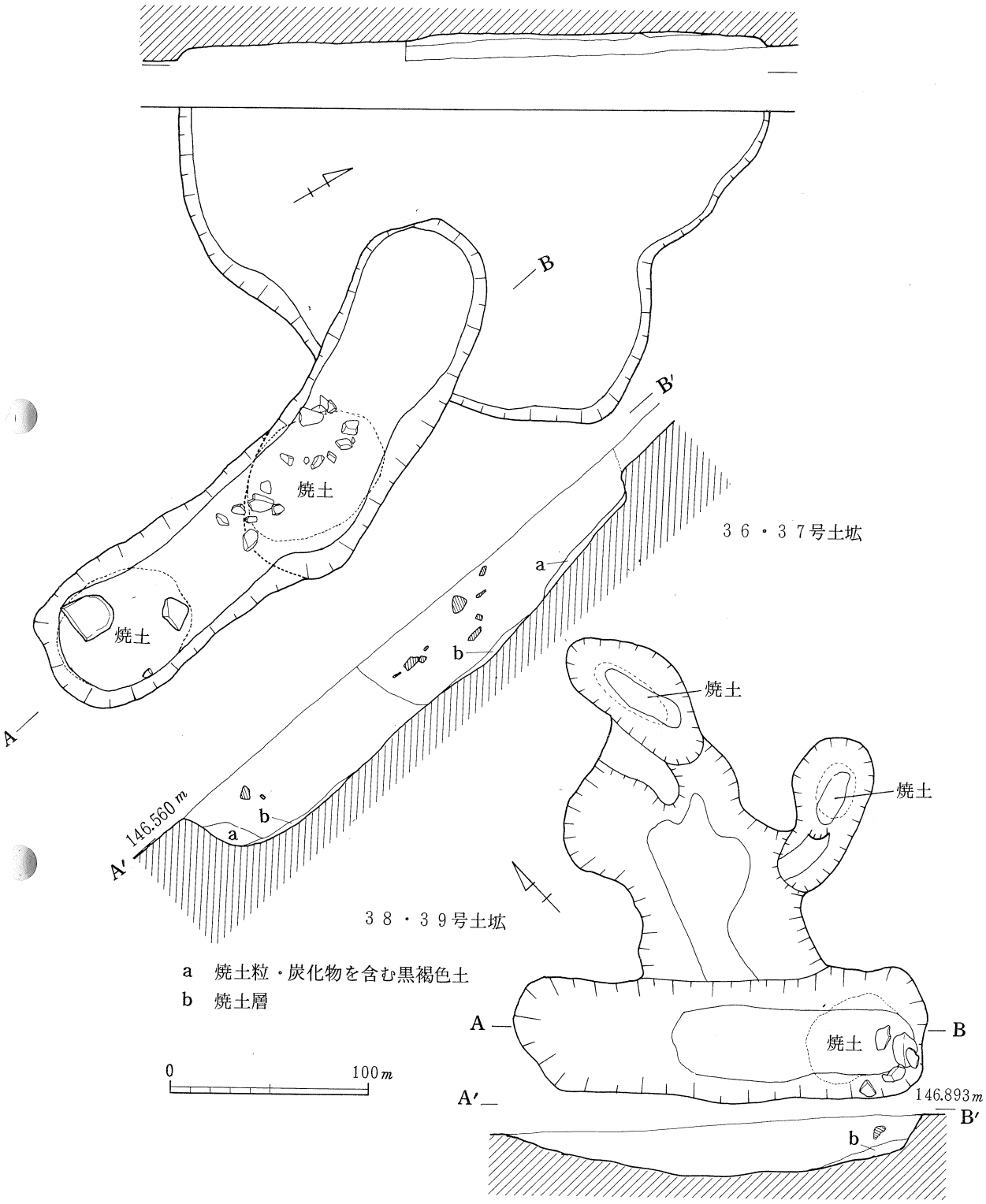
第７１図　土坑実測図(5)


焼土
焼土
A
B
A′
B′
146.453 m
b
b
a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層
21・22・23号土坑
焼土
A
B
24・25号土坑
A′
B′
145.709 m
a
b
a
焼土
焼土
A
B
26・27・28号土坑
A′
B′
145.371 m
b
b
0
100 cm

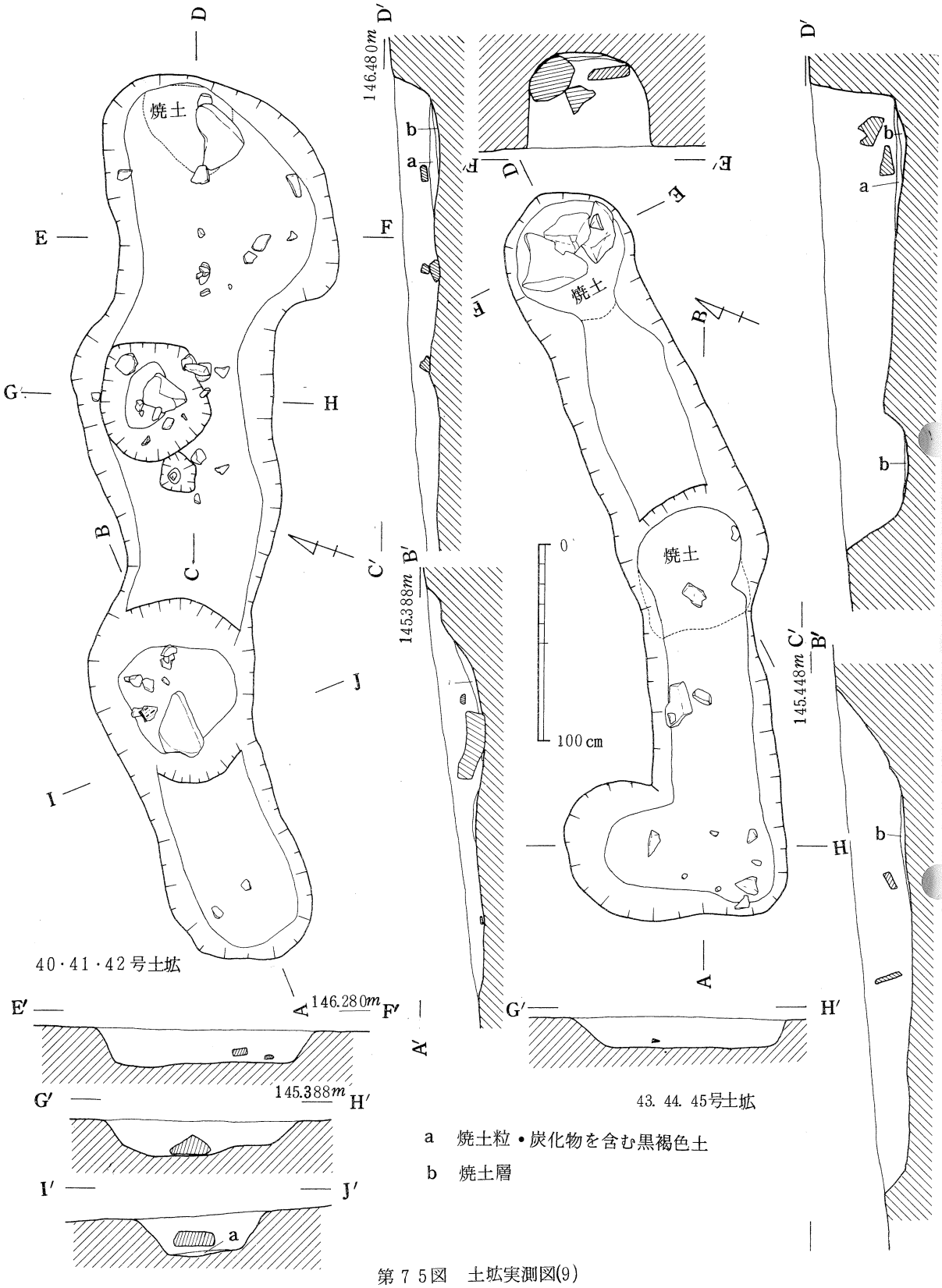
第72図　土坑実測図(6)


焼土
焼土
A
B
29・30号土坑
A′
146.918m
B′
b
a
b
a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層
焼土
A
焼土
B
0
100m
A′
146.701m
B′
b
a
b
31・32号土坑
E
焼土
D
F
F
E
b
a
A
B
C
C′
D′
a
A′
146.615m
B′
a
33・34・35号土坑

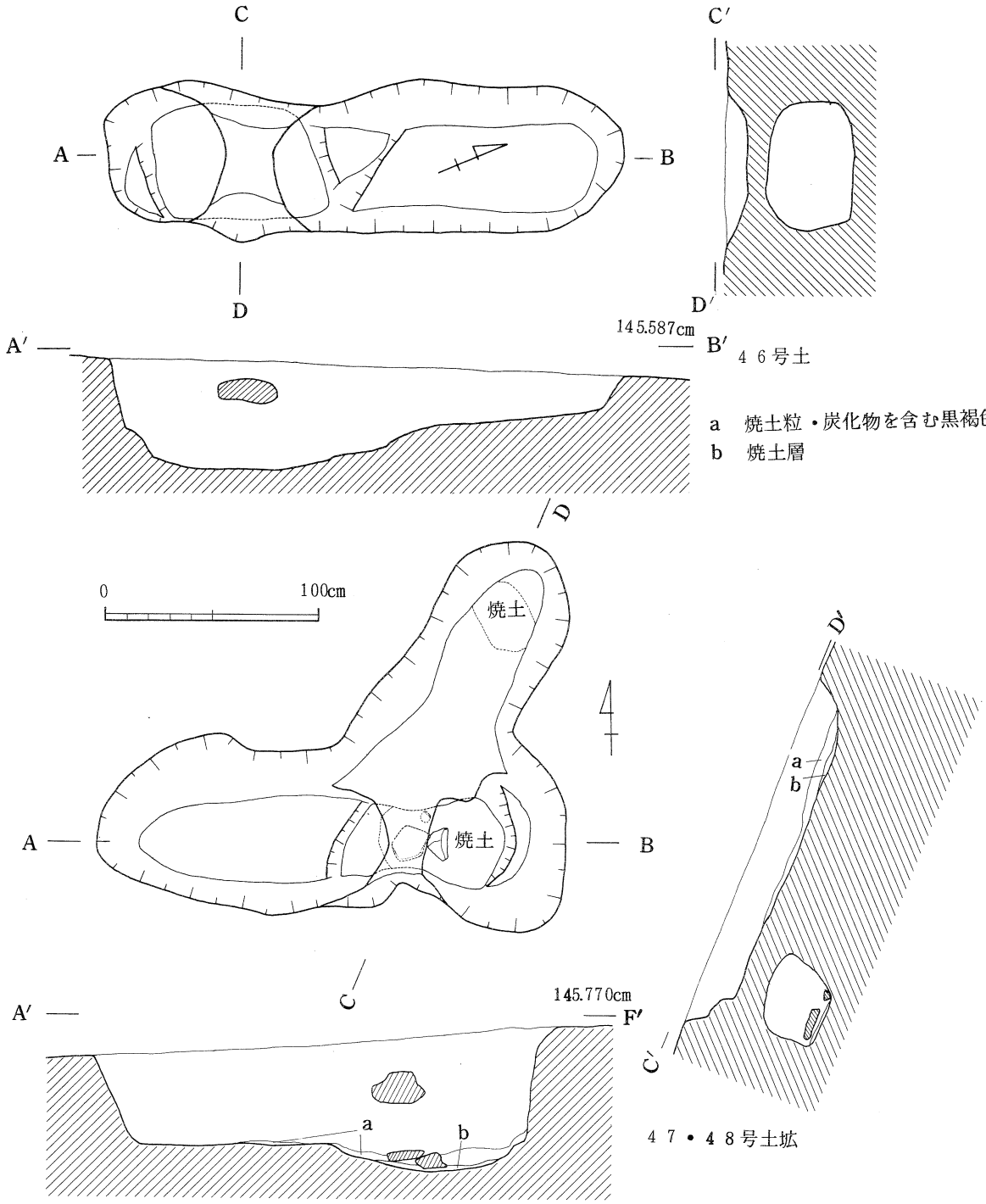
第73図　土坑実測図(7)


B
B′
焼土
焼土
A
A′
a
b
146.560 m
36・37号土坑
38・39号土坑
焼土
焼土
焼土
A
A′
B
B′
146.893 m
a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層
0
100 m

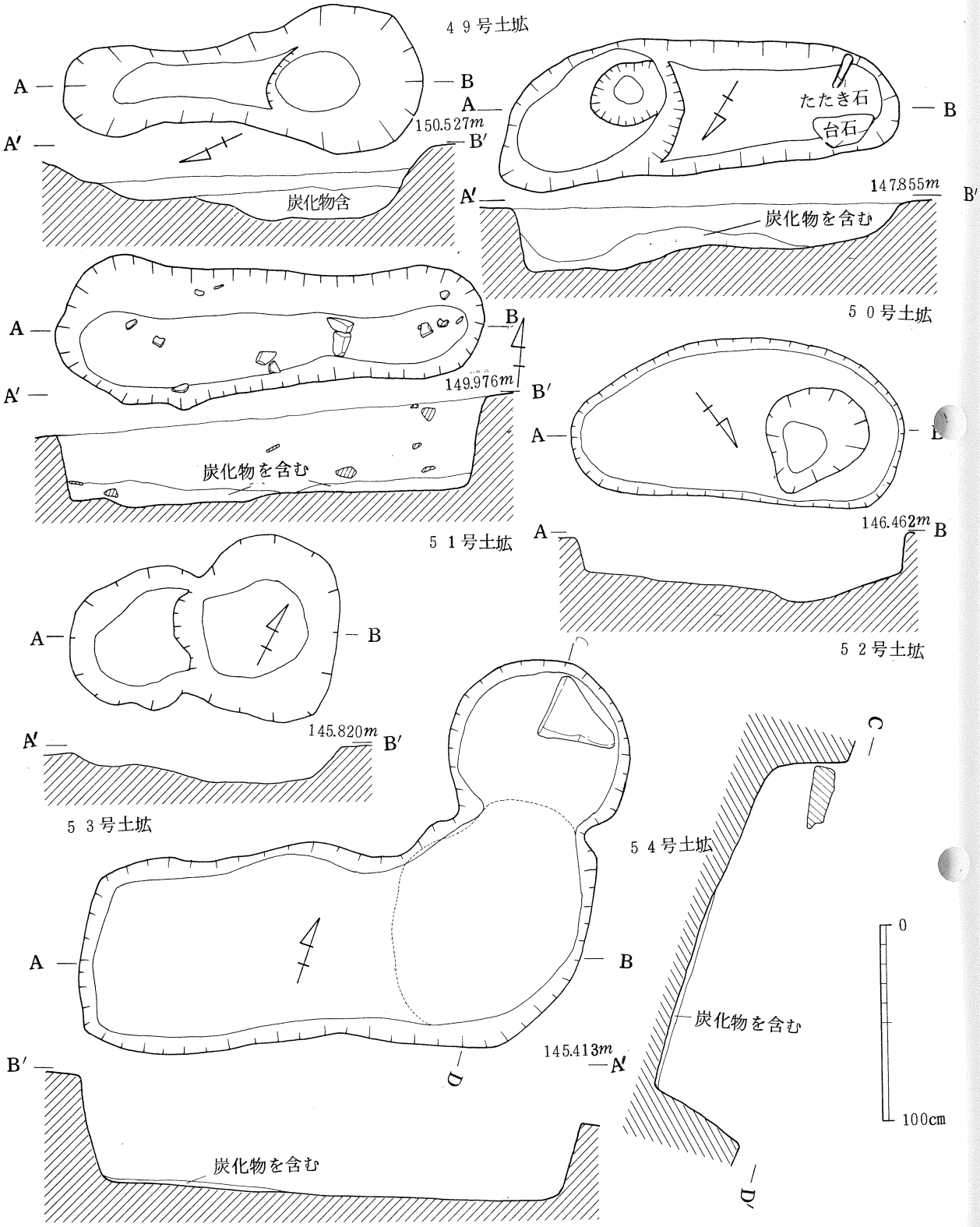
第74図　土坑実測図(8)


焼土
40・41・42号土坑
146.280m
145.388m
146.480m
145.388m
145.448m
焼土
焼土
0
100 cm
43. 44. 45号土坑
a　焼土粒・炭化物を含む黒褐色土
b　焼土層

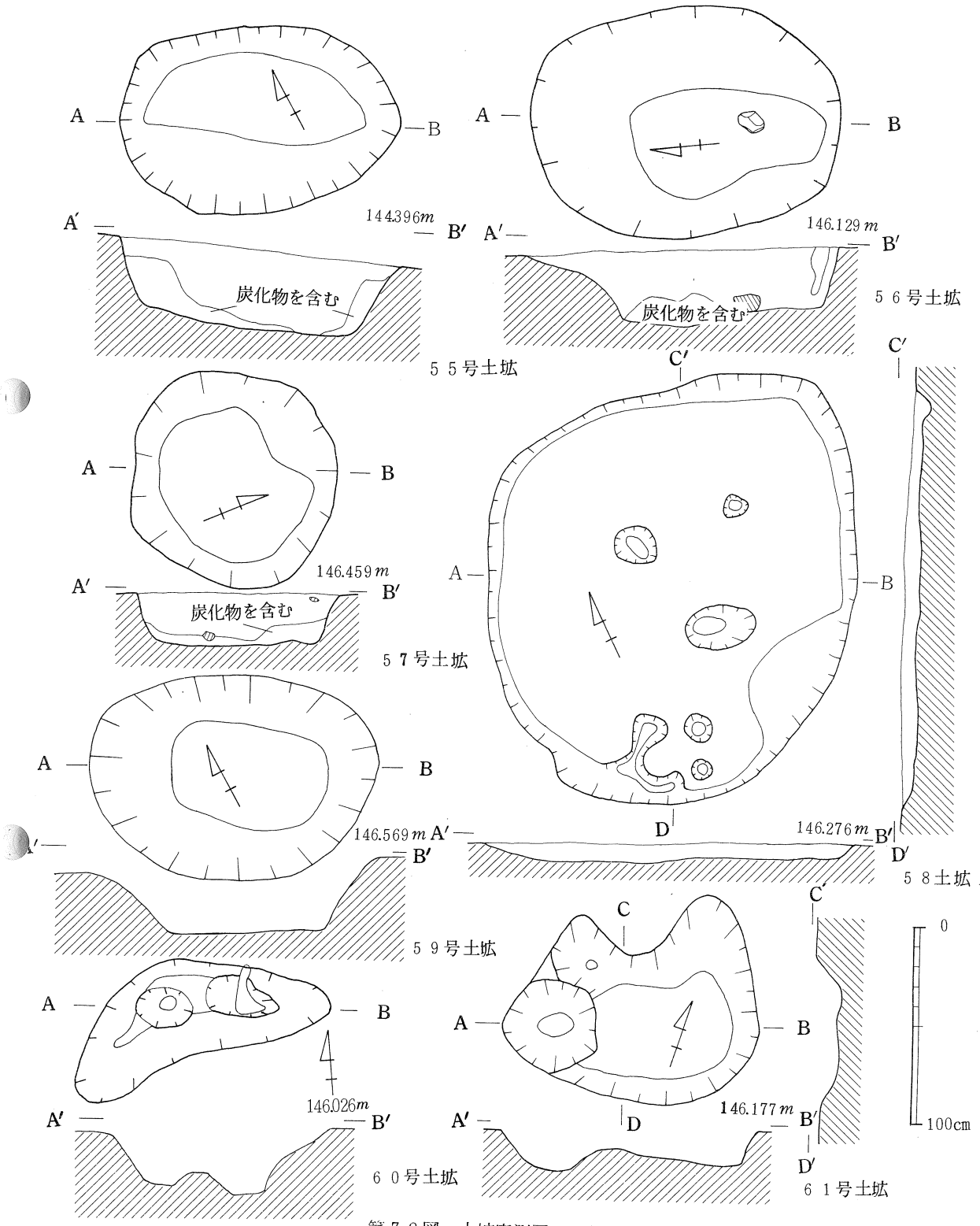
第７５図　土坑実測図(9)



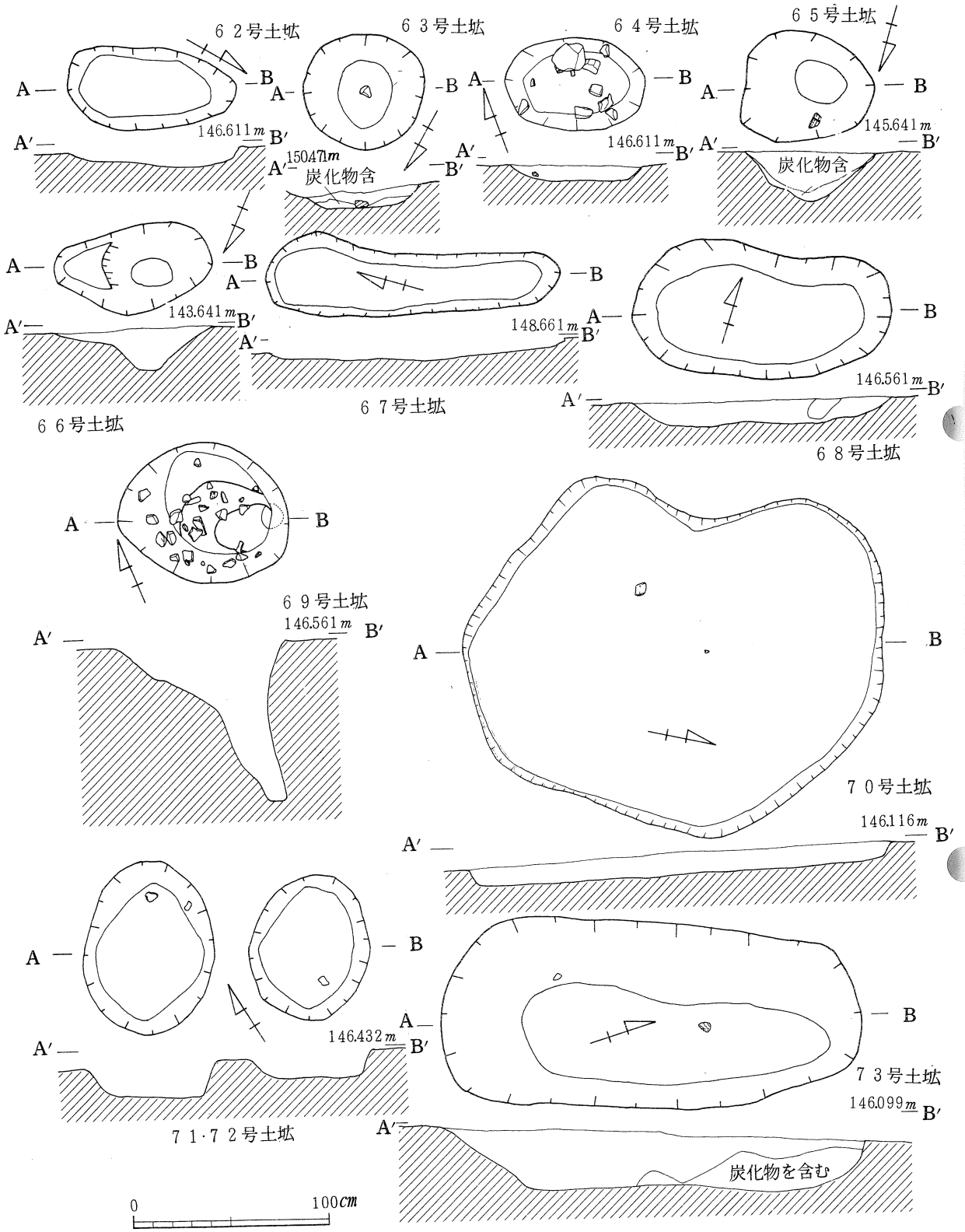
第76図　土坑実測図（10）



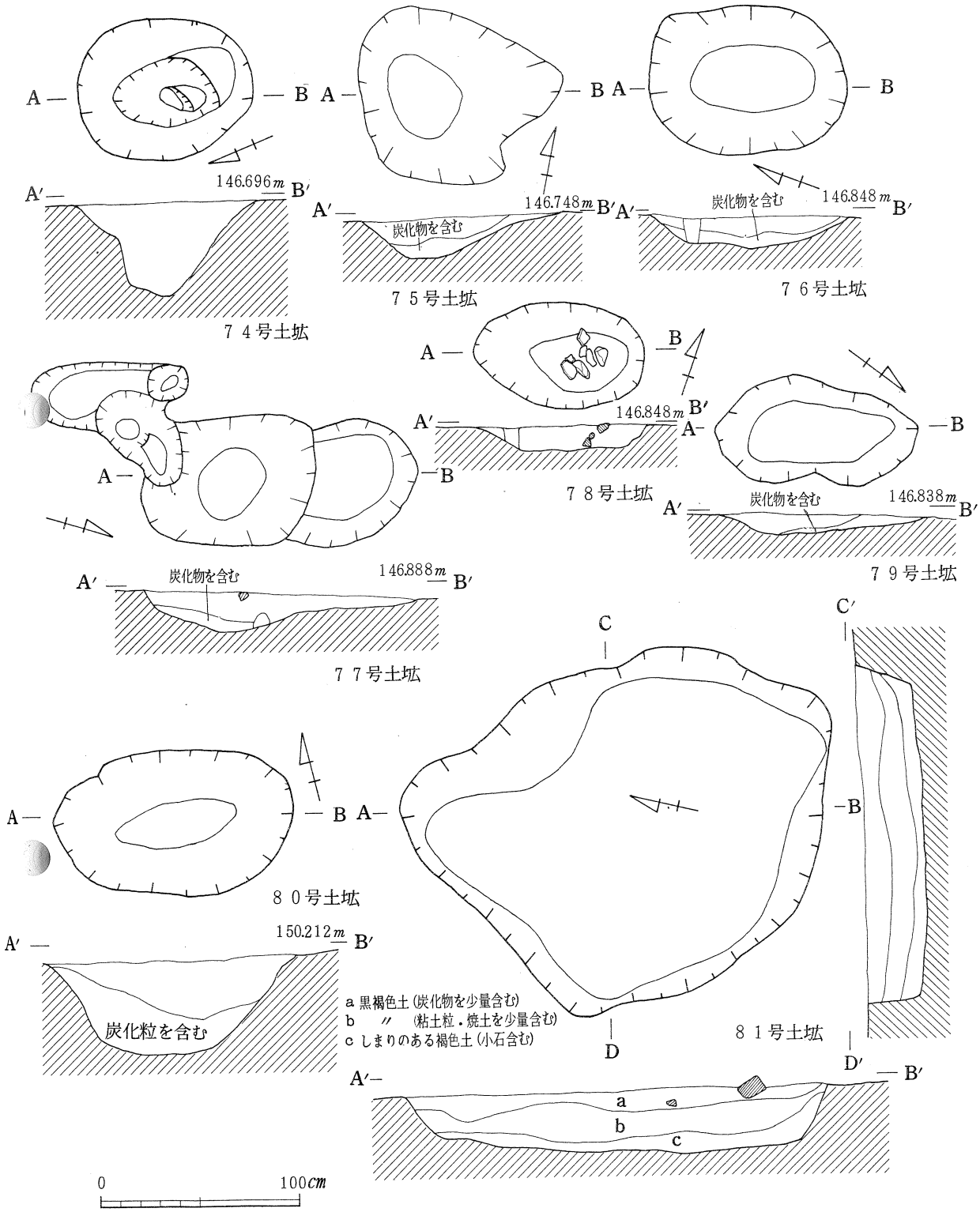
第７７図　土坑実測図（11）



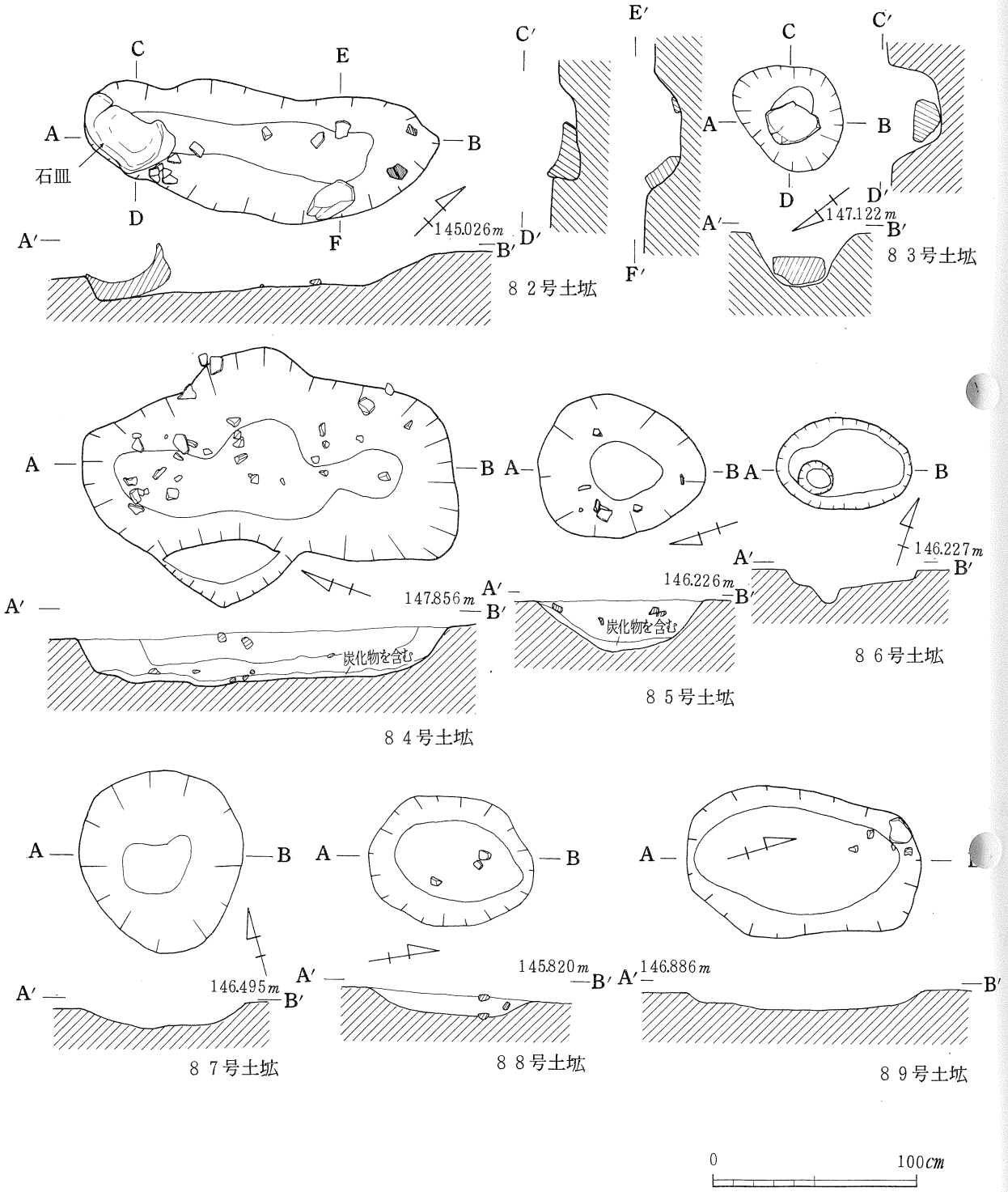
第７８図　土坑実測図（12）



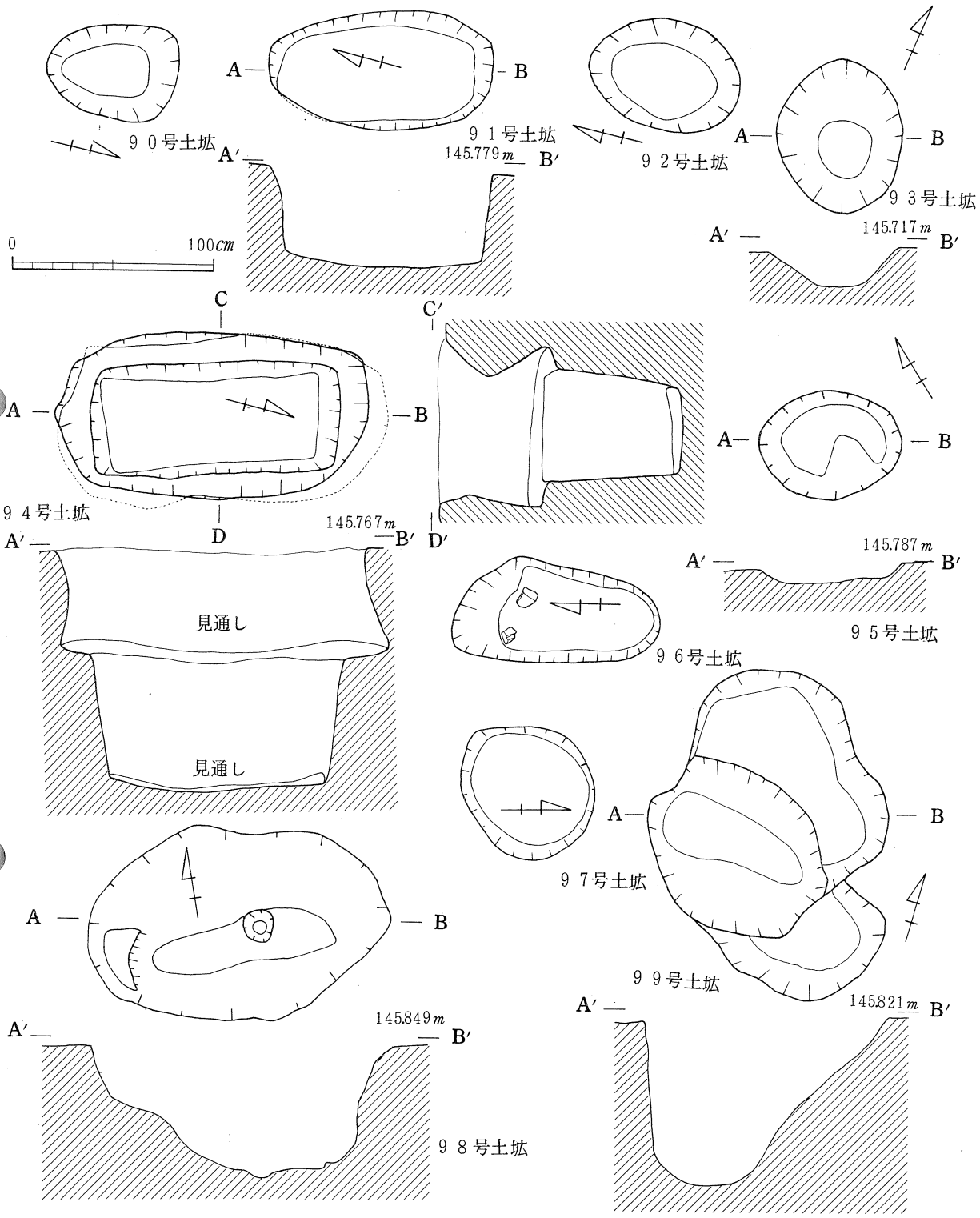
第７９図　土坑実測図 (13)



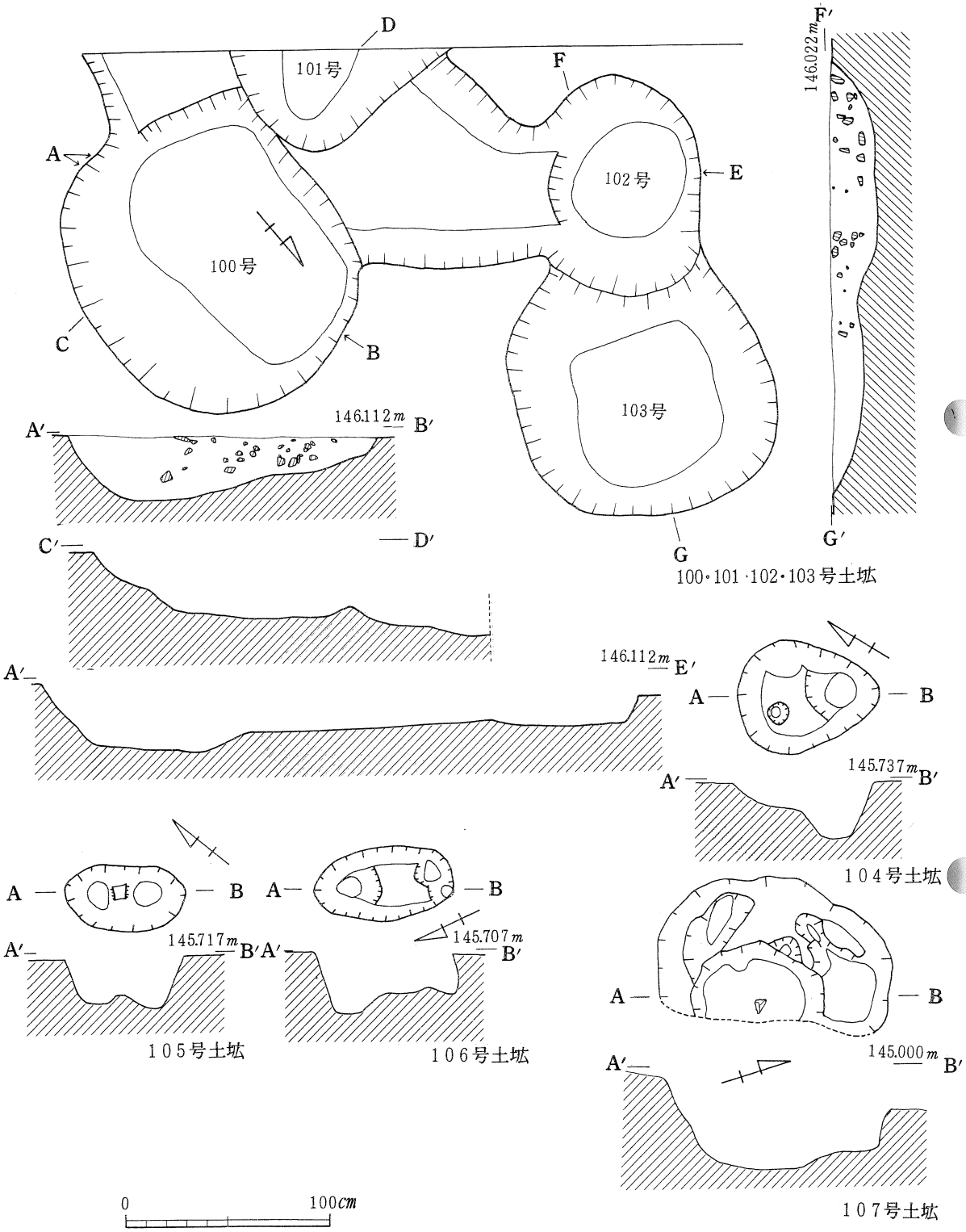
第８０図　土坑実測図 (14)



第８１図　土坑実測図(15)



第８２図　土坑実測図(16)



第８３図　土坑実測図(17)

と４７号の２基であり、４７号はⅠ型土坑と切り合っている。　この切合い状況からみるとⅡ型土坑よりⅠ型土坑のほうが新しくなっている。従って本遺跡の遺構に伴う土器群は鹿児島県加栗山遺跡のそれより新しいものと考えられる。

分布としては、Ⅰ型土坑はＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ－２・３・４区の緩斜面に分布域があり、等高線にほぼ直交する状態で検出された。さらにその他の発掘区周辺部のⅠ型土坑も、東側の平担な台地上に凹部を向ける状態で検出されている。またⅡ型土坑の４６号のみは、西側の小丘陵へ凹部を向けており、西側の小丘陵上にまた１つの遺構群があることが推定される。その他、土坑の分布の特徴としては、Ｂ・Ｃ－５・６区に土坑の集中地域がほぼ円形状に存在していることがあげられる。

住居跡（第８４・８５図）

１号住居跡　長軸2.9ｍ、短軸1.８５ｍの隅丸方形状を呈し、長軸線はほぼ南北方向である。深さは１５cm前後でほぼ一定し、床面も平担である。埋土は第Ⅳ層の黒褐色土であるが、僅かに炭化物を含む。住居跡内には６基、住居跡外に２基のピットが検出された。１号住居跡内で出土した遺物は、同一個体と思われるⅧ－Ｃ′類の角筒の破片が４点出土した。

２号住居跡　2.5ｍ×2.4ｍの隅丸方形状を呈する。中心部が２６cmと最も深く、壁面に近づくにつれて緩やかに浅くなり、壁際では２０cm前後の深さとなる。ピットは２９基検出されたが、29号ピットも含めてほぼ五角形の住穴構造が想定される。住居跡内で出土した土器はⅤ－６類の破片が３点出土している。

遺物

土器（第８６～９６図）

縄文時代の包含層である第Ⅳ層中では多型式の土器が混在して出土したので、包含層中での層位的な前後関係の把握は困難であった。そのため、出土した土器を文様・器形等からⅠ～Ⅻ類に大別し、平面的なまとまりを示す土器型式については平面分布図を作成した。

Ⅰ類　押型文土器

Ⅰａ－口縁部が外反し、山形口縁を呈する。外面は横位の山形文、内面は凹線文と横位の山形押型文を施文する。（１～３）

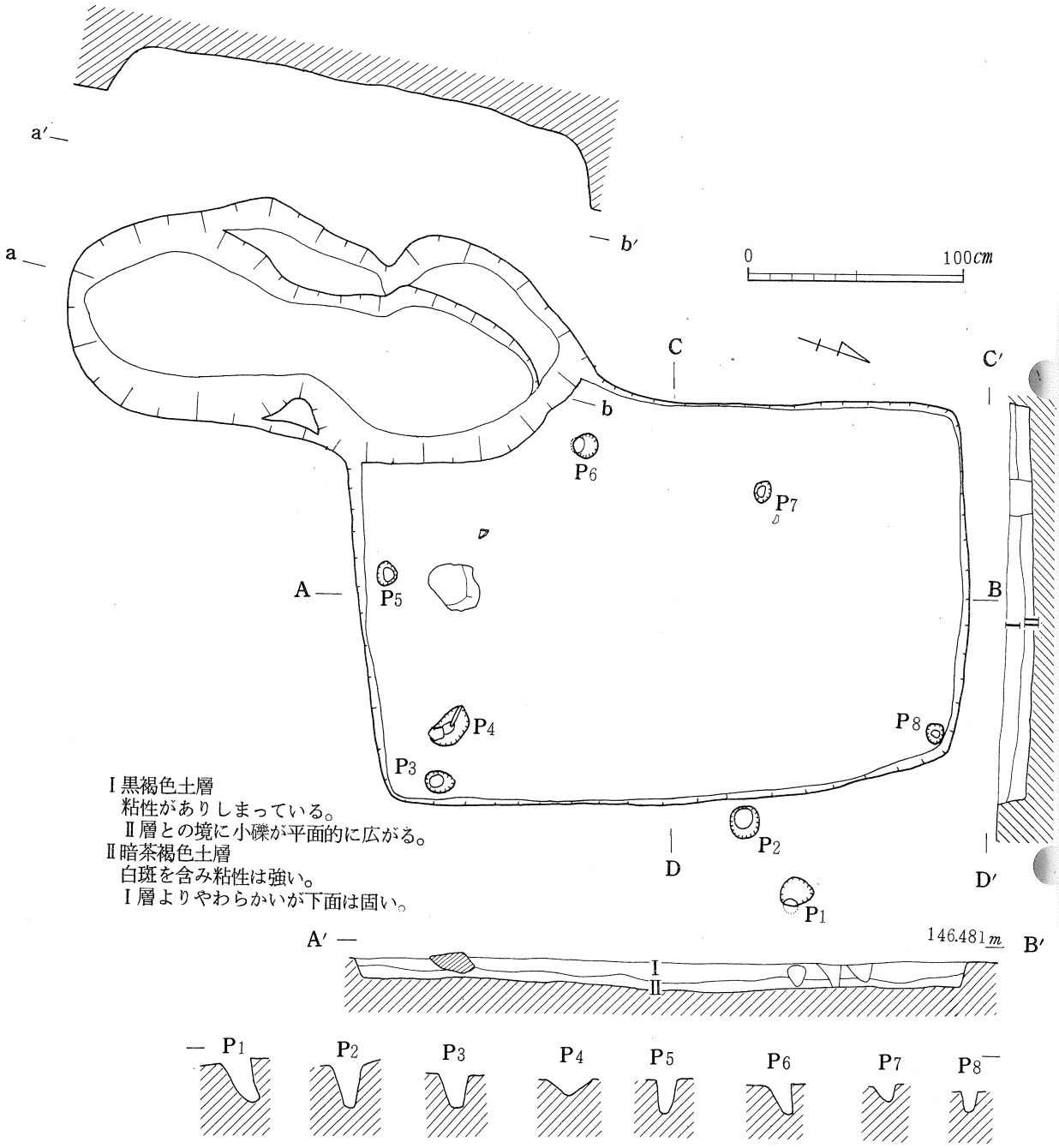
Ⅰｂ－口縁部が外傾し口唇部が平担。外面は横位の山形文で内面は凹線文と横位の山形文。（４）

Ⅰｃ－口縁部が肥厚し、口唇部は内傾する。外面に山形文を縦位に施文。（５）

Ⅱ類　手向山式土器（口縁部が外反し、胴部に屈曲部を有する）

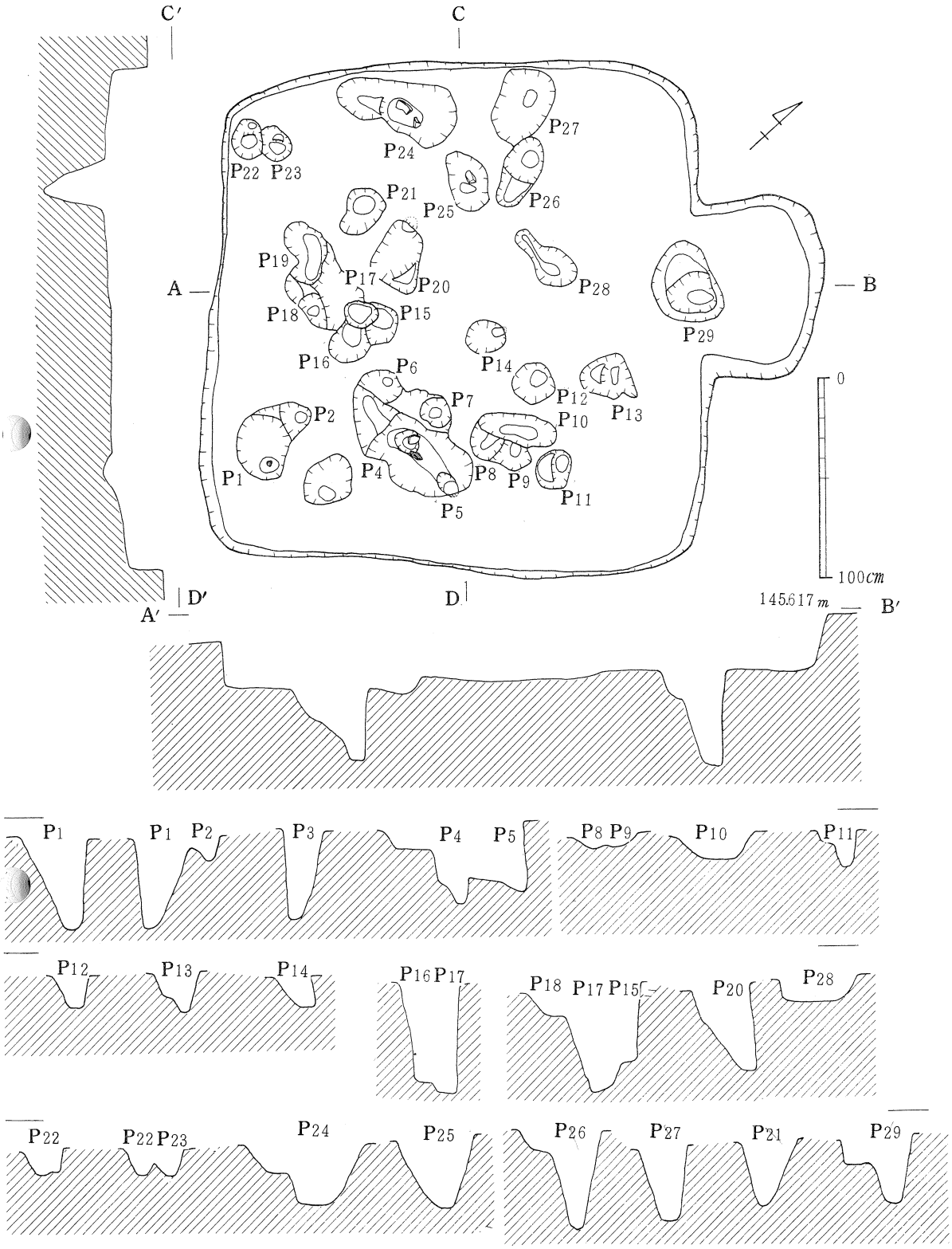
Ⅱａ－外面は横位に凹線文、内面と口唇部は山形押型文を施文。（７・８）

Ⅱｂ－外面は縦位の間延びした押型文と屈曲部上位の凹線文を施文。口縁部内面と口唇部にも山



Ⅰ黒褐色土層
粘性がありしまっている。
Ⅱ層との境に小礫が平面的に広がる。
Ⅱ暗茶褐色土層
白斑を含み粘性は強い。
Ⅰ層よりやわらかいが下面は固い。

第８４図　１号住居跡実測図



第８５図　２号住居跡実測図

形押型文を施文。（９・１０）

Ⅱｃ－外面は微隆起線（みみずばれ）文、口唇部は山形押型文を施文。屈曲部に刻目を有する貼付け突帯。（１１・１２）

Ⅲ類　貝殻条痕文を有する円筒平底で、条痕が浅く角筒が伴わない。

Ⅲａ－口縁部にヘラによる刺突文。（１３・１８）

Ⅲａ′－口縁部にヘラによる沈線文。（１６）

Ⅲｂ－口縁部に貝殻による波状文またはその類似文。（１４・２０・２２）

Ⅲｂ′－口縁部に貝殻頂部の押圧文。（２１）

Ⅲｃ－口縁部に貝殻腹縁による引き掻き文。（１５）

Ⅲｄ－口縁部に貝殻腹縁による連続押圧文。（１７・２８）

Ⅲｅ－口縁部に貝殻腹縁による押し引き文。（１９）

Ⅲｆ－貝殻条痕文のみで口縁部文様なし。（２３・２９）

Ⅳ類　貝殻条痕文を有し、口縁部から口唇部にかけて施文、円筒平底を呈する。

Ⅳａ－施文が羽状を呈する。

Ⅳｂ－押圧文を交互に施文。（３４）

Ⅳｂ′－Ⅳｂ類の角筒。（２６）

Ⅴ類　貝殻条痕文が荒く、内面もケズリ調整で角筒を伴う。

Ⅴａ－口縁部の押圧施文が１段のみ。（３１）

Ⅴｂ－口縁部の文様が羽状または類似文。（３０・３３）

Ⅴｃ－ヘラと貝殻による２段の押し引き文。（３５）

Ⅴｃ′－Ⅴｃ類の角筒。（２４・２５）

Ⅴｄ－口縁部に押し引き文、胴部に沈線文を有する角筒。（２７）

Ⅵ類　貝殻腹縁の連続押圧文と条痕文を有し、クサビを有しない。

Ⅵａ－貝殻条痕文の地文の上に口縁部は横位に、胴部は縦位に間隔をあけて施文。（３７・３８）

Ⅵｂ－Ⅵａ類の角筒で胴部は菱形類似文。（６７）

Ⅶ類　口縁部にのみ貝殻腹縁連続押圧文を施文し、胴部は貝殻条痕文のみでクサビ形貼り付け突帯を有する円筒平底。（３９～４７）

Ⅷ類　クサビ形貼付け突帯を有し、胴部にも貝殻腹縁連続押圧文をもつ。

Ⅷａ－地文となる貝殻条痕文が縦位。（４９・５７・５９）

Ⅷａ′－Ⅻａ類の角筒。（６６）

Ⅷｂ－貝殻腹縁連続押圧文が縦位。（４８・５２・５８）

Ⅷｂ′－Ⅻｂ類の角筒。（６１）

Ⅷｃ－貝殻腹縁連続押圧文がＹ字状を呈する。（５０・５１・５６）

Ⅷｃ′－Ⅻｃ類の角筒（６２・６４・６５・６８）

Ⅷｄ－クサビ形貼り付け突帯が丸みを帯びた特異な形態。（５５）

Ⅷｅ－貝殻腹縁の押圧文ではなく、引き掻きによって長方形の文様を施文。（５４）

Ⅸ類　クサビ形貼り付け突帯が密接し、地文は横位の貝殻腹縁押し引き文。（５８）

Ｘ類　撚糸文を施文する壷形土器。（７２）

Ⅺ類　円筒平底で外面にヘラ描きの綾杉文を施文する。

Ⅺａ－ヘラ状施文具によって口縁部は横位に、胴部は縦位に間隔あけて施文。（７３）

Ⅺｂ－ヘラ状施文具によって外面全面に密集して横位に施文。（７６・７７）

Ⅻ類　口縁部が内湾する円筒平底で貝殻によって施文。

Ⅻａ－１単位３㎝程度の貝殻腹縁刺突文を間隔をあけて横位に施文。（７４・７５）

Ⅻｂ－１単位４～５条の短い貝殻条痕文を斜位に不定方向に施文。（７８）

ⅩⅢ類　平栫式土器（口縁部が肥厚した山形口縁を有する円筒平底）

ⅩⅢａ－頸部に貼り付け刻目突帯、胴部に縄文を施文。（７９・８９）

ⅩⅢｂ－頸部に貼り付け刻目突帯、胴部に沈線・刺突文による幾可学文様を施文。（８０・８１）

ⅩⅢｃ－頸部は無文。肥厚部に幾可学的凹線文。（８２）

ⅩⅣ類　底部

ａ－平底で胴部へ外傾する。

ｂ－平底で胴部へ直行する。

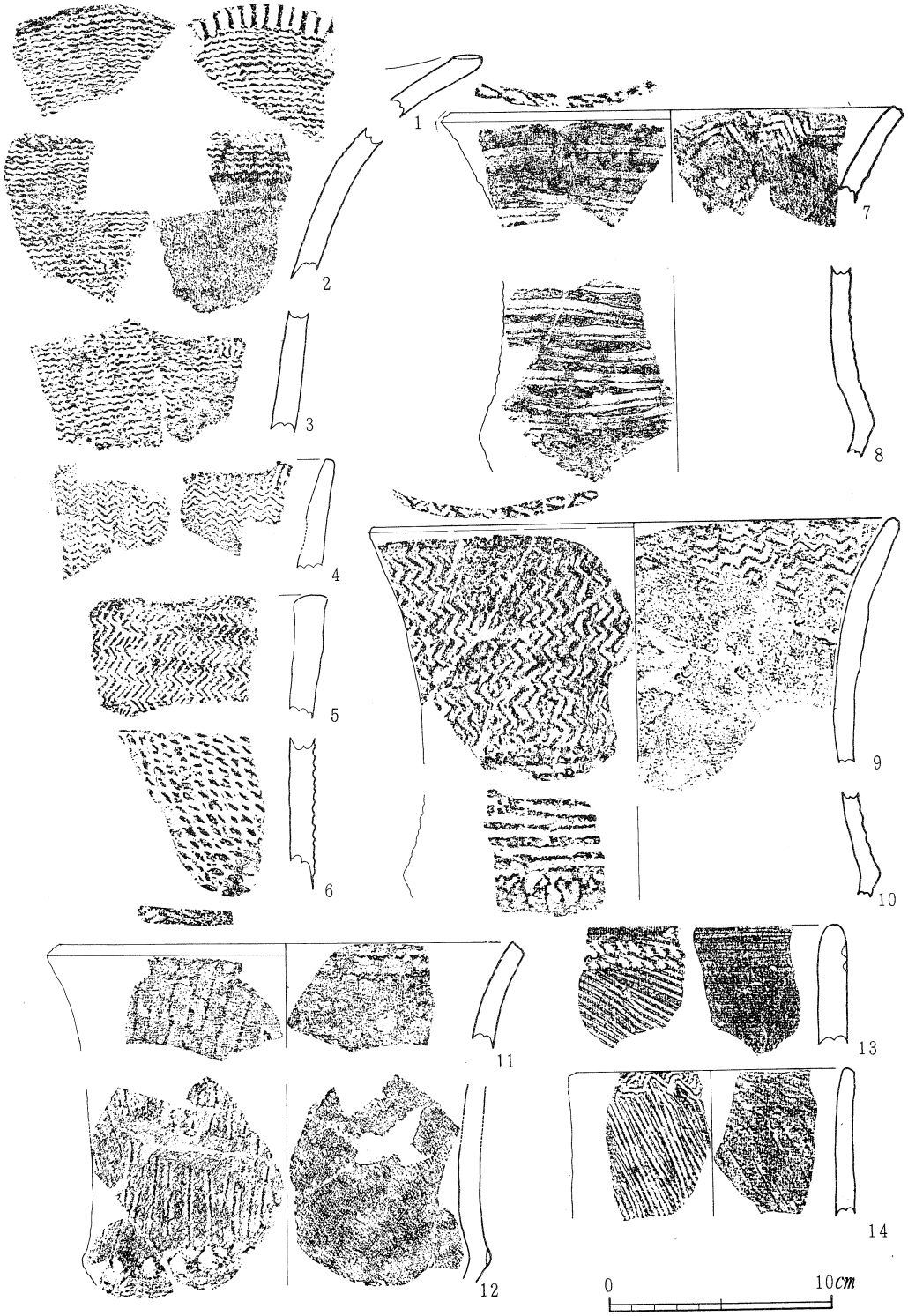
ｃ－あげ底状の平底で胴部へ外傾する。

ｄ－底面に葉脈痕を有する。

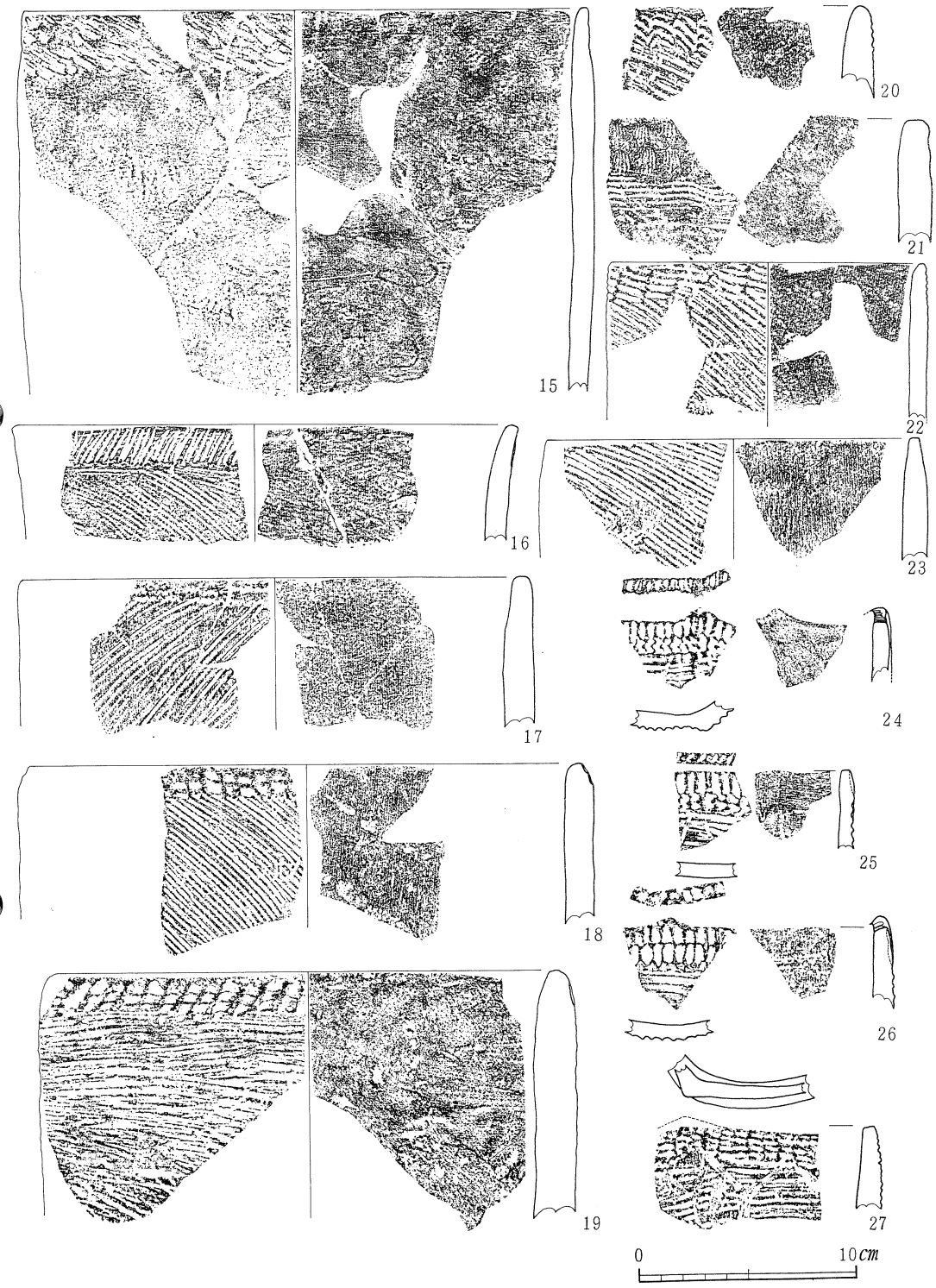
ｅ－底面に網代状の格子目圧痕文を有する。

土器の分布（第９７～９９図）

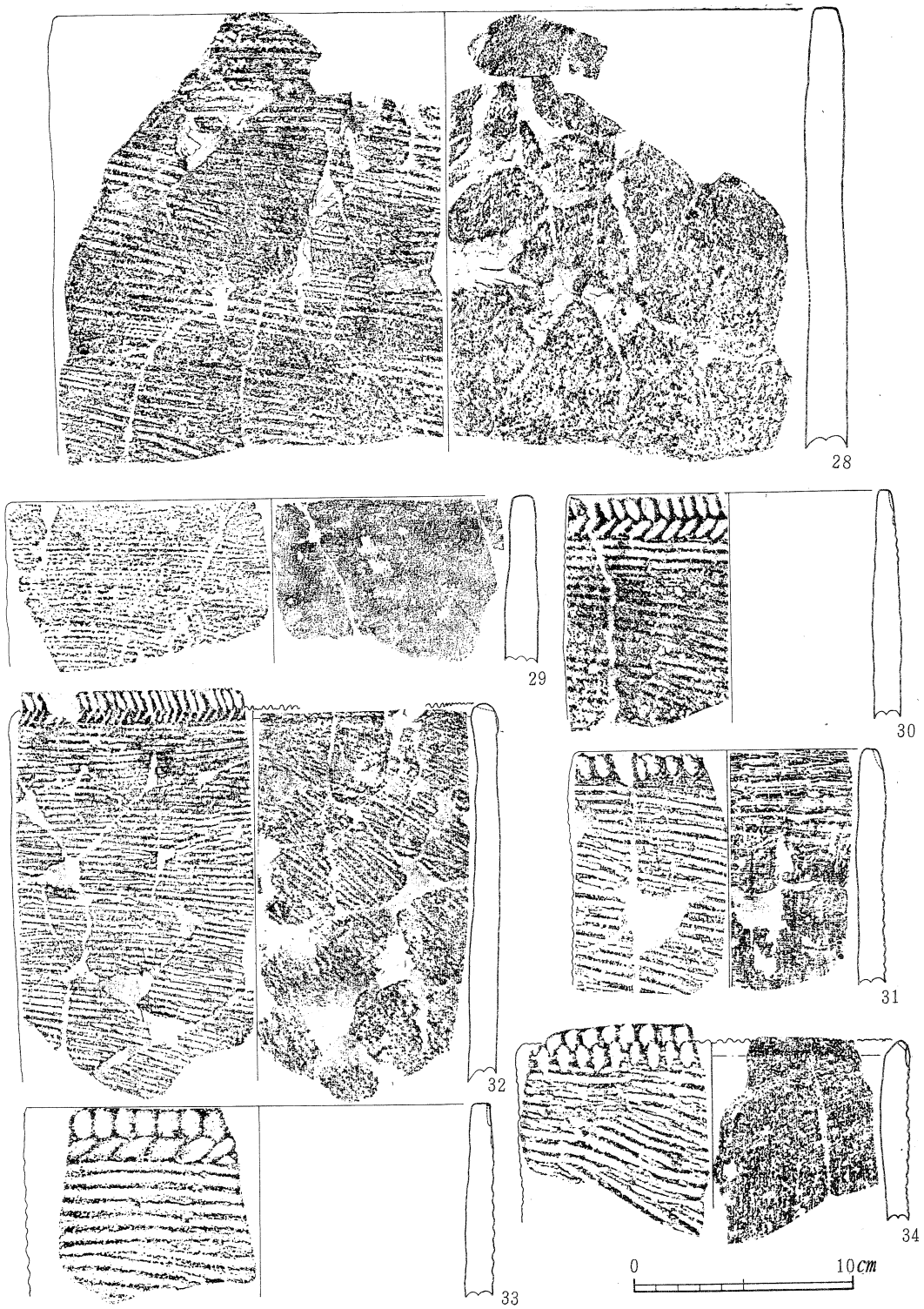
本遺跡では多型式の土器が多量に出土したが、ある程度まとまりを持って分布する土器を平面分布図として示した。まとまりを持つものとしてはⅠ類の押型文土器、Ⅱ類の手向山式土器、Ｘ類の撚糸文土器、Ⅺ・Ⅻ類の円筒土器、第ⅩⅢ類の平栫式土器である。その他に分布図に取上げなかったが、Ⅳ・Ⅴ類の角筒がＡ・Ｂ－４・５区に集中して出土し、ⅩⅣｅ類がＣ・Ｄ－１・２区にまとまった分布をする。その他の貝殻条痕文やクサビ形貼り付け突帯を有する土器は型式別の明確な分



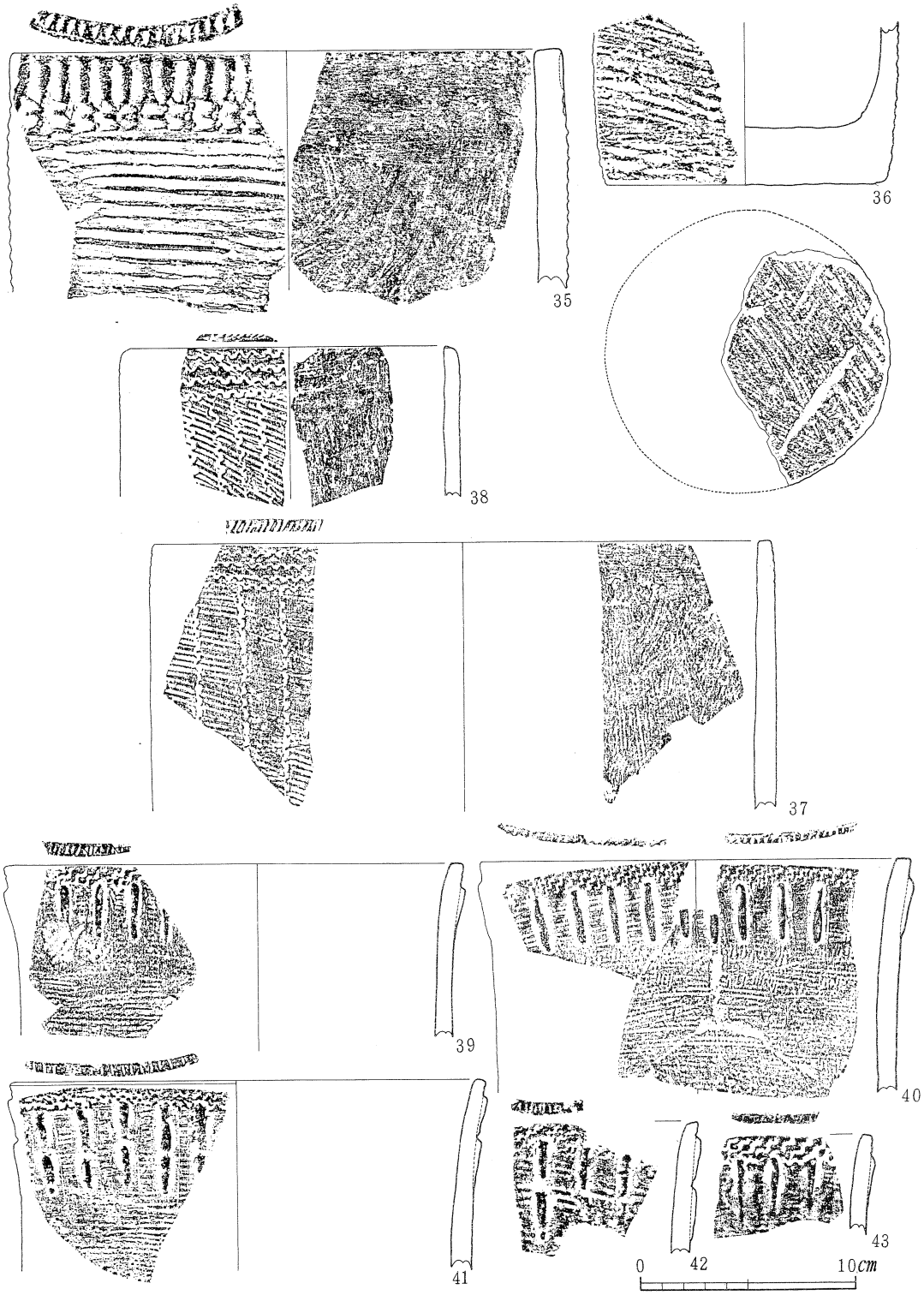
第８６図　出土土器実測図(1)



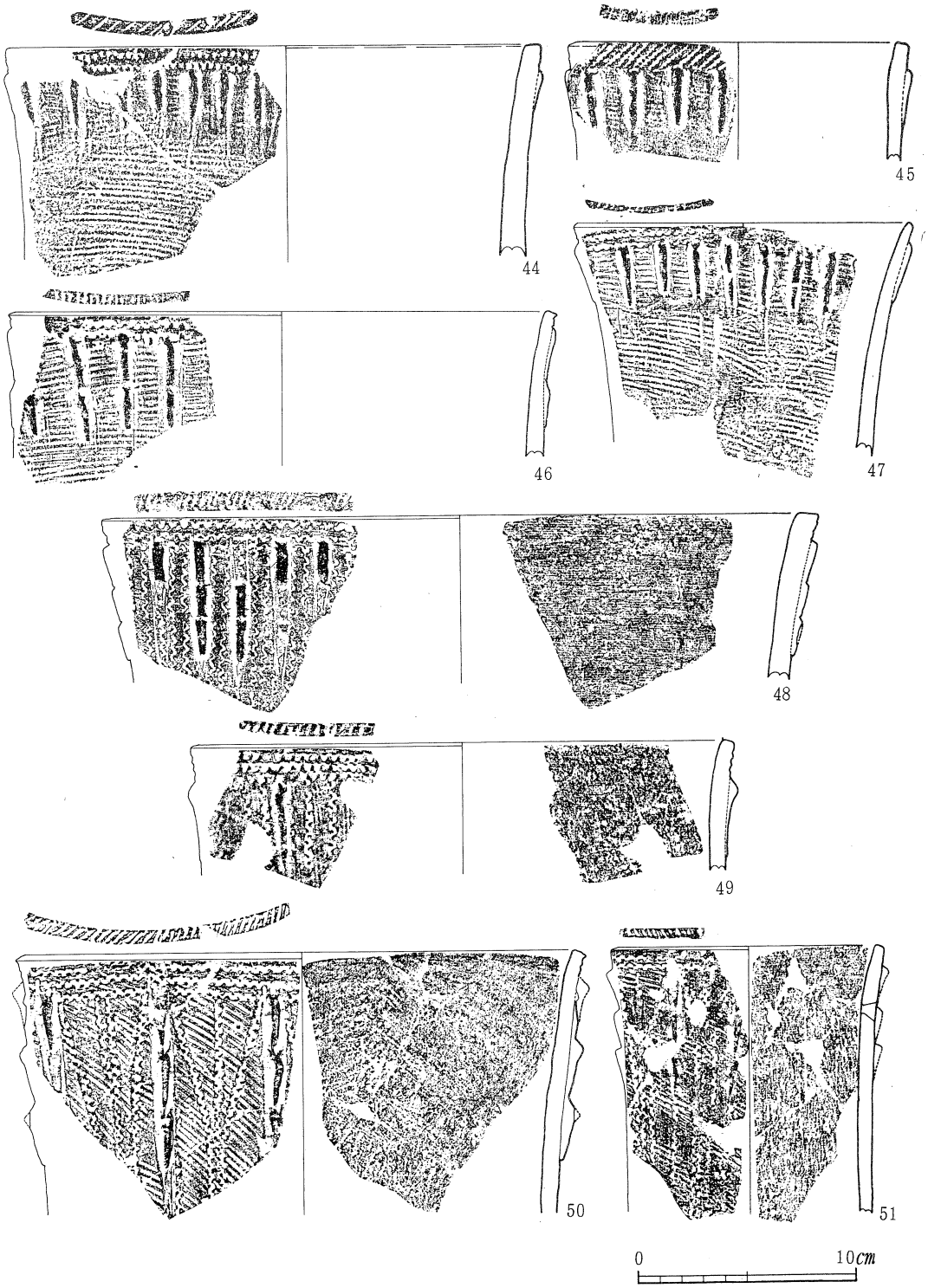
第８７図　出土土器実測図(2)



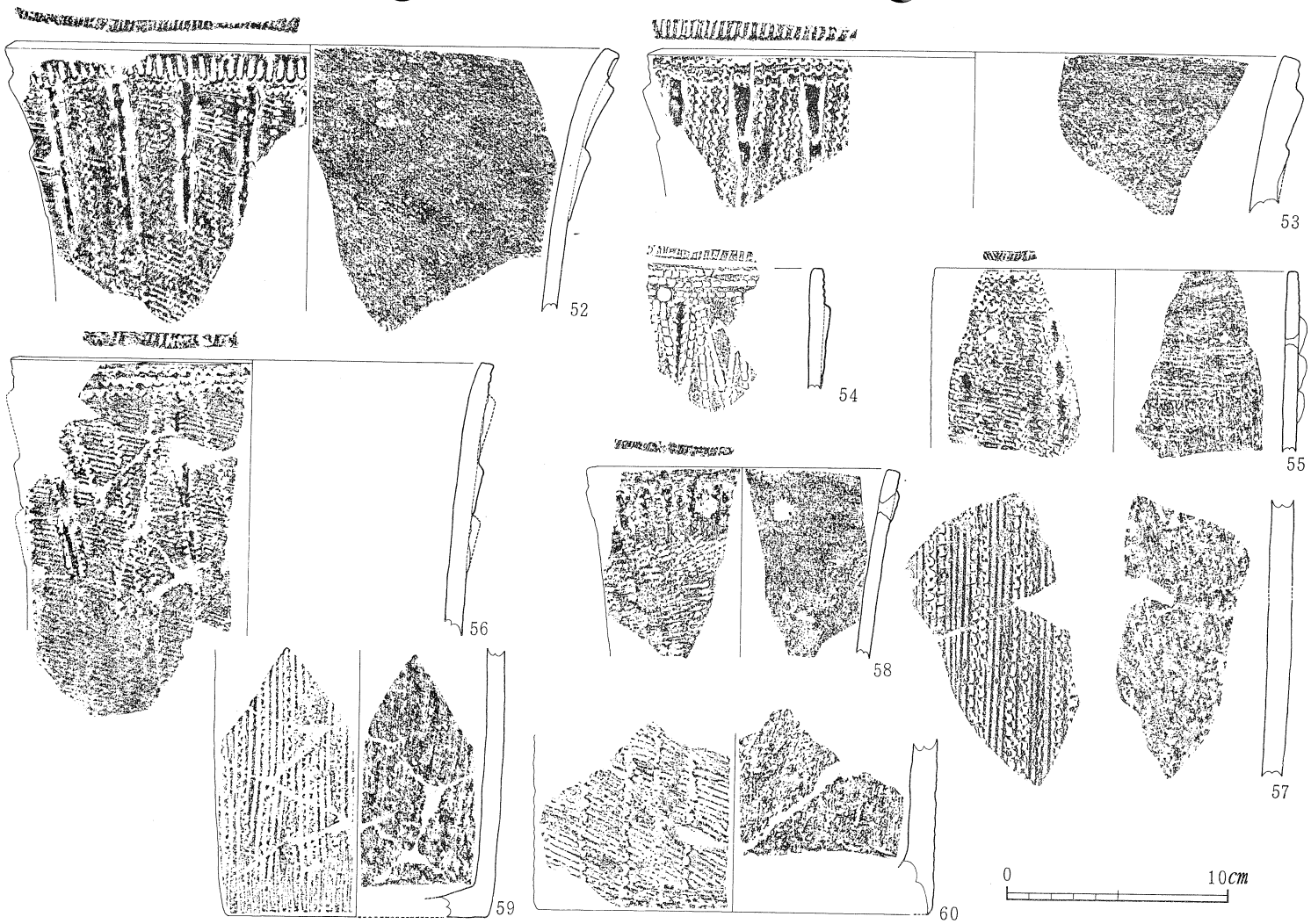
第８８図　出土土器実測図(3)



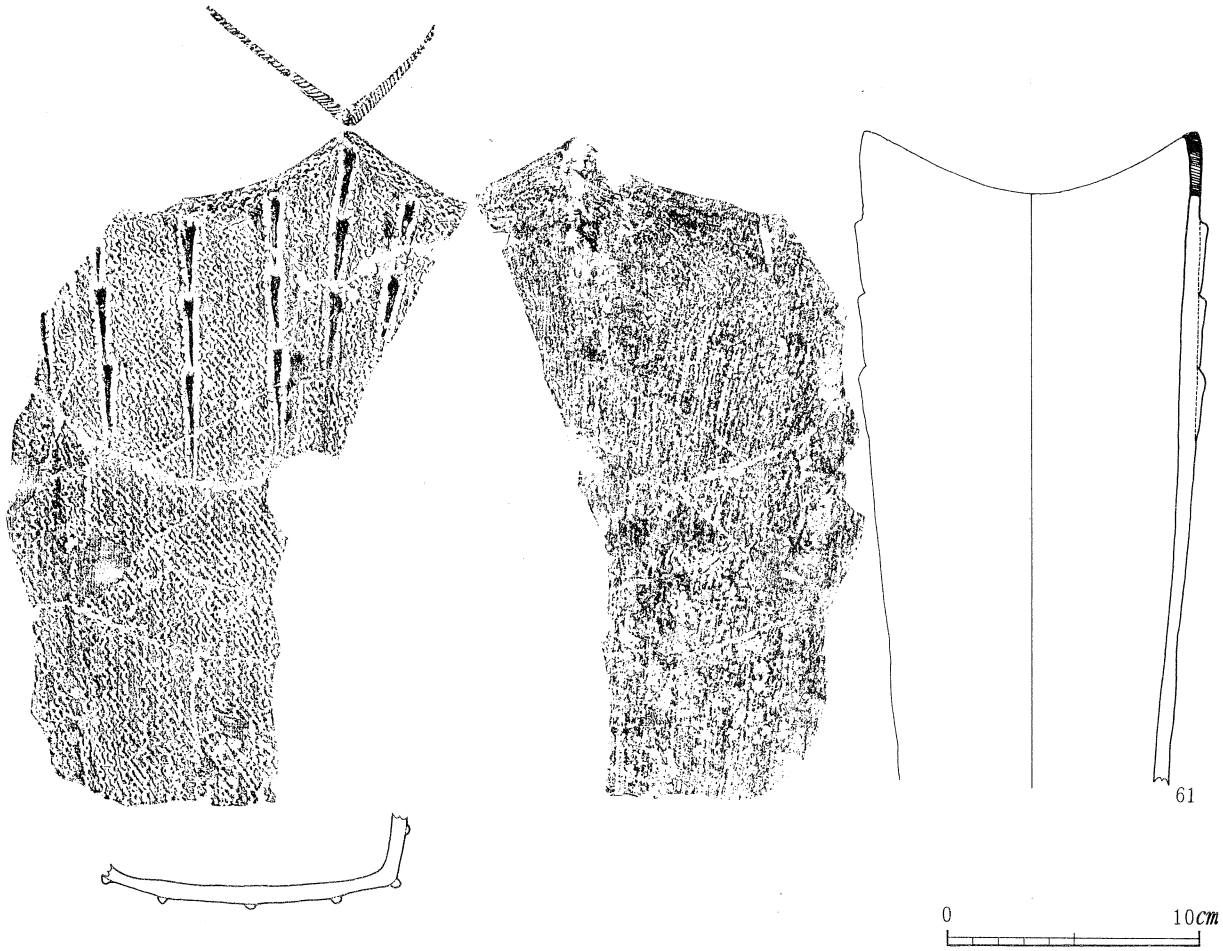
第８９図　出土土器実測図(4)



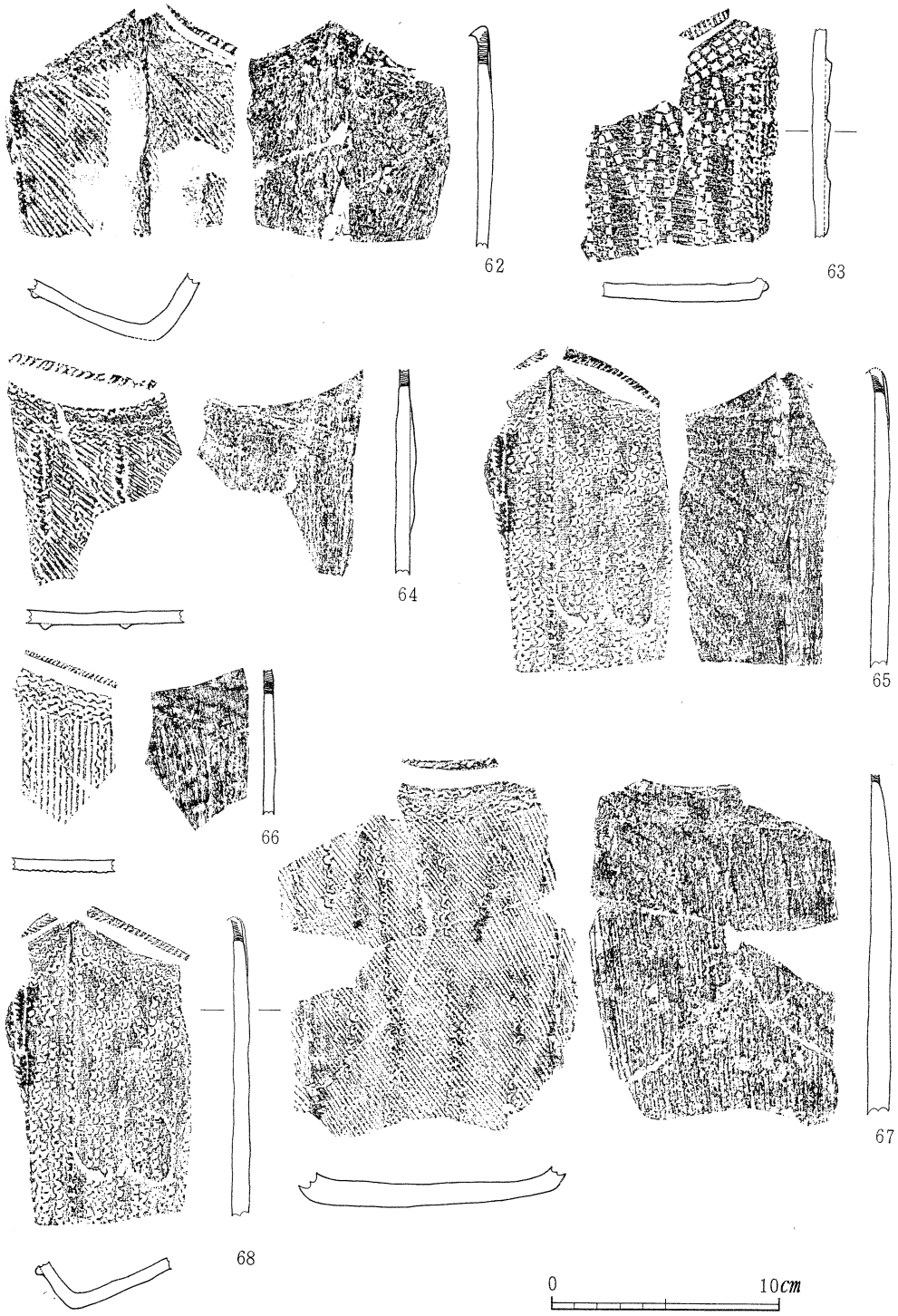
第９０図　出土土器実測図(5)



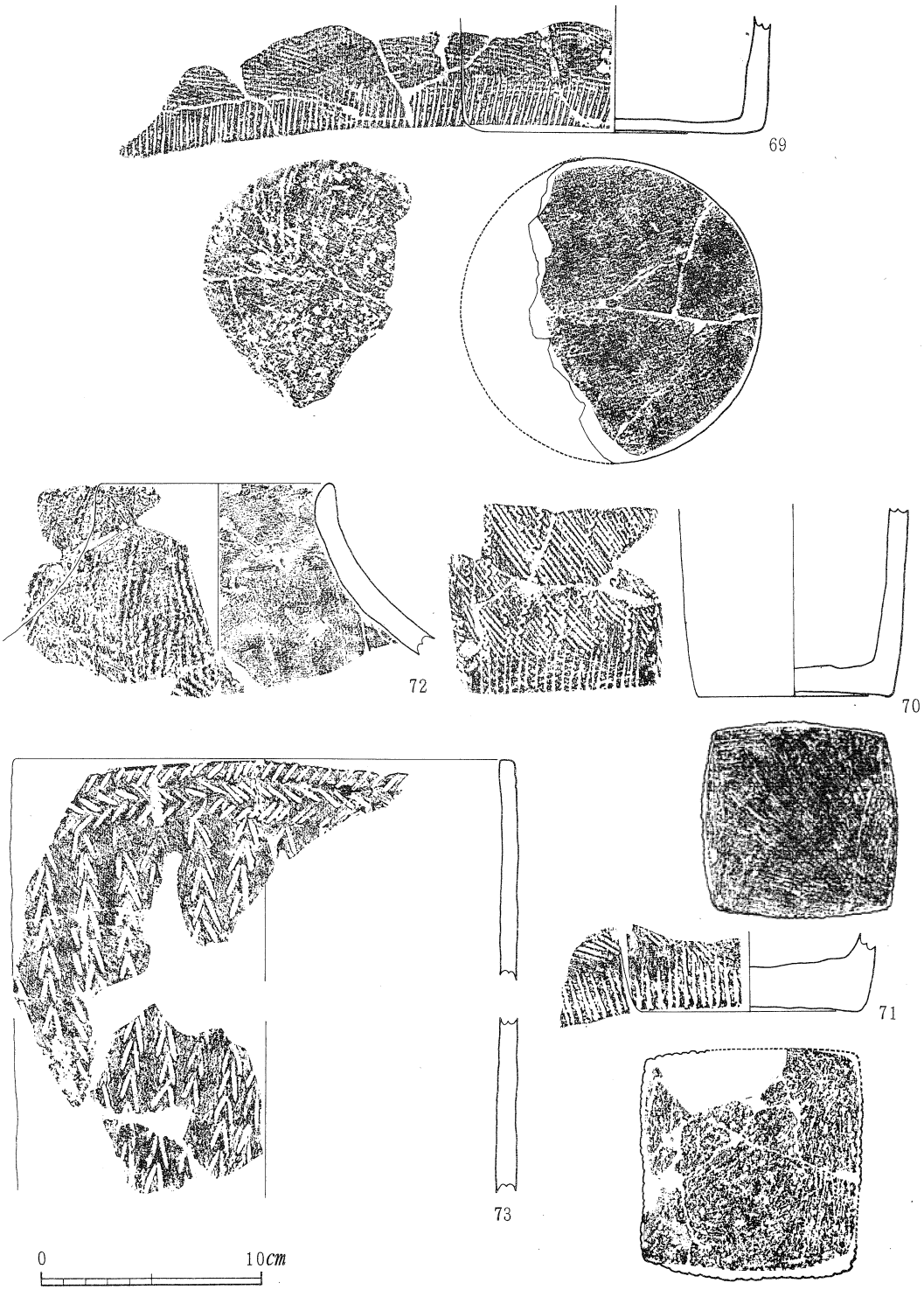
第９１図　出土土器実測図(6)



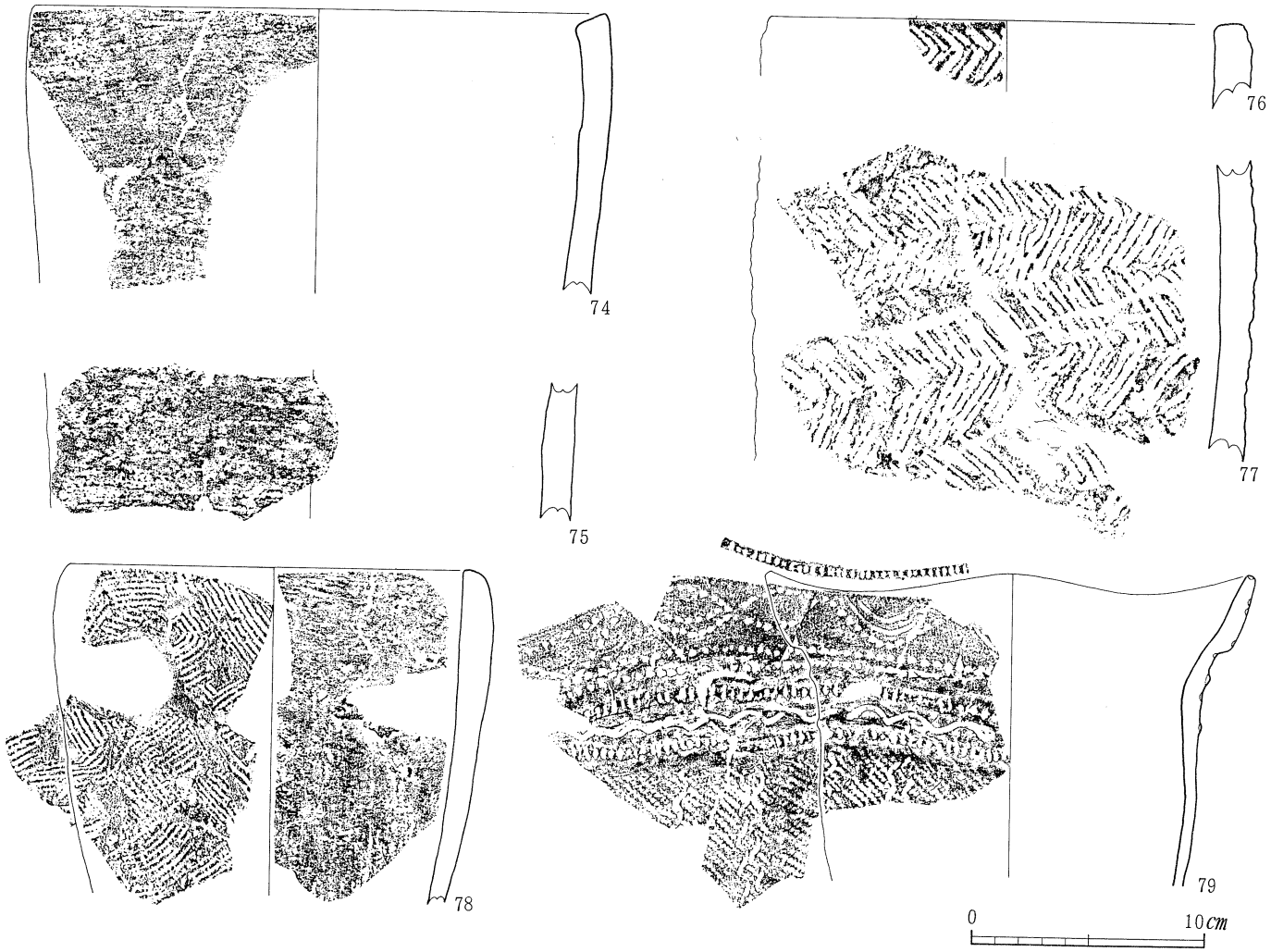
第９２図　出土土器実測図(7)



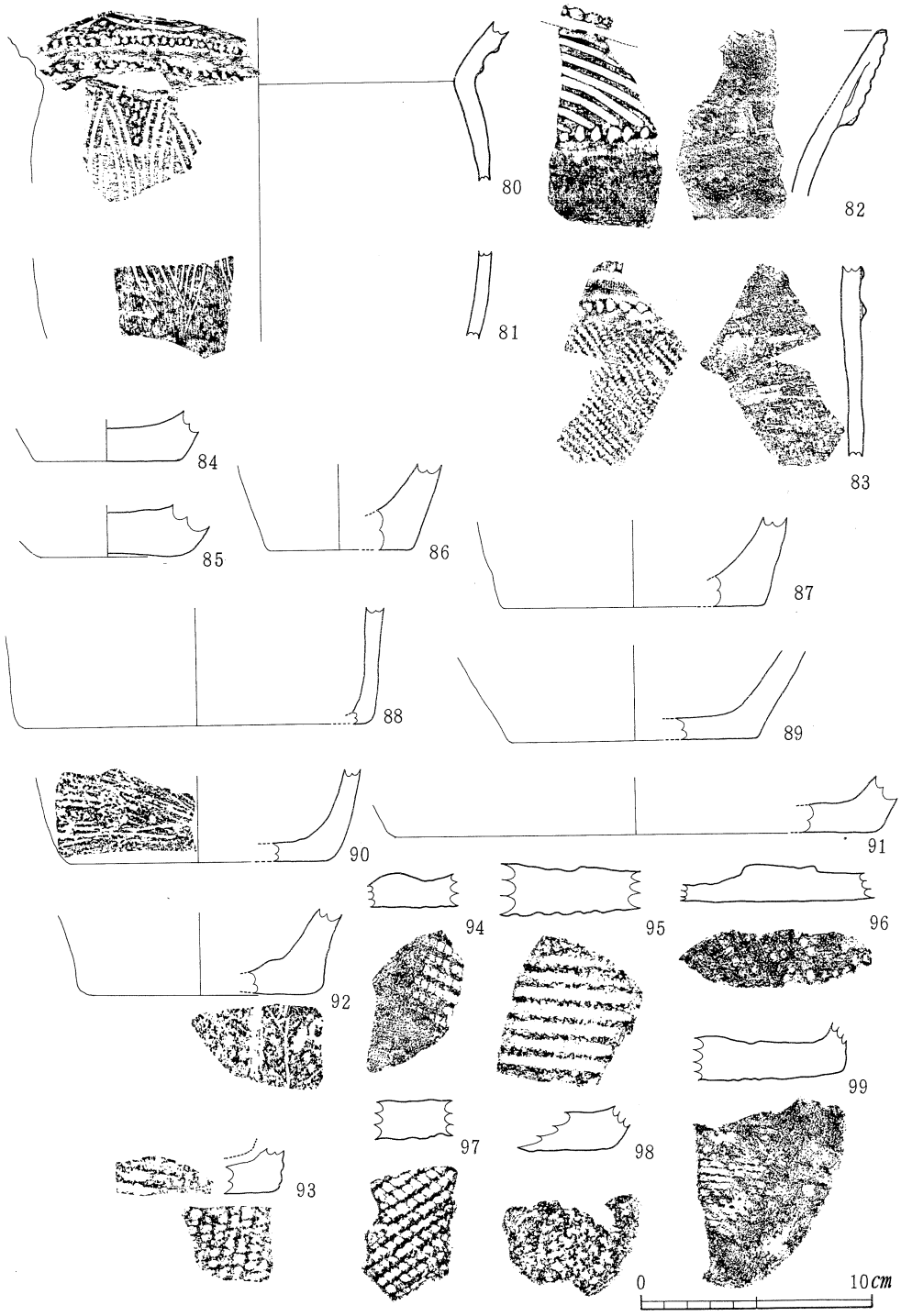
第９３図　出土土器実測図(8)



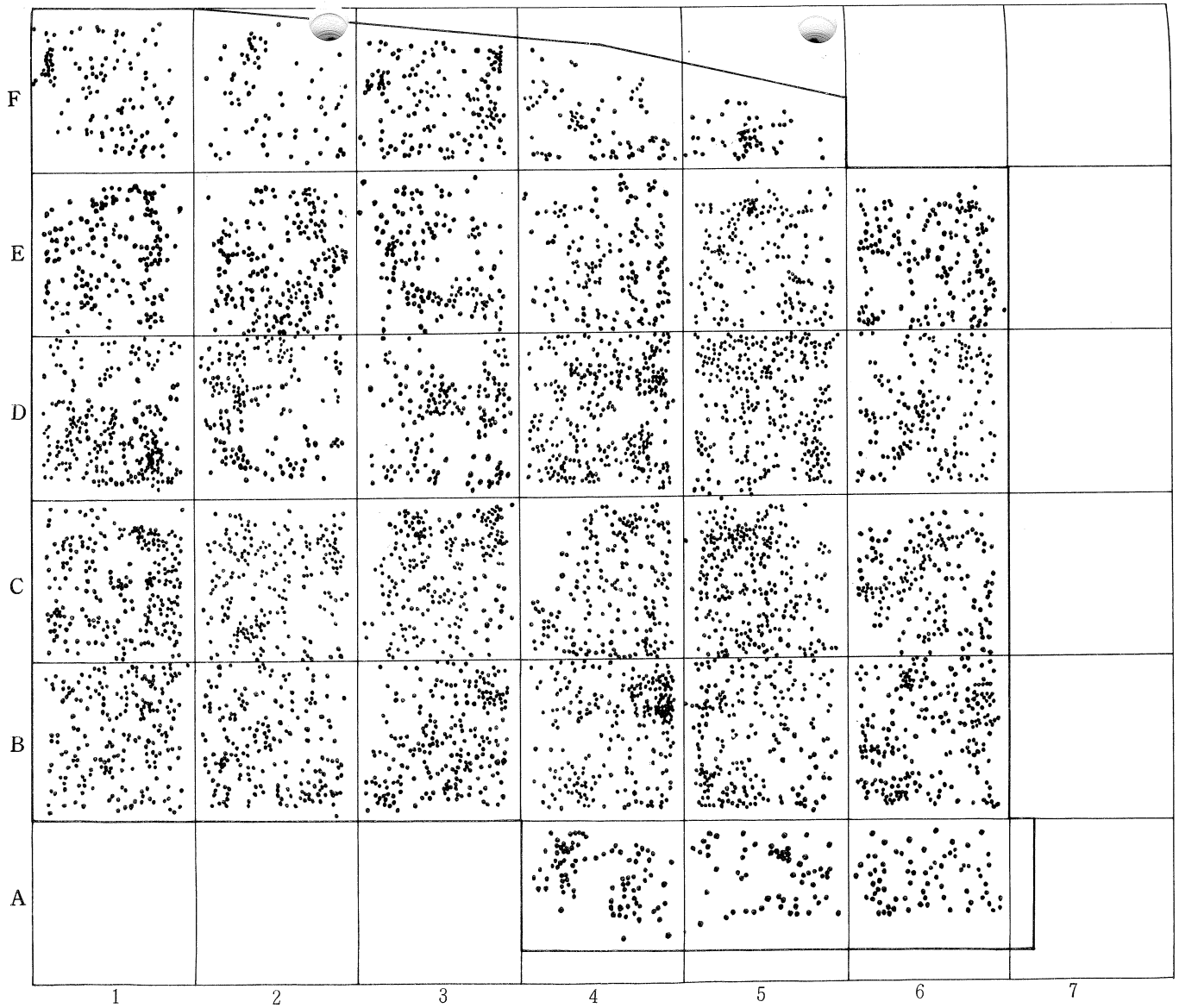
第９４図　出土土器実測図(9)



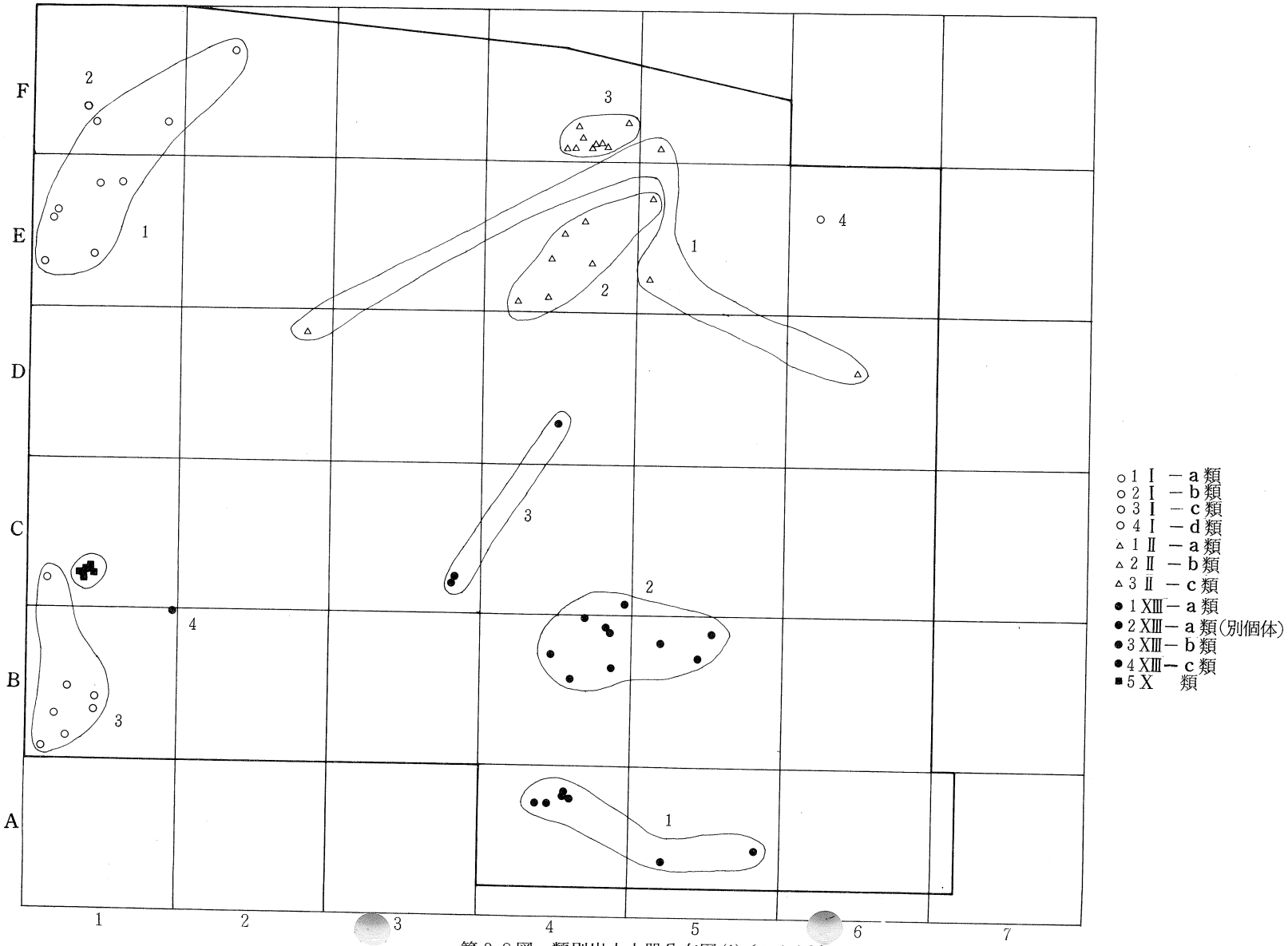
第９５図　出土土器実測図（10）



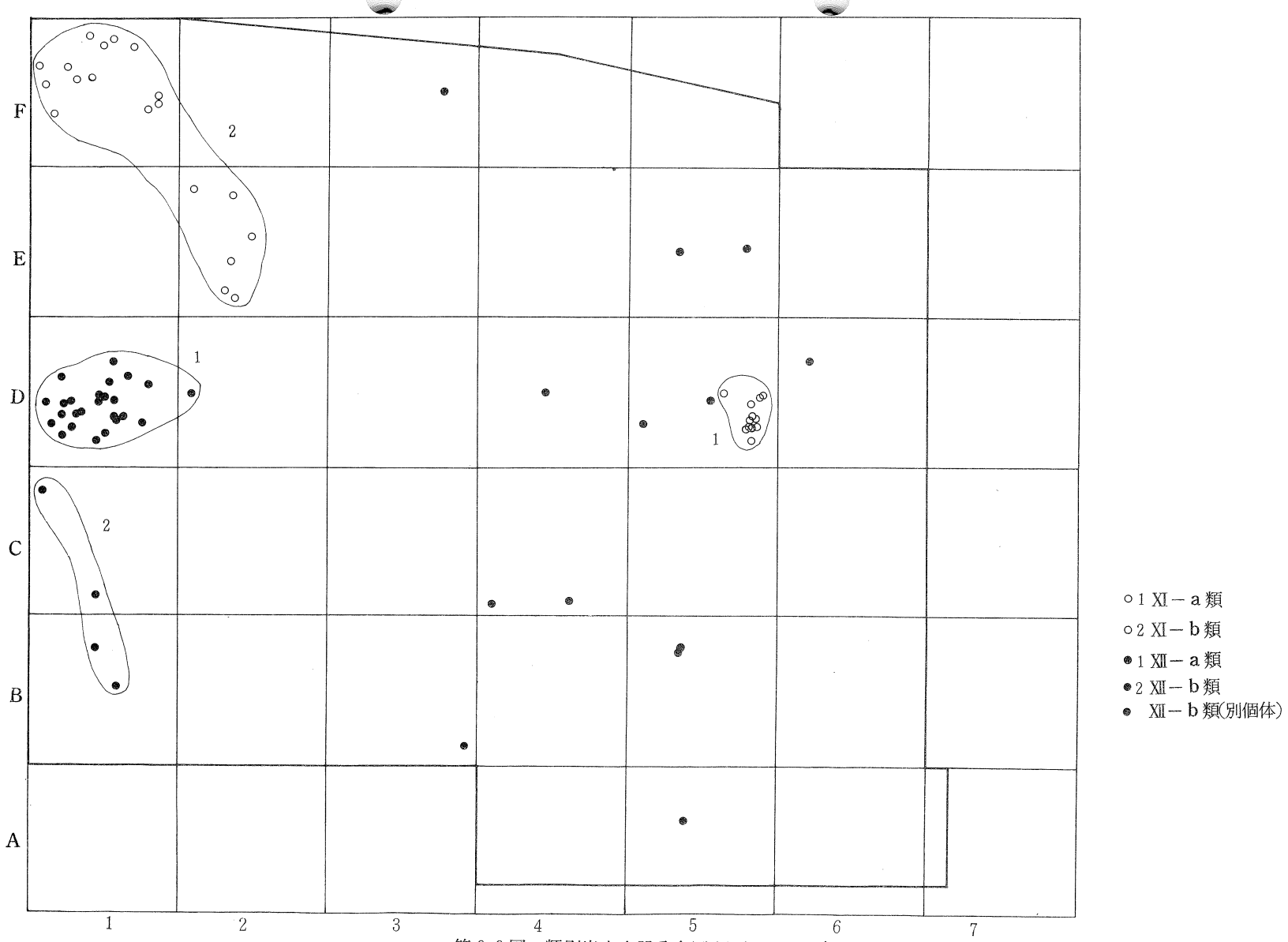
第９６図　出土土器実測図（11）



第９７図　全出土土器分布図（１／400）



第９８図　類別出土土器分布図(1)（1／400）



第９９図　類別出土土器分布図(2)（１／400）

布の差異は認められなかった。

石器（第１００～１０３図）

石器は、石鏃・尖頭状石器・掻器・磨製異形石器・局部磨製石斧・礫器・砥石・磨石・叩石・凹石・石皿が出土している。

石鏃は６７点出土しているが形態及び基部調整により次のように分類される。

Ⅰ類　U字状の抉りを有するもの

Ⅰａ－最大幅より最大長が大きい二等辺三角形状を呈するもの。

Ⅰｂ－正三角形状を呈するもの。

Ⅰｃ－両側辺が丸く張り出すもの。

Ⅰｄ－両側辺に鋸歯状刃部を有するもの。

Ⅰｅ－全体形が菱形状を呈するもの。

Ⅱ類　三角形又は円孤状の抉りを有するもの。

Ⅱａ－最大幅より最大長が大きい二等辺三角形状を呈するもの。

Ⅱｂ－正三角形状を呈するもの。

Ⅲ類　基部が外側に張り出す円基部を有するもの。

石材としては、姫島産９点を含む黒曜石製が２９点、チャート製２２点、サヌカイト製１０点と多く、その他細粒砂岩・石英脈岩・メノウ等が素材として使用されている。

尖頭状石器は４点出土している。（69・70・78）表裏面より調整された刃部を有しており、断面はレンズ状を呈する。石材は全てサヌカイトであり、破折している。

掻器は２点出土している。(71・72)ほぼ円形を呈するもので２ケ所に急角度の刃部調整が施されている。

局部磨製異形石器は5点出土している。(73～77)73～76は当初磨製石斧の破損部位と思われたが、77のように全面磨製のものもあり、さらに打面を研磨して刃部を作り出すなどの特徴より１種の切截具としての用途をもつ石器として分類した。素材としては粘板岩・細粒砂岩製の厚さ５㎜前後の剥片を利用している。

石斧は局部磨製のもの８点が出土している。（６８・７９～８５）７９は装着用の抉り部を有していいるのが特徴である。石材は玄武岩と砂岩を用いている。

礫器は１点出土している。（86）片面は全面調整を施し、他面は原礫面を残して調整を施し刃部を作り出している。石材は黒色細粒砂岩である。

砥石も１点出土している。（87）砂岩の剥片を用い表面に３本の溝が残っている。

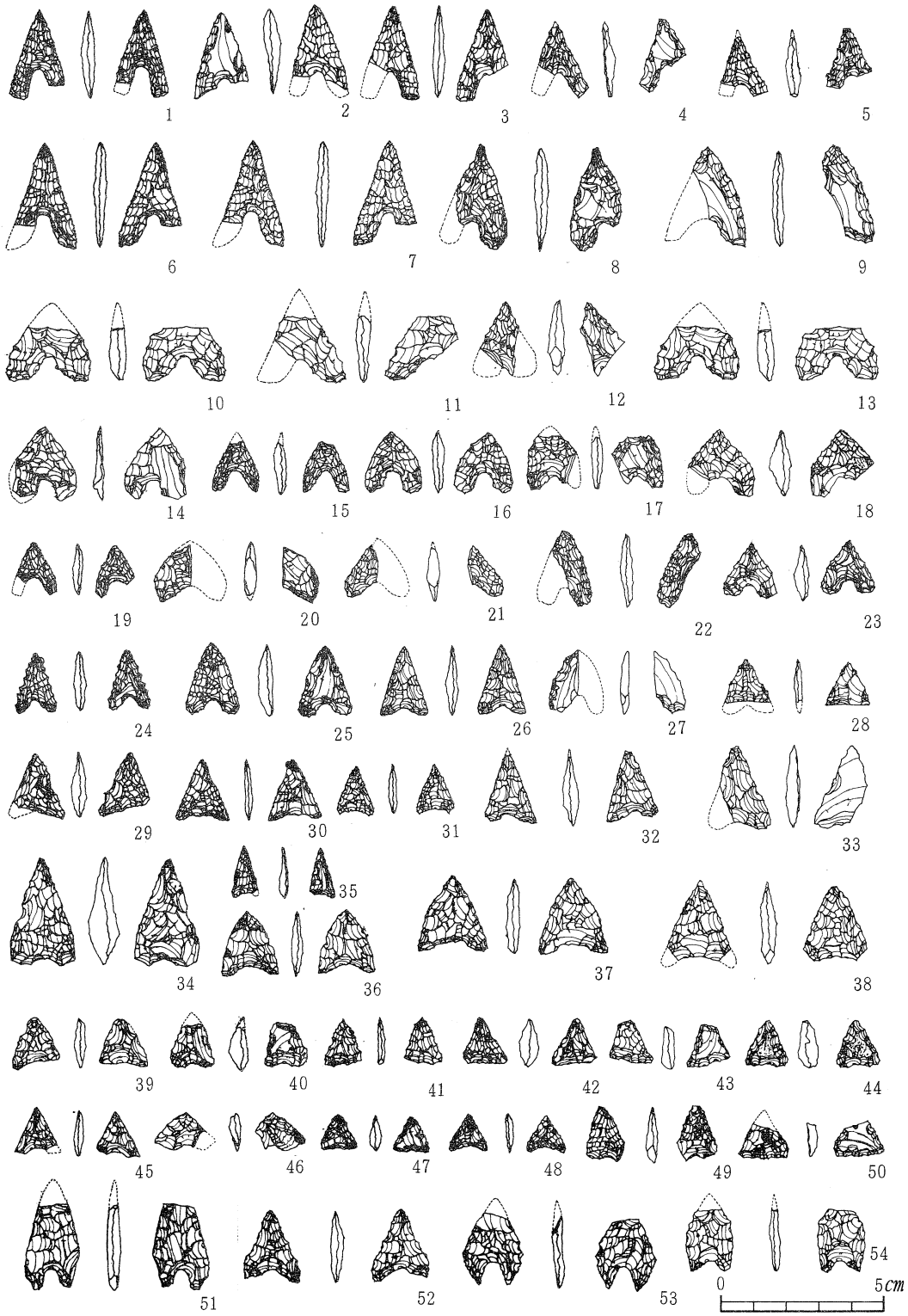
磨石は１３７点出土している。（88～93）

石材は砂岩が最も多く、その他安山岩・粘板岩・頁岩・流紋岩が利用されている。凹石は１１点出土している。（94～96）ほとんど砂岩製である。

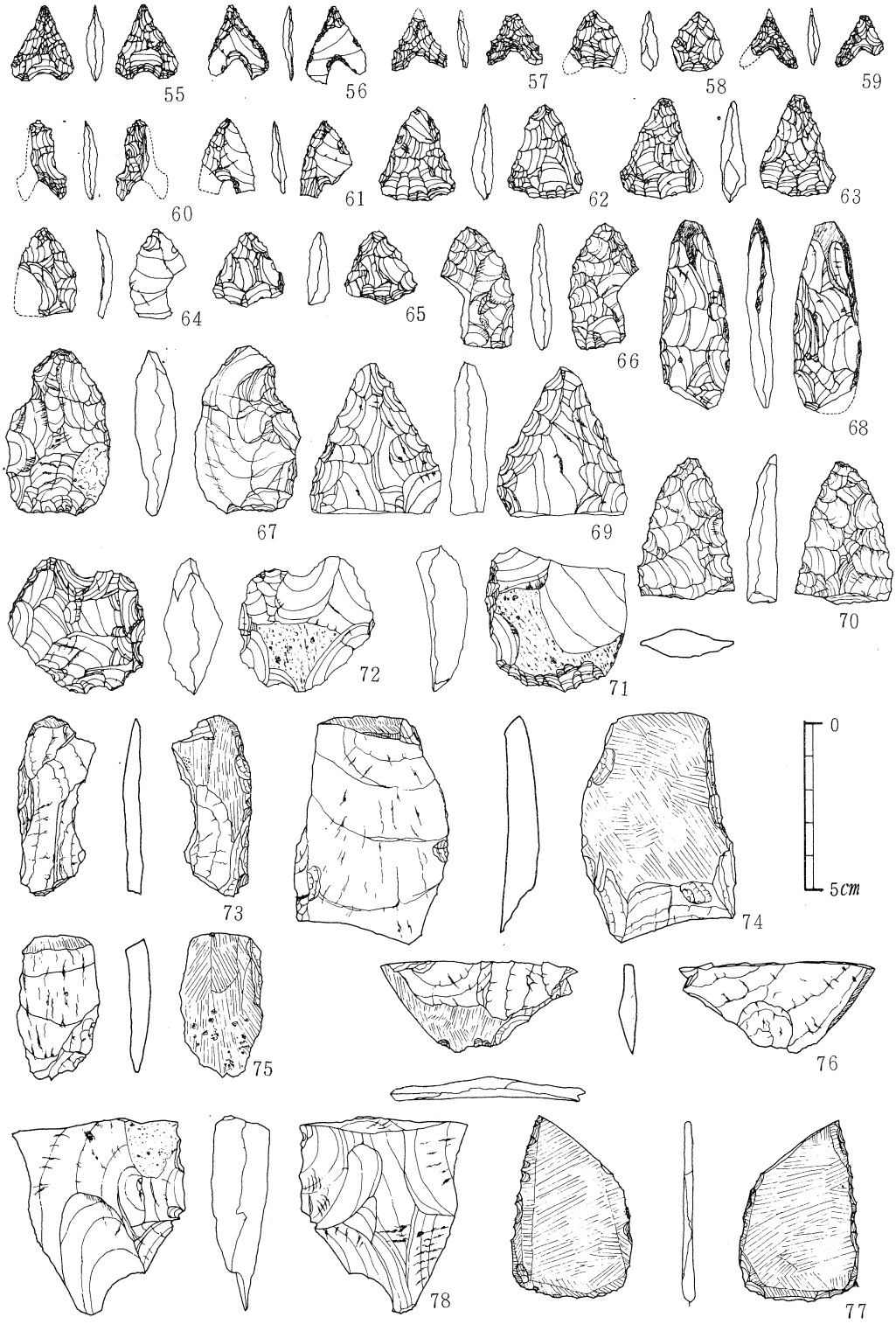
叩き石は１６点出土している。（97・９８）叩き石はほとんど磨石の転用であり、凹部を有するものも存在する。石材はほとんど砂岩である。

石器の分布（第104図）

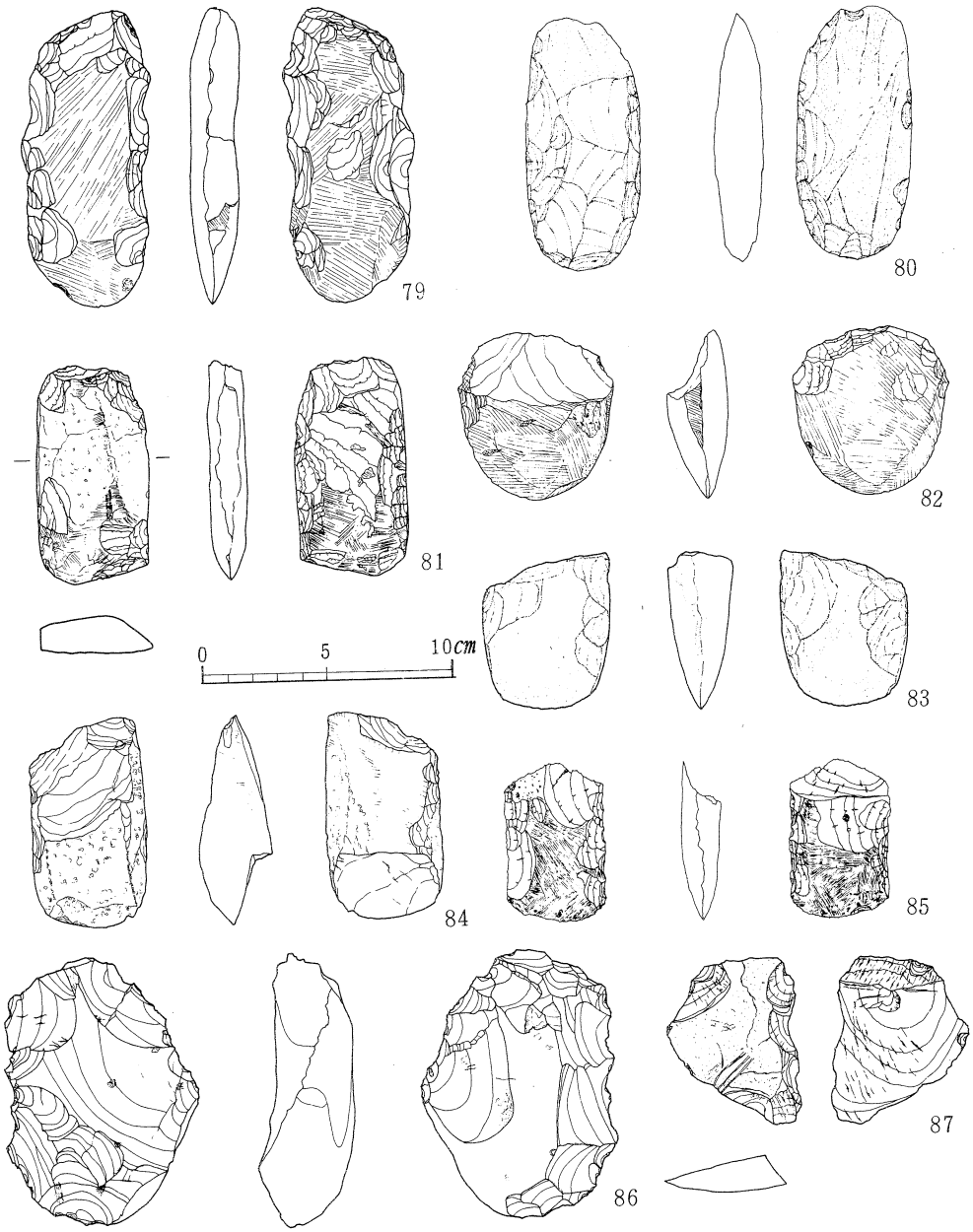
全体的な石器の分布としては、Ｂ・Ｃ－１区、Ｅ・Ｆ－１区、Ｂ・Ｃ－３区を除けばほとんど４・５区の安定した台地状に集中する。その他Ｂ・Ｃ－２・３Ｅに磨石等のみ分布していることも特徴とされる。



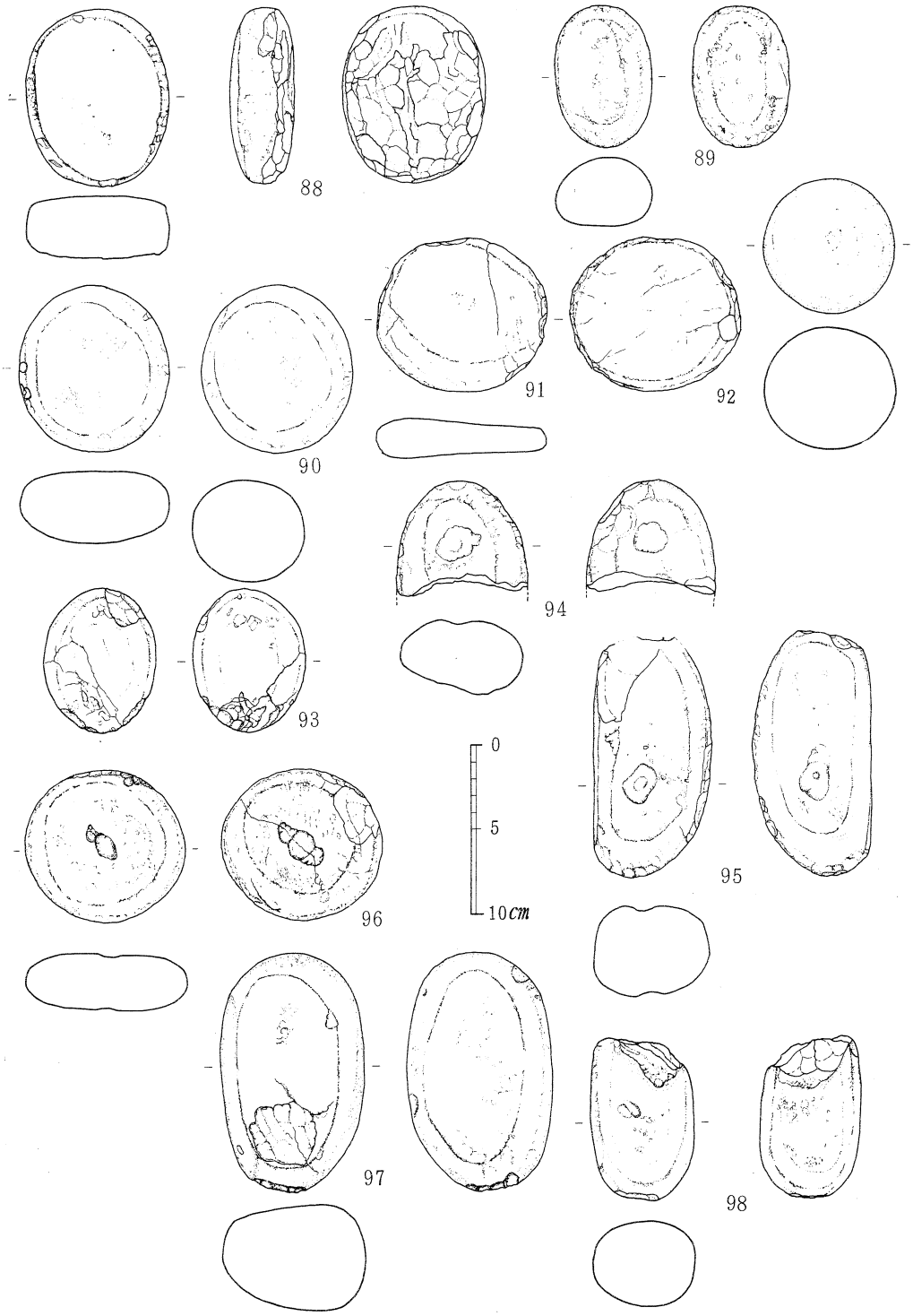
第１００図　出土石器実測図(1)



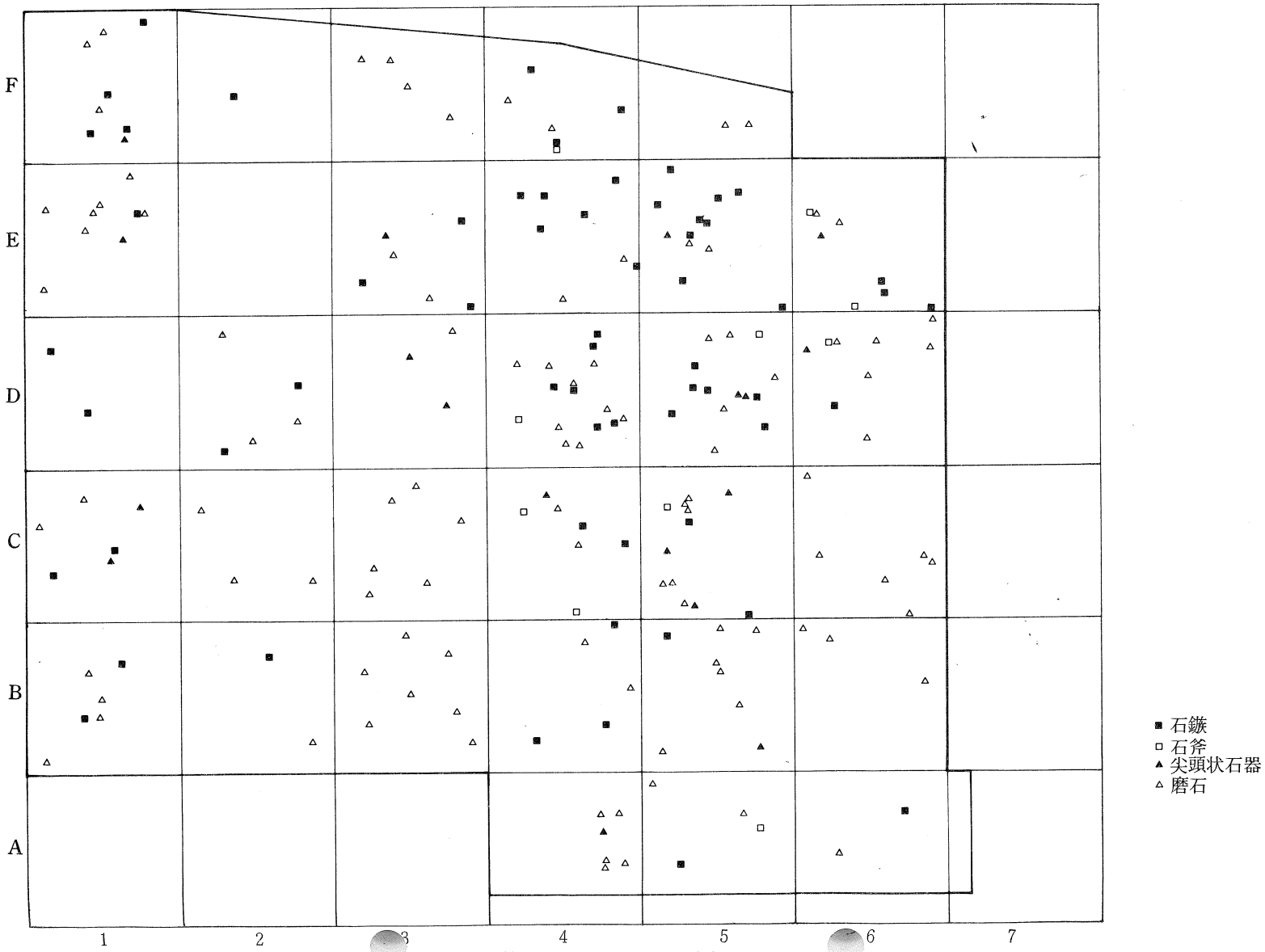
第１０１図　出土石器実測図(2)



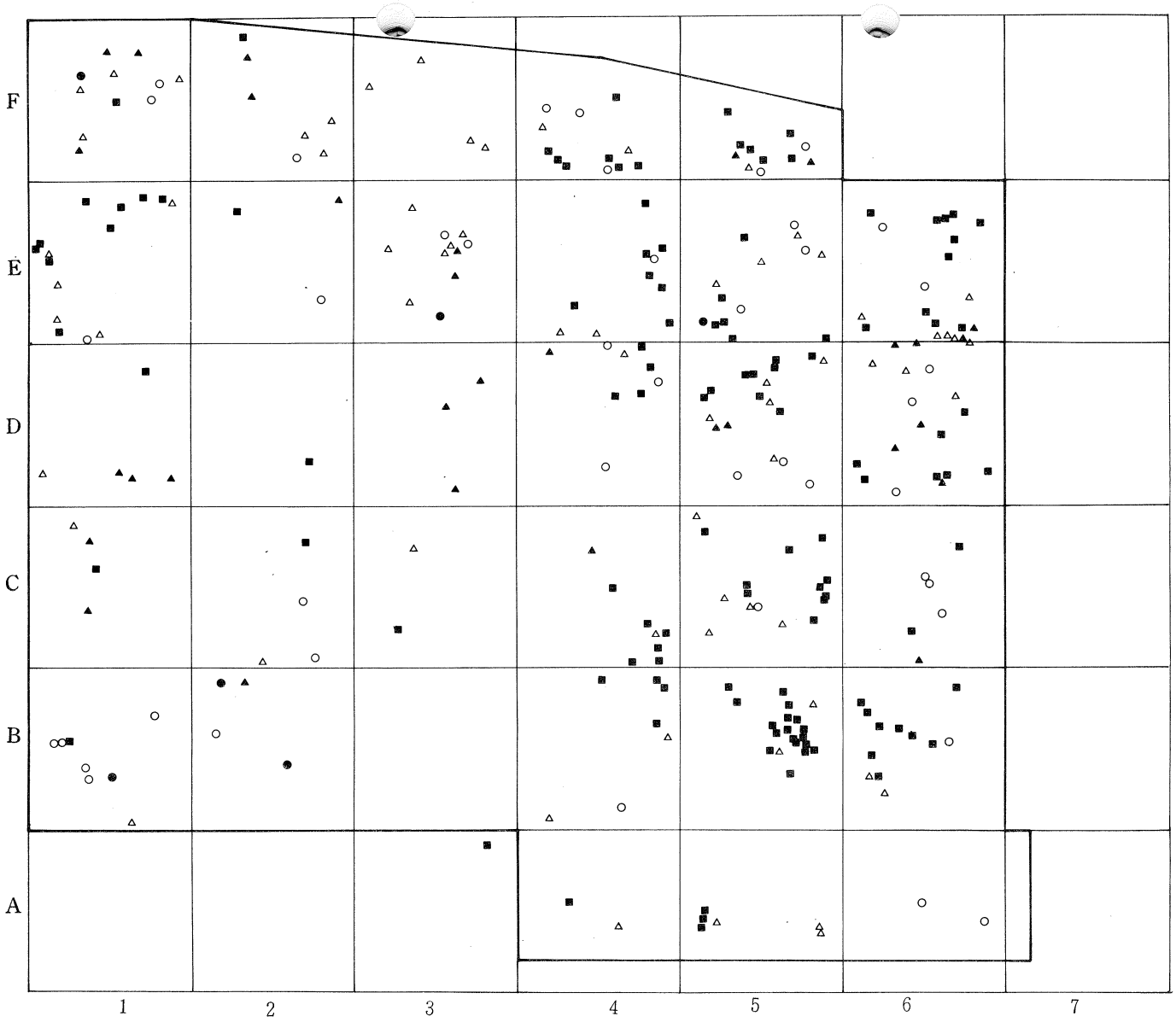
第１０２図　出土石器実測図(3)



第１０３図　出土石器実測図(4)



第１０４図　出土石器分布図



黒曜石
黒曜石（姫島産）
チャート
砂岩
その他（安山岩・粘板岩）

第１０５図　石材別チップ分布図（1／400）

第７章　年代測定の結果

前平地区の調査においては、自然科学的調査として花粉分析、熱ルミネッセンス法による年代測定、C^{14}による年代測定を行った。年代測定結果は次のとおりである。熱ルミネッセンス法については、前平地区遺跡群内での比較検討を行なうため、昭和５８年に調査が行なわれ塞ノ神式土器を多量に出土した又五郎遺跡の資料も測定している。その他、広島大学理学部地質学鉱物学教室柴田喜太郎氏の御協力により札ノ元遺跡の土壌分析も行っているが、花粉分析の結果と合わせて芳ケ迫第１遺跡の概報で報告している。

第１節　熱ルミネッセンス法及びＣによる年代測定結果

1.　芳ケ迫・又五郎縄文遺跡と札ノ元旧石器遺跡の焼石の熱ルミネッセンス年代 (1)

奈良教育大学教授　市川米太

試　　料	蓄積線量 (ラド)	ベータ線量 (ラド)	ガンマ線量 (ラド)	熱ルミネッセンス年代	誤　差 (%)
芳ケ迫No. 1 集石	2,890	0.240	0.088	8,810	5
又五郎集石(1)	2,250	0.180	0.088	8,390	11
〃　〃 (2)	2,860	0.265	0.088	8,100	6
札ノ元旧石器集石					
No. 1 (1)	8,140	0.288	0.101	20,920	13
〃 (2)	8,230	0.264	0.101	22,540	8
〃 (3)	7,800	0.271	0.101	20,960	12

1.　札ノ元と又五郎遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代 (2)

試　　料	蓄積線量 (ラド)	ベータ線量 (ラド)	ガンマ線量 (ラド)	熱ルミネッセンス年代 (年 B. P.)	誤　差 (%)
札ノ元吉田式(1)	1,920	0.138	0.088	8,490	30
〃　〃 (2)	2,020	0.131	0.088	9,220	18
札ノ元前平式	1,980	0.130	0.088	9,080	19
又五郎吉田式 (1)	2,260	0.142	0.088	9,820	14
〃　〃 (2)	1,400	0.141	0.088	6,110	16
又五郎前平式(1)	2,350	0.187	0.088	8,540	23
〃　〃 (2)	2,010	0.174	0.088	7,670	13
〃　〃 (3)	2,020	0.172	0.088	7,760	20
又五郎塞ノ神式(1)	1,610	0.142	0.088	7,000	9
〃　〃 (2)	2,080	0.214	0.088	6,880	8
〃　〃 (3)	2,170	0.244	0.088	6,530	5

2. 液体シンチレーション ^{14}C 年代測定結果

京都産業大学教授　山田　治

測定番号・測定値	試料名・採取地
KSU－988 〔8220±160〕B.P.	No.1, FD Do 60 木炭 2.38g °　′　″N,　°　′　″E
KSU－989 〔8350± 50〕B.P.	No.2, FD Su 29 木炭 13.23g °　′　″N,　°　′　″E
KSU－990 1 〔8850± 60〕B.P.	No.3, FD Su 36 木炭 2.67g °　′　″N,　°　′　″E
KSU－991 〔8550± 70〕B.P.	No.4, FD Su 48 木炭 9.07g °　′　″N,　°　′　″E

註，試料炭素の量が多いほど誤差が小さくなります。

第８章　結　語

昭和５８年度より昭和５９年度にかけて実施した前平地区の発掘調査により検出された遺構は、旧石器時代の集石遺構、縄文早期の集石遺構・礫群・土坑・住居跡・縄文晩期の土坑である。また出土した遺物は、これらに伴う土器・石器の他中世の遺物が出土している。

旧石器時代

旧石器時代の遺構としては、集石遺構が芳ケ迫第１遺跡で２基、芳ケ迫第３遺跡及び札ノ元遺跡においてそれぞれ１基が検出されている。各遺跡ともに旧石器時代の全面的な調査は行なっていないため、調査区内での集石遺構の分布状況は把握できなかったが、その形態については共通点が見出される。

集石遺構の規模としては、径５０㎝前後の範囲内に２０～３０個の挙大の円礫・角礫が円形または楕円形に配置され、掘り込みは有しない。この時期の集石遺構としては、県内でも宮崎学園都市内の堂地西遺跡をはじめ数ケ所で検出されているが、ほぼ類似した形態を有している。また、検出された層は、姶良Tn 火山灰に比定される第２オレンジ層の直上であり、札ノ元遺跡の集石遺構内の焼石の熱ルミネッセンス法による年代測定においても20,920年B.P.～22,540年B.P.の測定決果が得られていることから時期的には姶良Tn 火山灰降下後の最も古い様相を呈するものと考えられる。

遺物としては、芳ケ迫第１遺跡で１ユニットとして把握されるものが調査され、剝片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・彫器の他剝片尖頭器の素材となる砂岩製の剥片も出土している。また、芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡においても集石遺構を中心に石核・剝片が出土し、剝片尖頭器・ナイフ形石器も出土したが、宮崎学園都市内の堂地西遺跡出土のものと比較するとかなり小型であり、石材としても安山岩・流紋岩・泥岩等が素材として利用されている。

現在、旧石器時代の調査例は増加しつつあり、遺跡間の比較あるいはより全面的な調査によって石器の組成及び技術、さらには生活空間の把握という問題がより明確になってくるものと思われる。

縄文時代

縄文早期の遺構は、芳ケ迫第１遺跡・第３遺跡、札ノ元遺跡において検出された。

集石遺構は、アカホヤ層を除去した面で小礫が一面に散在していた。この礫はまとまりはなく、掘り下げるとまとまりを有するいわゆる礫群が数ケ所検出される。この礫群には厚さ１０㎝前後の堆積をなすものもあり、また掘り込みを有する集石遺構を数基含むものもある。この礫群内に

は遺物は出土するものの、上面を生活面としては考え難く、近接または中に含まれる集石遺構の廃棄礫である可能性が強い。このような縄文早期の礫群の検出状況は県内でも類例が増加しつつあり、生活空間内でのこの礫群の位置づけが課題である。また、集石遺構については前平地区の各遺跡ごとに５０～１００基の検出例がみられたが、掘り込みの有無によって２つに大別される。そして掘り込みを有する集石遺構には配石をもつものが見られる。配石は中心に礫を置き周囲に並べるいわゆる花弁状の配置をするものがあった。これらの掘り込みを有する集石遺構の埋土中特に床面付近では炭化材や炭化粒が多量に出土し、礫にタール状のものが付着するものも見られ石蒸し炉的な機能が考えられる。

以上のような礫群及び集石遺構の検出例は縄文早期の調査においては一般的なものとなりつつあり、遺跡内での空間的な位置づけ及び相互の関連性が課題となろう。

土坑として注目されるものは、連穴土坑及び長円形又はスプーン状の形状を呈し凹部を有する土坑であろう。前者は札ノ元遺跡において２基検出されている。１基は焼土が確認され後者の土坑と切合っているが、切り合い状況から判断して連穴土坑のほうが古い様相を呈している。後者の土坑は札ノ元Ⅰ型土坑と仮称しておくが、焼土を有する長円形の土坑は熊本県及び大分県内でも検出例がある。しかし札ノ元Ⅰ型土坑はさらに凹部の焼土上に径２０～４０㎝程度の大型礫が検出されるのが１つの特徴となっている。この札ノ元Ⅰ型土坑は数基が連続しているのが特徴であり、ほとんどは調査区内の緩やかな傾斜面に検出されている。札ノ元遺跡においては、調査区東南部の平担面に土坑を中心とする１つの空間があり、その他の土坑は周囲の斜面に分布している。この土坑の性格については、集石遺構には炭化物は多量にみられるものの焼土はなく、石蒸し料理的な機能がそれに与えられるならば、石を焼く場所としての機能も考えられるが、石を焼くのに特別な場所が必要かどうかとか焼けた多量の礫の移動法など問題がある。さらに、凹部の焼土上にある大型礫が焼土の直上ではなく間に炭化物を多量に含んだ固く締まった層が存在することや、大型礫自体の機能も不明である。大型礫の検出のされ方は、数個を凹部に乱雑に投げ入れたようなものと、１個だけを横に置くようにするものがあり、札ノ元Ⅰ型土坑及び大型礫の機能については今後の検討課題である。また、土坑内で出土する遺物も全て貝殻文系土器であり、札ノ元遺跡では埋土中から札ノ元第Ⅲ類から第Ⅷ類が混在して出土する状況であった。しかし、それらの土器が全く出土していない芳ケ迫第３遺跡においても２基検出されていることや、類似する土坑が熊本県及び大分県でも確認されていることから、明確に貝殻文系土器に特有の遺構とは断定できない。

住居跡は、札ノ元遺跡において２基検出されたが、調査区東側の平担な台地上ではなく西側の

緩斜面に検出され、床面は水平であった。１号住居は小型で浅いピットが散在して検出されたのに対して２号住居は大型で深いピットが密集して確認されている。時期的には、１号住居の埋土中からⅧC′類の同一個体と思われる土器片が４点出土しているのに対し、２号住居ではⅤ類の土器片が検出されており、弱冠のずれがあると思われる。２号住居は壁に突出部を有する特徴等から、鹿児島県の加栗山遺跡で検出されたものに類似した要素をもっている。縄文早期の貝殻文系土器に伴う住居跡の検出例は今後とも増加するものと思われるが、他の遺跡との比較検討や調査区内の他の遺構との関連性等は資料の増加を持ちたい。

土器に関しては、各遺跡ともに多型式の土器が混在して出土したが、各遺跡ごとに特徴的な出土を示しており、時期差としての把握は可能であるが、前後関係については明確ではない。

押型文土器は、全て平底であり円筒形に近いものも出土している。芳ケ迫第１遺跡では器壁が薄く横位にベルト状に施文する古いタイプのものが出土し、また口縁部に横位の条痕文を施すものも出土している。芳ケ迫第３遺跡では、押型文土器が出土土器の主体を占めているが、口縁部にベルト状の押型文を鋸歯状に巡らせるものが出土している。施文は縦位・斜位が多く楕円文も大粒であり、また底部も平底で押型文は相対的に新しい傾向がある。札ノ元遺跡は押型文土器の出土数が少なく、山形押型文土器が１０数点で楕円押型文土器は僅かに１点のみである。山形押型文土器は山形口縁を有するものが出土しているが、底部も出土しておらず時期的な位置づけは明確でない。押型文土器は３遺跡ともに出土しているが、形態及び組成が全く異なっており、他地域では出土していない土器も見られるため、周辺の資料も含めて検討したい。

貝殻文系土器、いわゆる吉田式土器・前平式土器と呼称される貝殻による条痕文を主とする土器については、県内の縄文早期の遺跡においては大部分で出土する土器型式であるが、本地区遺跡群内では芳ケ迫第３遺跡で１点も出土していないのが特徴である。芳ケ迫第１遺跡では出土数は少なく、角筒の胴部及び円筒の底部等しか出土しておらず、クサビ型張付け突帯を有するものも出土していない。一方札ノ元遺跡では出土土器の大部分を占め、バリエーションも豊富である。この中で№３９～№４７の胴部に貝殻腹縁の押圧文を有しない土器は特徴的なものであり、鹿児島県内ではあまり類例がない。この土器群は、クサビ型張付け突帯を有する土器群の中で他の文様バリエーションのものが円筒・角筒を有しているのに対して、円筒のみの器形であり、クサビ形張付け突帯も形がシャープでなく、粘土ひものを簡単に張り付けただけの粗雑なものである。この土器群は、地域差的な特徴でないとすればクサビ形張り付突帯を有する土器群のうちの初源形態とも考えられるものである。また、№５８の土器は、クサビ形張り付け突帯が口縁部に密に巡り胴部には横位に貝殻腹縁の押引き文を施文するいわゆる吉田式土器であるが、出土したのは

１点のみであり、他の土器と比べて風化が著しく異なった残存状態を呈している。この土器も周辺地域では出土しておらず、宮崎学園都市遺跡群等でも出土していないものである。従って、他地域からの持ち込みの可能性が考えられる土器である。また、第Ⅲ類～第Ⅵ類までの土器群は施文、調整・角筒の有無等によって大まかながら２つのタイプに大別される可能性がある。№24～№２７までの角筒土器は、いずれも明瞭な稜を有しておらず口縁部のみをつまみ上げるような造作を施しており、胴部・底部は出土していないもののそれらはほぼ円筒形に近いものと考えられる。また出土区もＡ・Ｂ－４・５区に片寄っており１つの土器群を形成するものであろう。

手向山式土器・平栫式は、札ノ元遺跡のみで出土している。量的には、それぞれのバリエーションが１個体分に近い程度でまとまって出土しており、出土層位も包含層中の最も上位であった。

その他型式未設定の土器については、県内で類例が増加しつつある口縁部が内彎する円筒土器群がある。これは芳ケ迫第１・第３遺跡、札ノ元遺跡ともに出土しており、文様バリエーションも豊富である。施文は、貝を利用する刺突文・押引き文、ヘラを利用する羽状文・沈線文・刺突文等である。また、器形的には口唇部が平担で内傾するものが多く、口唇部及口縁部内面の調整もミガキ状の非常に丁寧なナデ調整を施す。そして、胎土に雲母・石英・白色岩片を多量に含み、花崗岩系の胎土を呈するものが大部分を占め、他の土器群が火山灰系の胎土を呈しているのと異なる。この土器群は類例の増加を持って編年を検討したい。

石器は、特徴あるものとしては芳ケ迫第１遺跡の環状石斧、芳ケ迫第３遺跡の黒曜石製異形石器、札ノ元遺跡の磨製異形石器等である。環状石斧は最近類例が増加しつつあるが、他は類例がなく資料の増加を持ちたい。その他には、石鏃の石材に関して芳ケ迫第１・第３遺跡、札ノ元遺跡ともに姫島産黒曜石を利用しており、芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡ではサヌカイトも素材として利用している。

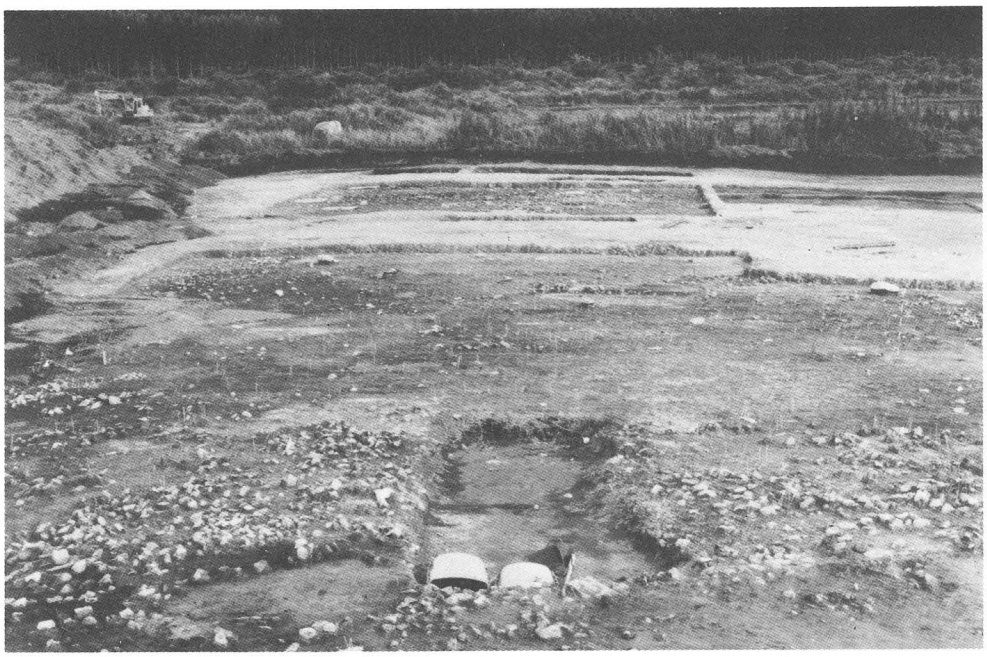
以上のように土器・石器ともに縄文早期の遺構・遺物は課題が多いが、前平遺跡群内のもう１つの又五郎遺跡の整理結果を検討して、遺構・遺物の詳細な検討を試みたい。

その他、縄文晩期・中世の遺構・遺物に関しては今回は調査結果の報告のみに留め、課題と検討の報告については機会を持ちたい。

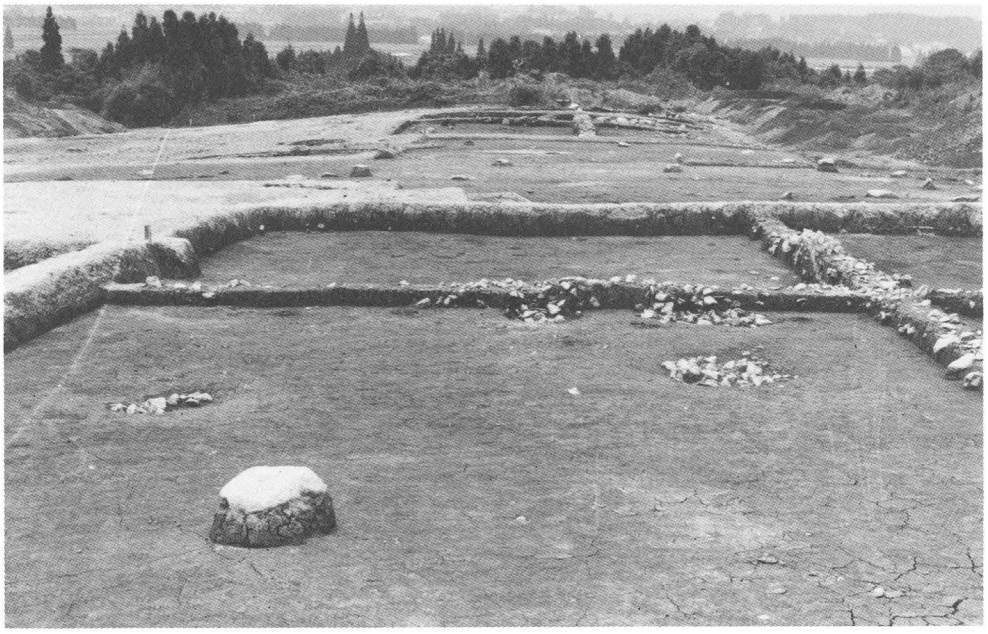
図版1（芳ケ迫第一）

芳ケ迫第1遺跡空中写真

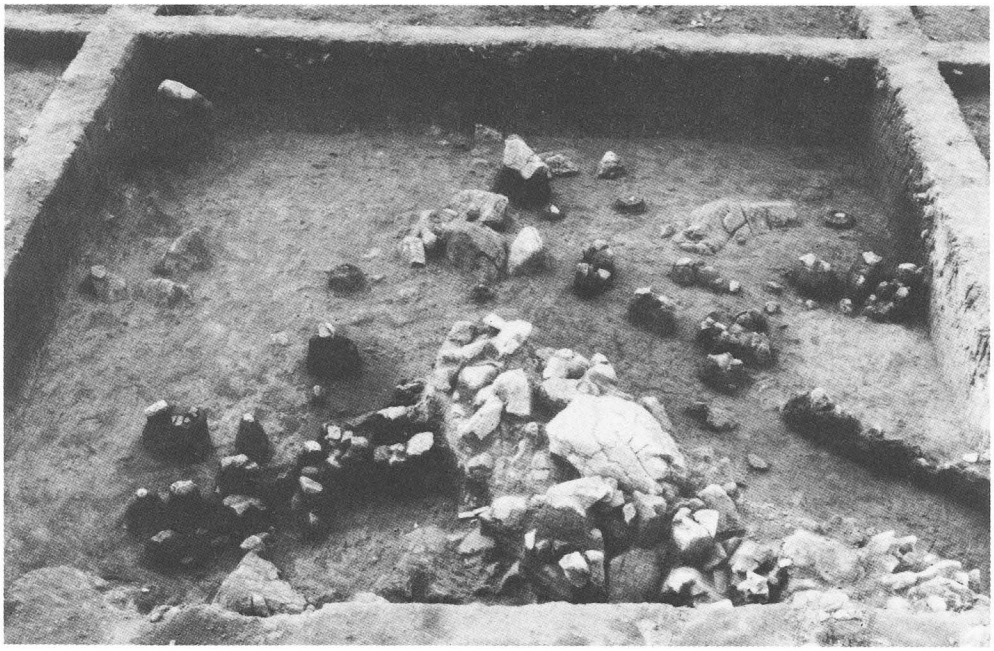
図版2（芳ケ迫第一）



礫群検出状況（北北西より）



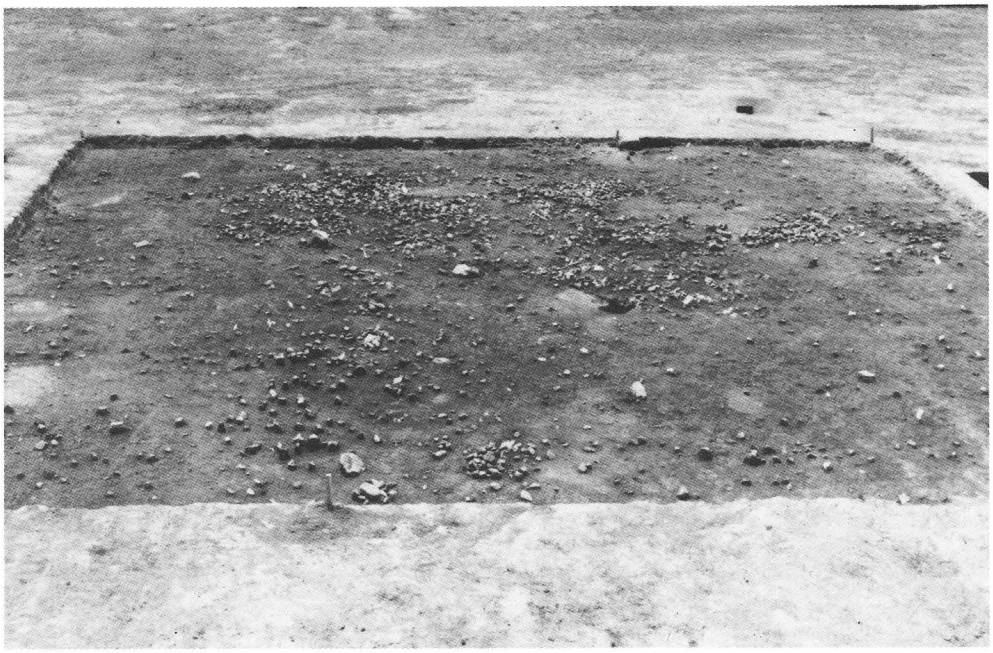
集石遺構検出状況（南南東より）



B－3区旧石器時代遺物出土状況（東北東より）

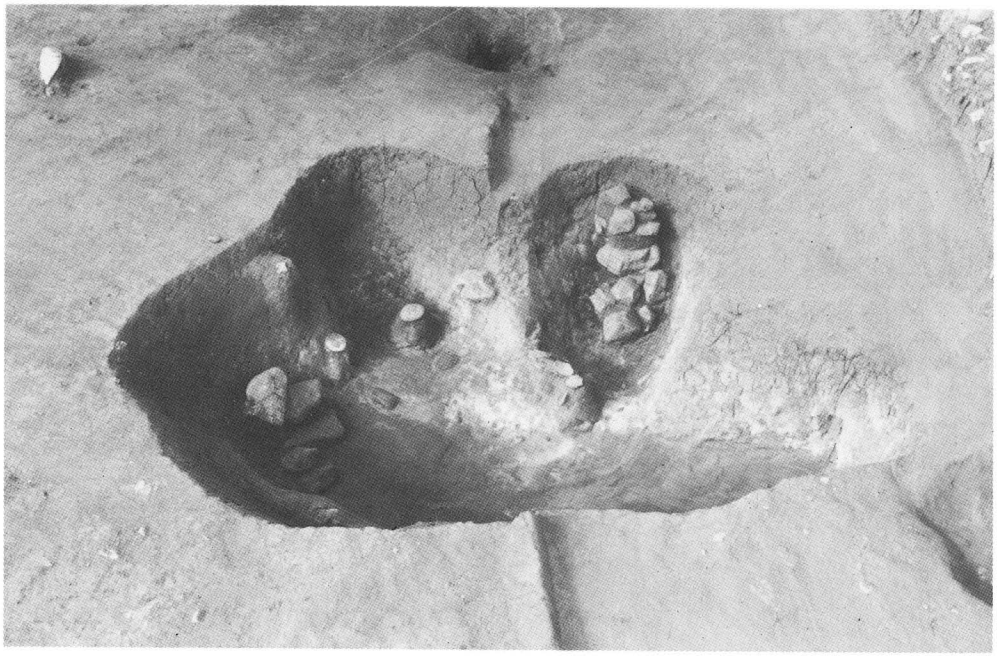
B－3区旧石器時代遺物出土状況

図版4（芳ケ迫第一）

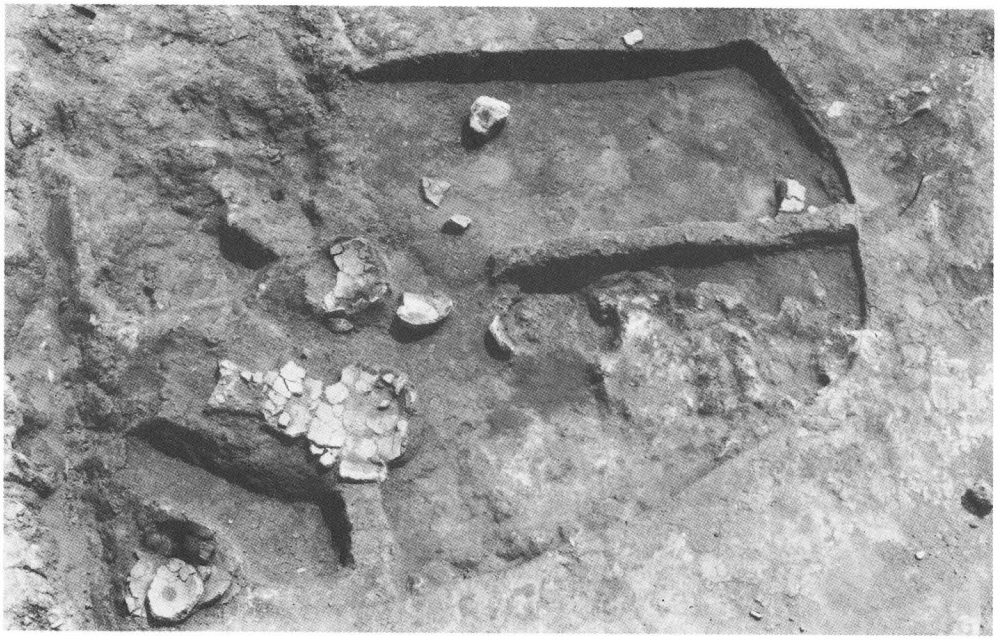


H・I－2・3区礫群（東北東より）

B・C－4・5区礫群（北北西より）



No. 2 土坑 （東北東より）

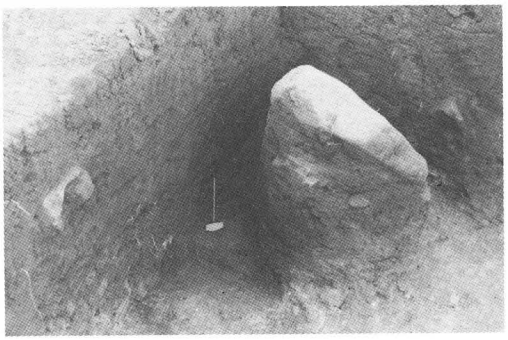


No. 1 竪穴遺構（北北東より）

図版6（芳ケ迫第一）

旧石器No. 1集石遺構

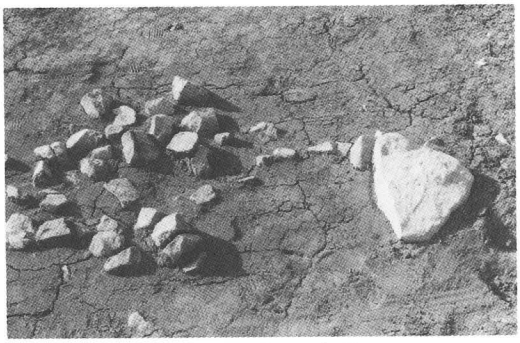
旧石器No. 2集石遺構



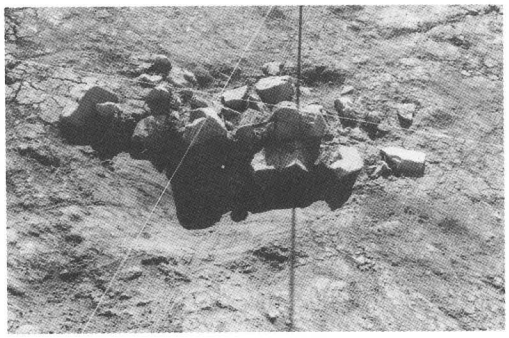
旧石器時代遺物出土状況

旧石器時代遺物出土状況

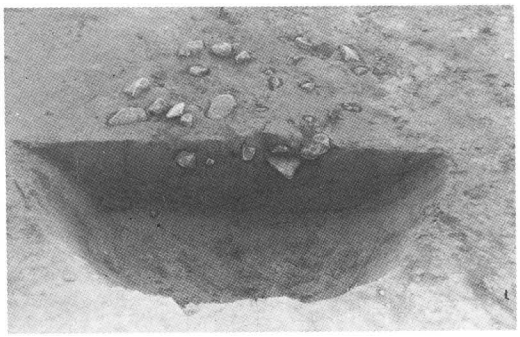
No. 7 集 石 遺 構



No. 2 8 集 石 遺 構



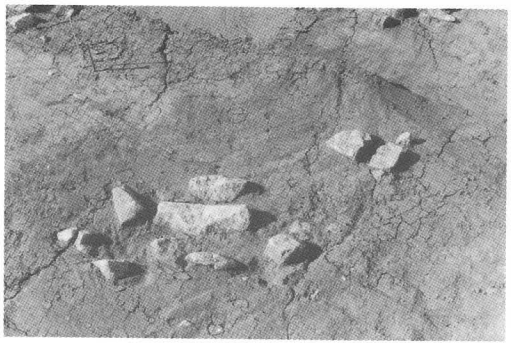
No. 2 0 集 石 遺 構



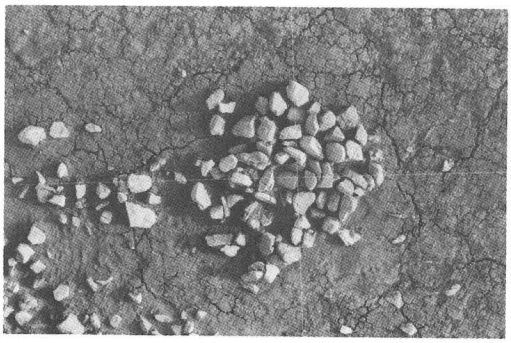
No. 4 4 集 石 遺 構

図版7（芳ケ迫第一）

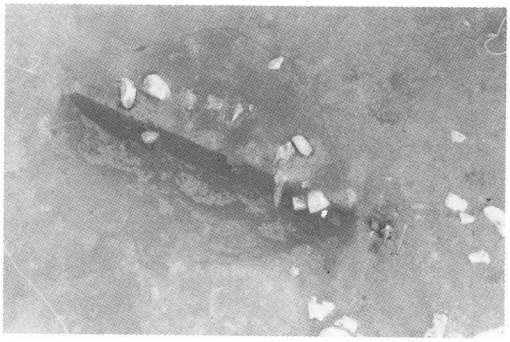
No. 4 6 集石遺構



No. 1 3 集石遺構

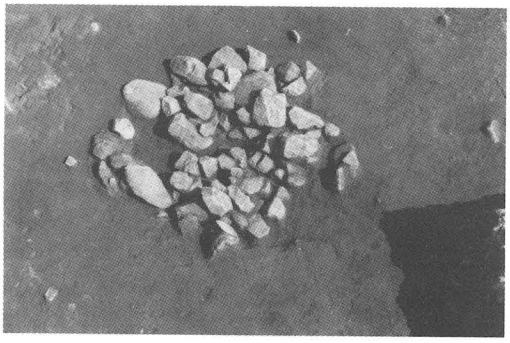


No. 1 9 集石遺構



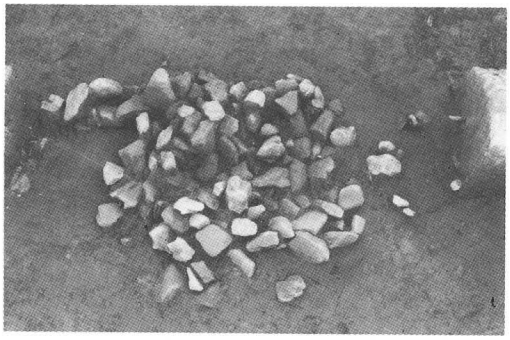
No. 3 9 集石遺構

No. 1 4 集石遺構



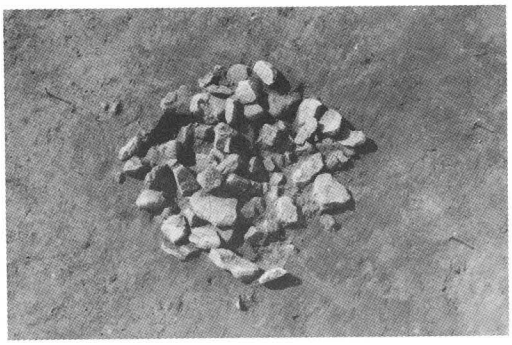
No. 1 8 集石遺構

No. 8 集石遺構



No. 8 集石遺構

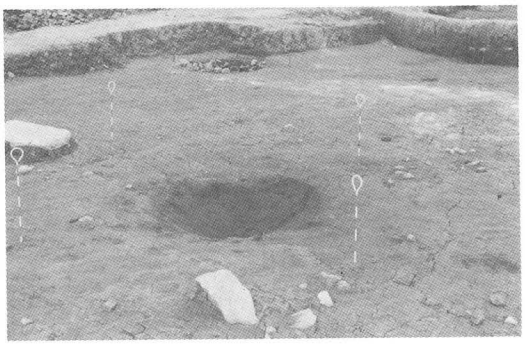
図版8（芳ケ迫第一）



No. 6 集石遺構

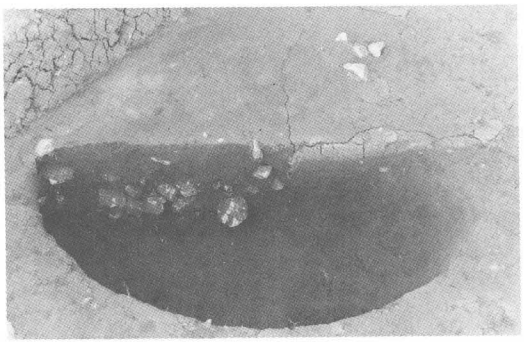
No. 1 集石遺構

No. 17 集石遺構



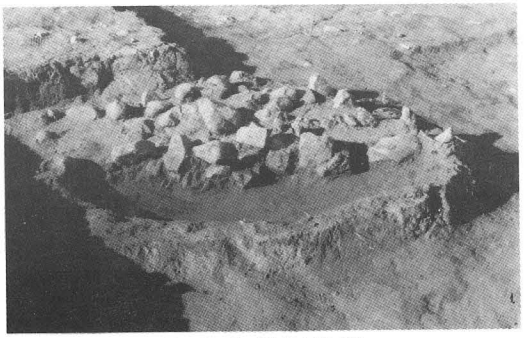
No. 17 集石遺構土坑（西より）

No. 12 集石遺構

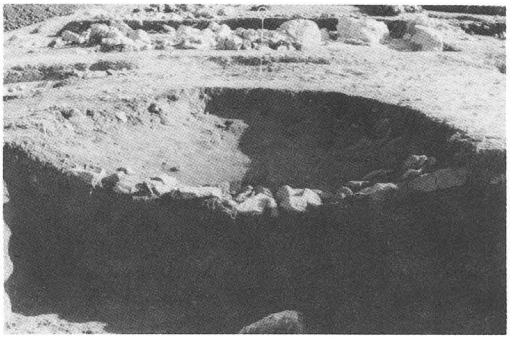


No. 37 集石遺構

No. 35 集石遺構

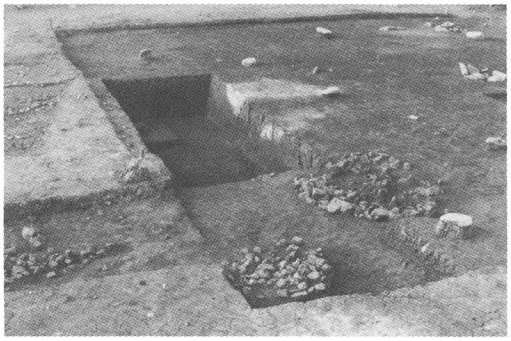


No. 51 集石遺構



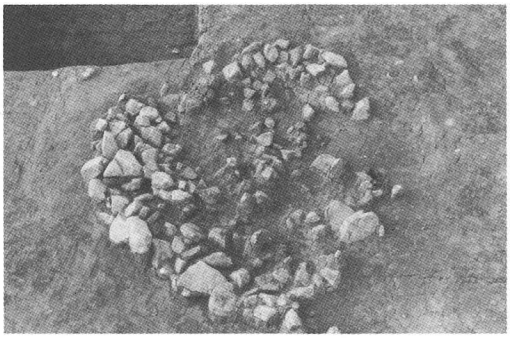
No. 3 4 集石遺構

No. 3 1 集石遺構

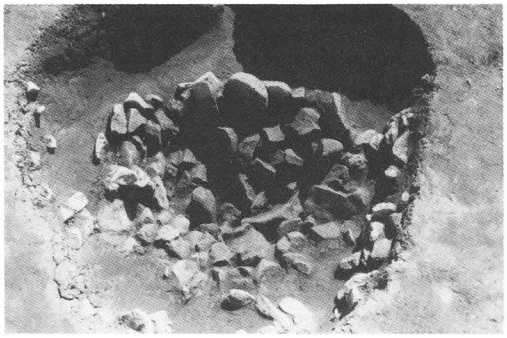


No. 50，51，52集石遺構（南より）

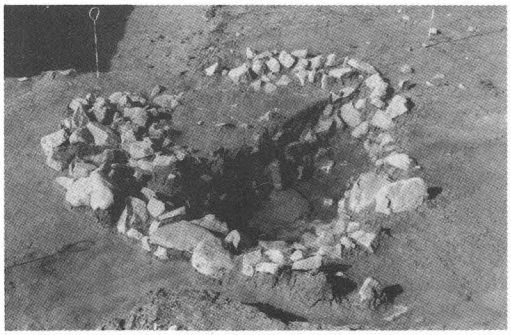
No. 4 集石遺構



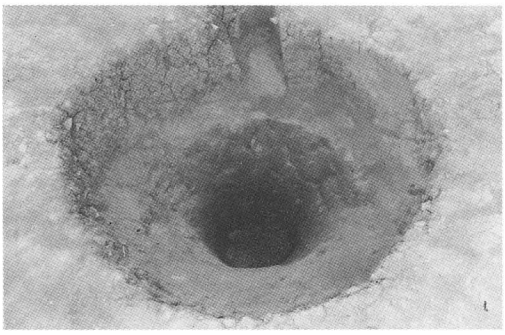
No. 5 2 集石遺構



No. 4 集石遺構

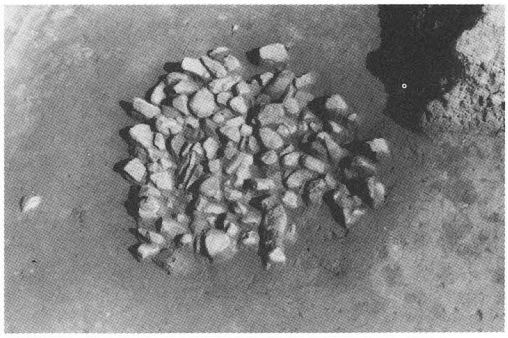


No. 5 2 集石遺構

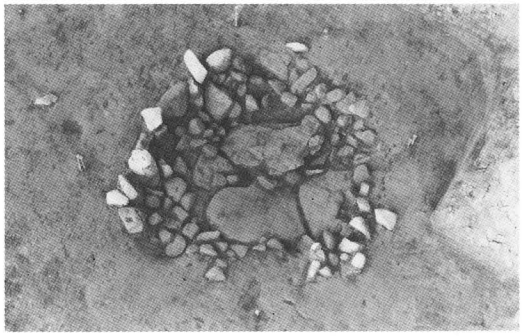


No. 4 集石遺構土坑

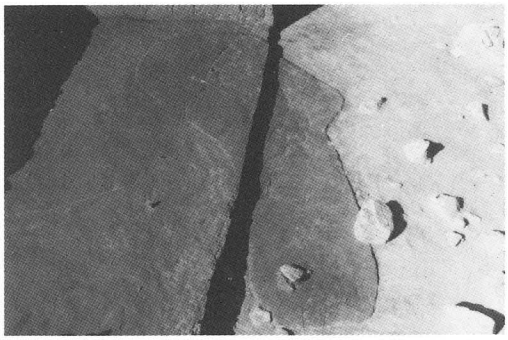
図版10（芳ケ迫第一）



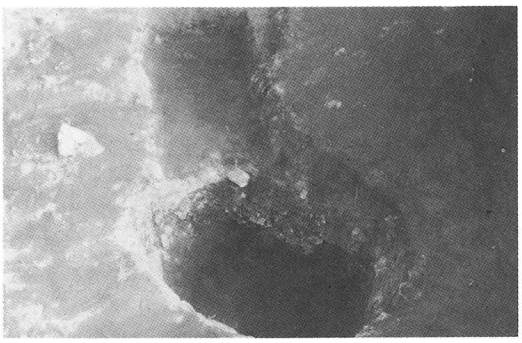
No. 16 集石遺構



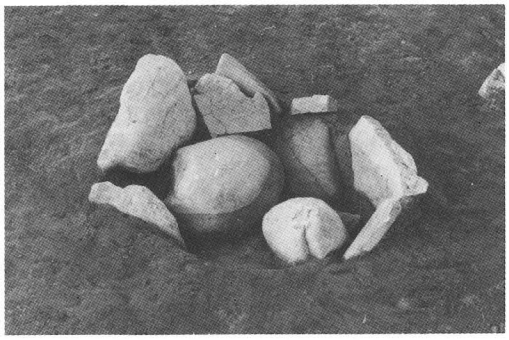
No. 16 集石遺構



No. 1 土 坑



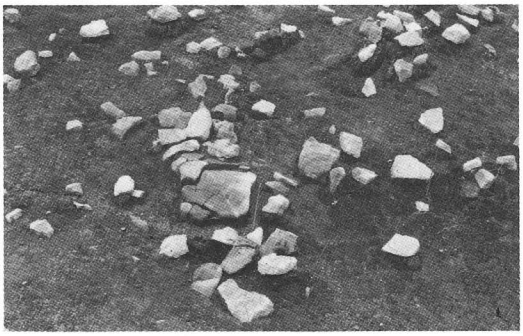
No. 1 土 坑



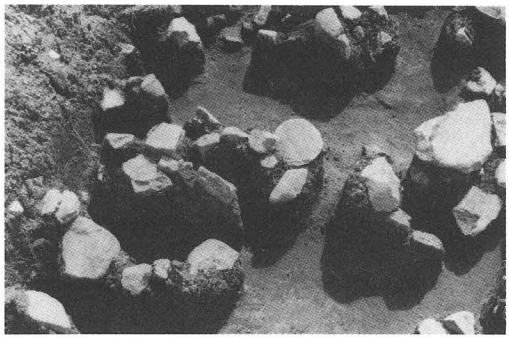
石 組 遺 構

石組遺構内石鏃出土状況

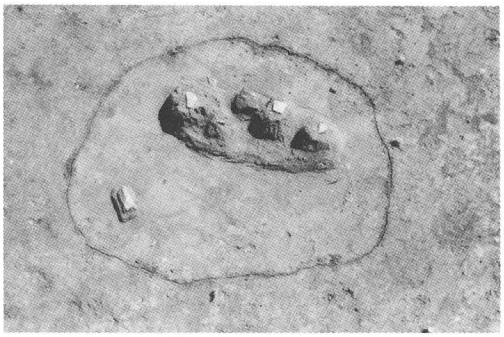
Ⅰ－3区環状石斧出土状況



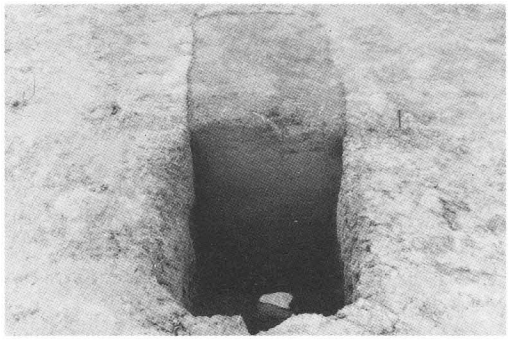
Ⅰ－2区土器出土状況



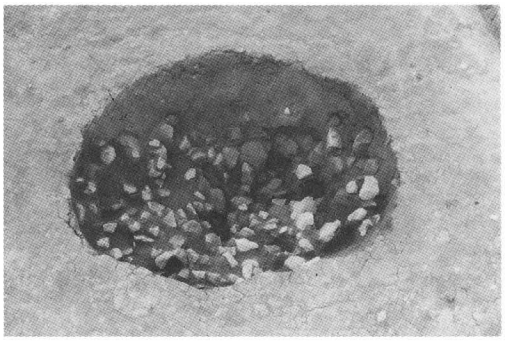
B－4区円盤状石器出土状況



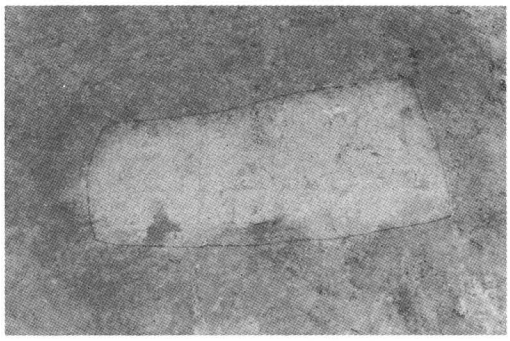
No. 2竪穴遺構検出状況



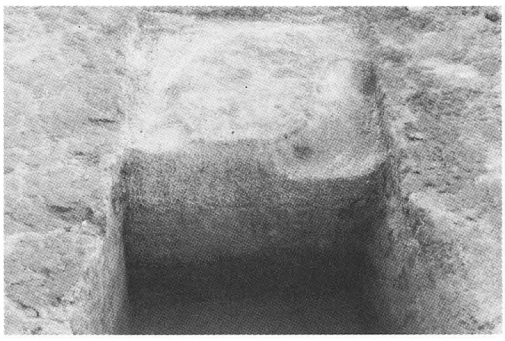
No. 7土坑土層



No. 2竪穴遺構



No. 9土坑検出状況

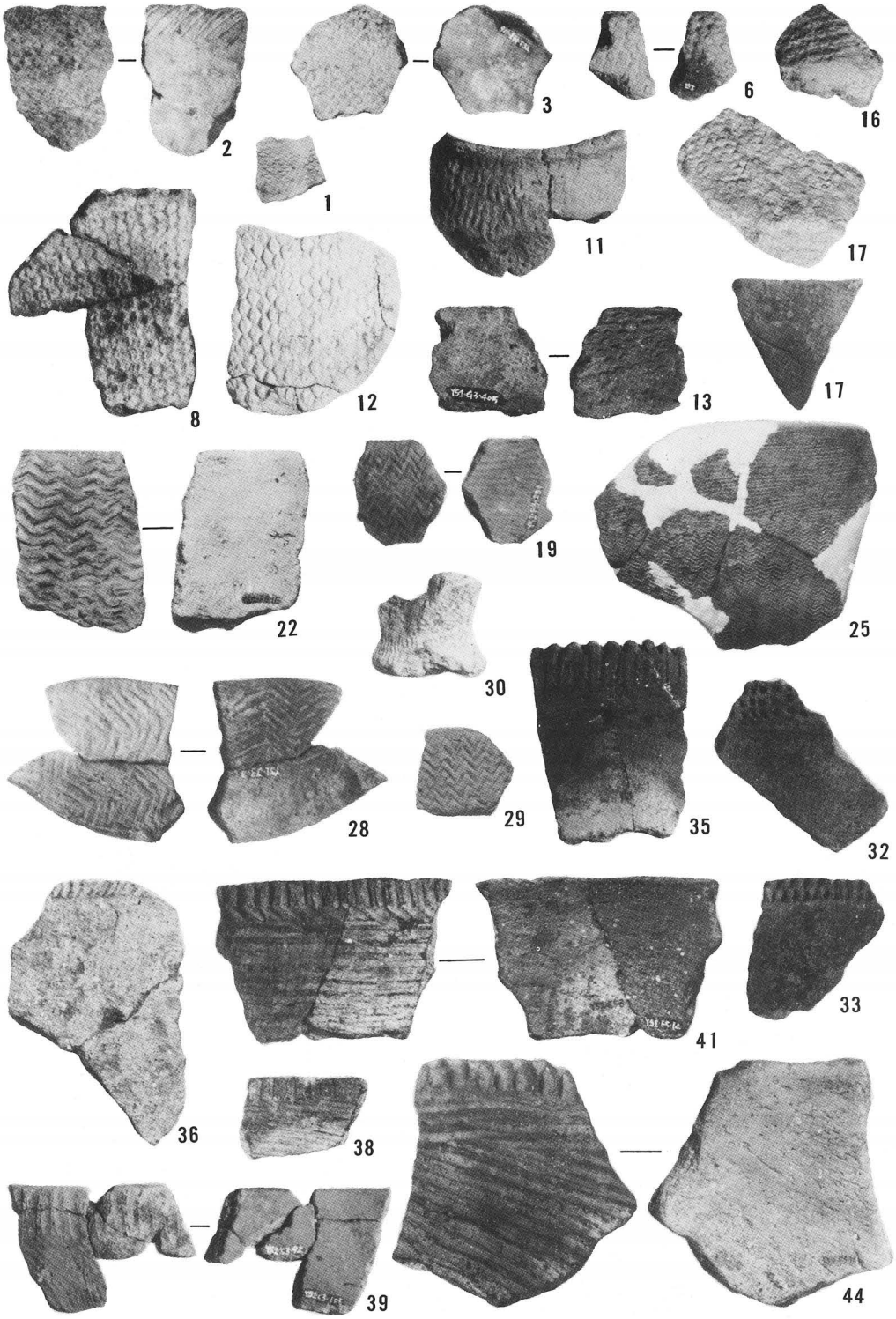


No. 8土坑土層

No. 12土坑土層

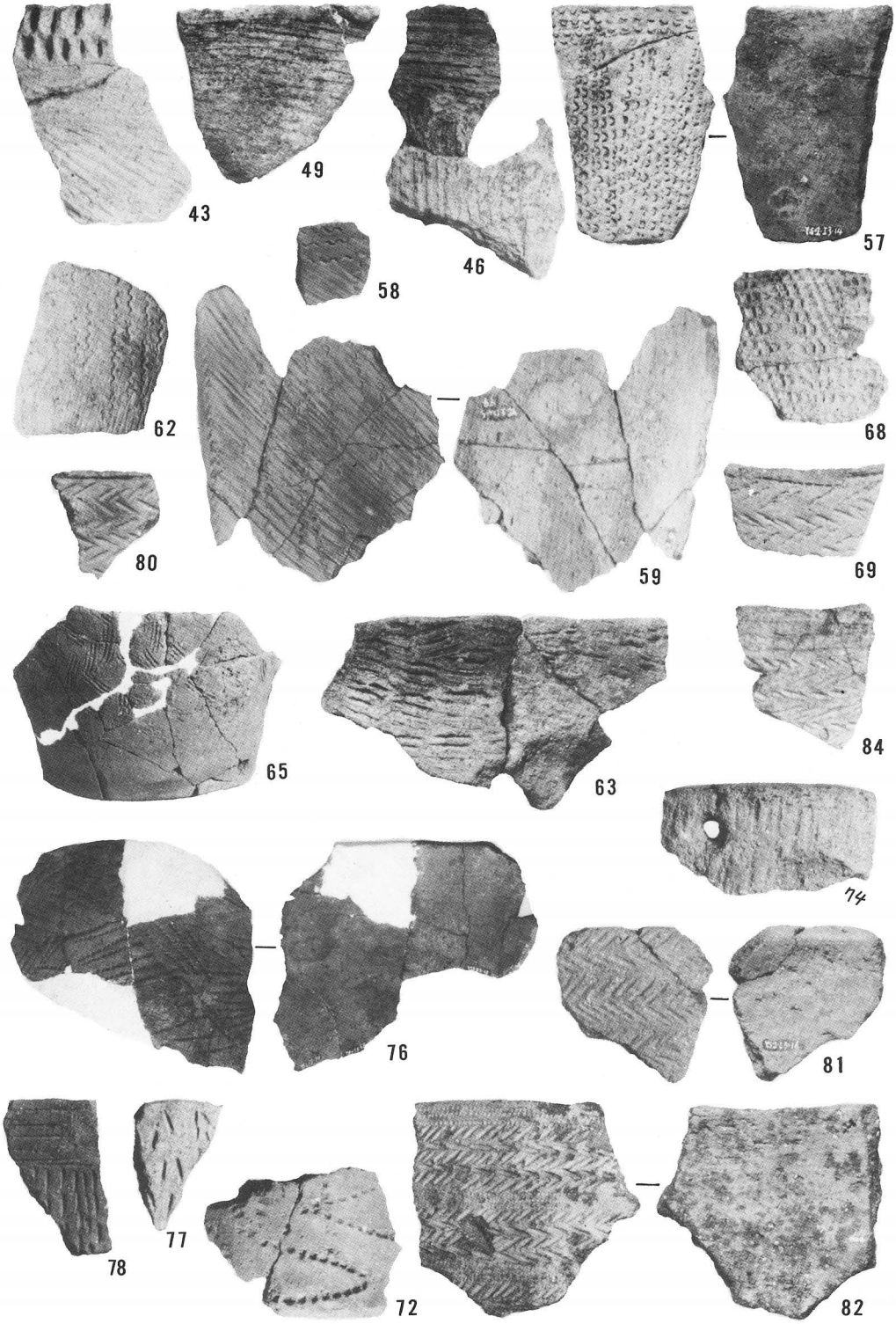
地層の回転部（上にアカホヤ）

図版12（芳ケ迫第一）



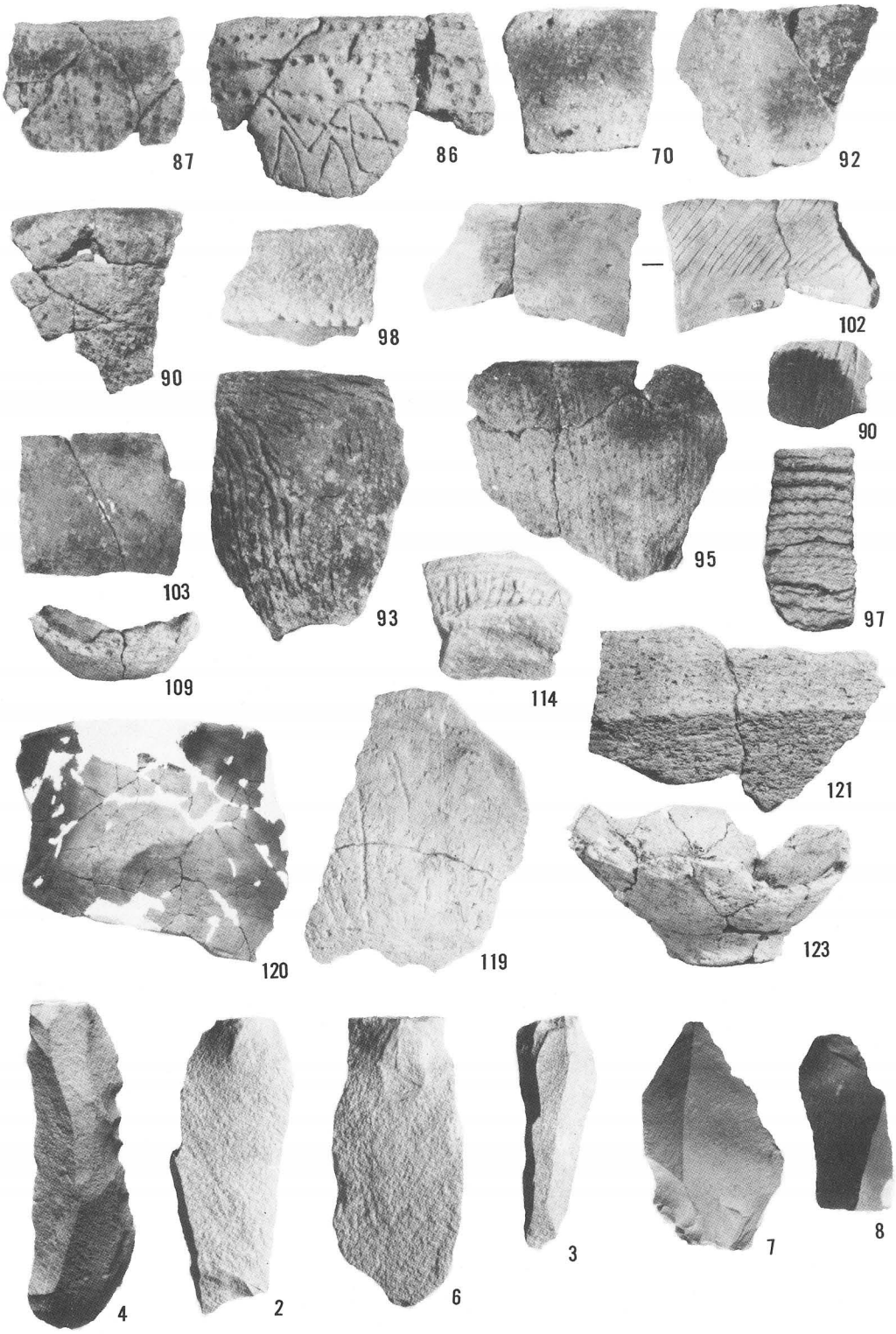
出 土 土 器（番号は図面番号に同じ）

図版13（芳ケ迫第一）



出　土　土　器

図版14（芳ケ迫第一）



出土土器及び石器